作業室用

茨城県教育財団文化財調査報告第209集

金田西遺跡
金田西坪B遺跡
九重東岡廃寺

中根・金田台特定土地区画整理
事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅶ

平成15年3月

都市基盤整備公団茨城地域支社
財団法人　茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第209集

金田西遺跡
金田西坪B遺跡
九重東岡廃寺

中根・金田台特定土地区画整理
事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅶ

平成15年3月

都市基盤整備公団茨城地域支社
財団法人　茨城県教育財団

金田西遺跡，九重東岡廃寺遠景（東から）

金田西遺跡出土銅印（印面）

金田西遺跡出土銅印（上面）

序

つくば市は，国際交流の拠点にふさわしい町づくりを進めております。この町づくりの一環として，つくば市と都市基盤整備公団茨城地域支社は，つくば市と東京圏を直結する「つくばエキスプレス」の開発と同時に，沿線開発を一体的に進める土地区画整理事業を計画的に推進しています。

財団法人茨城県教育財団は，都市基盤整備公団茨城地域支社から中根・金田台特定土地区画整理事業地内の埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け，中谷津遺跡，中原遺跡，上野陣馬遺跡及び上野古屋敷遺跡の発掘調査，そして金田西遺跡，金田西坪B遺跡，九重東岡廃寺の確認調査を実施してまいりました。その成果は既に当財団の文化財調査報告第139・155・159・170・182・195集として報告し，さらに今年度も整理を進めております。

本書は，金田西・金田西坪B遺跡，九重東岡廃寺の平成13年度における確認調査の成果を収録したものであります。本書が，学術的な研究資料としてはもとより，郷土の歴史の理解，教育・文化の向上の一助として広く活用されることを希望いたします。

なお，確認調査及び整理を進めるにあたり，委託者である都市基盤整備公団茨城地域支社から賜りました多大なる御協力に対し厚く御礼申し上げます。

また，茨城県教育委員会，つくば市教育委員会をはじめ，関係各機関及び関係各位からいただいた御指導，御協力を賜りましたことに対し，衷心より感謝の意を表します。

平成15年3月

財団法人　茨城県教育財団
理事長　齋藤佳郎

例　　言

1　本書は，都市基盤整備公団茨城地域支社の委託により，財団法人茨城県教育財団が平成13年６月から平成14年２月まで確認調査を実施した，茨城県つくば市大字金田字不動台1418番地ほかに所在する金田西遺跡，同市大字金田字二本松台1621番地ほかに所在する金田西坪Ｂ遺跡，同市大字金田字谷頭1874－1番地ほかに所在する九重東岡廃寺の確認調査報告書である。

2　当遺跡の確認調査期間及び整理期間は，以下のとおりである。

調　査　平成13年６月１日～平成14年２月28日

整　理　平成14年８月１日～平成15年１月31日

3　当遺跡の確認調査は，調査第二課長鈴木美治の指揮のもと，調査第二課第１班長萩野谷悟，主任調査員白田正子，同小竹茂美が調査した。

4　当遺跡の整理及び本書の執筆・編集は，整理第二課長瓦吹堅の指揮のもと，主任調査員白田正子が担当した。

5　調査にあたっては，東京学芸大学木下正史教授，国士舘大学須田勉教授に御指導をいただいた。

6　発掘調査及び整理に際し，関係各機関並びに関係各位から御指導・御協力を賜りました。ここに深く感謝の意を表します。

凡　　例

1　当遺跡の地区設定は，日本平面直角座標第Ⅸ系座標を用いて区画し，X軸＝＋11,080m，Y軸＝＋26,520mの交点を基準点（A１）とした。なお，この原点は，日本測地系による基準点である。

調査区は，この基準点を基に遺跡の範囲内を東西・南北20m四方に分割し，北から南へA・B・C…，西から東へ１・２・３…とし，「A１区」，「A２区」のように呼称する。

2　抄録の北緯及び東経の欄には世界測地系に基づく緯度・経度を（　）を付して併記した。

3　本書の実測図表等で使用した記号は，次のとおりである。

遺　構　　住居跡－ＳＩ　　基壇・掘立柱建物跡－ＳＢ　　礎石建物跡－ＳＳ　　溝跡－ＳＤ　　柱穴－Ｐ

その他　　撹乱－Ｋ　　トレンチ－Ｔ

4　土層観察と遺物における色調の判定には『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄著　日本色研事業株式会社）を使用した。

5　遺構・遺物実測図の掲載方法については，次のとおりである。

(2)　土器は原則として３分の１，瓦は５分の１に縮尺した。

(3)　遺構・遺物の実測図中の表示は，次のとおりである。

柱抜き取り痕・油煙・漆　　基壇建物跡・赤彩

灰釉・緑釉・二彩陶器　　黒色処理

6　遺物観察表の作成方法については，次のとおりである。

(1)　計測値の（　）内の数値は既存値を，［　］内の数値は推定値を示した。単位は，法量についてはcm，重量についてはgで示した。

(2)　備考の欄は，残存率や特記事項などを記した。

(3)　文字資料のうち，焼成前に線刻されたものを「ヘラ書き」，焼成後に線刻されたものを「刻書」と分けて記述した。

7　掘立柱建物跡の規模については，１尺＝0.303mとして算出した。

8　掘立柱建物跡の遺構平面図については，特徴的な建物は平面図と模式図の両方を掲載しているが，その他の建物は模式図だけで記述した。なお，模式図内の「６や7.5」などの数値は桁行や梁間の６尺・7.5尺を意味している。

抄　録

ふりがな	こんだにしいせき，こんだにしつぼーいせき，ここのえひがしおかはいじ
書名	金田西遺跡，金田西坪B遺跡，九重東岡廃寺
副書名	中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書
巻次	Ⅶ
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告
シリーズ番号	第209集
著者名	白田正子
編集機関	財団法人　茨城県教育財団
所在地	〒310－0911　茨城県水戸市見和1丁目356番地の2　TEL 029－225－6587
発行機関	財団法人　茨城県教育財団
所在地	〒310－0911　茨城県水戸市見和1丁目356番地の2　TEL 029－225－6587
発行年月日	2003（平成15）年3月26日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
金田西遺跡	茨城県つくば市金田字大木動台1418番地ほか	8220 －522	36度5分48秒	140度7分57秒	24.9～27.0m	20010601～20020227	102,735㎡	中根・金田台土地区画整理事業に伴う確認調査
金田西坪B遺跡	茨城県つくば市金田字二本松台1621番地ほか	8220 －110	36度5分35秒	140度8分0秒	25.0～26.2m		13,888㎡	
九重東岡廃寺	茨城県つくば市金田字大谷頭1874－1番地ほか	8220 －121	36度5分45秒	140度7分40秒	23.0～24.6m		13,194㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
金田西遺跡	官衙	奈良・平安	掘立柱建物跡　109棟 基壇建物跡　1基 竪穴住居跡　338軒 溝　19条 井戸　3基	土師器（坏・高台付坏・甕・高台付皿・椀・鉢），須恵器（坏・高台付坏・盤・壺・甕・高盤・甑・短頸壺），灰釉陶器（長頸瓶・椀），銅印	金田西遺跡では河内郡衙の郡庁説・館・居宅等に想定し得る建物群が確認されている。
金田西坪B遺跡	官衙	奈良・平安	掘立柱建物跡　3棟 竪穴住居跡　47軒 溝　4条	土師器（坏・高台付坏・甕・高台付皿・椀），須恵器（坏・高台付坏・盤・甕・甑）	
九重東岡廃寺	寺院跡	奈良・平安	掘立柱建物跡　4棟 竪穴住居跡　36軒 溝　5条	土師器（坏・高台付坏・甕）須恵器（坏・高台付坏・盤壺・高盤・甕），瓦，二彩陶器	

目　　次

序
例　言
凡　例
抄　録
目　次
第１章　調査経緯 …… 1
　第１節　調査にいたる経緯 …… 1
　第２節　調査経過 …… 1
第２章　位置と環境 …… 4
　第１節　地理的環境 …… 4
　第２節　歴史的環境 …… 4
第３章　金田西遺跡 …… 7
　第１節　遺跡の概要 …… 7
　第２節　遺構と遺物 …… 7
　　１　建物群Ａ区 …… 7
　　(1)　掘立柱建物跡 …… 7
　　(2)　柵列跡 …… 15
　　(3)　溝跡 …… 15
　　(4)　竪穴住居跡 …… 16
　　２　建物群Ｂ区 …… 22
　　(1)　掘立柱建物跡 …… 22
　　(2)　基壇建物跡 …… 32
　　(3)　竪穴住居跡 …… 33
　　３　建物群Ｃ区 …… 38
　　(1)　掘立柱建物跡 …… 38
　　(2)　溝跡 …… 57
　　(3)　竪穴住居跡・土坑 …… 60
　　４　建物群Ｄ区 …… 69
　　(1)　掘立柱建物跡 …… 69
　　(2)　溝跡 …… 83
　　(3)　竪穴住居跡 …… 84
　第３節　その他の遺物 …… 88
第４章　金田西坪Ｂ遺跡 …… 95
　第１節　遺跡の概要 …… 95
　第２節　遺構と遺物 …… 95
第５章　九重東岡廃寺 …… 99
　第１節　遺跡の概要 …… 99
　第２節　遺構と遺物 …… 99
　　１　溝跡 …… 99
　　２　掘立柱建物跡・竪穴住居跡 …… 110
　　３　その他の遺物 …… 112
第６章　まとめ …… 115
写真図版
付　図

第1章　調　査　経　緯

第1節　調査に至る経緯

つくば市は，国際交流の中心，科学技術をリードする研究開発の拠点として新しい町づくりを進めている。その一環として取り組んでいるのが，つくば市と東京圏を直結する「つくばエキスプレス」の建設とそれに伴う沿線開発である。中根・金田台地については，住宅・都市整備公団つくば開発局（平成9年10月から住宅・都市整備公団茨城地域支社に，平成11年10月から都市基盤整備公団茨城地域支社に名称を変更）を事業主として，土地区画整理事業を進めている。

平成6年11月18日，住宅・都市整備公団つくば開発局は，茨城県教育委員会あて，中根・金田台特定土地区画整理事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。これに対して茨城県教育委員会は，平成7年5月15日から6月8日にかけて現地踏査，平成12年3月6～9，13～15，17日に試掘・確認調査を実施した。その事業地内においては，金田西・金田西坪B遺跡の所在を確認し，平成12年3月17日に都市基盤整備公団茨城地域支社及び市教育委員会あて，その旨を回答した。平成12年3月21日に都市基盤整備公団茨城地域支社は，茨城県教育委員会と事業地内に所在する金田西・金田西坪B遺跡の取り扱いについて協議した。その結果，茨城県教育委員会は，3月24日，都市基盤整備公団茨城地域支社あて確認調査を実施する旨を回答し，調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。そこで都市基盤整備公団茨城地域支社は，財団法人茨城県教育財団と金田西・金田西坪B遺跡の確認調査に関する委託契約を結び，財団法人茨城県教育財団は，平成12年7月1日から確認調査を開始した。また，九重東岡廃寺については平成12年3月，茨城県教育委員会から，財団法人茨城県教育財団あてに九重東岡廃寺の一部を調査対象として寺域確認調査の依頼があり，同11月から12月の2か月にわたり，試掘調査が実施された。平成13年3月19日，茨城県教育庁文化課長から，都市基盤整備公団茨城地域支社つくば整備部長あて，平成12年度調査結果の報告とともに，金田西・金田西坪B遺跡，九重東岡廃寺を対象とした，平成13年度調査継続の必要性について説明し，6月から3遺跡の確認調査を実施することとなった。なお，これまでの調査等についての概要は，第2章第2節歴史的環境において後述する。

第2節　調査経過

平成12年度の確認調査において正倉院及び区画溝が確認されたことを受け，平成13年度は郡庁域・郡寺域を明確にすることを目的として，金田西遺跡83,060㎡，金田西坪B遺跡13,888㎡，九重東岡廃寺13,194㎡を対象に，6月1日から確認調査に入った。九重東岡廃寺は，平成12年度の確認調査で土地利用状況から西辺の区画溝をとらえることが困難であることから，今年度は北辺・東辺の区画溝，さらに主要伽藍を確認することを目的とした。郡庁院に関しては，平成12年度のトレンチ調査により，金田西遺跡北側で溝跡（今年度調査の第5号溝跡としたもの）が確認されていたため，この溝が区画に関わる可能性があるとして調査にあたった。また，正倉院の南側に関しても，地形的にみて郡庁院が位置する可能性を考慮して，金田西坪B遺跡の南部も調査することとなった。このように，調査開始段階では，郡庁域・郡寺域を明確にすることが目的であったため，20mごとにトレンチを設定し，遺構の広がりによって随時拡張していく方法で調査を実施した。

6月7日～7月3日

九重東岡廃寺の調査を開始する。第1～12号トレンチを設定する。第5・11号トレンチで南北に走る第5～7号溝跡を確認する。土地借り上げの都合上，九重東岡廃寺の確認調査は一時休止となる。

6月21日～8月10日

金田西遺跡の調査を開始する。第1～35号トレンチを設定する。第7～10号トレンチを拡張し，第1・4・27号掘立柱建物跡と柵列1条，竪穴住居跡17軒を確認し，建物群A区とする。第18・19号トレンチを拡張し，第7～16号掘立柱建物跡と竪穴住居跡4軒を確認し，建物群B区とする。第31～34号トレンチでは北東方向に走る第5号溝跡を確認する。第26・27号トレンチでも溝跡が確認され，この溝跡は第5号溝跡が南東方向に折れたものかどうかを確かめるため拡張したところ，古墳の周溝であることが判明する。

8月7日～8月29日

金田西坪B遺跡の調査を開始する。第1～13号トレンチを設定する。正倉に関連するような建物跡，あるいは郡庁院に関連するような建物跡はなく，昨年度確認した正倉院の南には，正倉や郡庁院にかかわる施設はないと判断し，8月30日から9月7日にかけて埋め戻しを行い，金田西坪B遺跡の確認調査を終了した。

8月30日～11月30日

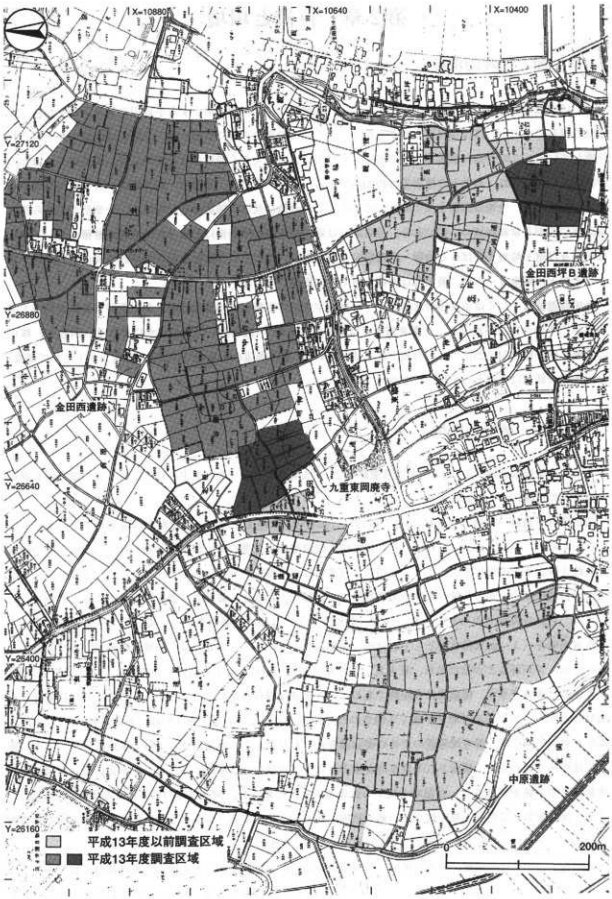
金田西遺跡の調査を再開する。第36～71号トレンチを設定する。第1～3，25，35号トレンチ，建物跡群A区の西北部第41～43号トレンチ，建物跡群B区の北東部第18号トレンチをそれぞれ拡張する。この調査により，新たに建物跡群A区では第21～23・26・38・39号掘立柱建物跡と竪穴住居跡7軒，建物跡群B区では第31～36号掘立柱建物跡と竪穴住居跡8軒を確認する。第5号溝跡については，調査区北端の第66・67号トレンチ，東端の第59～64号トレンチでも確認することができなかった。この時点で，今回の調査区内では郡庁院にかかわる区画溝の確認は不可能であろうとの考えが強くなった。さらに，建物跡群A・B区のように，大型建物跡が確認されていることから，「郡衙に関わる主要施設となりうる建物群を確認する」ことに調査方針を変更し，面的な確認調査を重視することとなった。

10月22日九重東岡廃寺の調査を再開する。調査区北側の遺構の広がりを確認するために第14～19号トレンチ，東側には第4・5号トレンチを延長した。これらのトレンチからは，伽藍に関係するような建物や，区画にかかわるような溝跡は確認されなかった。第5号溝跡は，平成12年度に調査した第2号溝跡とつながり，南に屈曲することが判明した。また，第7号溝跡は北東に向かって続くことを確認する。

10月30日からは，金田西遺跡の西端区域の調査を開始する。第44～54・57～59号掘立柱建物跡と23軒の竪穴住居跡を確認し，これらの建物群の北側を建物跡群C区，南側を建物跡群D区とした。以上が当初の予定であったが，郡庁院が確定できないことで，11月19日から新たに九重東岡廃寺と金田西遺跡との境に位置する13,591㎡が調査対象に加わることとなった。11月21日には九重東岡廃寺，金田西遺跡の空中撮影を実施し，11月30日には九重東岡廃寺のすべての調査・埋め戻しが完了した。

12月3日～2月27日

金田西遺跡の新しく調査区に加わった地区の調査を開始する。建物跡群C区と農道を挟んで西側に第78～99トレンチを設定し，随時拡張する。新調査区の北半分では第70～76，78～82，93～95号掘立柱建物跡と竪穴住居跡57軒，溝跡5条が確認され，建物跡群C区とする。北東に走る第5号溝跡は，九重東岡廃寺の第7号溝跡とつながることが想定されるようになった。新調査区の南半分では，第83～92号掘立柱建物跡と竪穴住居跡18軒，農道を挟んだ東側では第68・69・96～100・102・103・105・106号掘立柱建物跡と竪穴住居跡17軒を確認し，これらを併せて掘立柱建物跡群D区とした。2月27日には，金田西遺跡のすべての調査と埋め戻しが完了した。



第1図　金田西・西坪B遺跡，九重東岡廃寺区割図

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

つくば市域は，筑波山の南西麓を南下する桜川の低地と，市の西側を南下する小貝川の低地及びそれらに挟まれた標高25～27ｍのほぼ平坦な台地からなり，つくば市の東約５kmには霞ヶ浦，北端には筑波山がそれぞれ位置している。この台地の両端を流れる桜川と小貝川によって大きく開析された洗域には，標高約５ｍほどの沖積低地が形成され，台地との標高差は約20ｍである。また，花室川，蓮沼川，東谷田川，西谷田川など中小河川が南流して，台地縁辺部を浅く開析している。この台地は筑波・稲敷台地と呼ばれ，千葉県北部から茨城県南部に広がる常総台地の一部であり，地質的には新生代第四紀洪積世に形成された地層が堆積する。下層は成田層及び竜ヶ崎層と呼ばれる砂層・砂礫層が主体となり，その上に常総粘土層と呼ばれる灰白色粘土層，さらにその上に関東ローム層，最上部は腐植土層の順に堆積している。

金田西遺跡は，つくば市桜庁舎北部のつくば市大字金田字不動台1418番地ほか，金田西坪Ｂ遺跡は同市大字金田字二本松台1621番地ほか，九重東岡廃寺は同市大字金田字谷頭1874－１番地ほかにそれぞれ所在し，桜川の低地を望む標高24～25ｍの右岸台地上に立地している。遺跡周辺の土地利用状況は，台地上が主として畑地，桜川流域の低地は水田として耕作がなされている。

第２節　歴史的環境

ここでは金田西遺跡〈１〉・金田西坪Ｂ遺跡〈２〉・九重東岡廃寺〈３〉を中心に，これまでの調査例と周辺の律令期の遺跡について記述する。

金田西坪Ｂ遺跡（河内郡衙正倉）〈２〉周辺は「長者塚」の字名が残り，付近からは焼米が多く出土していたと伝えられていた。1959（昭和34）年，現桜中学校校庭拡張工事の際，倉庫跡と思われる３間×４間の総柱建物跡３棟と多量の炭化米が出土し，金田西坪Ｂ遺跡は河内郡衙と考えられるようになった。また，隣接する東岡の台地には古くから多量の瓦片や須恵器片・土師器片，瓦塔片，蔵骨器，礎石等が出土することが知られており，古代寺院跡とみられていた。1984（昭和59）年には桜村史編纂事業の一環として筑波大学によって九重東岡廃寺〈３〉が東岡遺跡として部分的に発掘調査された。この調査では，基壇建物跡の一部や瓦溜め土坑の一部，井戸跡などが検出され，軒丸瓦・軒平瓦・平瓦・道具瓦・土師器片・須恵器片が出土したものの，主要伽藍は確認できず，積極的に寺院跡であるという確証は得られなかった。しかし，これまでに採集された遺物などからも郡寺跡の可能性が強く示唆された。2000（平成12）年７月から2001（平成13年）３月には河内郡衙正倉域・郡庁域・郡寺域確認のための確認調査が行われた。この確認調査によって区画溝とその内部に掘立柱建物跡や礎石建物で構成される倉庫群が検出され，正倉域がほぼ明確となった。九重東岡廃寺では，基壇建物跡，堂宇跡が確認され，瓦溜め土坑からは多量の瓦片が出土し，河内郡寺の可能性が高まった。しかし，寺域・伽藍配置，郡衙域・郡庁院などの範囲把握が残されたままであり，それを受けて本書で報告する確認調査が2001（平成13）年６月から2002（平成14）年２月まで行われることとなった。

金田西・金田西坪Ｂ遺跡，九重東岡廃寺の当遺跡群から桜川を約９kmさかのぼると筑波郡衙正倉である平沢官衙遺跡がある。河内郡衙と筑波郡衙の両者は近接しており，郡衙の立地としては，河内郡衙が河内郡域の北東寄りに偏在していることなど，他の郡衙と比べると異なる状況にある。

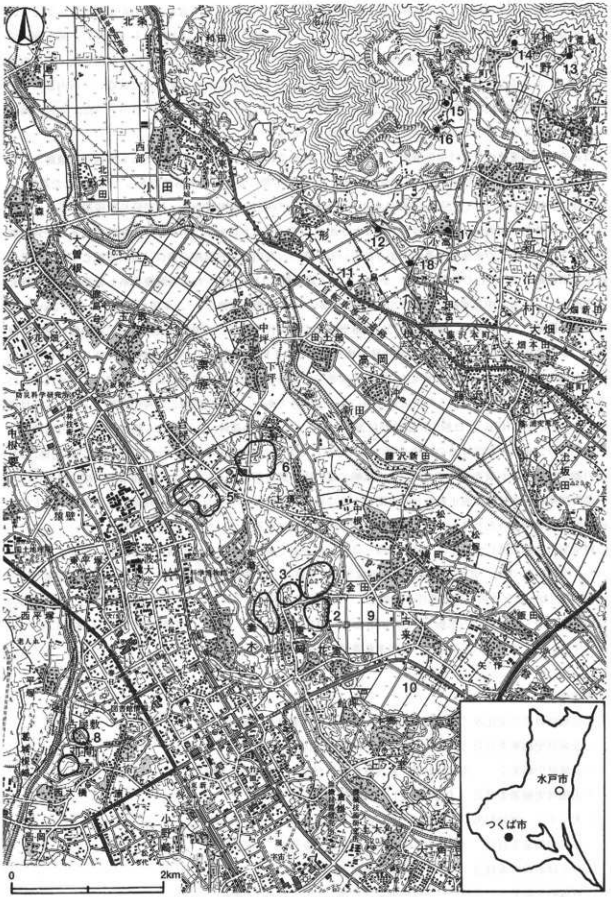
常陸国の郡の成立状況は『常陸国風土記』に詳しい。まず，大化前代の国造系の勢力が旧領域をふまえて新治・筑波・茨城・久慈・多珂・那賀の各郡が成立した。649（大化５）年には下総海上・那賀の一部を割いて神郡（鹿島），652（白雉３）年には茨城・那賀の一部を割いて行方郡，653（白雉４）年には筑波・茨城の一部を割いて志太郡が新たに置かれた。白壁・河内郡については記載がないため明らかではない。河内郡については，『新編常陸国誌』の筑波郡からの分郡という説が有力であり，河内郡は大山・菅田・八郷・大村・鴨名郷の五郷からなる下郡で，金田西遺跡は菅田郷に属している。

周辺の律令期遺跡の代表は中原遺跡〈４〉である。中原遺跡は，河内郡正倉院である金田西坪Ｂ遺跡から西へ約700ｍに位置し，８世紀前葉から10世紀前葉までの200年間に営まれた集落跡である。調査された遺構は，掘立柱建物跡133棟，竪穴住居跡497軒であり，灰釉陶器442点，緑釉陶器98点，初期貿易陶磁器17点をはじめとして，腰帯具・円面硯・墨書土器・銅椀などが出土している。８世紀前・中葉には小規模ではあるが倉庫群が形成され，郡衙との密接な関連が予想されている。また，金田西坪Ｂ遺跡の東には既に湮滅している条里遺跡の本田遺跡〈９〉，上ノ室条里〈10〉がある。下大島遺跡〈11〉では，九重東岡廃寺系と筑波廃寺系の軒丸瓦が出土している。中原遺跡から花室川を1.6kmさかのぼると柴崎遺跡〈５〉，金田西遺跡から北へ２kmには上野陣馬遺跡〈６〉がある。柴崎遺跡では集落形成は古墳時代中期で，古墳時代後期以降に本格的に集落が展開し，竪穴住居跡160軒以上，掘立柱建物跡３棟を数える。上野陣馬遺跡では竪穴住居跡175軒，掘立柱建物跡21棟が調査されており，集落の出現は古墳時代前葉で，柴崎遺跡同様，本格的な集落の展開は古墳時代後期以降であり，最も集落が繁栄する時期は律令期に入ってからである。蓮沼川流域には神田遺跡〈７〉・六十目遺跡〈８〉，東谷田川沿いには熊の山遺跡が位置している。これらの遺跡は，いずれも集落の形成は古墳時代にさかのぼり，集落が繁栄するのは律令期に入ってからである。特に熊の山遺跡では1331軒の竪穴住居跡，121棟の掘立柱建物跡が調査されており，河内郡鴨名郷の中心的集落と考えられている。律令期の桜川流域には河内郡衙関連遺跡や筑波郡衙正倉など律令期の主要な遺跡が位置することから，この時期の桜川周辺は水上交通の重要な地域であったと考えられ，その交通網は新治郡域にも達していたものと想定される。

律令期の生産遺跡については，河内郡衙とは桜川を挟んで対峙する宝篋山の南麓から東麓にかけて小高窯跡〈12〉，小野窯跡〈13〉，東城寺窯跡〈14〉，東城寺桑木窯跡〈15〉，東城寺寄居前窯跡〈16〉，小高村内窯跡〈17〉，田宮窯跡〈18〉などの須恵器窯跡群が位置し，一大窯跡群を形成している。これらの窯跡群から，西へ７kmの筑波郡衙，南へ６kmの河内郡衙，そして国府などへ製品が供給され，さらには常陸国外へも広く供給していた。
※文中の〈　〉の番号は，第２図の該当遺跡番号と一致している。

参考文献

・茨城県教育庁文化課『茨城県遺跡地図』茨城県教育委員会　2001年
・茨城県史編集委員会『茨城県史　原始古代編』　1985年
・茨城県史編集会　『茨城県史料　考古資料編　奈良・平安時代』1995年
・大穂町史編纂委員会　『大穂町史』　1989年
・大山年次　蜂須紀男　『茨城県　地学のガイド』　コロナ社　1977年
・桜村史編纂委員会　『桜村史　上巻』　桜村教育委員会　1982年
・つくば市教育委員会　『つくば市遺跡地図』　2001年
・筑波町史編纂専門委員会　『筑波町史　上巻』　つくば市　1988年
・中山信名　『新編常陸国誌（宮崎報恩会版）』　崙書房　1969年



第2図　金田西・金田西坪B遺跡，九重東岡廃寺周辺遺跡位置図

第３章　金田西遺跡

第１節　遺跡の概要

金田西・金田西坪Ｂ遺跡，九重東岡廃寺は古くから河内郡衙・河内郡寺と考えられてきた遺跡であり，昨年度の確認調査により金田西坪Ｂ遺跡では正倉院と正倉区画溝が確認されている。

金田西・金田西坪Ｂ遺跡，九重東岡廃寺確認調査の目的は，遺跡の性格と範囲の確認であり，調査対象面積は金田西遺跡102,735㎡，金田西坪Ｂ遺跡13,888㎡，九重東岡廃寺13,194㎡である。その内，実際に調査した面積は金田西遺跡が28,597.5㎡，金田西坪Ｂ遺跡が1,766㎡，九重東岡廃寺が1,372㎡である。確認調査は，基本的に日本平面直角座標Ⅸ系座標のＸ軸及びＹ軸を基準とした20ｍごとのトレンチ試掘を実施し，必要に応じて遺構の規模を確認するために拡張する方法を採った。

調査によって確認された遺構は，掘立柱建物跡109棟，礎石建物跡１基，竪穴住居跡338軒，溝跡19条，井戸跡３基である。当遺跡の調査対象面積が広範囲にわたること，掘立柱建物跡群にある程度のまとまりがみられることから，便宜上Ａ～Ｄ区にわけて記述する。遺構が重複している場合や一部の遺構については土層観察を実施したが，基本的にはその他の遺構は確認面のみの観察であるため，時期・性格等の詳細な情報は少ない。以下，確認された遺構の概略について記すことにする。

第２節　遺構と遺物

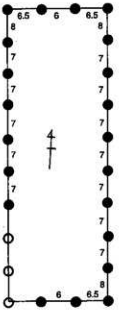
１　建物群Ａ区（付図１）

建物群Ａ区は当遺跡の南西部に位置し，掘立柱建物跡14棟，竪穴住居跡30軒，溝列１条，溝跡４条が確認された。竪穴住居跡は，縄文時代中期の第84・106・108号竪穴住居跡以外はすべて奈良時代に属するものである。また，第10・81号竪穴住居跡では鉄滓・椀状滓が採集されており，工房であった可能性がある。また，第１・４・26・27号掘立柱建物跡は規模が大きく，このＡ区のなかでも中心的役割であったことが推察される。なお，竪穴住居跡については，確認調査であることから，遺構に関しては一覧表のみの記載である。

(1)　掘立柱建物跡

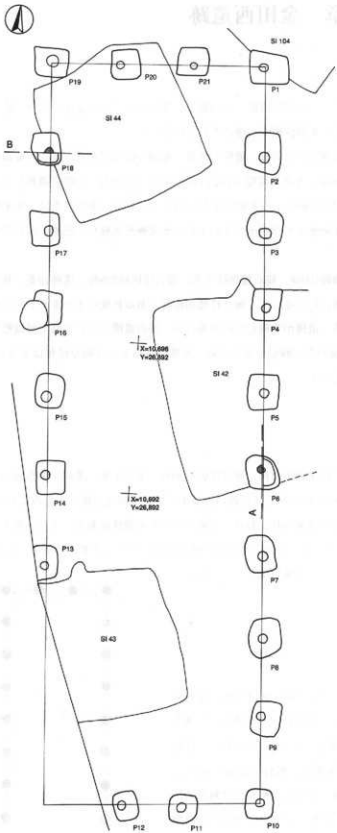
第１号掘立柱建物跡（第３図）

調査区の南東部，Ｓ９，Ｔ９区に位置する桁行９間×梁間３間，棟方向Ｎ－３°－Ｗの南北棟建物跡である。南西に9.0ｍの位置には本跡と同じ棟方向の第43号掘立柱建物跡が位置する。本跡は第42・43・44・104号竪穴住居跡を掘り込んでおり，本跡が新しい。建物の規模は，桁行19.69ｍ（65尺），梁間5.75ｍ（19尺）である。柱間寸法は等間隔ではなく，桁行では外側の１間分がそれぞれ2.42ｍ（８尺），内側の７間は2.12ｍ（７尺），梁間では外側が1.96ｍ（6.5尺），内側が1.81ｍ（６尺）である。柱穴の平面形はおおむね方形で，一辺は約0.75～1.05ｍ，深さは断ち割りを行ったＰ６・Ｐ18で約0.8ｍ・0.9ｍである。埋土はローム混じりの暗褐色土と褐色土とが交互に積み重ねられている。遺物は土師器・須恵器の細片がＰ３・Ｐ６・Ｐ17の埋土か



第１号掘立柱建物跡模式図

ら12点出土している。細片のため図化はできなかったが，Ｐ３出土の土師器坏の口縁部片は８世紀前葉に属するものである。また，本跡より古く重複関係にある第43・44号住居跡の遺物は極少量なため時期の断定はできないが，８世紀初頭から前葉にかけてのものと思われることから，本跡の時期は８世紀初頭以降の可能性がある。



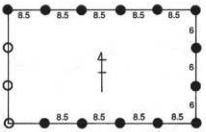
土層解説

1	極暗褐色	ローム粒子微量，白色粘土小ブロック微量，しまり弱
2	暗褐色	ローム中ブロック中量，しまり強
3	褐　色	ローム中・小ブロック少量，しまり強
4	褐　色	ローム中ブロック中量，しまり強
5	暗褐色	ローム小ブロック少量，しまり強
6	褐　色	ローム大ブロック中量，しまり強
7	暗褐色	ローム小ブロック中量，ローム中ブロック少量，しまり強

第３図　第１号掘立柱建物跡実測図

第４号掘立柱建物（第４・５図）

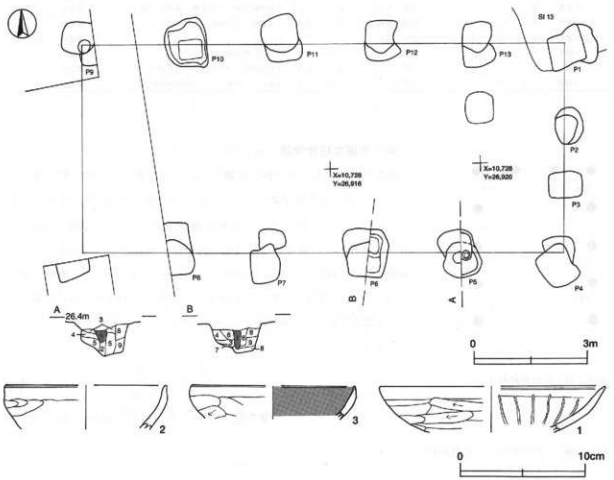
調査区の南東部，Ｒ20・Ｒ21区に位置する桁行５間×梁間３間，棟方向Ｎ－90°－Ｅの東西棟建物である。本跡から南に8.0ｍの距離には本跡の西梁間と西桁行が直交する第27号掘立柱建物跡が位置する。本跡は第13号竪穴住居跡を掘り込んでおり，本跡の方が新しい。建物の規模は，桁行12.87ｍ（42.5尺），梁間5.45ｍ（18尺）である。柱間寸法は桁行2.57ｍ（8.5尺）等間，梁間1.81ｍ（６尺）等間である。本跡は第５号掘立柱建物跡が建て替えられたもので，桁行柱がそれぞれ南・北にずらして据えており，本跡の方が新しい。柱穴の平面形は一辺0.75～0.95ｍの隅丸方形，深さは裁ち割りを行ったＰ５・Ｐ６で0.8ｍである。また埋土は，ロームブロック混じりの暗褐色土と灰褐色土である。遺物９の須恵器蓋はＰ６掘り方の埋土から出土したもので，その他の遺物は各柱穴確認面から出土したものである。本跡より古い第13号竪穴住居跡出土の遺物は８世紀初頭に属するものであることや，本跡の出土遺物などから，本跡の時期は８世紀初頭以降と思われる。



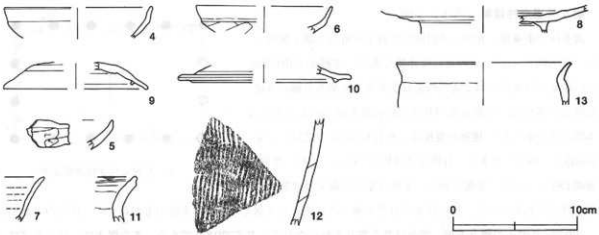
第４号掘立柱建物跡模式図

土層解説

1　暗 褐 色　ローム中ブロック中量，砂質粘土粒微量，しまり弱
2　暗 褐 色　ローム小ブロック少量，しまり弱
3　灰 褐 色　ローム中ブロック・黒色土小ブロック少量
4　灰 褐 色　ローム中・小ブロック少量
5　暗 褐 色　ローム大ブロック中量，しまり強
6　暗 褐 色　ローム大・中ブロック中量，しまり強
7　褐　　色　ローム中ブロック多量，しまり強
8　黒 褐 色　ローム中ブロック少量
9　褐　　色　ローム中ブロック多量，しまり強



第４図　第４号掘立柱建物跡・出土遺物実測図



第５図　第４号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第４号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第４・５図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	[18.0]	(3.6)	—	雲母，赤色粒子	明赤褐	普通	体部外面ヘラ削り，内面放射状のヘラ磨き	Ｐ３確認面	15%
2	土師器	坏	[13.0]	(3.5)	—	長石，赤色粒子	橙	普通	体部外面ヘラ削り，口辺部・体部内面横ナデ	Ｐ12確認面	10%
3	土師器	坏	[13.0]	(2.6)	—	長石，赤色粒子	橙	普通	体部外面ヘラ削り，口辺部・体部内面横ナデ	Ｐ10確認面	5%
4	土師器	坏	[11.8]	(2.5)	—	微粒子	明赤褐	普通	体部外面ヘラ削り，口辺部・体部内面横ナデ	Ｐ３確認面	5%
5	土師器	坏	—	(2.2)	—	赤色粒子	明赤褐	普通	体部外面ヘラ削り，口辺部横ナデ	Ｐ11確認面	5%
6	土師器	坏	[10.9]	(2.1)	—	微粒子	橙	普通	体部外面ヘラ削り，口辺部横ナデ	Ｐ10確認面	5%
7	須恵器	高台付坏	—	(3.5)	—	雲母	灰白	不良	内外面ロクロナデ	Ｐ12確認面	5%
8	須恵器	蓋	—	(2.2)	—	雲母，長石	褐	一次焼成	底部回転外面ヘラ削り後，高台貼り付け	Ｐ２確認面	10%
9	須恵器	蓋	[11.6]	(2.0)	—	雲母，長石	灰	普通	天井部右ロクロ回転ヘラ削り，かえり有り	Ｐ６確認面	5%
10	須恵器	蓋	[14.0]	(1.4)	—	雲母，長石	灰	普通	かえり有り	Ｐ１確認面	5%
11	土師器	甕	—	(3.1)	—	雲母，長石	にぶい橙	普通	口辺部内外面横ナデ	Ｐ11確認面	5% 油煙付着
12	須恵器	甕	—	(8.5)	—	雲母，長石	灰	普通	体部外面縦方向平行叩き，内面指押さえ	Ｐ２確認面	5%
13	土師器	小形甕	[14.0]	(3.4)	—	赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り，口辺部内外面横ナデ	Ｐ１確認面	5%

第21号掘立柱建物跡模式図

第21号掘立柱建物跡（第６図）

調査区の南東部，Ｒ19区に位置する桁行４間以上×梁間３間，棟方向Ｎ－５°－Ｗの南北棟建物である。第22・29号掘立柱建物跡と重複しており，柱同士の切り合いがないため新旧関係は不明である。建物の南部分は調査区域外のため確認された建物の規模は，桁行10.30m（34尺）以上，梁間5.75m（18尺）である。柱間寸法は桁行2.57m（8.5尺）等間，梁間1.81m（６尺）等間で，柱穴の平面形は一辺約0.7mの方形である。遺物14の土師器坏片はＰ５の確認面から出土したもので，８世紀前葉に属するものである。

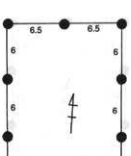
第６図　第21号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第21号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第６図）

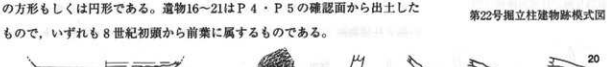
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
14	土師器	坏	—	(2.8)	—	微粒子	橙	普通	体部外面ヘラ削り，口辺部内外面横ナデ	Ｐ５確認面	5%

第22号掘立柱建物跡（第７図）

調査区の南東部，Ｒ19区に位置する桁行２間以上×梁間２間，棟方向Ｎ－４°－Ｗの南北棟建物である。本跡は第29号掘立柱建物跡に掘り込まれ，Ｐ３は第88号竪穴住居跡を掘り込んでいることから，第29号掘立柱建物跡より古く，第88号竪穴住居跡より新しい。また，第21号掘立柱建物跡とも重複しているが柱同士の切り合いがないため，新旧関係は不明である。建物の規模は，桁行3.63m（12尺）以上，梁間3.93m（13尺）である。柱間寸法は桁行1.81m（６尺）等間，梁間1.96m（6.5尺）等間で，柱穴平面形は一辺0.6～0.7mの方形もしくは円形である。遺物16～21はＰ４・Ｐ５の確認面から出土したもので，いずれも８世紀初頭から前葉に属するものである。



第22号掘立柱建物跡模式図



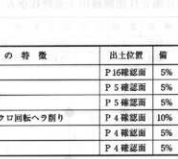
第７図　第22号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第22号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第７図）

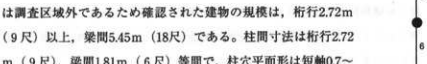
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
16	須恵器	蓋	—	(1.5)	—	長石，石英	灰黄	不良	かえり有り	Ｐ16確認面	5%
17	須恵器	蓋	[15.6]	(0.8)	—	雲母，長石	灰白	普通	かえり有り	Ｐ５確認面	5%
18	須恵器	蓋	—	(1.3)	—	雲母，砂粒	灰	普通	かえり有り	Ｐ５確認面	5%
19	須恵器	坏	—	(1.2)	[10.8]	長石	灰	普通	丸底，底部外面石ロクロ回転ヘラ削り	Ｐ４確認面	10%
20	須恵器	蓋	—	(1.5)	—	雲母，砂粒	灰	普通	かえり有り	Ｐ４確認面	5%
21	須恵器	甕	—	(1.5)	—	雲母，長石	灰黄	普通	体部外面同心円叩き	Ｐ４確認面	5%

第23号掘立柱建物跡（第８図）

調査区の南東部，Ｑ20区に位置する桁行１間以上×梁間３間，棟方向Ｎ－79°－Ｅの東西棟建物跡と思われる。建物の東側部分は調査区域外であるため確認された建物の規模は，桁行2.72m（９尺）以上，梁間5.45m（18尺）である。柱間寸法は桁行2.72m（９尺），梁間1.81m（６尺）等間で，柱穴平面形は短軸0.7～0.8m×長軸0.85～0.95mの長方形である。遺物は細片で８点出土しているが，図示できたのは２点だけである。遺物22は土師器坏口縁部，23は須恵器蓋天井部で，前者は８世紀前葉，後者は８世紀中葉以降に属するものと思われる。



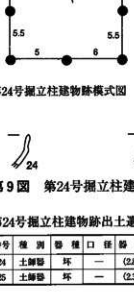
第23号掘立柱建物跡模式図



第８図　第23号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第23号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第８図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
22	土師器	坏	—	(1.4)	—	微粒子	橙	普通	口辺部横ナデ	Ｐ６確認面	5%
23	須恵器	蓋	—	(4.5)	—	雲母，長石	灰	普通	天井部右ロクロ回転ヘラ削り	Ｐ３確認面	5%



第24号掘立柱建物跡模式図

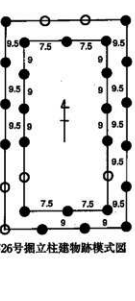
第24号掘立柱建物跡（第９図）

調査区の南東部，Ｑ19区に位置する桁行３間×梁間２間，棟方向Ｎ－10°－Ｅの南北棟建物である。南西へ2.2mの距離には本跡と同様な柱穴掘り方の第29号掘立柱建物跡が位置する。建物の規模は，桁行4.99m（16.5尺），梁間3.32m（11尺）である。柱間寸法は，桁行1.66m（5.5尺）等間，梁間は等間隔ではなく1.51m（５尺）と1.81m（６尺）である。柱穴平面形は，径0.4～0.5mの円形である。出土遺物は土師器・須恵器の細片が確認面から８点出土しているが，図示できたのは24・25の土師器坏口縁部である。いずれの遺物も８世紀前葉に属するものと思われるが，柱穴掘り方や規模などは他の掘立柱建物跡とは異にしており，平安時代以降の建物の可能性がある。

第９図　第24号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第24号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第９図）

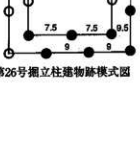
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
24	土師器	坏	—	(2.8)	—	雲母	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り，口辺部横ナデ	Ｐ３確認面	5%
25	土師器	坏	—	(2.3)	—	微砂子	明赤褐	普通	体部外面ヘラ削り，口辺部横ナデ	Ｐ７確認面	5%



第25号掘立柱建物跡模式図

第25号掘立柱建物跡

調査区の南東部，Ｒ21区に位置する桁行３間×梁間２間，棟方向Ｎ－４°－Ｗの南北棟建物である。30m西には本跡と同様な柱穴掘り方の第29号掘立柱建物跡が主軸方向をほぼ同じくして位置する。建物の規模は，桁行4.69m（15.5尺），梁間3.33m（11尺）である。桁行の柱間寸法は等間隔ではなく，1.51m（５尺）と1.66m（5.5尺）であり，梁間柱間寸法は1.66m（5.5尺）等間である。柱穴平面形は，径0.3～0.4mの円形である。前述の第24号掘立柱建物跡と同様に柱穴掘り方・建物規模も小さく，奈良・平安時代の建物というよりは平安時代以降の建物の可能性がある。出土遺物は土師器の細片が６点あるが図示できるものはない。



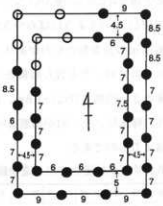
第26号掘立柱建物跡模式図

第26号掘立柱建物跡

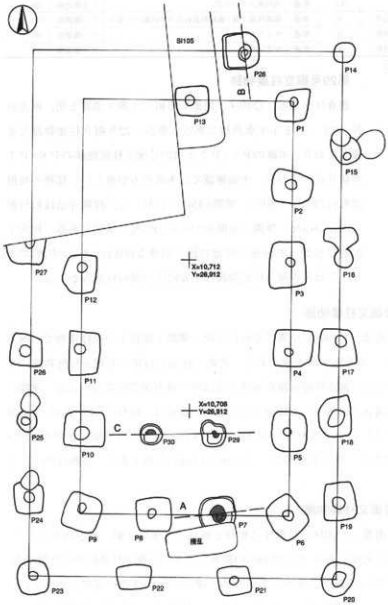
調査区の南東部，Ｓ19区に位置する桁行５間×梁間２間の身舎に四面庇がつき，棟方向はＮ－０°を示す南北棟である。建物の規模は，身舎で桁行13.6m（45尺），梁間4.54m（15尺）を測り，1.5m（５尺）の庇が付き，四面を含めると桁行14.39m（4.75尺），梁間7.57m（25尺）である。身舎の柱間寸法は桁行が2.72m（９尺）等間，梁間2.27m（7.5尺）等間，庇の柱間寸法は桁行2.87m（9.5尺）等間である。身舎の柱穴平面形は短軸0.8～1.0m×長軸0.9～1.2mの長方形，庇の柱穴平面形は径0.7～1.0mの円形である。本跡のＰ13が第95号竪穴住居跡を，Ｐ22が竪穴第78号竪穴住居跡を掘り込んでおり，本跡が新しい。いずれの竪穴住居跡も出土遺物がないため時期の決定はできない。

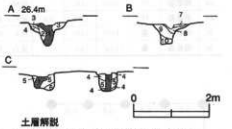
第27号掘立柱建物跡（第10図）

調査区の南東部，S20区に位置する桁行５間×梁間３間の身舎に四面庇が付き，棟方向はN－１°－Eを示す南北棟建物跡である。北へ８ｍの距離に本跡の桁行と第４・５号掘立柱建物跡の梁間が柱筋を通して位置している。また，西へ13.5ｍには本跡と軸方向が同様の第26号掘立柱建物跡が位置している。建物の規模は身舎だけで桁行10.75ｍ（35.5尺），梁間5.45ｍ（18尺）を測り，南面には1.51ｍ（５尺），東・西・北面には1.36ｍ（4.5尺）の庇が付き，四面を含めた規模は桁行13.63ｍ（45尺），梁間8.16ｍ（27尺）である。身舎の柱間寸法は，桁行では東面中央の柱間が2.27ｍ（7.5尺）を測り，他はすべて2.12ｍ（７尺）等間である。庇の柱間寸法は，東桁行は



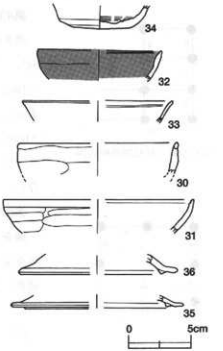
第27号掘立柱建物跡模式図





土層解説

1　極暗褐色　砂質粘土粒多量，しまり弱
2　暗褐色　ローム中ブロック少量，しまり弱
3　暗褐色　ローム中・小ブロック少量，しまり強
4　褐　色　ローム大ブロック少量，しまり強
5　黒褐色　ローム中ブロック・黒色土中ブロック中量，しまり強
6　暗褐色　ローム小ブロック中量
7　暗褐色　ローム粒子微量
8　暗褐色　ローム粒子少量
9　暗褐色　ローム小ブロック，ローム粒子少量
10　暗褐色　ローム小ブロック微量



第10図　第27号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

北２間分が2.57m（8.5尺）で，それ以外は2.12m（７尺）等間，西桁行は2.12m（７尺），1.81m（６尺），2.57m（8.5尺）というようにばらつきが見られる。身舎の柱穴平面形は，一辺が約0.9mの方形のものと短軸0.9m×長軸1.1mの長方形のものがあり，深さは敲ち割りを行ったＰ７・Ｐ28で約0.58m・0.67mである。柱穴の堀土はロームブロックを含む暗褐色土，柱抜き取り穴は径0.5mの円形で埋土は砂質粘土粒を多量に含んでいる。南妻の２m内側に径0.5～0.6m，深さ0.5mの円形の柱穴が位置し，床束と思われる。出土遺物は30～32が土師器坏口縁部片，33・34が須恵器坏口縁部片，35・36が須恵器蓋口縁部片であり，いずれも８世紀初頭から前葉に属するものである。

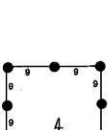
第27号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第10図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
30	土師器	坏	[12.8]	(2.5)	—	砂粒，赤色粒子	明赤褐	普通	体部外面ヘラ削り，口辺部横ナデ	Ｐ１確認面	5%
31	土師器	坏	[15.2]	(2.7)	—	砂粒，赤色粒子	橙	普通	体部外面ヘラ削り，口唇部横ナデ，口唇部内面沈線	Ｐ30確認面	5%
32	土師器	坏	[9.6]	(2.4)	—	微粒子	褐	普通	口辺部横ナデ，口唇部内面沈線，黒色処理	Ｐ７埋土	5%
33	須恵器	坏	[12.0]	(1.6)	—	砂粒	灰白	普通	内外面ロクロナデ	Ｐ３確認面	5%
34	須恵器	坏	—	(2.0)	6.8	長石，石英	灰	普通	体部外面下端・底部外面右ロクロ回転ヘラ削り	Ｐ４確認面	20%
35	須恵器	蓋	[14.0]	(1.6)	—	長石，砂粒	灰	普通	かえり有り	Ｐ１確認面	5%
36	須恵器	蓋	[12.4]	(1.5)	—	長石，砂粒	灰	普通	かえり有り	Ｐ１確認面	5%

第29号掘立柱建物跡模式図

第29号掘立柱建物跡

調査区南東部，Ｑ19区に位置する桁行４間×梁間２間，棟方向Ｎ－83°－Ｅを示す東西棟である。第21・22号掘立柱建物跡と重複しており，本跡のＰ６・Ｐ７と第22号掘立柱建物跡のＰ６・Ｐ７が切り合っており，平面確認では本跡の方が新しい。建物の規模は桁行7.87m（26尺），梁間5.15m（17尺）で，柱間寸法は桁行が1.96m（6.5尺）等間，梁間が2.57m（8.5尺）等間である。柱穴平面形は第24・25号掘立柱建物跡と同様な径0.4mほどの円形であり，これらの掘立柱建物跡は平安時代以降の可能性がある。



第43号掘立柱建物跡模式図

第43号掘立柱建物跡

調査区南部，Ｕ19区に位置する桁行３間×梁間１間以上の総柱建物で，棟方向Ｎ－３°－Ｗを示す南北棟である。北東へ9.0mには第１号掘立柱建物跡，東へ18mに第62号掘立柱建物跡が本跡とほぼ同じ棟方向で位置している。建物の東部分は調査区域外のため確認された建物の規模は，桁行5.45m（18尺），梁間2.12m（７尺）以上で，柱間寸法は桁行が1.81m（６尺）の等間，梁間が2.12m（７尺）である。柱穴平面形は一辺が0.9～1.1mの方形である。遺物は出土してない。

第62号掘立柱建物跡模式図

第62号掘立柱建物跡

調査区南端，Ｕ20区に位置する桁行２間以上×梁間２間，棟方向Ｎ－１°－Ｗを示す南北棟である。西へ約18mの距離には第43号掘立柱建物跡が位置する。建物の南部分が調査区域外であるため，確認された建物の規模は桁行5.45m（18尺）以上，梁間5.45m（18尺）である。柱間寸法は桁行，梁間共に2.72m（９尺）の等間である。柱穴掘り方平面形は，短軸0.8～0.9m×長軸0.9～1.1mの長方形である。遺物は出土していない。

(2) 柵列跡

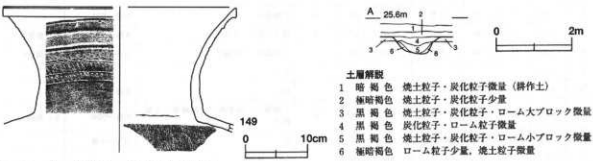
第１号柵列

調査区南東端，R21・S21・T22区に位置する。正倉域区画溝である金田西坪B遺跡第１号溝の約15m北から北に向かってN－6°－Wの方向で延びる。確認された総延長は，柱穴P１～P15の57.2m で，柱穴の平面形は径0.4～0.6mの円形，深さは裁ち割り調査を実施したP８・P９で0.6～0.7mである。遺物は出土していない。

(3) 溝跡

第２号溝跡（第11図）

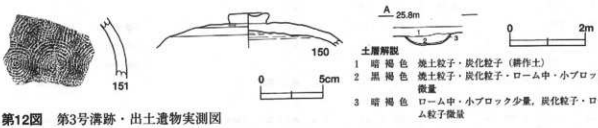
調査区南端中央部，U16，V16区に位置する。建物群A区から47mの空白域を隔て，N－2°－Wの南北方向にはしる。北・南は調査区域外であるため，確認できた規模は，長さ11.5mである。２か所で溝が途切れており，調査範囲が狭いため，土坑状の掘り込みがつながっているようにも見えるが確定はできない。上幅1.3m，下幅6.5m，確認面からの深さは35cmで，薬研堀状を呈する。出土遺物は149の須恵器片があり，第３号溝から出土した破片と接合関係にあり，８世紀中・後葉の時期に属するものと思われる。



第11図 第２号溝跡・出土遺物実測図

第３号溝跡（第12図）

調査区南端中央部，V19区の第43号掘立柱建物跡から南へ12m位置しN－2°－Wの南北方向にはしる。本跡の南側が調査区域外であるため，確認できた規模は長さ2.2mである。上幅1.25m，確認面からの深さ28cmで断面は緩やかな弧状を呈する。遺物は土師器坏片，須恵器蓋片・甕片が出土している。150は須恵器蓋片，151は須恵器甕体部片で，８世紀後葉頃に属するものと思われる。なお，第２号溝跡の149須恵器甕口縁部片は本跡から出土したものと接合している。



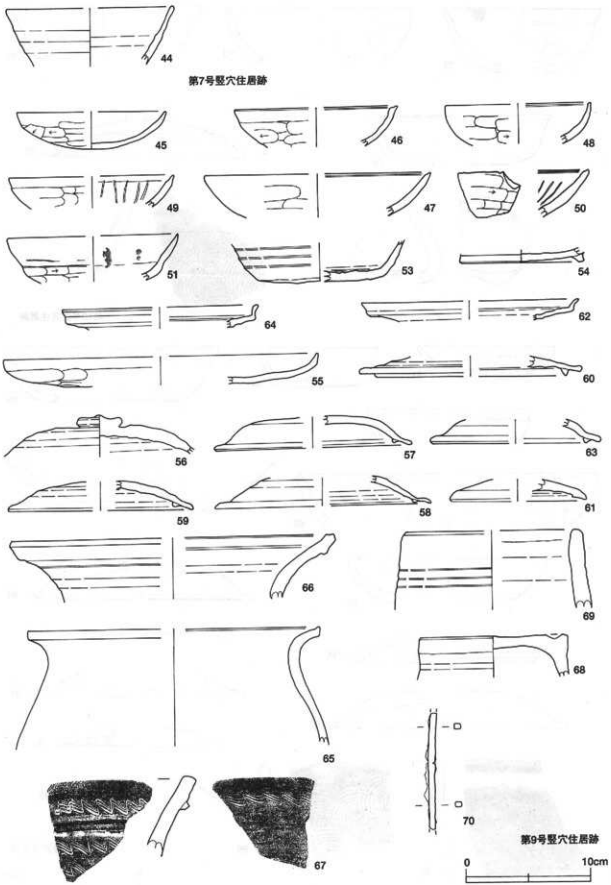
第12図 第3号溝跡・出土遺物実測図

第２・３号溝跡出土遺物観察表

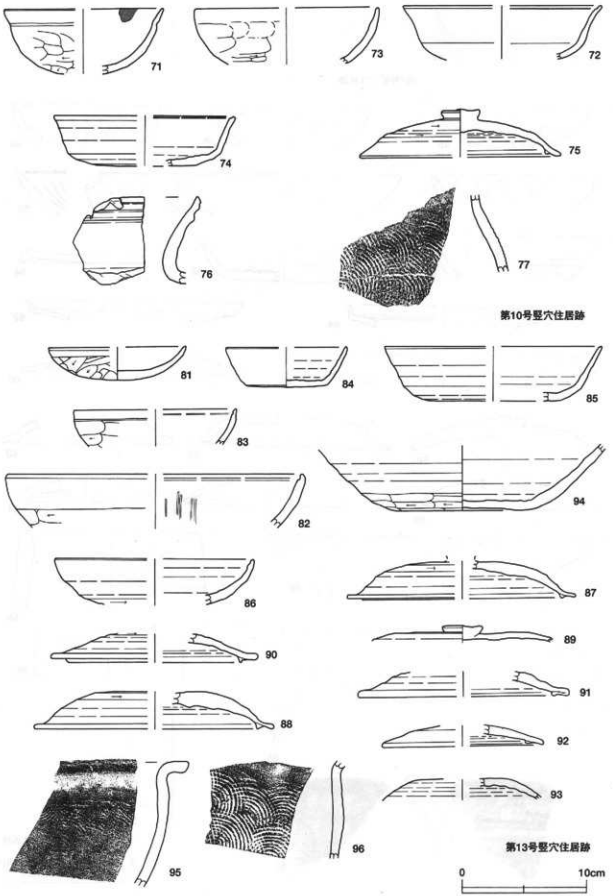
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
149	須恵器	甕	[37.2]	(20.1)	—	白色粒子多量	青灰	普通	7本1組の櫛歯状波状文1条・押圧文2条，内面同心円状含て具痕スリ消し	2・3号溝	20%
150	須恵器	蓋	—	(2.8)	—	長石	灰白	普通	天井部右ロクロ回転ヘラ割り	3号溝	20%
151	須恵器	甕	—	(4.9)	—	砂粒	灰	普通	体部外面同心円状叩き痕，内面指頭押圧	3号溝	5%

(4) 竪穴住居跡

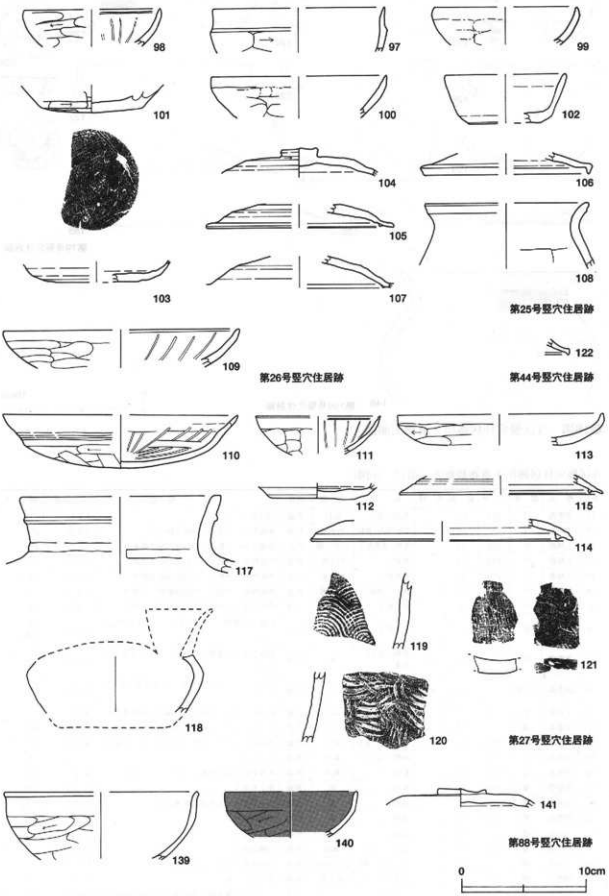
住居跡番号	位置	主(長)軸方向	平面形	規模(m)(長軸×短軸)	壁	出土遺物	新旧関係(古→新)	時期
5	U-16 V-16	N－20°－E	方形	4.3 × 4.3	—	なし		—
6	V-16	N－4°－E	方形	3.3 × (2.4)	—	なし		—
7	U-17	N－14°－W	方形	4.6 × (4.2)	有	土師器片，須恵器片		8C後葉
9	Q-20・21 R-20・21	N－7°－W	方形	6.8 × (4.2)	—	土師器片，須恵器片，円面硯，鉄鏃，鞆状淖，スサ入粘土		8C初頭
10	R-22	—	—	—	—	土師器片，須恵器片，鉄淖，スサ入粘土		8C初頭
12	Q-20 R-20	N－25°－E	—	—	—	なし		—
13	R-20・21	N－17°－W	長方形	6.0 × 4.5	—	土師器片，須恵器片	SB4・5→本跡	8C初頭
25	Q-20	—	—	4.0 × (2.2)	—	土師器片，須恵器片，灰釉陶器片2，瓦片3，鉄滓		8C前葉
26	R-20	N－10°－W	長方形	4.0 × 3.4	—	縄文土器片，土師器片，須恵器片		8C初頭
27	R-21 S-21	N－8°－W	方形	9.0 × (9.0)	有	土師器片，須恵器片，瓦片1	SI79	8C初頭
38	T-20	—	—	—	—	なし		—
42	U-19	N－15°－W	方形	5.0 × 5.0	有	土師器片	本跡→SB1	—
43	U-19	N－21°－W	方形	3.8 × (3.2)	有	縄文土器片，土師器片	本跡→SB1	8C前葉か
44	S-19	N－29°－W	方形	4.0 × 4.0	—	土師器片，須恵器片	本跡→SB1	8C前葉か
47	Q-22	—	—	—	—	なし		—
78	S-19	—	—	—	—	なし	本跡→SB26	—
79	S-21	N－11°－W	方形	8.3 × (6.8)	有	土師器片，須恵器片，紡錘車，支脚，鉄滓	本跡→SI80	8C初頭
80	S-21	N－11°－W	長方形	6.7 × 5.7	有	なし	SI79→本跡	—
81	Q-18・19	—	—	(1.6) ×(11.6)	—	羽口，鞆状淖		—
82	R-22	—	—	4.3 × (1.6)	—	なし		—
83	R-22	—	—	—	—	なし		—
84	S-21	—	—	—	—	なし		—
88	R-19	N－15°－W	—	—	有	土師器片，須恵器片	本跡→SB21・22	8C初頭，SI95と同一か
89	Q-20	N－15°－W	長方形	4.0 × (4.0)	—	なし		—
90	S-19	—	—	2.2 × (1.2)	有	なし	SI91→本跡	—
91	S-19	—	—	—	—	なし	本跡→SI90，SB26	—
92	R-19	—	—	4.6 × (1.0)	—	なし		—
93	R-19	—	楕円形	4.7 × (2.8)	—	なし		—
95	R-19	—	—	4.5 × (4.0)	—	なし	本跡→SB26	SI88と同一か
104	S-19	N－28°－E	長方形	5.3 × 3.5	—	なし	本跡→SB1	—
105	S-20	—	—	4.9 × —	—	なし	本跡→SB27	—
106	S-21	N－12°－W	円形	5.4 × (5.0)	—	縄文土器片		縄文中期
107	T-21	N－12°－E	方形	4.5 × 4.0	有	なし		—
108	T-21	N－25°－W	—	6.0 × 3.7	有	縄文土器片，土師器片		縄文中期
174	U-18	N－0°	方形	3.9 × 3.9	—	須恵器片		—
199	U-20・21	N－13°－W	—	5.2 × (4.6)	—	縄文土器片，土師器片，須恵器片		8C初頭
206	R-22 S-22	—	—	—	—	なし		—



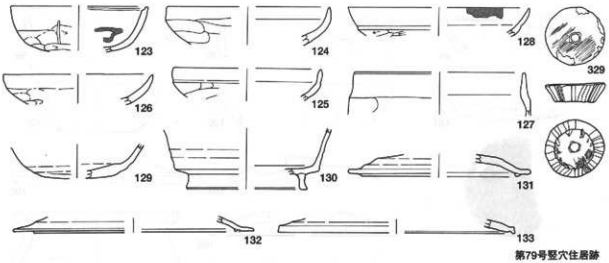
第13図　A区竪穴住居跡出土遺物実測図(1)



第14図　A区竪穴住居跡出土遺物実測図(2)



第15図　A区竪穴住居跡出土遺物実測図(3)



第16図　A区竪穴住居跡出土遺物実測図(4)

A区竪穴住居跡出土遺物観察表（第13～16図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
44	須恵器	坏	[13.4]	(4.6)	—	雲母，長石	灰白	普通	内外面ロクロナデ	7号住	10%
45	土師器	坏	[12.0]	2.9	—	雲母，長石，砂粒	明赤褐	普通	体部外面ヘラ削り，口縁部横ナデ	9号住	25%
46	土師器	坏	[13.0]	(3.1)	—	雲母，赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り，口唇部内面沈線あり	9号住	10%
47	土師器	坏	[18.0]	(3.4)	—	微粒子	明赤褐	普通	体部外面ヘラ削り，口唇部内面沈線あり	9号住	10%
48	土師器	坏	[11.8]	(3.2)	—	赤色粒子	明赤褐	普通	体部外面ヘラ削り，口唇部内面沈線あり	9号住	10%
49	土師器	坏	[13.3]	(2.5)	—	長石，砂粒	明赤褐	普通	体部外面ヘラ削り，内面放射状ヘラ磨き	9号住	5%
50	土師器	坏	—	(3.6)	—	赤色粒子	明赤褐	普通	体部外面ヘラ削り，内面放射状ヘラ磨き	9号住	10%
51	土師器	坏	[13.7]	(3.6)	—	赤色粒子	橙	普通	口縁部と体部との境に段をもつ，体部外面ヘラ削り	9号住	10% 油煙付着
53	須恵器	坏	—	(3.1)	[10.6]	雲母，長石，石英	灰	普通	底部不定方向手持ちヘラ削り，二次底面有り，丸底	9号住	40%
54	須恵器	高台付坏	—	(1.1)	[9.8]	長石，砂粒	灰	普通	底部右ロクロ回転ヘラ削り，高台貼り付け後ナデ	9号住	15%
55	土師器	皿	[25.4]	(2.3)	—	雲母，赤色粒子	にぶい褐	普通	底部から体部ヘラ削り，口縁部・内面横ナデ	9号住	15%
56	須恵器	壺	—	(3.3)	—	雲母，砂粒	灰	普通	天井部右ロクロ回転ヘラ削り	9号住	30%
57	須恵器	蓋	[16.0]	(2.4)	—	雲母，砂粒，長石	灰白	普通	天井部，右ロクロ回転ヘラ削り，かえり有り	9号住	25%
58	須恵器	蓋	[17.4]	(2.3)	—	砂粒，長石	黄灰	普通	かえり有り	9号住	20%
59	須恵器	蓋	[14.6]	(2.3)	—	長石	褐灰	普通	天井部右ロクロ回転ヘラ削り，かえり有り	9号住	20%
60	須恵器	蓋	[18.0]	(1.6)	—	長石	灰	普通	かえり有り	9号住	10%
61	須恵器	蓋	[11.0]	(1.7)	—	長石	灰	普通	かえり有り，天井部自然釉付着	9号住	5%
62	須恵器	蓋	[17.4]	(1.6)	—	雲母	灰	普通	口縁部外反	9号住	10%
63	須恵器	蓋	[13.8]	(1.9)	—	長石	灰白	普通	かえり有り	9号住	10%
64	須恵器	蓋	[15.8]	(1.7)	—	雲母，長石	黄灰	普通	口縁部外反	9号住	10%
65	土師器	甕	[23.4]	(9.4)	—	雲母，長石，砂粒	にぶい褐	普通	口縁端部わずかにつまみ上げ	9号住	5%
66	須恵器	甕	[25.8]	(5.0)	—	雲母，長石，小石	暗赤褐	普通	折り返し口縁	9号住	5%
67	須恵器	甕	—	(6.2)	—	雲母，長石，小石	灰	普通	3本一組の櫛歯状工具による波状文	9号住	5%
68	須恵器	円面硯	11.7	(3.3)	—	雲母，長石	灰	普通		9号住	30%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
69	須恵器	鉢か	[13.6]	(6.3)	—	緻密	黄灰	良好	外面自然釉	9号住	20%
71	土師器	坏	[12.7]	(5.2)	—	赤色粒子	にぶい橙	普通	体・底部外面ヘラ削り，体部と口辺部との境に段をもつ	10号住	20% 油煙付着
72	須恵器	高台付坏	[16.0]	(4.3)	—	雲母，長石	にぶい橙	不良	口唇部内面に沈線あり	10号住	20%
73	土師器	坏	[14.6]	(4.5)	—	雲母，赤色粒子	橙	普通	体・底部外面ヘラ削り，内面横ナデ	10号住	15%
74	須恵器	坏	[14.6]	(5.0)	[12.0]	雲母，長石	灰	不良	底部右ロクロ回転ヘラ削り，二次底面有り	10号住	20%
75	須恵器	蓋	[16.0]	3.9	—	雲母，砂粒	灰	不良	天井部右ロクロ回転ヘラ削り，かえり有り	10号住	60%
76	須恵器	壺	—	(7.0)	—	長石，白色粒子	灰	普通	口縁部直下に1条の凸帯が巡る	10号住	5%
77	須恵器	甕	—	(6.2)	—	雲母，長石	灰黄	不良	外面同心円叩き，内面指頭痕	10号住	5%
81	土師器	坏	[11.0]	1.6	—	赤色粒子，砂粒	赤褐	普通	体・底部ヘラ削り	13号住	30%
82	土師器	坏	[23.6]	(4.4)	—	雲母，赤色粒子	橙	普通	底部ヘラ削り，内面放射状ヘラ磨き，口唇部内面沈線	13号住	5%
83	土師器	坏	[13.0]	(3.0)	—	赤色粒子	橙	普通	体部ヘラ削り，口唇部内面沈線	13号住	5%
84	須恵器	坏	[9.6]	3.2	6.4	砂粒	灰オリーブ	良好	底部右ロクロ回転ヘラ削り	13号住	40%
85	須恵器	坏	[17.4]	4.4	[13.8]	雲母，長石	灰	普通	二次底面あり	13号住	20%
86	須恵器	坏	[15.8]	(3.7)	—	長石	灰	普通	底部丸底，底部右ロクロ回転ヘラ削り	13号住	15%
87	須恵器	蓋	[18.2]	(3.0)	—	雲母，長石	灰白	普通	天井部右ロクロ回転ヘラ削り，かえり有り	13号住	40%
88	須恵器	蓋	[19.2]	(3.0)	—	雲母，長石	にぶい黄橙	不良	天井部右ロクロ回転ヘラ削り，かえり有り	13号住	20%
89	須恵器	蓋	—	(1.4)	—	雲母，長石	橙	不良	天井部右ロクロ回転ヘラ削り，つまみ層平なボタン状	13号住	20%
90	須恵器	蓋	[16.6]	(2.3)	—	雲母，長石	浅黄	普通	かえり有り，内面墨付着	13号住	10%
91	須恵器	蓋	[16.8]	(2.0)	—	雲母，長石	灰白	普通	かえり有り	13号住	10%
92	須恵器	蓋	[13.0]	(1.7)	—	雲母，砂粒	灰白	普通	かえり有り	13号住	10%
93	須恵器	蓋	—	(1.7)	—	砂粒	灰白	普通	内面自然釉	13号住	5%
94	須恵器	鉢	—	(5.2)	[11.8]	雲母，長石	にぶい黄	普通	底部縁を回転ヘラ削り，底部外周・体部下端ヘラ削り	13号住	20%
95	須恵器	壺	—	(10.1)	—	雲母，長石	灰白	普通	外面同心円叩き後ナデ，内面横ナデ	13号住	10%
96	須恵器	甕	—	(9.8)	—	雲母，砂粒	にぶい赤褐	普通	外面同心円叩き	13号住	10%
97	土師器	坏	[13.8]	(3.6)	—	砂粒	にぶい赤褐	普通	体部ヘラ削り，体部と口縁部との境に段をもつ	25号住	5%
98	土師器	坏	[11.0]	(2.9)	—	赤色粒子	橙	普通	体部ヘラ削り，内面放射状の磨き，口唇部内面沈線	25号住	5%
99	土師器	坏	[11.5]	(3.0)	—	赤色粒子	橙	普通	体部ヘラ削り，口縁部・内面横ナデ	25号住	5%
100	土師器	坏	[14.0]	(3.4)	—	砂粒	にぶい橙	普通	体部ヘラ削り，口縁部・内面横ナデ	25号住	5%
101	土師器	坏	—	(2.3)	8.0	砂粒	明赤褐	普通	底部・体部下端不定方向手持ちヘラ削り，丸底	25号住	30%
102	須恵器	坏	[9.6]	3.9	[7.6]	砂粒，長石	灰	普通	底部回転ヘラ切り後縁なナデ，二次底部あり	25号住	30%
103	須恵器	坏	—	(1.7)	[10.6]	砂粒，石英	灰白	不良	底部一方向手持ちヘラ削り，二次底面あり	25号住	10%
104	須恵器	蓋	—	(2.3)	—	雲母，砂粒	灰黄	普通	天井部右ロクロ回転ヘラ削り，つまみボタン状	25号住	80%
105	須恵器	蓋	[14.9]	(1.9)	—	雲母，砂粒	灰	普通	天井部右ロクロ回転ヘラ削り，かえり有り	25号住	20%
106	須恵器	壺	[13.2]	(1.7)	—	砂粒	灰	普通	口縁端部垂直に屈曲	25号住	5%
107	須恵器	甕	—	(2.1)	—	長石，砂粒，雲い	灰	普通	天井部左ロクロ回転ヘラ削り，かえり有り	25号住	10%
108	土師器	甕	[13.0]	(5.3)	—	長石	橙	普通	口唇部はわずかにつまみ上げられる	25号住	5%
109	土師器	坏	[18.8]	(3.0)	—	赤色粒子	明赤褐	普通	体・底部ヘラ削り，内面放射状の磨き	26号住	15%
110	土師器	坏	[18.8]	(4.2)	—	雲母，長石	にぶい橙	普通	底部ヘラ削り，内面放射状磨き	27号住	20%
111	土師器	坏	[9.8]	(3.0)	—	赤色粒子	明赤褐	普通	体部ヘラ削り，口唇部内面工具による沈線	27号住	20%
112	土師器	坏	—	(1.0)	9.4	雲母，長石	橙	普通	底部一方向手持ちヘラ削り，二次底面あり	27号住	30%
113	土師器	鉢	[16.4]	(2.5)	—	雲母，長石，小石	にぶい黄橙	普通	体・底部ヘラ削り，内面横ナデ	27号住	10%
114	須恵器	蓋	[21.0]	(1.7)	—	雲母，砂粒	灰	普通	かえり有り	27号住	5%
115	須恵器	蓋	[16.4]	(1.5)	—	砂粒	灰	普通	かえり有り	27号住	5%
117	須恵器	広口壺	[16.0]	(6.1)	—	雲母，砂粒	灰黄	不良	口縁部は水平面をもつ，口縁直下に凸帯	27号住	15%
118	須恵器	平瓶	—	(4.5)	—	長石	青灰	普通	肩部はわずかに丸み有り	27号住	10%
119	須恵器	甕	—	(6.0)	—	雲母，砂粒	灰	普通	体部外面同心円状叩き	27号住	5%
120	須恵器	甕	—	(5.6)	—	砂粒	灰	普通	体部内面同心円状の当て具痕	27号住	5%
121	瓦	軒丸瓦	—	—	—	赤色粒子，砂粒	赤褐	普通	凸面ヘラ削り	27号住	5%
122	須恵器	壺	—	(1.2)	—	砂粒	青灰	普通	口縁端部垂直に屈曲	44号住	5%
123	土師器	坏	[11.0]	(3.6)	—	緻密	にぶい赤褐	良好	体・底部指頭押圧，口唇部内面工具による沈線	79号住	10% 内面油煙
124	土師器	坏	[13.0]	(3.0)	—	赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部ヘラ削り，内面横ナデ	79号住	10%
125	土師器	坏	[11.8]	(2.4)	—	赤色粒子	橙	普通	体部ヘラ削り	79号住	10%
126	土師器	坏	[12.0]	(2.3)	—	赤色粒子，砂粒	にぶい赤褐	普通	体部ヘラ削り・指頭押圧，内面横ナデ	79号住	10%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
127	土師器	鉢	[13.8]	(3.4)	—	緻密	にぶい赤褐	良好	体部ヘラ削り，口縁部ほぼ直立	79号住	10%
128	土師器	坏	[14.6]	(2.3)	—	赤色粒子，砂粒	にぶい橙	普通	体部ヘラ削り	79号住	10% 口縁部油煙
129	須恵器	坏	—	(2.5)	[8.8]	微粒子	灰白	普通	底部回転ヘラ切り後雑なナデ，二次底面あり，丸底	79号住	20%
130	須恵器	高台付坏	—	(4.9)	[9.6]	長石，小石	灰	普通	高台は「八」の字状	79号住	20%
131	須恵器	蓋	[14.7]	(1.8)	—	長石，小石	にぶい赤褐	普通	かえり有り	79号住	10%
132	須恵器	蓋	[19.4]	(1.2)	—	雲母，長石	灰オリーブ	普通	かえり有り	79号住	10%
133	須恵器	蓋	[19.0]	(1.1)	—	長石	灰	普通	口縁端部は鳥嘴に屈曲	79号住	10%
139	土師器	鉢	[15.4]	(5.4)	—	微粒子	明赤褐	普通	体部ヘラ削り	88号住	20%
140	土師器	坏	[10.4]	(3.6)	—	赤色粒子	にぶい橙	普通	体部ヘラ削り，黒色処理	88号住	10%
141	須恵器	蓋	—	(1.6)	—	雲母，砂粒	灰白	普通	天井部右ロクロ回転ヘラ削り，扁平なボタン状つまみ	88号住	20%
148	土師器	小形甕	[14.2]	(10.3)	—	赤色粒子	橙	普通	体部ヘラ削り，頸部櫛歯状工具によるナデ	199号住	30%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
70	鏃	(9.4)	0.5	0.4	(8.35)	鉄	鏃身部欠損。	第9号住	

番号	器種	最大径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
329	紡錘車	4.7	1.6	0.9	38.9	軟板岩	断面逆台形。側面磨き	79号住	

2　建物群B区（付図1）

B区は当遺跡の中央部に位置し，掘立柱建物跡16棟，竪穴住居跡15軒，基壇建物跡1基が確認された。以下，掘立柱建物跡・基壇建物跡については遺構ごとに記述し，竪穴住居跡については，確認調査のみであることから，遺構・遺物に関しても一覧表で記載する。

(1)　掘立柱建物跡

第7号掘立柱建物跡模式図

第7号掘立柱建物跡

調査区の中央部，O14・P14・P15区に位置する桁行3間×梁間2間，棟方向N－82°－Eの東西棟建物跡である。本跡から5.5m南西には第14号掘立柱建物跡が位置し，本跡の西妻と第14号掘立柱建物跡の東妻が一直線上に並ぶ。建物の規模は，桁行6.81m（22.5尺），梁間4.84m（16尺）であり，柱間寸法は桁行2.27m（7.5尺）等間，梁間2.42m（8尺）等間である。柱穴掘り方平面形は一辺は約0.7～0.8mの方形である。遺物は出土していない。

第8号掘立柱建物跡模式図

第8号掘立柱建物跡（第17図）

調査区の中央部，P14・P15区に位置する桁行4間×梁間2間，棟方向N－7°－Wの南北棟建物跡である。本跡から5.0m西には第10号掘立柱建物跡が位置し，棟方向がほぼ一致する。第16号掘立柱建物跡と重複するが柱穴同士の切り合いがないため新旧関係は不明である。また，第36号掘立柱建物跡をP8・P9号柱穴が掘り込んでおり，本跡の方が新しい。建物の規模は，桁行8.48m（28尺），梁間4.84m（16尺）である。柱間寸法は桁行2.12m（7尺）等間，梁間2.42m（8尺）等間で，柱穴の平面形は短軸0.7～0.9m×長軸0.9～1.1mの方形または長方形である。遺物はP2確認面から土師器片3

点，須恵器片が2点出土しており，154須恵器坏片は，8世紀中・後葉以降に属するものと思われる。また，本跡と重複関係にあり，本跡より古い第36号竪穴住居跡の遺物は8世紀中葉頃のものと思われるので，本跡の時期は8世紀中葉以降の可能性がある。

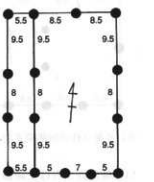
第17図　第8号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第8号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第17図）

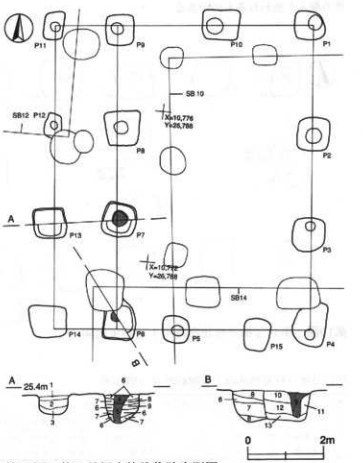
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
154	須恵器	坏	(12.6)	(3.3)	—	微粒子	灰白	普通	口縁端部が肥厚する。	P 2 確認面	5%

第9号掘立柱建物跡（第18図）

調査区の中央部，P14区に位置する桁行3間×梁間2間の身舎に西庇がつく，棟方向N—5°—Wの南北棟建物跡である。第10・12・14号掘立柱建物跡と重複しており，第14号掘立柱建物跡の方が新しい。また，第10号掘立柱建物跡の新旧は平面観察では本跡が新しく，本跡と第10号掘立柱建物跡の規模・棟方向がほぼ同一であることから，建て替えの可能性がある。建物の規模は身舎だけで，桁行8.18m（27尺），梁間5.15m（17尺）を測り，1.66m（5.5尺）の庇が西に付き，庇も含めると6.82m（22.5尺）になる。柱間寸法は等間隔ではなく，桁行では外側から1間分がそれぞれ2.87m（9.5尺）等間，中央1間分が2.42m（8尺）である。梁間の北妻は2間で2.57m（8.5尺）等間であるのに対して，南妻は3間で，外側1間ずつは1.51m（5尺），内側1間は2.12m（7尺）となっている。身舎の柱穴平面形は一辺約0.9mの方形で，断ち割りを行ったP6の深さは0.96m，埋土はロームブロックを含んだ暗褐色土である。第18図土層断面図中，第1～8層までが本跡柱穴のもの，第9～13層が本跡と重複関係にある第14号掘立柱建物跡のものである。庇の柱穴平面形は一辺約0.7mの方形と短軸0.5m×長軸0.7mの長方形がありばらつきがみられる。遺物は出土していない。



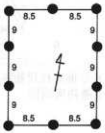
第9号掘立柱建物跡模式図



第18図　第9号掘立柱建物跡実測図

土層解説

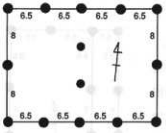
1　褐　色　ローム中ブロック多量
2　褐　色　ローム大・中ブロック少量
3　暗褐色　ローム大ブロック少量
4　褐灰色　白色粘土ブロック中量（SB9柱抜き取り痕）
5　暗褐色　ローム中ブロック中量（SB9柱抜き取り痕）
6　褐　色　ローム大ブロック多量，しまり強
7　暗褐色　ローム中ブロック少量
8　暗褐色　ローム中・小ブロック少量
9　褐灰色　白色粘土大ブロック中量（SB14柱抜き痕）
10　褐　色　ローム大ブロック中量，白色粘土小ブロック少量（SB14埋土）
11　褐　色　ローム大ブロック多量　しまり強（SB14埋土）
12　黒褐色　ローム中ブロック・白色粘土小ブロック少量　しまり強（SB14埋土）
13　褐　色　ローム大ブロック中量　しまり強（SB14埋土）



第10号掘立柱建物跡模式図

第10号掘立柱建物跡

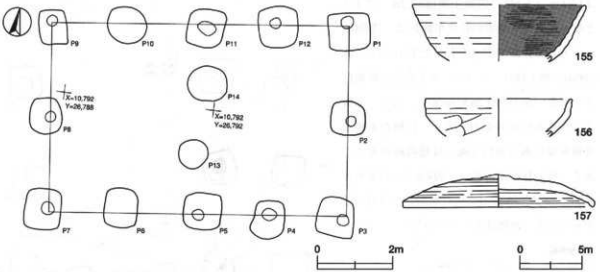
調査区の中央部，Ｐ14区に位置する桁行３間×梁間２間，棟方向Ｎ－10°－Ｗの南北棟建物跡である。南西へ1.8mの距離に第24号掘立柱建物跡，南西へ10.0mの距離に第21・29号掘立柱建物跡が位置する。本跡の５ｍ東には棟方向がほぼ同一の第８号掘立柱建物跡がある。建物の規模は，桁行8.18m（27尺），梁間5.15m（17尺）である。柱間寸法は桁行2.72m（９尺），梁間2.57m（8.5尺）等間で，柱穴平面形は一辺が0.6～0.7mの方形または円形である。遺物は出土していない。



第11号掘立柱建物跡模式図

第11号掘立柱建物跡（第19図）

調査区の中央部，Ｏ14区に位置する桁行４間×梁間２間，棟方向Ｎ－84°－Ｅの東西棟建物跡である。北へ1.0mには規模・棟方向がほぼ同一の第13号掘立柱建物跡が位置する。建物の規模は，桁行7.87m（26尺），梁間4.84m（16尺）である。柱間寸法は，桁行1.96m（6.5尺）等間，梁間2.42m（８尺）等間で，柱穴掘り方平面形は一辺約1.0mの方形である。側柱のＰ５・Ｐ11の一直線上にはＰ13・Ｐ14がみられ，東柱もしくは間仕切り柱と思われる。Ｐ１・Ｐ３・Ｐ４・Ｐ10・Ｐ13・Ｐ14の確認面からは土師器甕片３点・坏片５点，須恵器蓋片４点・甕片２点が出土している。155・156は土師器坏片，157は須恵器天井部片であり，８世紀前・中葉に属するもの，９世紀後葉に属するものなどであり，後世の混入と思われるものがある。



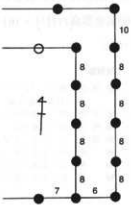
第19図　第11号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第11号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第19図）

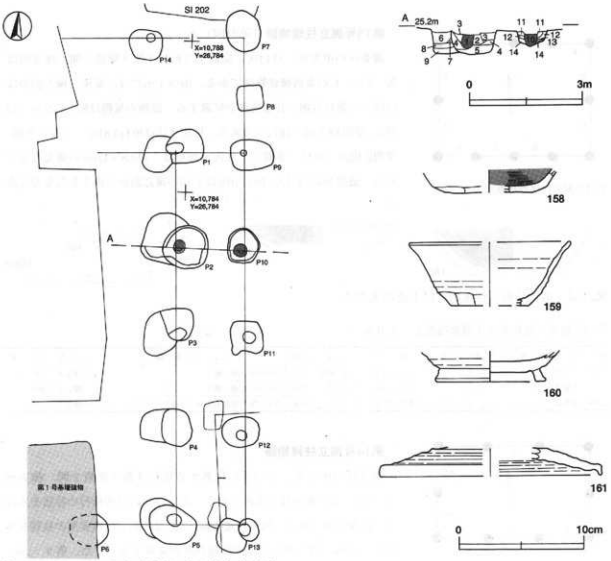
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
155	土師器	坏	[14.0]	(4.5)	—	赤色粒子	灰黄	普通	内面黒色処理，磨き	Ｐ13確認面	5%
156	土師器	坏	[11.6]	(3.0)	—	雲母，白色粒子	褐灰	普通	体部と口縁部との境に段をもつ，体部外面ヘラ削り	Ｐ14確認面	5%
157	須恵器	蓋	15.2	2.3	—	雲母，長石，小石	灰黄	普通	天井部右ロクロ回転ヘラ削り	Ｐ10確認面	60%

第12号掘立柱建物跡（第20図）

調査区の中央部，O14・P14区に位置する桁行４間×梁間１間以上に東庇・北庇が付く棟方向N－２°－Wを示す南北棟建物跡である。第９号掘立柱建物跡と重複するが新旧関係は不明である。建物の西部分の北側は調査区域外であり，南側は第１号基壇建物に切られているため，確認できた建物の規模は身舎だけで桁行9.69m（32尺），梁間2.12m（７尺）を測り，東には1.81m（６尺）の庇，北には3.03m（10尺）の庇がそれぞれ付き，二面の庇を含めた規模は桁行12.72m（42尺），梁間3.93m（13尺）となる。身舎の桁行柱間寸法2.42m（８尺）等間，梁間柱間寸法2.12m（７尺）等間である。身舎の柱穴平面形は，一辺0.8～1.0mの隅丸方形，裁ち割りを行ったＰ２で深さ0.8mである。庇の柱穴平面形径約0.8mの円形，裁ち割りを行ったＰ10の深さは0.5mである。柱穴の埋土はロームブロック混じりの暗褐色土や褐色土で，柱抜き取り痕には白色粘土粒が含まれている。なお，東桁行柱Ｐ１～５のみに建て替えが行われており，新しい柱穴に対応して庇がつけられたものと思われる。土層断面図中，第１～５層が新しい柱穴，第６～９層が古い柱穴，第10～14層が庇の柱穴土層である。遺物は



第12号掘立柱建物跡模式図



第20図　第12号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

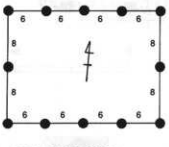
158土師器坏・159須恵器坏はＰ２柱抜き取りから出土したもので，いずれも９世紀中葉に属するものである。160須恵器高台付坏・161須恵器蓋はＰ２の埋土から出土したもので８世紀中葉もしくは後葉に属するものと思われる。

土層解説

1　暗褐色　焼土小ブロック中量，白色粘土小ブロック少量（柱抜き取り痕）
2　暗褐色　ローム中ブロック少量
3　暗褐色　ローム小ブロック少量
4　暗褐色　ローム中・小ブロック少量
5　褐　色　ローム中ブロック多量
6　褐　色　ローム大・中ブロック少量
7　褐　色　ローム中・小ブロック微量
8　褐　色　ローム中・小ブロック中量
9　暗褐色　ローム中ブロック中量，ローム小ブロック少量
10　暗褐色　ローム小ブロック少量，ローム中ブロック微量
11　褐　色　ローム小ブロック中量
12　黒褐色　黒色土ブロック多量，ローム小ブロック少量
13　褐　色　ローム大ブロック多量
14　暗褐色　黒色土小ブロック少量，ローム中ブロック微量

第12号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
158	土師器	坏	—	(1.8)	[7.2]	微砂子	にぶい橙	普通	底部外周手持ちヘラ削り，内面黒色処理，磨き	Ｐ２新掘き取り	5%
159	須恵器	坏	[12.8]	5.1	[6.4]	雲母，長石	浅黄	普通	体部下端手持ちヘラ削り	Ｐ２新掘き取り	30%
160	須恵器	高台付坏	—	(2.4)	[8.6]	雲母，長石	灰	普通	底部回転ヘラ削り後，高台貼り付け	Ｐ２新埋土	20%
161	須恵器	蓋	[17.8]	(2.3)	—	雲母，長石	灰	普通	天井部右ロクロ回転ヘラ削り	Ｐ２新埋土	10%



第13号掘立柱建物跡模式図

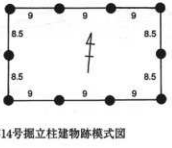
第13号掘立柱建物跡（第21図）

調査区の中央部，Ｏ14区に位置する桁行４間×梁間２間，棟方向はＮ－85°－Ｅの東西棟建物跡である。南へ１ｍには，規模・棟方向がほぼ同一の第11号掘立柱建物跡が位置する。建物の規模は桁行7.27ｍ（24尺），梁間4.84ｍ（16尺）であり，柱間寸法は桁行1.81ｍ（６尺）等間，梁間2.42ｍ（８尺）等間で，柱穴平面形は一辺0.8～1.0ｍの隅丸方形である。遺物164はＰ13，165・166はＰ10の確認面から出土したものである。

第21図　第13号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第13号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第21図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
164	土師器	坏	[12.8]	(2.1)	—	雲母，白色粒子	にぶい赤褐	普通	内面黒色処理，磨き	Ｐ13確認面	10%
165	土師器	坏	—	(3.8)	[7.0]	雲母，白色粒子	明赤褐	普通	内面黒色処理，磨き	Ｐ10確認面	10%
166	須恵器	坏	—	(1.4)	7.0	雲母，長石	灰白	普通	丸底気味。底部不定方向手持ちヘラ削り	Ｐ10確認面	25%



第14号掘立柱建物跡模式図

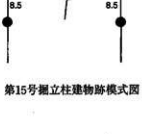
第14号掘立柱建物跡

調査区の中央部，Ｐ14区に位置する桁行３間×梁間２間，棟方向Ｎ－85°－Ｅの東西棟建物跡である。東へ3.8ｍには南桁行の柱筋を本跡と一直線に通す第16号掘立柱建物跡，北へ23.3ｍには西梁間の柱筋を本跡と一直線に通す第13号掘立柱建物跡が位置する。また，第９・10・15号掘立柱建物跡と重複しており，柱穴同士の切り合いから第９号掘

立柱建物跡より本跡の方が新しい。建物の規模は桁行8.18m（27尺），梁間5.15m（17尺），柱間寸法桁行2.72m（9尺）等間，梁間寸法2.57m（8.5尺）等間である。柱穴平面形は一辺0.8～1.0mの方形，深さは断ち割りを行ったP8で0.94mである。柱抜き取り痕には白色粘土ブロックが混じった褐灰色土，埋土はロームブロック混じりの褐色土と黒褐色土である。出土遺物はP3・P4・P8確認面から土師器坏片2点・甕片4点，須恵器坏片3点・甕片4点が出土しているが細片のため図示できるものはなかった。

第15号掘立柱建物跡

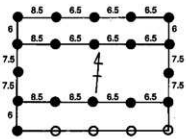
調査区の中央部，P14区に位置する桁行2間以上×梁間2間，棟方向はN－5°－Wの南北棟建物跡である。北へ2.3mには第9号掘立柱建物跡が位置し，本跡の桁行柱筋と第9号掘立柱建物跡庇の柱筋を通して並んでいる。第14号掘立柱建物跡と重複しているが，柱穴同士の切り合いがないため新旧関係は不明である。建物の規模は桁行5.15m（17尺）以上，梁間5.15m（17尺）である。柱間寸法は桁行，梁間共に2.57m（8.5尺）等間で，柱穴平面形は一辺0.9～1.1mの方形である。遺物はP1・P2の確認面から土師器坏片1点，須恵器甕片2点が出土しているが，細片のため図示できなかった。



第15号掘立柱建物跡模式図

第16号掘立柱建物跡（第22図）

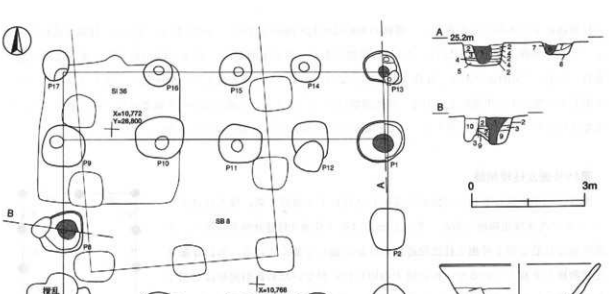
調査区中央部，P15区に位置する桁行4間×梁間2間の身舎に北・南庇が付く，棟方向N－88°－Eの東西棟建物跡である。西へ3.8mには南桁行の柱筋を本跡と一直線に通す第14号掘立柱建物跡が位置する。また，第8号掘立柱建物跡と第36号竪穴住居跡と重複し，本跡が第36号竪穴住居跡を掘り込んでいるので本跡の方が新しい。建物の規模は身舎だけで桁行8.48m（28尺），梁間4.59m（15尺）を測り，北と南には1.81m（6尺）の庇が付き，二面の庇を含めた規模は桁行8.48m（28尺），梁間8.18m（27尺）となる。桁行柱間寸法は西側一間分が2.57m（8.5尺），その他は1.96m（6.5尺）の等間，梁間柱間寸法が2.27m（7.5尺）の等間である。身舎柱穴平面形は短軸1.0×長軸1.2mの隅丸長方形，断ち割りを行ったP1の深さは0.6mである。庇柱穴平面形は径約0.7mの円形，断ち割りを行ったP13の深さは0.4mである。埋土はロームブロックを含んだ褐色土と極暗褐色土が互層に重なっている。171の須恵器坏はP9の確認面から出土したもので，9世紀中葉に属するものである。また，本跡より古い第36号竪穴住居跡出土の遺物は8世紀代のものであることから，本跡の成立時期はそれ以降になる。



第16号掘立柱建物跡模式図

土層解説

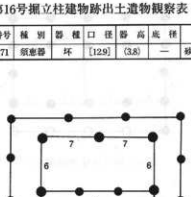
1　極暗褐色　ローム中・小ブロック少量（柱抜き取り痕）
2　極暗褐色　ローム中ブロック少量
3　褐　　色　ローム大ブロック中量
4　極暗褐色　ローム小ブロック微量
5　極暗褐色　ローム中ブロック微量
6　暗 褐 色　ローム中・小ブロック中量（柱抜き取り痕）
7　褐　　色　ローム中ブロック中量，ローム大ブロック少量
8　褐　　色　ローム大ブロック多量
9　褐　　色　ローム中ブロック多量
10　暗 褐 色　ローム小ブロック少量



第22図　第16号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第16号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第22図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
171	須恵器	坏	[12.9]	(3.8)	—	砂粒	灰白	普通	体部下半手持ちヘラ削り	P 9 確認面	5%



第31号掘立柱建物跡模式図

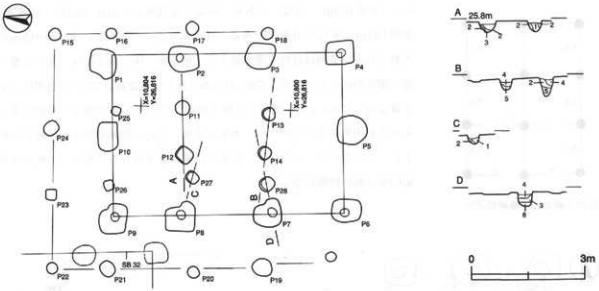
第31号掘立柱建物跡（第23図）

調査区中央部，N15・O15区に位置する桁行３間×梁間２間，棟方向N－３°－Wの南北棟建物跡である。建物の規模は桁行5.89m（19尺），梁間4.24m（14尺）である。柱間寸法は，桁行外側の１間分がそれぞれ1.81m（６尺），中央の１間分が2.12m（７尺），梁間が2.12m（７尺）等間である。柱穴平面形は短軸0.6×長軸0.8mの長方形である。柱筋をそろえて屋内に四つの柱穴（P11～P14）があり，本跡はこれを床束とする建物と思われる。この床束とした柱穴は一辺が0.3～0.4mの隅丸方形で，深さは確認面から0.4～0.5mほどである。また，本跡の東・北・西を径0.3～0.5mのP15～P28がコの字状に巡る。

遺物は土師器坏・甕，須恵器坏の細片がP２・５・７・９・10の確認面から出土しているが，細片のため図示できなかった。これらの遺物は８世紀前葉頃に属すると思われる土師器の盤状の坏片や，丸底気味の須恵器坏片であることから，本跡の成立時期はそれ以降になる。

土層解説

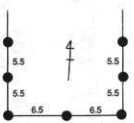
1　暗褐色　ローム小ブロック中量
2　褐　　色　ローム中ブロック少量
3　暗褐色　ローム小ブロック微量
4　暗褐色　ローム粒子・炭化粒子少量　しまり弱
5　褐　　色　ローム中ブロック中量，砂質粘土粒子少量
6　暗褐色　ローム中・砂質粘土小ブロック少量



第23図　第31号掘立柱建物跡実測図

第32号掘立柱建物跡（第24図）

調査区中央部，N15区に位置する桁行２間以上×梁間２間，棟方向N－3°－Wの南北棟建物跡である。本跡は第103号竪穴住居跡を掘り込んでおり，本跡の方が新しい。建物の北部分が調査区域外であるため，確認された建物の規模は桁行3.33m（11尺）以上，梁間3.93m（13尺）である。柱間寸法は桁行1.66m（5.5尺）の等間，梁間1.96m（6.5尺）の等間である。柱穴掘り方平面形は，一辺0.55mの隅丸方形である。遺物は各柱穴確認面から土師器甕・坏・皿，須恵器坏・蓋・甕の細片が出土している。173の土師器皿はＰ４柱痕確認面出土で，９世紀後葉に属するものである。175の須恵器蓋はＰ４掘り方確認面出土で８世紀後葉に属するものである。本跡と重複している第103号竪穴住居跡から出土している遺物は８世紀中～後葉に属するものであることと，本跡出土の遺物から，本跡の時期は８世紀後葉以降と思われる。



第32号掘立柱建物跡模式図

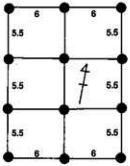
第24図　第32号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第32号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第24図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
173	土師器	皿	[13.5]	(1.4)	—	砂粒	にぶい赤褐	普通	口縁部で大きく反る。内面黒色処理，磨き	Ｐ４柱痕３取り 表採認識	5%
175	須恵器	蓋	—	(1.5)	—	砂粒	灰白	普通	天井部回転ヘラ削り	Ｐ４確認面	5%

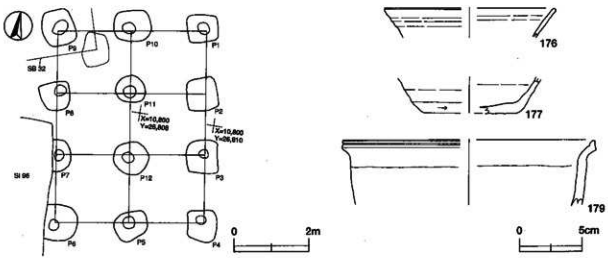
第33号掘立柱建物跡（第25図）

調査区中央部，N15・O15区に位置する桁行３間×梁間２間，棟方向N－９°－Wの南北棟総柱建物跡である。Ｐ６・７が第96号竪穴住居跡に掘り込まれており，本跡の方が古い。本跡から2.4m南には西桁行の柱筋がほぼ一直線に揃い，棟方向がほぼ一致する第34号掘立柱建物跡が位置する。建物の規模は桁行4.99m（16.5



第33号掘立柱建物跡模式図

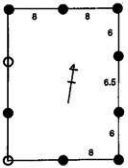
尺），梁間3.63m（12尺）である。柱間寸法は桁行1.66m（5.5尺）の等間，梁間1.81m（6尺）の等間である。柱穴掘り方平面形は，一辺0.8～0.9mの方形である。遺物は各柱穴確認面から土師器甕・坏，須恵器坏・蓋・高盤・甕の細片が出土している。176の須恵器坏はP4確認面，177の須恵器坏はP7確認面，179の土師器甕はP1確認面出土で，属する時期は8世紀中葉から9世紀中葉頃までと幅広い。本跡と重複している第96号竪穴住居跡から出土している遺物は，9世紀中・後葉の時期に属するものであり，本跡は9世紀中葉以前の時期になる。



第25図　第33号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第33号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第25図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
176	須恵器	坏	[13.7]	(2.4)	—	砂粒	褐灰	普通	内外面ロクロナデ	P 4 確認面	5%
177	須恵器	坏	—	(2.9)	[7.4]	雲母，長石	灰白	普通	底部・体部下端右ロクロ回転ヘラ削り	P 7 確認面	20%
179	土師器	甕	[20.2]	(5.2)	—	雲母，長石	黄橙	普通	口縁端部つまみ上げ，内外面に沈線	P 1 確認面	5%



第34号掘立柱建物跡模式図

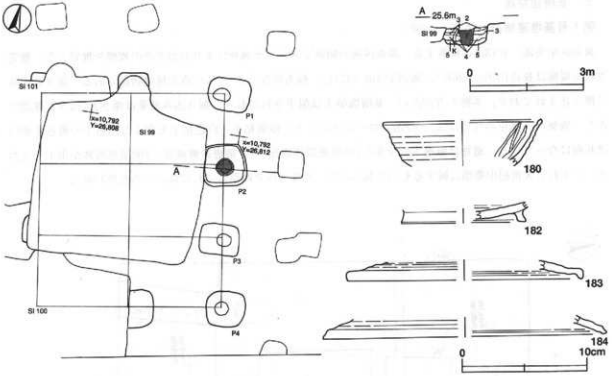
第34号掘立柱建物跡（第26図）

調査区中央部，O15区に位置する桁行3間×梁間2間，棟方向N－8°－Wを示す南北棟建物跡である。第99・100・101号竪穴住居跡に掘り込まれているため総柱建物跡であるのか側柱建物跡であるのかは不明である。本跡から2.4m北には西桁行の柱筋がほぼ一直線に揃い，棟方向がほぼ一致する第33号掘立柱建物跡が位置する。建物の規模は桁行5.60m（18.5尺），梁間4.84m（16尺）である。柱間寸法は桁行が等間隔ではなく，外側の1間分がそれぞれ1.81m（6尺），中央の1間分が1.96m（6.5尺），梁間が2.42m（8尺）である。柱穴掘り方平面形は，一辺約1.0mのおおむねの方形で，深さは断ち割りを行ったP2で0.55mである。埋土はローム混じりの暗褐色土と褐色土が水平に積み重ねられている。遺物は各柱穴確認面から土師器甕・坏，須恵器坏・蓋・盤・高台付坏・甕片

が出土している。180の須恵器坏・183の須恵器蓋はＰ１確認面，182の須恵器盤はＰ２確認面，184の須恵器蓋はＰ４確認面出土で，属する時期は８世紀中葉から９世紀前葉頃である。本跡より新しい第99号竪穴住居跡から出土している遺物は９世紀後葉頃，第100・101号竪穴住居跡出土遺物は９世紀前・中葉の時期に属するものであることから，本跡はこれらより古い９世紀中葉以前の時期になる。

土層解説

1　暗褐色　ローム中・小ブロック少量　しまり弱(柱抜き取り痕)
2　暗褐色　ローム中ブロック・ローム粒子少量　しまり強
3　褐　色　ローム中ブロック中量　しまり強
4　褐　色　ローム中ブロック中量，ローム大・小ブロック少量
5　褐　色　ローム小ブロック中量，ローム中ブロック中量　しまり強



第26図　第34号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

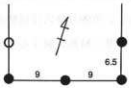
第34号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第26図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
180	須恵器	坏	[12.8]	(3.6)	—	雲母，長石	灰	普通	内面火襷あり	Ｐ１確認面	5%
182	土師器	盤	—	(1.5)	[10.0]	雲母，白色粒子	灰	普通	底部右ロクロ回転ヘラ削り後，高台貼り付け	Ｐ２確認面	5%
183	須恵器	蓋	[18.8]	(1.5)	—	雲母，白色粒子	灰	普通	口縁端部は短く垂直に屈曲する	Ｐ２確認面	5%
184	須恵器	蓋	[22.8]	(1.5)	—	雲母，長石	灰	普通	口縁端部は短く内側に屈曲する	Ｐ４確認面	5%

第35号掘立柱建物跡

調査区中央部，Ｏ16区でＮ－９°－Ｗの方向で東西に柱穴が３つ並んだものを，梁間２間の建物と想定した。建物の南部分が調査区域外であるため，確認された規模は梁間3.63m（12尺）だけで桁行は不明である。梁間柱間寸法は1.81m（６尺）等間で，柱穴掘り方平面形は一辺が約0.7mの方形と思われる。遺物は柱穴確認面から土師器甕片２点，須恵器蓋片が１点出土したが細片のため図示できなかった。

第35号掘立柱建物跡模式図



第36号掘立柱建物跡模式図

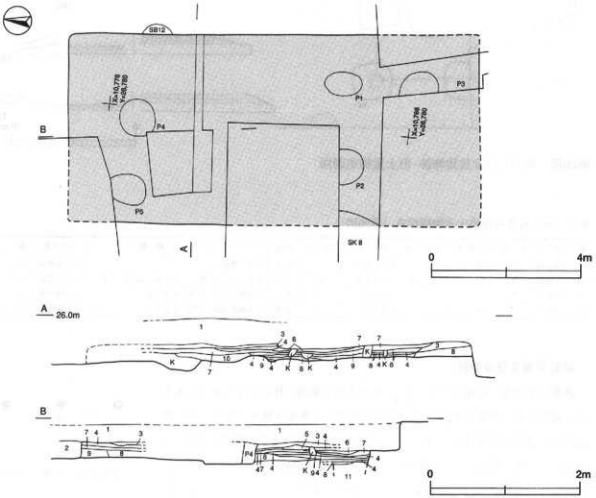
第36号掘立柱建物跡

調査区中央部，N15区に位置する桁行１間以上×２間，棟方向N－17°－Wの南北棟建物跡である。本跡は第96・103号竪穴住居に掘り込まれており，本跡が古い。建物の北・西部分が調査区域外であるため，確認された規模は桁行1.96m（6.5尺）以上，梁間5.45m（18尺）だけで，桁行は不明である。梁間柱間寸法は2.72m（９尺）等間である。遺物は出土していない。

(2) 基壇建物跡

第１号基壇建物跡（第27・28図）

調査区中央部，P13区に位置する。調査区域の関係でトレンチ調査によりおおよその規模を推定した。推定される規模は長辺10.9m（36尺），短辺5.14m（17尺），棟方向N－７°－Wの南北棟建物跡である。第８号土坑に掘り込まれており，本跡の方が古い。基壇版築土は削平されており，掘り込み地業は深さ20cmほど確認できた。版築の一単位の厚さは３～７cmでロームブロック・砂質粘土・白色粘土を含んだ黒色土や褐色土がほぼ互層になっている。遺物は版築土の中から195須恵器坏底部，197須恵器盤底部，198須恵器鉢が出土しており，いずれも８世紀中葉頃に属するものであるので，本跡の成立時期はこれ以降になると思われる。



第27図　第１号基壇跡実測図

土層解説

1　暗 褐 色　ローム粒子中量，炭化粒子微量（表土）
2　暗 褐 色　ローム粒子少量
3　黒 褐 色　砂質粘土中ブロック少量　しまり強
4　黒 褐 色　砂質粘土小ブロック微量　しまり強
5　黄 褐 色　ローム大ブロック中量　しまり強
6　暗 褐 色　ローム粒子・砂質ローム粒子少量　しまり強
7　灰 黄 色　砂質粘土大ブロック多量，黒色土ブロック少量　しまり強
8　暗 褐 色　鉄分を多量に含んだローム中ブロック中量　しまり強
9　灰 黄 色　白色粘土層　しまり強
10　暗灰黄色　白色粘土小ブロック・白色粘土粒子中量　しまり強
11　暗 褐 色　地山（鉄分多量のローム）
※3～10層が版築土層

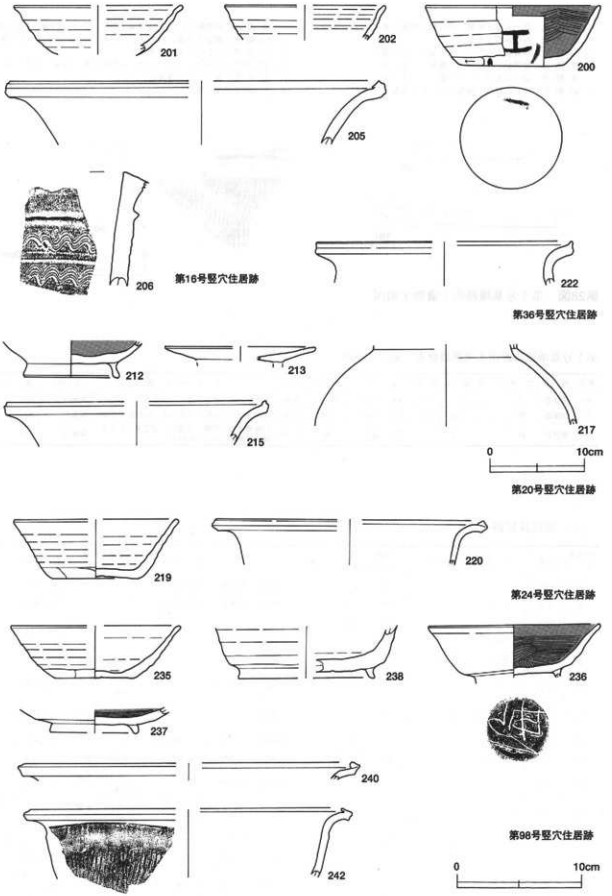
第28図　第1号基壇跡出土遺物実測図

第1号基壇建物跡出土遺物観察表（第27・28図）

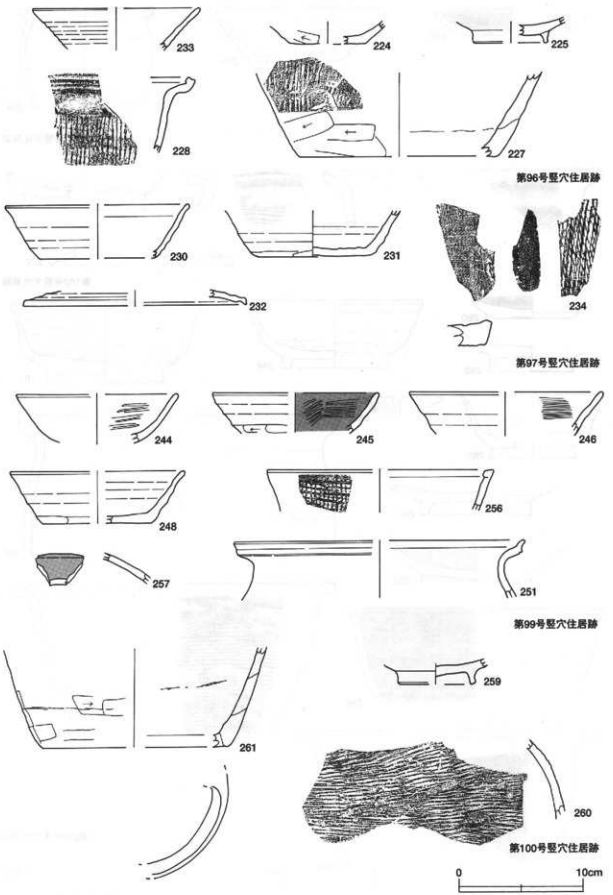
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
195	須恵器	坏	—	(1.2)	8.5	長石，小石	灰白	普通	底部一方向の雑な手持ちヘラ削り	版築内	20%
197	須恵器	盤	—	(2.2)	13.8	雲母，小石	灰白	普通	底部右ロクロ回転ヘラ削り後，高台貼り付け	版築内	20%
198	須恵器	鉢	—	(7.3)	—	雲母，長石	灰	普通	口縁部は短く外側に屈曲し，ほぼ水平になる。体部外面縦方向の平行叩き	版築内	10%

(3)　竪穴住居跡

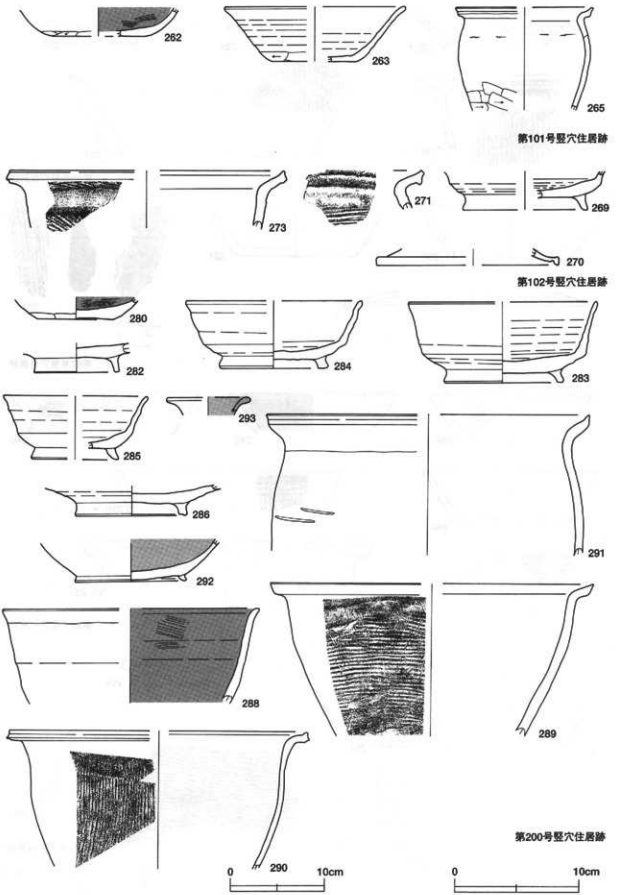
住居跡番号	位置	主(芯)軸方向	平面形	規模（m）(長軸×短軸)	竈	出土遺物	新旧関係(古→新)	時期
16	O-14	N－5°－W	—	3.0 × (2.5)	有	土師器片（墨書あり），須恵器片		9C中葉
20	P-15	N－0°	—	4.0 × (2.0)	—	土師器片，須恵器片，灰釉陶器片1		9C後葉カ
21	P-16	—	—	6.5 × (2.0)	—	なし		—
24	O-14	N－90°－W	—	(5.5) × 5.5	有	土師器片，須恵器片		9C前葉
36	P-15	N－0°	方形	3.8 × 3.6	—	土師器片	本跡→SB8・16	—
96	O-15	N－3°－E	方形	5.1 × 5.4	有	土師器片，須恵器片	SI97・SB37→本跡	9C中葉，後葉
97	O-14 O-15	N－5°－W	—	(7.2) × 7.0	有	土師器片，須恵器片	本跡→SI24・96	8C中葉
98	O-15	N－3°－E	—	(3.0) × (3.0)	—	土師器片（ヘラ書きあり），須恵器片	—	9C中葉
99	O-15	N－0°	方形	4.8 × 4.0	有	土師器片，須恵器片，灰釉陶器片2	SI101→本跡	9C後葉
100	O-15	N－0°	—	4.5 × (2.7)	有	土師器片，須恵器片	SB34→本跡→SI99	9C前葉
101	O-15	N－9°－W	方形	3.3 × 3.3	有	土師器片，須恵器片	SB34→本跡→SI99	9C中葉
102	O-15	N－7°－W	方形	4.0 × 4.2	有	土師器片，須恵器片	—	9C前葉以降
103	N-15	N－7°－W	—	(3.5) × 3.7	—	土師器片，須恵器片	本跡→SB32	8C後葉
200	O-13	N－7°－W	—	7.9 × (1.5)	—	土師器片，須恵器片，灰釉陶器片2	SB12と重複，新旧？	8C中葉，9C後葉
202	O-14	N－5°－E	方形	3.2 × 3.2	有	なし	本跡→SB12	—



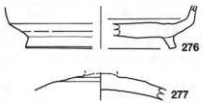
第29図　B区竪穴住居跡出土遺物実測図(1)

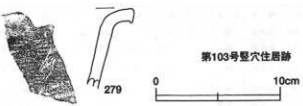


第30図　B区竪穴住居跡出土遺物実測図(2)



第31図　B区竪穴住居跡出土遺物実測図(3)





第32図　B区竪穴住居跡出土遺物実測図(4)

B区竪穴住居跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
200	土師器	坏	14.1	4.9	8.4	雲母，長石，赤色粒子	にぶい橙	普通	回転ヘラ切り後，底部一方向の手持ちヘラ削り。体部下端手持ちヘラ削り。内面ヘラ磨き，黒色処理	16号住	80%　体部下端から底部外面にかけて墨書
201	須恵器	坏	[13.6]	(3.9)	—	雲母，白色粒子	にぶい黄橙	普通	口縁端部外反	16号住	20%
202	須恵器	坏	[13.0]	(2.8)	—	雲母，白色粒子	灰	普通	内面のロクロ目が強い	16号住	10%
205	須恵器	甕	[29.8]	(5.0)	—	雲母，長石，赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口縁端部内側に折り返し，断面三角形。酸火焔焼成。口縁部と頸部の境に叩き痕	16号住	10%
206	須恵器	甕	—	(9.2)	—	長石	暗灰	普通	口縁直下に1条の凸線が巡る。5本1組の櫛歯状工具による波状文が2条	16号住	10%
212	土師器	高台付坏	—	(3.0)	7.6	長石，赤色粒子	橙	普通	内面黒色処理。摩滅のため調整不明	20号住	30%
213	土師器	高台付皿	[12.0]	(1.2)	—	長石，小石	橙	普通	摩滅のため調整不明	20号住	20%
215	須恵器	甕	[20.8]	(3.5)	—	砂粒	灰	普通	口縁端部内側に折り返し，断面三角形。口縁直下に叩き痕がわずかに残る	20号住	10%
217	須恵器	短頸壺	—	(8.7)	—	長石，小石	灰	良好	体部上半自然釉	20号住	10%
219	須恵器	坏	[12.8]	4.7	6.8	雲母，長石	にぶい橙	二次焼成	底部回転ヘラ切り後，一方向の手持ちヘラ削り。体部下端手持ちヘラ削り	24号住	50%
220	須恵器	甕	[21.5]	(3.6)	—	雲母，長石，赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁端部内側に折り返し，断面三角形。酸火焔焼成。口縁部と頸部の境に叩き痕	24号住	10%
222	土師器	甕	[20.5]	(3.5)	—	雲母，長石	にぶい橙	普通	口縁端部を上方につまみ上げ，口縁直下内外面に1条の沈線	36号住	5%
223	須恵器	坏	[13.4]	(3.4)	—	雲母，長石	明赤褐	普通	酸化焔焼成	96号住	10%
224	須恵器	坏	—	(1.7)	[6.0]	雲母	灰	普通	底部・体部下端手持ちヘラ削り	96号住	10%
225	須恵器	高台付坏	—	(2.0)	[6.0]	雲母・長石	明赤褐	普通	酸化焔焼成	96号住	25%
228	須恵器	甕	—	(6.0)	—	長石	灰	普通	口縁端部内側上方につまみ上げ。体部外面縦位の平行叩き	96号住	10%
229	須恵器	甕	—	(6.7)	[16.0]	長石	灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り，体部縦位の平行叩き	96号住	5%
230	須恵器	坏	[14.6]	(4.3)	[9.2]	長石	灰	普通	体部下端手持ちヘラ削りか	97号住	20%
231	須恵器	坏	—	(3.7)	8.8	雲母，長石	灰白	普通	底部・体部下端手持ちヘラ削り	97号住	25%
232	須恵器	蓋	—	(1.2)	[17.8]	砂粒	灰白	普通	口縁端部，短くつまみ出す	97号住	5%
235	須恵器	坏	[13.6]	4.2	6.0	雲母，長石	灰	普通	底部回転ヘラ切り後，一方向手持ちヘラ削り，体部下端手持ちヘラ削り	98号住	60%
236	土師器	高台付坏	[13.6]	(4.3)	7.7	雲母，長石，小石	にぶい褐	普通	内面磨き，黒色処理。底部外面ヘラがき「逆」か	98号住	90%
237	土師器	高台付坏	—	(2.6)	7.0	雲母，長石	橙	普通	内面ヘラ磨き，黒色処理	98号住	20%
238	須恵器	高台付坏	—	(4.1)	[10.8]	雲母，長石，小石	灰	普通	底部右ロクロ回転ヘラ削り	98号住	30%
240	須恵器	甕	[27.8]	(1.8)	—	雲母	灰褐	普通	口縁端部は，内側上方につまみ上げ	98号住	5%
242	須恵器	甕	[26.2]	(5.7)	—	雲母	黒褐	普通	口縁端部は，内側上方につまみ上げ。体部外面縦位の平行叩き	98号住	5%
244	土師器	坏	[12.8]	(3.9)	—	雲母，赤色粒子	にぶい褐	普通	内面ヘラ磨き	99号住	20%
245	土師器	坏	[13.4]	(3.2)	—	砂粒	橙	普通	内面ヘラ磨き，黒色処理。体部下端手持ちヘラ削り	99号住	10%
246	土師器	高台付椀	[15.4]	(3.3)	—	雲母，長石	橙	普通	内面ヘラ磨き	99号住	10%
248	須恵器	坏	[14.0]	4.2	[8.8]	雲母，長石	灰	普通	底部右ロクロ回転ヘラ削り。体部下端手持ちヘラ削り	99号住	30%
251	土師器	甕	[23.2]	(4.6)	—	雲母，長石	褐	普通	口縁端部上方につまみ上げ	99号住	5%
256	須恵器	甕	[18.0]	(3.3)	—	雲母，長石	にぶい橙	不良	口縁端部内側に折り返し。体部外面格子叩き	99号住	5%
257	灰釉陶器	瓶	—	(2.3)	—	緻密	灰	良好	瓶の肩部の破片	99号住	30%
259	須恵器	高台付坏	—	(1.6)	6.0	雲母，長石	灰	普通	底部右ロクロ回転ヘラ削り後，高台貼り付け	100号住	30%

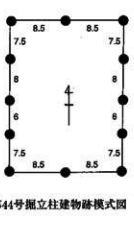
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
260	須恵器	甕	—	(6.2)	—	雲母、長石	灰	普通	体部外面横位の平行叩き	100号住	5%
261	須恵器	甑	—	(7.9)	[14.8]	長石、小石	灰	普通	体部縦位の平行叩き、下端手持ちヘラ削り	100号住	10%
262	土師器	坏	—	(2.3)	[7.4]	砂粒	橙	普通	内面ヘラ磨き、黒色処理。底部・体部下端手持ちヘラ削り	101号住	20%
263	須恵器	坏	[14.4]	4.4	[6.8]	雲母、長石	明赤褐	二次焼成	底部・体部下端手持ちヘラ削り	101号住	20%
265	土師器	小形甕	[10.8]	(8.2)	—	雲母、長石	にぶい赤褐	普通	体部下半手持ちヘラ削り	101号住	20%
269	須恵器	高台付坏	—	(3.1)	[14.0]	砂粒	灰白	普通	底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け	102号住	10%
270	須恵器	蓋	[14.6]	(1.3)	—	雲母、長石	灰	普通	口縁端部は鋭角につまみ出される	102号住	5%
271	須恵器	鉢	—	(3.9)	—	雲母、長石	灰	普通	口縁部はほぼ水平に折り曲がり、口縁端部はつまみ上げ	102号住	5%
273	須恵器	甕	[22.0]	(4.6)	—	緻密	にぶい赤黄	普通	酸化焔焼成。口縁端部はつまみ上げ	102号住	10%
276	須恵器	高台付坏	—	(3.4)	[12.2]	緻密	灰白	普通	回転ヘラ削り後、高台貼り付け	103号住	20%
277	須恵器	蓋	—	(2.0)	—	長石・石英	灰	普通	天井部石ロクロ回転ヘラ削り	103号住	20%
279	須恵器	鉢	—	(6.4)	—	雲母、長石	灰	普通	口縁部はほぼ水平に屈曲。体部外面横位平行叩き	103号住	5%
280	土師器	坏	—	(1.8)	6.0	赤色粒子	橙	普通	内面ヘラ磨き、黒色処理。底部・体部下端手持ちヘラ削り	200号住	20%
282	土師器	高台付坏	—	(2.3)	[6.8]	赤色粒子	橙	普通	内面ヘラ磨き、黒色処理。	200号住	10%
283	須恵器	高台付坏	[15.2]	6.5	9.6	雲母、長石	灰オリーブ	普通	底部右ロクロ回転ヘラ削り後、高台貼り付け	200号住	70%
284	須恵器	高台付坏	[13.9]	5.5	8.8	雲母、長石	灰白	普通	底部右ロクロ回転ヘラ削り後、高台貼り付け	200号住	60%
285	須恵器	高台付坏	[11.4]	5.1	5.0	雲母、長石	橙	普通	底部・体部下端右ロクロ回転ヘラ削り	200号住	40%
286	須恵器	高台付坏	—	(2.6)	9.0	砂粒	灰	普通	底部右ロクロ回転ヘラ削り後、高台貼り付け	200号住	40%
288	土師器	鉢	[20.6]	(7.6)	—	砂粒	橙	普通	内面ヘラ磨き、黒色処理。	200号住	10%
289	須恵器	鉢	[26.0]	(12.2)	—	雲母、長石	灰黄	普通	体部横位の平行叩き	200号住	20%
290	瓦器類	鉢	[31.6]	(14.6)	—	雲母、長石	オリーブ黒	普通	口縁部水平に屈曲、口縁端部上方につまみ上げ。体部外面縦位の平行叩き	200号住	10%
291	土師器	甕	[25.8]	(11.2)	—	雲母、長石	明赤褐	普通	口縁端部上方につまみ上げ	200号住	15%
292	灰釉陶器	椀	—	(3.4)	8.8	緻密	灰オリーブ	普通	角高台。内面施釉	200号住	50%
293	灰釉陶器	椀	[5.6]	(1.7)	—	緻密	灰オリーブ	普通	内面施釉	200号住	5%

番号	器種	幅	長さ	厚さ	重量	特徴	出土位置	備考
234	平瓦	(3.9)	(8.1)	2	(69.0)	凸面縦縄叩き、凹面布目痕。朱？付着	第97号住	5%

3　建物群Ｃ区（付図１）

Ｃ区は当遺跡の西部に位置し，西南には九重東岡廃寺が隣接している。調査により掘立柱建物跡29棟，竪穴住居跡93軒，溝跡３条が確認された。以下，掘立柱建物跡・溝跡については遺構ごとに記述し，竪穴住居跡・土坑については確認調査のみであることから，遺構・遺物に関しても一覧表で記載する。

(1)　掘立柱建物跡



第44号掘立柱建物跡模式図

第44号掘立柱建物跡（第33図）

調査区の西部，O11・P11区に位置する桁行４間×梁間２間，棟方向Ｎ－０°の南北棟建物跡である。本跡の21m東には，南・北の妻が２棟共に一直線上に並び，規模・棟方向もほぼ同一の建物である第49号掘立柱建物跡が位置している。本跡は第180号竪穴住居に掘り込まれており，本跡の方が古い。建物の規模は，桁行8.78m（29尺），梁間5.15m（17尺）である。梁間の柱間寸法は2.57m（8.5尺）等間であるが，桁行の柱間寸法は等間隔ではない。桁行の柱間寸法は外側の１間分はそれぞれ2.27m（7.5尺），内側２間は1.81m（６尺）と2.42m（８尺）でばらつきがある。柱穴掘り方平面形は一辺0.8～1.0mの隅丸方形である。遺物294は須恵器高台付皿で，Ｐ５確認面から出土

している。本跡より新しい第180号竪穴住居跡の遺物は９世紀中葉頃のものと思われるので，本跡はそれ以前の時期である。

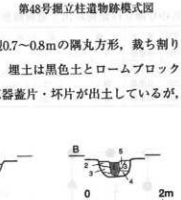
第33図　第44号掘立柱遺物跡出土遺物実測図

第44号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第33図）

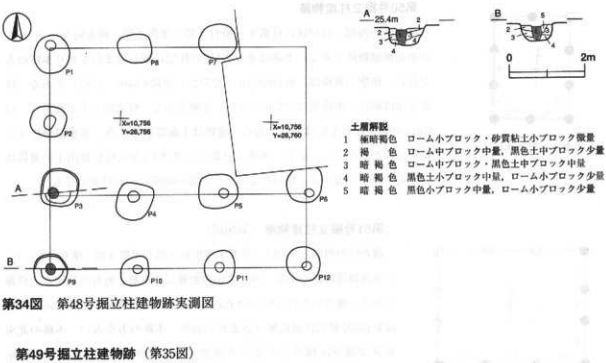
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
294	須恵器	高台付皿	[13.0]	2.1	[6.0]	雲母，長石	灰黄	普通	口縁部は外方に大きく開く	Ｐ５確認面	20%

第48号掘立柱建物跡（第34図）

調査区の西部，Ｑ12・13区に位置する桁行３間×梁間２間の身舎に南庇が付く，棟方向Ｎ－88°－Ｅの東西棟建物跡である。本跡の北東部が調査区域外であるため，確認できた建物の規模は，身舎だけで桁行6.81m（22.5尺），梁間3.93m（13尺）を測り，南に1.96m（6.5尺）の庇が付き，庇を含めた建物の規模は桁行6.81m（22.5尺），梁間5.90m（19.5尺）となる。柱間寸法は桁行2.27m（7.5尺）等間，梁間1.96m（6.5尺）等間である。身舎柱穴掘り方平面形は一辺0.9～1.0mの隅丸方形，断ち割りを行ったＰ３の深さは0.5mである。庇柱穴掘り方平面形は一辺0.7～0.8mの隅丸方形，裁ち割りを行ったＰ９の深さは0.45mである。柱穴抜き取り痕には砂質粘土が含まれ，埋土は黒色土とローム ブロック混じりの暗褐色土・褐色土である。遺物は柱穴確認面から土師器甕片，須恵器蓋片・坏片が出土しているが，細片のため図示できなかった。



第48号掘立柱遺物跡模式図

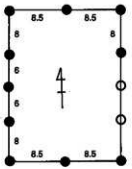


第34図　第48号掘立柱建物跡実測図

第49号掘立柱建物跡（第35図）

調査区の西部，Ｐ12区に位置する桁行４間×梁間２間，棟方向Ｎ－０°の南北棟建物跡である。本跡の21m西には第44号掘立柱建物跡が位置し，南・北の妻が２棟共に一直線上に並び，規模・棟方向もほぼ同一の建物である。第59号掘立柱建物跡と重複するが柱同士の切り合いがないため，新旧関係は不明である。また，本跡のＰ５・Ｐ６柱穴が第181号竪穴住居跡を掘り込んでおり，本跡の方が新しい。建物の規模は，桁行8.48m（28

尺），梁間5.15m（17尺）である。梁間の柱間寸法は2.57m（8.5尺）等間であるが，桁行の柱間寸法は等間隔ではない。桁行の柱間寸法は外側の１間分がそれぞれ2.42m（8尺），内側２間分はそれぞれ1.81m（6尺）である。柱穴掘り方平面形は一辺約1.0mの隅丸方形または円形である。遺物295の須恵器坏はＰ11確認面，296の須恵器高台付坏・297の須恵器盤はＰ５掘り方埋土，298の須恵器盤はＰ９確認面から出土している。また，本跡と重複関係にあって本跡より古い第181号住居跡出土の遺物は，８世紀初頭に属するものと思われることから，本跡はそれ以降の時期が考えられる。

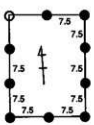


第49号掘立柱建物跡模式図

第35図　第49号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第49号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第35図）

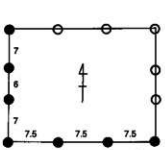
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
295	須恵器	坏	[13.8]	(3.5)	—	長石	灰	普通	内外面ともにロクロ目が強い	Ｐ11確認面	10%
296	須恵器	高台付坏	—	(2.5)	[6.5]	雲母	灰	普通	体部外面下端右ロクロ回転ヘラ削り，器壁が薄い	Ｐ５埋土	10%
297	須恵器	盤	—	(2.2)	[7.8]	長石，白色粒子	暗灰	普通	高台が太くがっちりとしている。高台貼り付け	Ｐ５埋土	20%
298	須恵器	盤	—	(2.2)	[11.7]	長石	灰	普通	高台端部が外にふんばる。高台貼り付け	Ｐ９確認面	10%



第50号掘立柱建物跡模式図

第50号掘立柱建物跡

調査区の西部，Ｏ12区に位置する桁行３間×梁間２間，棟方向Ｎ－４°－Ｅの南北棟建物跡である。本跡は第184号竪穴住居に掘り込まれており本跡の方が古い。建物の規模は，桁行6.81m（22.5尺），梁間4.54m（15尺）である。柱間寸法は桁行・梁間共に2.27m（7.5尺）等間である。柱穴掘り方平面形は一辺0.8mの隅丸方形または円形である。遺物は土師器細片５点，須恵器細片３点が確認面から出土している。本跡より新しい第184号竪穴住居跡出土の遺物は９世紀中葉頃に属すると思われるので，本跡の時期はそれ以前となる。



第51号掘立柱建物跡模式図

第51号掘立柱建物跡（第36図）

調査区の西部，Ｎ12区に位置する桁行３間×梁間３間，棟方向Ｎ－０°の東西棟建物跡である。西へ７mの距離には本跡と桁行の柱筋が一直線に並び，棟方向もほぼ同一の第53・54号掘立柱建物跡が位置する。本跡は第183号竪穴住居に掘り込まれており，本跡の方が古い。本跡の北東部分は調査区域外であるため確認できた建物の規模は，桁行6.81m（22.5尺），梁間6.06m（20尺）である。柱間寸法は桁行2.27m（7.5尺）等間，梁間は外側１間分がそれぞれ2.12m（７尺），内側１間分は1.81m（６尺）である。柱穴掘り方平面形は一辺が0.8～0.9mの方形または円形である。遺物は柱穴確認面から須恵器坏片・壺片・甕片が出土している。302の須恵器壺天井部片，304軒平瓦

はＰ２確認面，303須恵器蓋片はＰ５確認面から出土したもので，８世紀代に属するものである。本跡より新しい第183号竪穴住居跡出土の遺物は９世紀後葉頃に属するものであるため，これ以前に本跡は存在したと思われる。

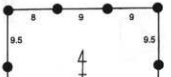
第36図　第51号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第51号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第36図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
302	須恵器	蓋	—	(1.7)	—	雲母，小石	灰	普通	天井部右ロクロ回転ヘラ削り	Ｐ２確認面	20%
303	須恵器	蓋	—	(1.8)	—	雲母	にぶい橙	不良	つまみボタン状	Ｐ５確認面	10%

番号	種別	幅	長さ	厚さ	重量	特徴	出土位置	備考
304	軒平瓦	(3.0)	[14.0]	(2.2)	[36.7]	瓦当面の一部残損。摩滅が激しい。	Ｐ２確認面	5%

第53号掘立柱建物跡（第37図）

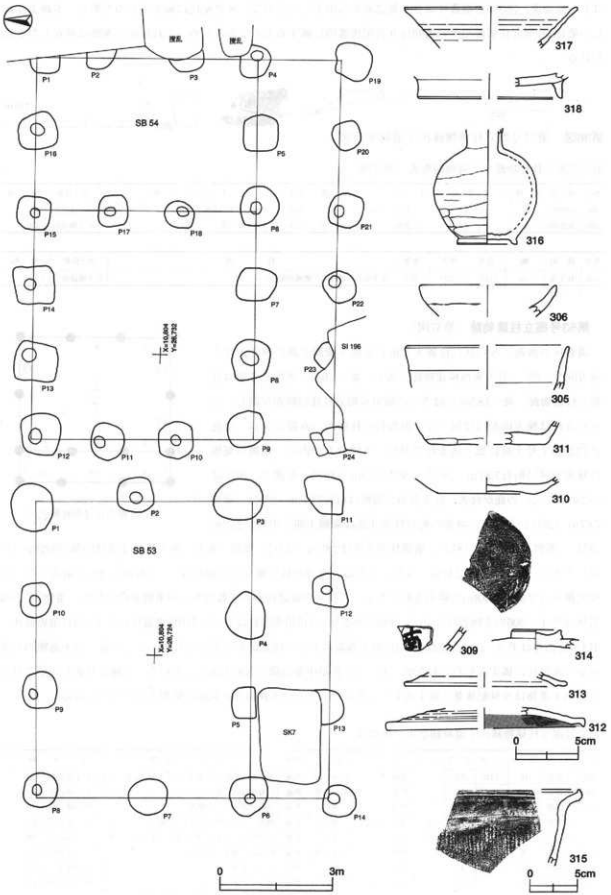


第53号掘立柱建物跡模式図

調査区の西部，Ｎ11区に位置する桁行３間×梁間２間に南庇が付く棟方向Ｎ－89°－Ｅの東西棟建物跡である。東へ1.6ｍと近接して第54号掘立柱建物跡，東へ18.5ｍにはさらに第51号掘立柱建物跡が位置し，これら３棟は棟方向がほぼ同一で，南桁行の柱筋が一直線に並ぶ。南庇Ｐ13が第７号土坑に掘り込まれており，本跡の方が古い。建物の規模は身舎だけで桁行7.87ｍ（26尺），梁間5.75ｍ（19尺）を測り，南には2.12ｍ（７尺）の庇が付き，庇を含めた規模は桁行7.87ｍ（26尺），梁間7.87ｍ（26尺）となる。身舎の桁行柱間寸法は東側１間と中央が2.72ｍ（9尺），西側１間が2.42（8尺），梁間柱間寸法は2.87ｍ（9.5尺）等間である。庇の柱間寸法は内側が3.03ｍ（10尺）と広く，外側２間が2.42ｍ（８尺）である。身舎の柱穴掘り方平面形は，一辺0.9～1.2ｍの隅丸方形，庇柱穴掘り方平面形は0.8ｍの隅丸方形である。各柱穴の確認面から比較的多くの遺物が出土した。遺物305土師器坏はＰ４，306の土師器坏はＰ５，309土師器坏・315須恵器鉢はＰ11，310須恵器坏はＰ１，311須恵器坏・314須恵器蓋はＰ３，312土師器蓋，313須恵器蓋はＰ２の確認面からそれぞれ出土している。出土遺物の大部分が８世紀代に属するものであるが，中には９世紀中葉以降のものも混入している。本跡より新しい第７号土坑の出土遺物は９世紀後葉に属するものであることから，本跡はそれ以前の時期ということになる。

第53号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第37図）

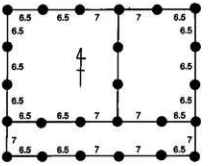
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
305	土師器	坏	[13.0]	(3.5)	—	砂粒	にぶい橙	普通	体部と口縁部の境に段をもち，口縁部は直立する	Ｐ４確認面	10%
306	土師器	坏	[11.0]	(2.5)	—	砂粒	にぶい橙	普通	口縁部は短く立ち上がる	Ｐ５確認面	10%
309	土師器	坏	—	(1.8)	—	雲母	黄褐	普通	体部外面「南」の墨書	Ｐ11確認面	10%
310	須恵器	坏	—	(1.4)	8.0	雲母，長石	灰白	普通	底部一方向の糸切り手持ちヘラ削り	Ｐ１確認面	20%
311	須恵器	坏	—	(1.8)	[9.4]	長石，小石	青灰	普通	底部右ロクロ回転ヘラ削り，体部下端手持ちヘラ削り	Ｐ３確認面	10%
312	土師器	蓋	[16.0]	(1.6)	—	雲母	にぶい橙	普通	内面ヘラ磨き，黒色処理	Ｐ２確認面	10%
313	須恵器	蓋	[13.2]	(1.1)	—	雲母	灰	普通	かえり有り	Ｐ２確認面	10%
314	須恵器	蓋	—	(1.4)	—	雲母，小石	灰白	普通	扁平なボタン状つまみ	Ｐ３確認面	10%
315	須恵器	鉢	[32.2]	(8.0)	—	雲母	にぶい橙	普通	口縁部は外側に屈曲したのち，端部上方につまみ上げ。体部外面縦方向平行叩き	Ｐ11掘き取り確認面	10%



第37図　第53・54号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第54号掘立柱建物跡（第37図）

調査区の西部，N11区に位置する桁行５間×梁間３間に南庇が付く棟方向N－０°の南北棟建物跡である。西へ1.6mの近接した位置には第53号掘立柱建物跡，東へ７mには第51号掘立柱建物跡が位置し，これら３棟は棟方向がほぼ同一で，南桁行の柱筋が一直線に並ぶ。南庇Ｐ23・24が第196号竪穴住居跡に掘り込まれており，本跡の方が古い。建物の規模は身舎だけで桁行10.15m（33.5尺），梁間5.90m（19.5尺）を測り，南には2.12m（７尺）の庇が付き，庇を含めた規模は桁行10.15m（33.5尺），梁間8.02m（26.5尺）となる。身舎の桁行柱間寸法は中央と東側１間が2.12m（７尺），外側と西側１間が1.96m（6.5尺），梁間柱間寸法が1.96m（6.5尺）等間である。また，Ｐ６とＰ15の柱を通す位置に間仕切りの柱穴と思われる径0.6～0.8mのＰ17・18が位置する。柱穴掘り方平面形は，身舎で一辺0.9～1.1mの方形，庇で一辺0.8～0.9mの隅丸方形である。柱穴確認面からは第53号掘立柱建物跡同様，比較的多くの遺物が出土している。遺物317須恵器坏はＰ12，318須恵器盤はＰ11・Ｐ13，316灰釉陶器薬小瓶はＰ８の抜き取り痕の確認面からそれぞれ出土している。本跡と重複し，本跡より新しい第196号竪穴住居跡の遺物は９世紀中葉以降に属するものであることから，本跡はそれ以前の時期ということになる。



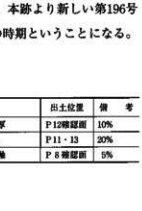
第54号掘立柱建物跡模式図

第54号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第37図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
317	須恵器	坏	[13.7]	(3.3)	—	雲母，長石	黒褐	普通	器壁が薄手，口縁端部でわずかに肥厚	Ｐ12確認面	10%
318	須恵器	盤	—	(2.0)	[11.6]	長石	灰白	普通	高台接地部は断面三角形で細くなる	Ｐ11・13	20%
316	灰釉陶器	小瓶	—	(9.2)	4.7	長石	黄灰	良好	体部下半手持ちヘラ削り，頂部自然釉	Ｐ８確認面	5%

第55号掘立柱建物跡（第38図）

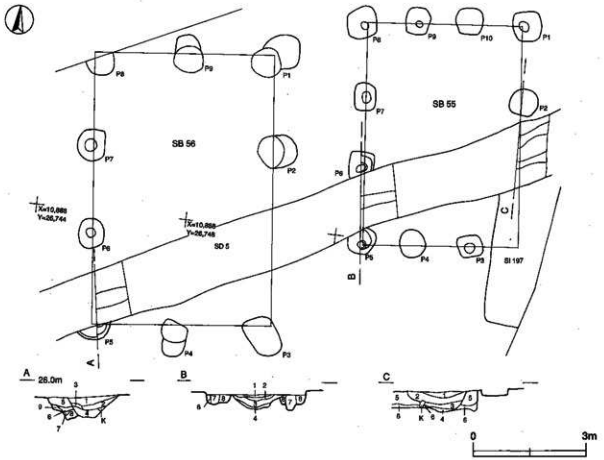
調査区の北西端部，建物群Ｃ区北部のＪ12区に位置する桁行３間×梁間３間，棟方向はＮ－５°－Ｗの南北棟建物跡である。西へ2.4mには本跡と規模・棟方向が同じ第56号掘立柱建物跡が位置する。本跡は第５号溝に掘り込まれており，本跡の方が古い。第197号竪穴住居とも重複しているが，断面観察では，本跡が掘り込んでいる状況が見られないことから，本跡の方が古いと考えられる。建物の規模は桁行5.90m（19.5尺），梁間4.09m（13.5尺）である。柱間寸法は桁行1.96m（6.5尺）等間，梁間1.36m（4.5尺）等間である。柱穴掘り方平面形は一辺0.7mの方形，断ち割りを行ったＰ５の深さは0.35m，Ｐ６は0.55mである。遺物は確認面から丸底気味の須恵器坏底部細片が２点出土している。



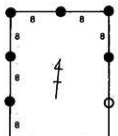
第55号掘立柱建物跡模式図

土層解説（第38図B・C）

1　黒褐色　ローム粒子中量，炭化物微量（５号溝覆土）
2　暗褐褐色　ローム小ブロック・粒子少量，炭化粒子微量（同上）
3　暗褐色　ローム中ブロック少量（同上）
4　暗褐色　ローム中ブロック中量（同上）
5　褐　色　ローム小・焼土小ブロック少量（197号住）
6　褐　色　ローム小ブロック中量，ローム小ブロック少量（197号住）
7　暗褐色　ローム粒子微量（掘立柱抜き取り）
8　褐　色　ローム中ブロック中量（掘立柱埋土）



第38図　第55・56号掘立柱建物跡実測図



第56号掘立柱建物跡模式図

第56号掘立柱建物跡（第38・39図）

調査区の北西端部，建物群Ｃ区北部のＪ12区に位置する桁行３間×梁間２間，棟方向はＮ－５°－Ｗの南北棟建物跡である。東へ2.4mには本跡と規模・棟方向が同じ第55号掘立柱建物跡が位置する。本跡は第５号溝に掘り込まれており，本跡の方が古い。建物の規模は桁行7.27m（24尺），梁間4.84m（16尺）である。柱間寸法は桁行・梁間共に2.42m（８尺）等間である。柱穴掘り方平面形は短軸0.65m×長軸0.8mの楕円形，断ち割りを行ったＰ５の深さは0.6mである。遺物696の須恵器整はＰ２確認面，697須恵器高台付坏はＰ８確認面出土で，８世紀中葉に属するものである。

土層解説（第38図A）

1　褐　色　ローム小ブロック・炭化物・焼土粒子少量（５号溝）
2　褐　色　ローム小ブロック少量，焼土粒子微量（同上）
3　暗褐色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量（同上）
4　暗褐色　ローム粒子少量（同上）
5　褐　色　ローム小ブロック・粒子少量（本跡覆土）
6　暗褐色　ローム中ブロック少量（本跡覆土）
7　褐　色　ローム中ブロック中量（同上）
8　暗褐色　ローム小ブロック中量，ローム中ブロック少量（同上）
9　褐　色　ローム小ブロック・粒子中量（同上）

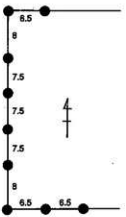
第39図　第56号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第56号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第39図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
696	須恵器	盤	—	(2.1)	10.1	長石	褐灰	普通	高台接地面は断面三角形で細くなる	P 2 確認面	40%
697	須恵器	盤	—	(2.9)	—	砂粒	灰黄褐	普通	高台貼り付け	P 8 確認面	20%

第57号掘立柱建物跡（第40図）

調査区の西部，N11区に位置する桁行５間×梁間２間以上，棟方向はN－1°－Wの南北棟建物跡である。南へ2.4mには本跡と棟方向がほぼ直交して第54号掘立柱建物跡が位置し，第54号掘立柱建物跡の間仕切り柱とした柱穴と本跡の西桁行柱は一直線に並ぶ。建物の規模は桁行11.66m（38.5尺），梁間3.93m（13尺）以上である。本跡の西側に設定した第68号トレンチ内に，本跡桁柱の北から２本目の位置に柱穴が確認されていることから，本跡の柱穴である可能性があり，本跡は５間×３間と推定される。本跡Ｐ１の柱穴が第58号掘立柱建物Ｐ６に掘り込まれており，本跡の方が古い。柱間寸法は桁行が等間隔ではなく，外側１間分がそれぞれ2.42m（８尺），内側３間分がそれぞれ2.27m（7.5尺），梁間1.96m（6.5尺）等間である。柱穴掘り方平面形は一辺0.65～0.8mの隅丸方形である。遺物はＰ６確認面から８世紀中葉に属す319須恵器坏片が１点出土しただけである。



第57号掘立柱建物跡模式図

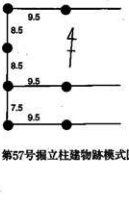
第40図　第57号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第57号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第40図）

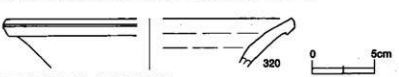
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
319	須恵器	坏	—	(2.7)	[8.4]	長石	黄灰	普通	底部・体部下端右ロクロ回転ヘラ削り	P 6 確認面	5%

第58号掘立柱建物跡（第41図）

調査区の西部，M11区に位置する桁行１間以上×梁間２間の身舎に南庇がつく，棟方向N－86°－Eの東西棟建物跡と想定した。庇Ｐ６が第57号掘立柱建物跡Ｐ１を掘り込んでおり，本跡の方が新しい。本跡の東部分は調査区域外であるため，確認できた建物の規模は桁行2.87m（9.5尺）以上，梁間5.15m（17尺）の身舎に，2.27m（7.5尺）の庇が付き，庇も含めると梁間は7.42m（24.5尺）になる。梁間の柱間寸法は2.57m（8.5尺）等間である。柱穴掘り方平面形は身舎が一辺0.9～1.1mの方形，庇が一辺0.8mの方形である。遺物は各柱穴確認面から須恵器坏片・盤片・蓋片・甕片が出土している。320の須恵器甕はＰ３確認面から出土したものである。遺物は８世紀後葉に属すると思われるものが多い。



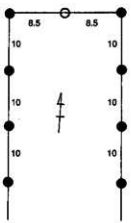
第57号掘立柱建物跡模式図



第41図　第58号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第58号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第41図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
320	須恵器	甕	[23.0]	(3.9)	—	長石，白色粒子	灰	普通	口縁端部は外に折り曲げられ，断面四角形	P 3 確認面	5 %



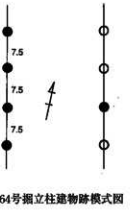
第59号掘立柱建物跡模式図

第59号掘立柱建物跡（第42図）

調査区の西部，O12区に位置する桁行３間以上×梁間２間，棟方向はN－6°－Wの南北棟建物跡である。本跡のＰ１・Ｐ７・Ｐ８が第64号掘立柱建物のＰ３・Ｐ４・Ｐ５に掘り込まれ，本跡のＰ３・Ｐ４が第66号掘立柱建物跡Ｐ１・Ｐ２を掘り込んでいることから本跡は第66号掘立柱建物跡より新しく，第64号掘立柱建物より古い。確認できた建物の規模は桁行9.09m（30尺）以上，梁間5.15m（17尺）である。柱間寸法は桁行3.03m（10尺）等間，梁間2.57m（8.5尺）等間で，柱穴掘り方平面形は一辺1.0～1.2mの方形である。遺物321須恵器坏はＰ６，322須恵器坏はＰ３，323須恵器蓋はＰ５，324須恵器蓋はＰ４，326須恵器甕はＰ１の確認面からそれぞれ出土している。

第59号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第42図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
321	須恵器	坏	[12.0]	3.6	[8.2]	長石	黄灰	普通	底部，体部下端手持ちヘラ削り	P 6 確認面	10%
322	須恵器	坏	—	(0.6)	7.2	長石，白色粒子	黄灰	普通	底部右ロクロ回転ヘラ削り	P 3 確認面	10%
323	須恵器	蓋	[16.8]	(1.3)	—	長石	黄灰	普通	口縁端部は垂直に下方につまみ出される	P 5 確認面	10%
324	須恵器	蓋	—	(2.4)	—	雲母，長石	灰白	普通	つまみは器平な擬宝珠状	P 4 確認面	20%
326	須恵器	甕	—	(13.0)	—	長石	青灰	普通	体部外面叩き格子叩き	P 1 確認面	5%



第64号掘立柱建物跡模式図

第64号掘立柱建物跡（第42図）

調査区西部，O12区に位置する桁行３間以上×梁間２間，棟方向N－12°－Wの南北棟建物跡と想定した。本跡のＰ３・Ｐ４・Ｐ５は，第59号掘立柱建物跡Ｐ１・Ｐ７・Ｐ８を掘り込んでおり，本跡の方が新しい。確認できた建物の規模は桁行6.81m（22.5尺）以上，梁間4.24m（14尺）である。柱間寸法は桁行2.27m（7.5尺）等間，梁間は2.12m（７尺）等間と想定される。柱穴掘り方平面形は短軸0.8m×長軸1.0mの長方形である。遺物330土師器坏，332平瓦はＰ１・Ｐ２確認面から出土している。

第64号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第42図）

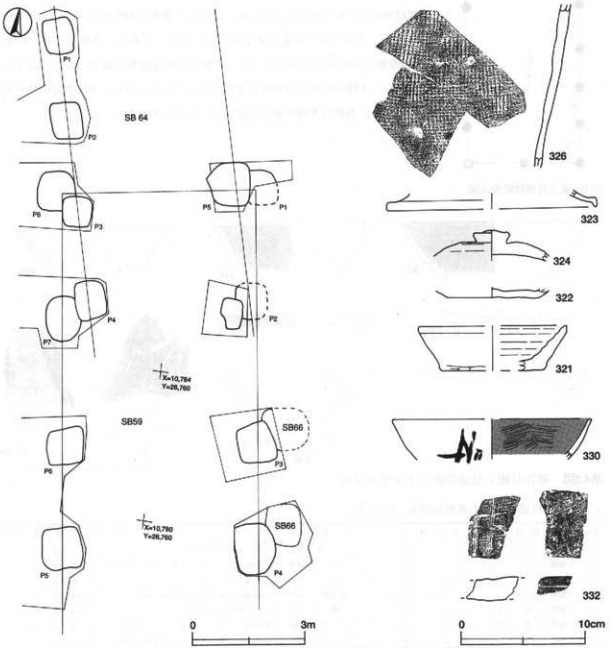
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
330	土師器	坏	[16.4]	(3.2)	—	白色微粒	赤褐	普通	内面ヘラ磨き，風化処理	遺構確認面	20% 静岡

番号	種別	幅	長さ	厚さ	重量	特徴	出土位置	備考
332	平瓦	(2.5)	(5.4)	2.0	[51.4]	凸面ヘラ削り，凹面布目痕	遺構確認面	5 %

第65・66号掘立柱建物跡

調査区西部，O12区に位置する。第59号掘立柱建物跡が掘り込んでいる２つの柱穴を第66号掘立柱建物跡と

した。また，第59・66号掘立柱建物跡の両者と組み合わない柱穴が確認されたので，第65号掘立柱建物跡とした。遺物は出土していない。

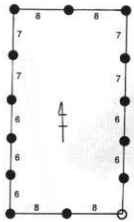


第42図　第59・64号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

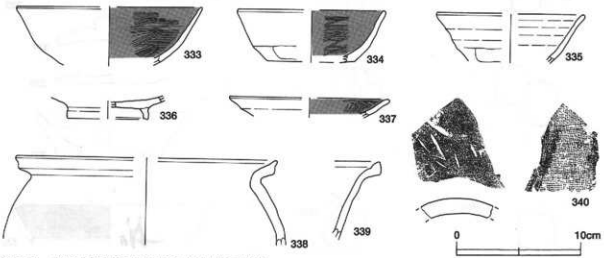
第70号掘立柱建物跡（第43図）

調査区西端部，Ｐ８区に位置する桁行５間×梁間２間，棟方向Ｎ－２°－Ｅの南北棟建物跡である。本跡の東10.5mには第71号掘立柱建物跡が位置し，本跡の南妻の柱筋と第71号掘立柱建物跡の桁行がほぼ一直線に並ぶ。本跡は第249号竪穴住居と第79号掘立柱建物に掘り込まれており，それらよりも本跡の方が古い。建物の規模は桁行9.69m（32尺），梁間4.84m（16尺）である。柱間寸法は桁行が等間隔ではなく，北側２間分が2.12m（７尺），それ以外は1.81m（６尺），梁間は2.42m（８尺）の等間である。柱穴掘り方平面形は，一辺0.9～1.2mの方形である。遺物は各柱穴確認面から土師器甕・坏・皿，須恵器坏・蓋・高台付坏・甕の細片が出土して

いる。333の土師器坏・337土師器皿はP11柱痕確認面出土で，9世紀後葉頃に属するものである。334の土師器坏はP1確認面，335の須恵器坏・338土師器甕・340丸瓦はP7確認面，336土師器高台付坏・339須恵器甕片はP4確認面からそれぞれ出土している。これらの遺物は338の土師器甕・340丸瓦を除いて大部分が9世紀中葉以降に属するものである。本跡より新しい第249号竪穴住居跡から出土している遺物は9世紀前葉に属するものであることから，本跡の時期は9世紀前葉以前ということになり，本跡確認面柱穴から出土した遺物は本跡廃絶後に混入したものと考えたい。



第70号掘立柱建物跡模式図



第43図　第70号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第70号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第43図）

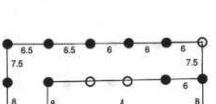
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
333	土師器	坏	[15.0]	(4.7)	－	長石，赤色粒子	にぶい橙	普通	内面ヘラ磨き，黒色処理	P11確認面	20%
334	土師器	坏	[12.0]	4.2	[7.0]	長石	橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り，内面ヘラ磨き，黒色処理	P1確認面	20%
335	須恵器	坏	[11.8]	(3.9)	－	雲母，長石	灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り	P7確認面	20%
336	土師器	高台付坏	－	(1.9)	[6.6]	砂粒	明赤褐	普通	高台接地面に沈線をもち，断面三角形	P4確認面	20%
337	土師器	皿	[13.0]	(1.5)	－	砂粒	橙	普通	内面ヘラ磨き，黒色処理	P11確認面	10%
338	土師器	甕	[20.8]	(6.8)	－	長石	にぶい橙	普通	口縁端部はつまみ上げられ，「く」の字状	P7確認面	10%
339	須恵器	甕	－	(6.3)	－	緻密	にぶい橙	良好	口縁端部は内側に折り曲げられ断面三角形	P4確認面	5%

番号	種別	幅	長さ	厚さ	重量	特徴	出土位置	備考
340	軒丸瓦	(5.8)	(7.6)	1.3	[73.8]	凸面ヘラ削り，凹面布目痕	遺構確認面	5%

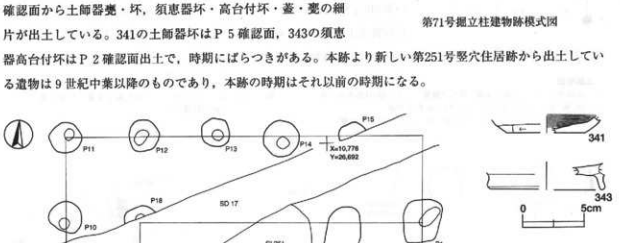
第71号掘立柱建物跡（第44図）

調査区西部，P9区に位置する桁行4間×梁間2間の身舎に北・西庇が付く，棟方向N－92°－Eの東西棟建物跡である。本跡の西10.5mには第70号掘立柱建物跡が位置し，本跡の南桁と第70号掘立柱建物跡南妻がほぼ一直線に並ぶ。本跡は第251号竪穴住居と第17号溝に掘り込まれており，本跡が最も古く，第251号掘立柱建物跡→第17号溝の順に新しくなる。建物の規模は身舎だけで，桁行7.42m（24.5尺），梁間4.84m（16尺）を測

り，北に2.27m（7.5尺）の庇と，西に1.96m（6.5尺）の庇がそれぞれ付き，庇を含めると，桁行9.39m（31尺），梁間7.12m（23.5尺）となる。身舎の桁行柱間寸法は西１間分が1.96m（6.5尺）で，そのほかが1.81m（6尺），梁間は2.42m（８尺）等間である。柱穴掘り方平面形は，一辺0.９～1.1mの隅丸方形，庇掘り方平面形は一辺0.8mの隅丸方形である。遺物は各柱穴確認面から土師器甕・坏，須恵器坏・高台付坏・蓋・甕の細片が出土している。341の土師器坏はＰ５確認面，343の須恵器高台付坏はＰ２確認面出土で，時期にばらつきがある。本跡より新しい第251号竪穴住居跡から出土している遺物は９世紀中葉以降のものであり，本跡の時期はそれ以前の時期になる。



第71号掘立柱建物跡模式図



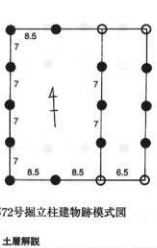
第44図　第71号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第71号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第44図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
341	土師器	坏	—	(1.4)	[6.4]	雲母，長石	灰褐	普通	内面ヘラ磨き，黒色処理	Ｐ５確認面	10%
343	須恵器	高台付坏	—	(2.2)	[9.0]	雲母，長石	灰白	普通	高台は外にふんばる	Ｐ２確認面	10%

第72号掘立柱建物跡（第45図）

調査区西端部，Ｏ８区に位置する桁行４間×梁間２間の身舎に東庇が付く，棟方向Ｎ－２°－Ｅの南北棟建物跡である。本跡から26m東に第75号掘立柱建物跡が位置し，規模・棟方向もほぼ同一であり，庇を中央にむけ対峙する。本跡は第246・249号竪穴住居，第80号掘立柱建物に掘り込まれており，いずれよりも本跡の方が古い。建物の規模は身舎だけで桁行8.48m（28尺），梁間5.15m（17尺）を測り，1.96m（6.5尺）の庇が東に付き，庇も含めると梁間が7.12m（23.5尺）となる。柱間寸法は桁行2.12m（７尺）等間，梁間2.57m（8.5尺）等間である。身舎の柱穴掘り方平面形は，一辺0.9～1.0mの隅丸方形で，救ち割りを行ったＰ３の深さは0.6m，埋土はロームブロックを含んだ極暗褐色土・暗褐色土・褐色土である。第45図土層断面図中第１～４層が本跡

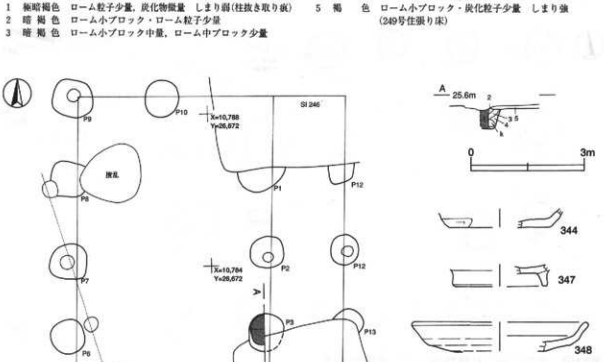


第72号掘立柱建物跡模式図

のもので，第５層は本跡の廃絶後に構築した第249号竪穴住居跡の張り床の土層である。庇の柱穴掘り方平面形は約0.75mの円形である。遺物は各柱穴確認面から土師器甕・坏，須恵器坏・蓋・高台付坏・盤・甕片など比較的多く出土している。344の須恵器坏はＰ９確認面，347の須恵器高台付坏・349須恵器蓋はＰ11確認面，348須恵器盤はＰ２確認面からそれぞれ出土しており，９世紀前葉頃までの時期に属すると思われる。本跡より新しい第246号竪穴住居跡から出土している遺物は８世紀後葉頃，第249号竪穴住居跡出土遺物は９世紀前葉頃の時期に属するものであるので，本跡はこれらより古い時期になる。

土層解説

1　極暗褐色　ローム粒子少量，炭化物微量　しまり弱(柱抜き取り痕)
2　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
3　暗褐色　ローム小ブロック中量，ローム中ブロック少量
4　褐　色　ローム小ブロック中量
5　褐　色　ローム小ブロック・炭化粒子少量　しまり強(249号住張り床)



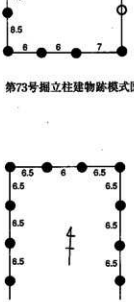
第45図　第72号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第72号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第45図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
344	須恵器	坏	—	(1.5)	[8.0]	雲母，白色粒子	灰	普通	底部外面，体部下端手持ちヘラ削り	Ｐ９確認面	10%
347	須恵器	高台付坏	—	(1.8)	[7.2]	雲母，白色粒子	灰	普通	高台接地面に比線	Ｐ11確認面	10%
348	須恵器	盤	[13.8]	(2.3)	—	長石，白色粒子	灰	普通	口縁端部，肥厚する	Ｐ２確認面	10%
349	須恵器	蓋	[13.6]	(1.3)	—	長石，白色粒子	灰	普通	口縁部で反り，端部は短く下方につまみ出される	Ｐ11確認面	10%

第73号掘立柱建物跡

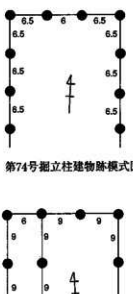
調査区西部，P10区に位置する桁行4間×梁間3間，棟方向N－0°の南北棟建物跡である。本跡の北17.5mには，本跡と規模・棟方向がほぼ同じの第95号掘立柱建物跡が位置する。本跡は第256号竪穴住居跡に掘り込まれており，本跡の方が古い。建物の規模は桁行9.69m（32尺），梁間5.75m（19尺）である。柱間寸法は等間隔ではなく，桁行では外側1間分がそれぞれ2.57m（8.5尺），中央2間分が2.27m（7.5尺）である。梁間の柱間寸法は東側1間が2.12m（7尺），中央と西側の2間が1.81m（6尺）である。柱穴掘り方平面形は径0.8～1.0mの円形である。遺物はP8・P11確認面から土師器甕片，須恵器高台付坏片・甕片が出土しているが，細片のため図示できなかった。



第73号掘立柱建物跡模式図

第74号掘立柱建物跡

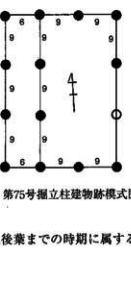
調査区西部，P9区に位置する桁行3間以上×梁間3間，棟方向N－3°－Wの南北棟建物跡である。建物の規模は桁行5.90m（19.5尺）以上，梁間5.75m（19尺）である。柱間寸法は桁行1.96m（6.5尺）等間，梁間の外側1間分が1.96m（6.5尺），中央1間が1.81m（6尺）である。柱穴掘り方平面形は短軸0.8m×長軸1.0mの長方形または，一辺0.8～1.0mの隅丸方形である。遺物はP7確認面から土師器甕片が出土しているが，細片のため図示できなかった。



第74号掘立柱建物跡模式図

第75号掘立柱建物跡（第46図）

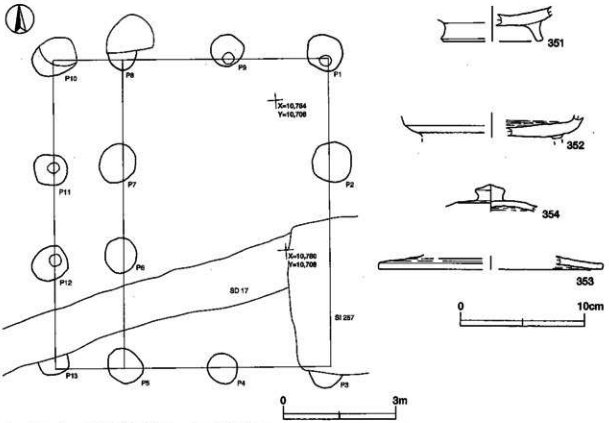
調査区西部，O10・P10区に位置する桁行3間×梁間2間の身舎に西庇が付く，棟方向N－3°－Eの南北棟建物跡である。本跡から26m西に第72号掘立柱建物跡が位置し，規模・棟方向もほぼ同一であり，庇を中央に向け対峙する。本跡は第257号竪穴住居と第17号溝に掘り込まれており，本跡が最も古く，第257号掘立柱建物跡→第17号溝の順に新しくなる。建物の規模は身舎だけで桁行8.18m（27尺），梁間5.45m（18尺）を測り，1.81m（6尺）の庇が西に付き，庇も含めると梁間が7.27m（24尺）となる。柱間寸法は桁行・梁間共に2.72m（9尺）等間である。柱穴掘り方平面形は径0.9～1.1mの円形である。遺物はP7・P9の確認面から集中的に出土している。351須恵器高台付坏・352須恵器盤・354須恵器壺はP7，353須恵器壺はP9の確認面出土であり，8世紀後葉までの時期に属すると思われる。



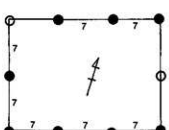
第75号掘立柱建物跡模式図

第75号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第46図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
351	須恵器	高台付坏	—	(2.6)	[7.7]	密砂	灰	普通	高台は高く，外にふんばる	P7確認面	10%
352	須恵器	盤	—	(1.9)	—	密砂	灰	普通	底部回転ヘラ削り後，高台貼り付け	P7確認面	10%
353	須恵器	壺	—	[17.8]	(1.1)	—	白色粒子	灰	普通	口縁端部に沈線	P9確認面	10%
354	須恵器	壺	—	(2.1)	—	長石	灰	普通	擬宝珠状のつまみ	P7確認面	10%



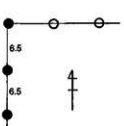
第46図　第75号掘立柱建物跡・出土遺物実測図



第76号掘立柱建物跡模式図

第76号掘立柱建物跡

調査区西部，Ｏ９区に位置する桁行３間×梁間２間，棟方向N―77°―Eの東西棟建物跡である。本跡は第260・261号竪穴住居跡に掘り込まれており，本跡の方が古い。建物の規模は桁行6.36m（21尺），梁間4.24m（14尺）であり，柱間寸法は桁行2.12m（７尺）等間，梁間2.12m（７尺）等間である。柱穴掘り方平面形は径0.55～0.7mの円形である。遺物は出土していない。本跡より新しい第260・261号竪穴住居跡の出土遺物は９世紀後葉や10世紀代に属するものであり，本跡はそれ以前ということになる。



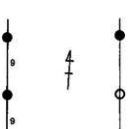
第78号掘立柱建物跡模式図

第78号掘立柱建物跡

調査区西部，Ｑ７・Ｑ８区に位置する桁行３間×梁間１間以上，棟方向N―0°の南北棟建物跡と想定した。本跡は第270・271号竪穴住居跡・第17号溝に掘り込まれており，本跡が最も古く，第270・271号竪穴住居跡→第17号溝の順に新しくなる。建物の規模は桁行5.90m（19.5尺），梁間2.27m（7.5尺）以上になる。柱間寸法は桁行1.96m（6.5尺）等間，梁間2.27m（7.5尺）である。柱穴掘り方平面形は一辺0.6～0.8mの方形である。遺物は出土していない。なお，本跡と重複している第270・271号住居跡からも遺物は出土していない。

第79号掘立柱建物跡

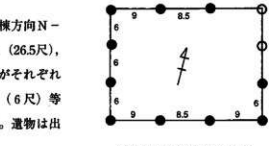
調査区西部，Ｐ８区に位置する桁行２間以上×梁間２間，棟方向N－４°－Wの南北棟建物跡である。本跡は第70号掘立柱建物跡を掘り込んでおり，本跡の方が新しい。建物の規模は桁行5.45m（18尺）以上，梁間4.54m（15尺）である。柱間寸法は桁行2.72m（９尺）等間，梁間2.27m（7.5尺）等間である。柱穴掘り方平面形は短軸0.6m×長軸0.8mの楕円形である。遺物は極少量の細片で，図示できるものはない。



第79号掘立柱建物跡模式図

第80号掘立柱建物跡

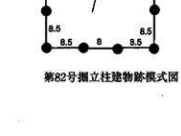
調査区西端部，Ｏ８・Ｐ８区に位置する桁行７間以上×梁間２間，棟方向N－15°－Wの南北棟建物跡である。本跡は第70・72号掘立柱建物跡を掘り込んでおり，本跡の方が新しい。また，第５号溝とも重複しているが新旧関係は不明である。建物の規模は桁行13.18m（43.5尺）以上，梁間3.93m（13尺）である。桁行の柱間寸法は基本的には1.96m（6.5尺）が多く，中央の１間が1.51m（５尺），北１間が1.81m（６尺）というようにばらつきがみられる。梁間の柱間寸法は1.96m（6.5尺）等間である。建物中央部に間仕切り柱と思われる柱穴がある。柱穴掘り方平面形は径0.4～0.6mの円形である。本跡は，他の掘立柱建物跡と比べると柱穴掘り方・棟方向も異なっており，奈良・平安時代に属するかどうか疑問が残る。遺物は出土していない。



第80号掘立柱建物跡模式図

第81号掘立柱建物跡

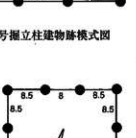
調査区西部，Ｑ10区に位置する桁行３間×梁間３間，棟方向N－76°－Ｅの東西棟建物跡である。建物の規模は桁行8.02m（26.5尺），梁間5.45m（18尺）であり，柱間寸法は桁行の外側２間がそれぞれ2.72m（９尺），中央１間が2.57m（8.5尺），梁間が1.81m（６尺）等間である。柱穴掘り方平面形は径0.8～0.9mの円形である。遺物は出土していない。



第81号掘立柱建物跡模式図

第82号掘立柱建物跡（第47図・付図１）

調査区西部，Ｐ７・８，Ｑ７・８区に位置する桁行３間×梁間３間，棟方向N－12°－Wの南北棟建物跡である。本跡は第275号竪穴住居に掘り込まれており，本跡の方が古い。建物の規模は桁行7.72m（25.5尺），梁間7.57m（25尺）であり，柱間寸法は梁間の外側１間分がそれぞれ2.57m（8.5尺），中央１間が2.42m（８尺），桁行が2.57m（8.5尺）等間である。柱穴掘り方平面形は一辺0.9～1.0mの隅丸方形または円形であり，断ち割りを行ったＰ８の深さは0.5m，埋土はロームブロックを含んだ暗褐色土・褐色土である。

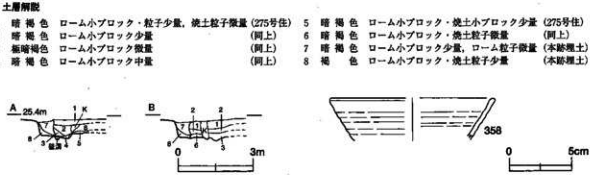


第82号掘立柱建物跡模式図

第47図土層断面図中，第１～６層が本跡を掘り込んでいる第275号竪穴住居跡の覆土，第７・８層が本跡の埋土である。遺物は各柱穴確認面から土師器甕，須恵器坏・蓋・高台付坏・甕などが出土している。358須恵器坏はＰ１確認面出土で，９世紀代に属するものと思われる。

土層解説

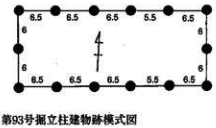
1	暗褐色	ローム小ブロック・粒子少量，焼土粒子微量	(275号住)	5	暗褐色	ローム小ブロック・焼土小ブロック少量	(275号住)
2	暗褐色	ローム小ブロック少量	(同上)	6	暗褐色	ローム小ブロック・焼土粒子微量	(同上)
3	褐暗褐色	ローム小ブロック微量	(同上)	7	暗褐色	ローム小ブロック少量，ローム粒子微量	(本跡埋土)
4	暗褐色	ローム小ブロック中量	(同上)	8	褐色	ローム小ブロック・焼土粒子少量	(本跡埋土)



第47図　第82号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第82号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第47図）

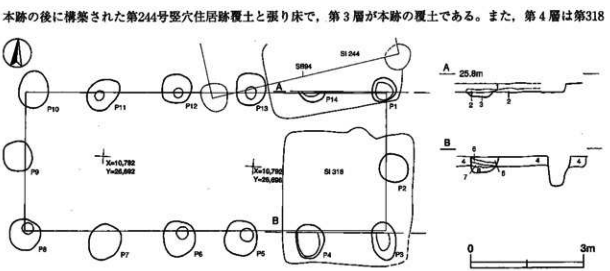
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
358	須恵器	坏	[13.2]	(3.4)	—	長石	灰	普通	器壁が薄手，口縁端部がわずかに肥厚	遺構確認面	5%



第93号掘立柱建物跡模式図

第93号掘立柱建物跡（第48・49図）

調査区西部，Ｏ９区に位置する桁行５間×梁間２間，棟方向Ｎ－86°－Ｅの東西棟建物跡である。本跡は第318号竪穴住居跡を掘り込み，第244号竪穴住居に掘り込まれており，第318号竪穴住居跡→本跡→第244号竪穴住居跡の順に新しくなる。柱穴同士の重複はないが，北に近接する第94号掘立柱建物跡とも重複している。建物の規模は桁行9.54m（31.5尺），梁間3.63m（12尺）であり，柱間寸法は桁行1.96m（6.5尺）が基本となっているが１間だけ1.66m（5.5尺）である。梁間の柱間寸法は1.81m（６尺）等間である。柱穴掘り方平面形は一辺0.8～0.9mの隅丸方形または円形であり，断ち割りを行ったＰ３の深さは0.9m，Ｐ４・Ｐ14の深さは0.4mである。第48図土層断面図中，第１・２層は本跡の後に構築された第244号竪穴住居跡覆土と張り床で，第３層が本跡の覆土である。また，第４層は第318

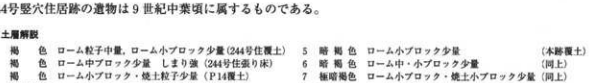


第48図　第93号掘立柱建物跡実測図

号竪穴住居跡の覆土，第５～８層は本跡柱穴の覆土である。遺物は各柱穴確認面から土師器甕，須恵器坏・蓋・高台付坏・盤・甕などが出土しており，時期的にみても９世紀前葉に属するものから９世紀後葉に属するものまでと幅広い。ちなみに，本跡より古い第318号住居跡出土遺物は８世紀代のもので，本跡より新しい第244号竪穴住居跡の遺物は９世紀中葉頃に属するものである。

土層解説

1 褐　色　ローム粒子中量，ロームブロック少量（244号住覆土）
2 褐　色　ローム中ブロック少量　しまり強（244号住張り床）
3 褐　色　ローム小ブロック・焼土粒子少量（Ｐ14覆土）
4 暗褐色　ローム小ブロック中量（318号住覆土）
5 暗褐色　ローム小ブロック少量　（本跡覆土）
6 暗褐色　ローム中・小ブロック少量　（同上）
7 極暗褐色　ローム小ブロック・焼土小ブロック少量（同上）
8 褐　色　ローム中ブロック中量　（同上）



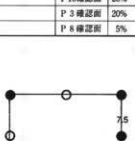
第49図　第93号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第93号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第49図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
359	須恵器	坏	[13.0]	4.8	[8.0]	長石，小石	灰	普通	底部，体部下端手持ちヘラ削り	Ｐ10確認面	20%
361	土師器	高台付坏	—	(1.9)	[6.4]	赤色粒子	橙	普通	内面ヘラ磨き，黒色処理	Ｐ３確認面	20%
363	須恵器	盤	[16.8]	(2.3)	—	長石，小石	灰	普通	口縁端部，わずかに肥厚	Ｐ８確認面	5%

第94号掘立柱建物跡（第50図）

調査区西部，Ｎ９，Ｏ９区に位置する桁行４間×梁間２間と想定した棟方向Ｎ－16°－Ｗの南北棟建物跡である。本跡は第238・244号竪穴住居に掘り込まれており，本跡の方が古い。柱穴同士の重複はないが，南に近接する第93号掘立柱建物跡とも重複している。建物の規模は桁行8.78m（29尺），梁間5.14m（17尺）であり，柱間寸法は桁行の外側１間分がそれぞれ2.27m（7.5尺），内側２間が2.12m（７尺）である。梁間については2.57m（8.5尺）等間と想定した。柱穴掘り方平面形は一辺0.7～0.85mの隅丸方形であり，断ち割りを行ったＰ５の深さは0.65m，埋土はロームブロックを含んだ褐色土である。第50図土層断面図中，第１～６層が本跡の後に構築された第244号竪穴住居跡覆土，第７～10層が本跡の埋土である。遺物は柱穴確認面から須恵器蓋・高盤・甕の３点が出土している。いずれも８世紀前・中葉に属するもので，本跡より新しい第238・244号竪穴住居跡出土遺物は９世紀中・後葉に属するものである。



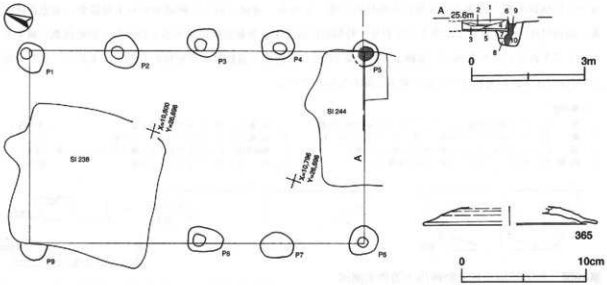
第94号掘立柱建物跡模式図

土層解説

1 灰褐色　砂質ローム小ブロック中量（第244号住覆土）
2 灰褐色　ローム小ブロック少量（同上）
3 褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量（同上）
4 暗褐色　ローム小ブロック・粒子少量（同上）
5 褐　色　ローム中・小ブロック少量（第244号住張り床）
6 暗褐色　ローム中・砂質粘土小ブロック少量（第244住壁）
7 褐　色　ローム中ブロック多量　しまり強（本跡埋土）
8 褐　色　ローム中ブロック中量（同上）
9 暗褐色　ローム小ブロック少量　しまり弱（柱抜き取り）
10 褐　色　ローム中・小ブロック（同上）

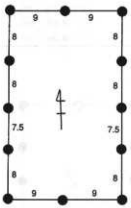
第94号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第50図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
365	須恵器	蓋	[14.0]	(2.0)	—	長石，赤色粒子	赤褐	不良	かえり有り	Ｐ２確認面	20%



第50図　第94号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第95号掘立柱建物跡（第51図・付図1）

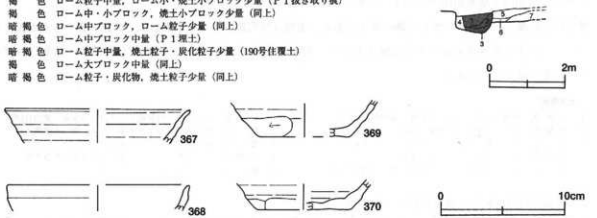


第95号掘立柱建物跡模式図

調査区西部，N10，O10区に位置する桁行４間×梁間２間，棟方向N－0°の南北棟建物跡である。本跡は第190・234号竪穴住居跡を掘り込んでおり，本跡の方が新しい。また第237号竪穴住居跡とも重複しているが新旧は不明である。建物の規模は桁行9.54m（31.5尺），梁間5.45m（18尺）であり，柱間寸法は桁行2.42m（８尺）が基本となっているが１間分だけ2.27m（7.5尺））である。梁間柱間寸法は2.72m（９尺）等間である。柱穴掘り方平面形は一辺0.95～1.1mの方形であり，断ち割りを行ったＰ11の深さは0.6mである。第51図土層断面図中，第１～３層が本跡Ｐ１の抜き取り痕，第４層がＰ４埋土，第５～７層が第190号竪穴住居跡覆土である。367・368の土師器坏はＰ７柱抜き取り痕の確認面出土で時期的には８世紀前葉，９世紀後葉というように幅が大きい。369・370須恵器はＰ４・Ｐ１確認面から出土したもので，いずれも９世紀前葉頃に属するものと思われる。

土層解説

1　褐　色　ローム粒子中量，ローム小・焼土小ブロック少量（Ｐ１抜き取り痕）
2　褐　色　ローム中・小ブロック，焼土小ブロック少量（同上）
3　暗褐色　ローム中ブロック，ローム粒子少量（同上）
4　暗褐色　ローム中ブロック中量（Ｐ１埋土）
5　暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量（190号住覆土）
6　褐　色　ローム大ブロック中量（同上）
7　暗褐色　ローム粒子・炭化物，焼土粒子少量（同上）



第51図　第95号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第95号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第51図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
367	土師器	坏	[14.8]	(2.8)	—	赤色粒子	橙	普通	口縁端部は，屈くすぼまり，外反する	P７確認面	10%
368	土師器	坏	[14.6]	(2.1)	—	砂粒	にぶい橙	普通	口縁部はほぼ直立する	P７確認面	10%
369	須恵器	坏	—	(2.8)	[8.0]	長石	灰	普通	底部，体部下端手持ちヘラ削り	P４確認面	10%
370	須恵器	坏	—	(2.1)	[7.4]	長石	灰	普通	底部，体部下端手持ちヘラ削り	P１確認面	10%

(2) 溝跡

建物群Ｃ区では，第５・17・18号の３条の溝跡が確認された。第５号溝跡は当遺跡の北端から西端をはしっている。特に建物群Ｃ区において最も長い距離を確認されたので，建物群Ｃ区以外の土層確認や出土遺物についても，すべてここで取り扱うことにする。また，第17号溝跡については，現在の土地区割と合致しており，境界溝の可能性が高いため，付図１遺構確認図のみの記載とした。

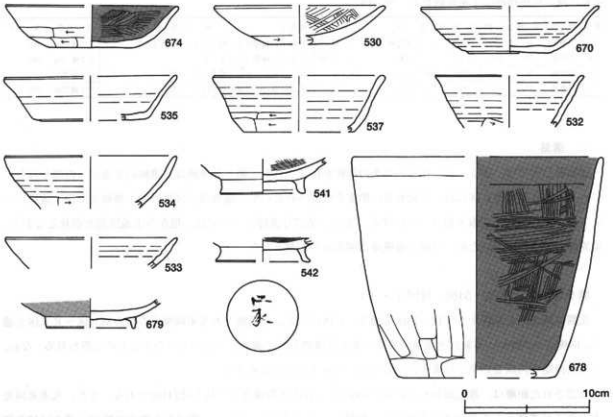
第５号溝跡（第52・54図・付図１・４）

北端は調査区Ｄ20区からＩ12・13区を通り，Ｃ区に入り，当遺跡と九重東岡廃寺の境のＭ９区～Ｒ６区を通り，同廃寺へ向かい，本跡は九重東岡廃寺の第７号溝跡として調査したものとつながるものと思われる。なお，九重東岡廃寺内調査の第７号溝跡については，同廃寺の項で記載する。

確認された距離は，推定部分も入れると366m，その内実際確認した長さは241mである。また，九重東岡廃寺の第７号溝跡とした部分まで含めると，総延長おおよそ466mとなる。確認した溝の規模は，調査区域北側では幅1.6～2.0m，深さ1.2～1.8m，建物群Ｃ区内では最も狭い部分で幅0.6m，深さ0.5m，最も広い部分で幅2.5mであった。建物群Ｃ区内では，幅1.6m，深さ0.6mが平均値である。主軸方向は，建物群Ｃ区内ではＮ－35°－Ｅ，Ｊ12区付近で角度が変わりＮ－70°－Ｅ，北端部Ｄ20区ではＮ－57°－Ｅとなる。北端部のＤ20区では第56・76号竪穴住居跡と重複が認められ，本跡の方が新しいことを確認した（第54図土層断面図）。また，Ｊ12区では第55・56号掘立柱建物跡と重複しており，本跡の方が新しい（第38図，第55・56号掘立柱建物跡土層断面図）。Ｍ９区では本跡が第242号竪穴住居跡，Ｐ８区では第276号竪穴住居跡をそれぞれ掘り込んでおり，いずれも本跡が新しいことが確認できた。また，Ｎ８区では第18号溝跡と交差をしており，新旧関係は本跡の方が新しいと判断した。重複関係や出土遺物から本跡の時期は９世紀後葉以降の可能性がある。

第５号溝跡出土遺物観察表（第52図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
530	土師器	坏	[13.6]	3.1	[5.0]	赤色粒子	橙	普通	底部，体部下端石ロクロ回転ヘラ削り	T34内	20%
532	須恵器	坏	[11.8]	(4.2)	—	長石，小石	灰	普通	内外面ロクロ目が強い，体部下端手持ちヘラ削り	T31～34内	10%
533	須恵器	坏	[13.8]	(2.5)	—	雲母	灰黄	普通	内面のロクロ目が強い	T31～34内	10%
534	須恵器	坏	[13.8]	(4.2)	—	雲母，長石	灰黄褐	普通	内湾して口縁部にいたる，体部下端手持ちヘラ削り	T33・34内	10%
535	須恵器	坏	[13.8]	3.6	[9.2]	長石，白色粒子	灰	普通	底部回転ヘラ切り後，雑なナデ	T31～34内	20%
537	須恵器	坏	[13.6]	4.5	[9.0]	雲母，長石	褐灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り	T31～34内	10%
541	土師器	高台付坏	—	(2.8)	6.7	長石	橙	普通	内面ヘラ磨き	T33・34内	30%
542	土師器	高台付坏	—	(1.9)	[7.5]	砂粒	にぶい黄橙	普通	内面ヘラ磨き，黒色処理	T34・35内	20% 底部内面「家」墨書
670	須恵器	坏	[14.2]	3.8	6.6	雲母，砂粒	灰黄	普通	底部糸切ヘラ切り後，雑なナデ	T34内	50%
674	土師器	坏	[13.8]	3.4	6.8	長石，小石	明赤褐	普通	底部石ロクロ糸切ヘラ削り，体部下端手持ちヘラ削り，内面ヘラ磨き，黒色処理	T34内	40%
678	土師器	鉢	[20.0]	17.8	[12.0]	赤色粒子	橙	普通	内面ヘラ磨き，黒色処理，体部下半横方向手持ちヘラ削り	T34内	30%
679	灰釉陶器	椀	—	(2.3)	[6.8]	緻密	灰オリーブ	堅緻	三日月高台。	T34内	10%



第52図　第５号溝跡出土遺物実測図

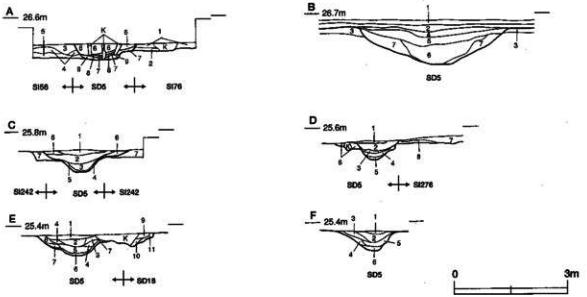
第18号溝跡（第53・54図）

調査区M10区～Ｎ８区において，Ｎ－80°－Ｅの東西方向で46.5mにわたって確認した。さらに南の調査区Ｏ７区の第81号トレンチではＮ－15°－Ｗの南北方向で4.5mの距離を確認でき，調査区Ｎ７区付近で本跡はほぼ直角に折れ曲がるものと思われる。確認した規模は，幅がおよそ0.7m，深さ0.35mである。Ｎ８区では第５号溝とほぼ直交しており，新旧関係は本跡が古いと判断でき，遺物は大変少量のため時期断定はできないが，８世紀中・後葉のものが出土している。

第53図　第18号溝跡出土遺物実測図

第18号溝跡出土遺物観察表（第53図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
568	須恵器	坏	—	(0.9)	[8.8]	雲母，長石	灰	普通	底部，底部外周右ロクロ回転ヘラ削り	確認面	10%
569	須恵器	甕	—	(3.7)	[26.0]	雲母，長石	灰白	普通	外面，粗い同心円状叩き，内面指ナデ	確認面	10%



第54図　第5・18号溝跡土層断面図

第5号溝跡，第56・76号竪穴住居跡土層解説　A－A'

1　暗 褐 色　ローム小・焼土小ブロック少量（76号住）
2　暗 褐 色　ローム粒子・焼土小ブロック微量（同上）
3　褐　　色　ローム小ブロック少量，焼土粒子微量（56号住）
4　褐　　色　ローム粒子中量，炭化物・焼土粒子少量（同上）
5　暗 褐 色　焼土小ブロック中量，炭化物少量，
　　ローム粒子微量（同上）
6　褐　　色　ローム粒子中量，焼土粒子微量（5号溝）
7　暗 褐 色　ローム粒子・焼土粒子微量（同上）
8　褐　　色　ローム小ブロック・焼土粒子微量（同上）
9　褐　　色　ローム小ブロック・焼土小ブロック少量，
　　焼土粒子微量（同上）

第5号溝跡土層解説　B－B'

1　暗 褐 色　焼土粒子・炭化物微量
2　極暗褐色　焼土粒子・炭化物・ローム小ブロック微量
3　褐　　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，
　　炭化粒子微量
4　黒 褐 色　ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子微量
5　黒 褐 色　炭化物中量，ローム粒子・炭化物・焼土粒子微量
6　暗 褐 色　ローム粒子少量，炭化粒子・焼土粒子微量
7　暗 褐 色　ローム粒子少量，ローム中・小ブロック微量

第5号溝跡，第242号竪穴住居跡土層解説　C－C'

1　黒 褐 色　ローム中・小ブロック少量（5号溝）
2　暗 褐 色　ローム小ブロック少量　　（同上）
3　極暗褐色　ローム中・小ブロック微量（同上）
4　暗 褐 色　ローム中ブロック少量　　（同上）
5　暗 褐 色　ローム中ブロック微量　　（同上）
6　暗 褐 色　ローム小・焼土小ブロック少量（同上）
7　暗 褐 色　ローム小ブロック中量，焼土小ブロック微量（242号住）

第5号溝跡，第276号竪穴住居跡土層解説　D－D'

1　黒 褐 色　ローム中ブロック少量（5号溝）
2　黒 褐 色　ローム小ブロック微量（同上）
3　暗 褐 色　ローム大ブロック中量（同上）
4　暗 褐 色　ローム小ブロック少量（同上）
5　褐　　色　ローム大ブロック少量（同上）
6　暗 褐 色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量（同上）
7　暗 褐 色　ローム小ブロック・炭化粒子・焼土粒子少量（276号住）
8　暗 褐 色　ローム中・小ブロック少量，焼土粒子微量（同上）

第5・18号溝跡土層解説　E－E'　F－F'

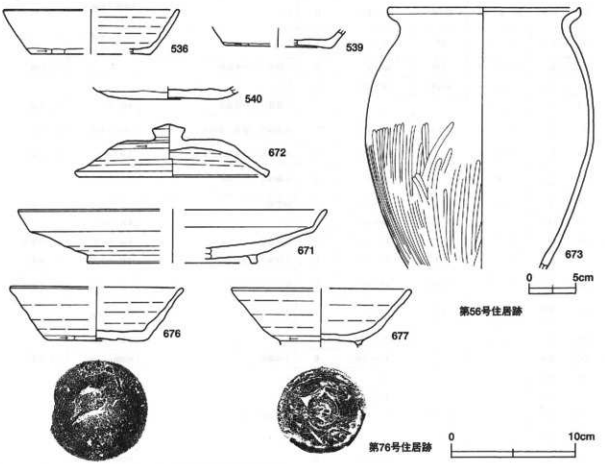
1　暗 褐 色　炭化粒子・焼土粒子少量　　（5号溝）
2　明 褐 色　ローム大ブロック　　（同上）
3　暗 褐 色　ローム粒子少量　　（同上）
4　暗 褐 色　ローム中ブロック・ローム粒子中量（同上）
5　極暗褐色　ローム中・小ブロック少量　　（同上）
6　暗 褐 色　ローム小ブロック少量　　（同上）
7　明 褐 色　ローム中ブロック多量　　（5号溝）
8　褐　　色　ローム中・小ブロック少量　　（同上）
9　暗 褐 色　ローム粒子微量　　（18号溝）
10　暗 褐 色　ローム粒子中量，ローム中ブロック微量（同上）
11　褐　　色　ローム中ブロック少量　　（同上）

(3) 竪穴住居跡・土坑

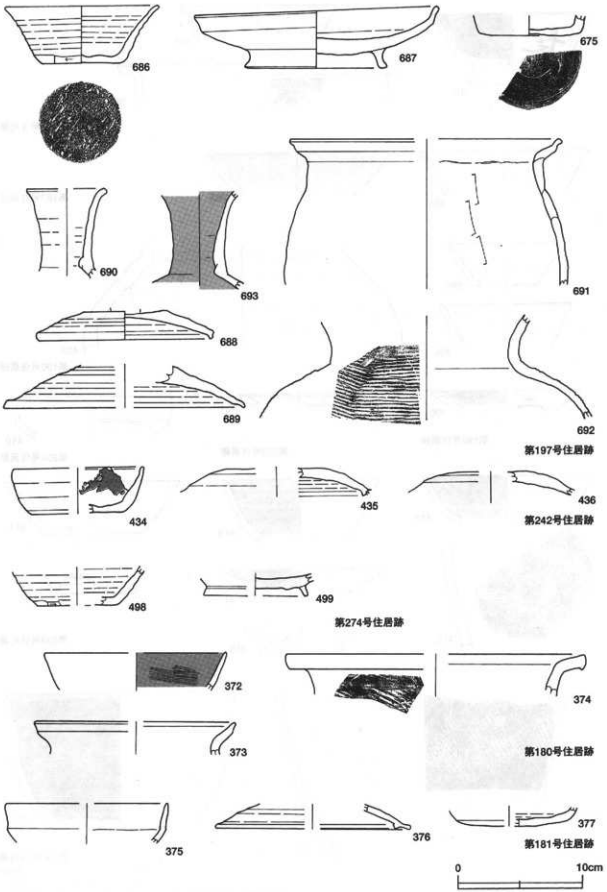
住居跡番号	位置	主(長)軸方向	平面形	規模(m)(長軸×短軸)	竈	出土遺物	新旧関係(古→新)	時期
56	B-20	N－0°	方形	4.0×(4.0)	—	土師器片，須恵器片	本跡→SD5 本跡→SB76カ	8Ｃ中葉
76	B-20	N－0°	—	(3.2)×(2.7)	—	土師器片，須恵器片	本跡→SD5	8Ｃ後葉
179	P-11	N－0°	方形	4.2×4.0	有	土師器片		—
180	O-1 P-11	—	方形	6.5×5.6	有	土師器片，須恵器片	SB44→本跡	9Ｃ中葉以降
181	P-12	N－9°－W	方形	5.0×5.0	有	土師器片，須恵器片	本跡→SB49	8Ｃ初頭
182	N-12	N－3°－W	長方形	3.5×3.0	—	須恵器片	SI183	9Ｃ前葉カ
183	N-12	N－3°－W	長方形	4.0×3.0	有	土師器片	SI182，SB51→本跡	9Ｃ後葉
184	O-12	N－8°－W	方形	4.2×4.2	有	土師器片，須恵器片，墨書	SI185，SB50→本跡	9Ｃ中葉以降
185	O-12	N－0°	方形	3.0×(1.0)	有	なし	本跡→SI184	—
186	P-12	N－13°－E	方形	4.6×4.6	有	土師器片，須恵器片		—
187	O-11	N－17°－W	長方形	3.5×2.8	—	須恵器片，緑釉陶器		9Ｃ後葉
188	O-10	—	—	4.6×(1.0)	—	土師器片，須恵器片		8Ｃ中葉～後葉
189	N-10 O-10	—	方形	3.2×(1.6)	有	土師器片，須恵器片		8Ｃ中葉
190	N-10	—	—	6.0×(1.2)	—	土師器片，須恵器片	本跡，SI234→SB95	8Ｃ中葉
191	O-11	—	—	—	—	土師器片，須恵器片，灰釉陶器		—
192	N-11	—	—	—	—	土師器片，須恵器片		9Ｃ中葉以降カ
193	N-10	—	—	—	—	なし		—
196	N-11	N－0°	方形	3.8×3.0	—	土師器片，須恵器片，墨書	SB54→本跡	9Ｃ中葉以降カ
197	J-12	—	—	(8.5)×—	—	土師器片，須恵器片，灰釉陶器	本跡→SD5	9Ｃ前・中葉
198	N-10	N－5°－E	方形	3.3×3.0	—	なし		—
201	O-13	—	—	—	—	土師器片，須恵器片，砥石		9Ｃ中葉
204	N-11	—	—	3.5×(1.6)	—	なし		—
205	N-12	—	—	4.0×(1.0)	有	なし		—
206	N-12	—	—	4.0×(2.2)	—	なし		—
234	N-10	N－12°－W	長方形	5.0×4.6	有	土師器片	本跡→SB95	8Ｃ初頭
236	O-10	N－0°	長方形	3.5×3.0	有	土師器片		—
237	O-10	N－28°－E	長方形	4.0×3.5	有	なし	SB95	—
238	N-9	N－0°	方形	3.8×3.8	有	土師器片，須恵器片，灰釉陶器	SB94→本跡	9Ｃ後葉
239	N-10	N－11°－W	—	4.0×(2.4)	有	土師器片，須恵器片，灰釉陶器		9Ｃ後葉
240	N-9，10	N－7°－W	方形	2.8×2.7	有	土師器片，須恵器片，灰釉，墨書		9Ｃ後葉
241	N-9	N－0°	方形	3.5×3.5	有	土師器片，須恵器片		9Ｃ後葉
242	M-9	—	—	—	—	須恵器片，灰釉	本跡→SD5	8Ｃ前葉
243	N-10	N－13°－W	長方形	5.3×4.8	有	土師器片，須恵器片		8Ｃ後葉
244	O-9，10	N－17°－W	長方形	3.5×2.5	有	土師器片，須恵器片	SB93，94→本跡	9Ｃ中葉
245	O-8，9	—	長方形	3.9×3.6	—	須恵器片	本跡→SI258	8Ｃ前葉
246	O-8	N－7°－W	方形	4.1×4.1	有	土師器片，須恵器片	SB72→本跡	8Ｃ後葉
247	O-9	N－0°	方形	4.0×4.0	有	土師器片	SI248→本跡	10Ｃ後葉
248	O-8，9	—	—	—	—	土師器片，須恵器片	本跡→SI247	9Ｃ中葉
249	O-8	N－0°	方形	4.0×4.0	有	須恵器片	SB70，72→本跡	9Ｃ中葉カ
250	O-9	N－10°－E	長方形	3.8×3.5	有	土師器片，須恵器片		8Ｃ前葉
251	P-9	—	方形	4.0×3.0	—	土師器片，須恵器片	本跡→SD17	9Ｃ中葉

住居跡番号	位置	主(長)軸方向	平面形	規模 (m)(長軸×短軸)	壁	出土遺物	新旧関係(古→新)	時期
252	P-8	N－0°	長方形	3.3×2.3	—	土師器片，須恵器片		—
253	P-9	N－0°	—	4.5×3.8	有	土師器片，須恵器片	SI254→本跡	9Ｃ中葉
254	P-9	N－12°－W	—	3.3×(3.3)		土師器片	本跡→SI253	8Ｃ前葉
255	Q-8	N－0°	方形	3.8×3.8	有	土師器片，須恵器片		8Ｃ後葉
256	P-10	N－22°－W	方形	4.7×4.7	有	須恵器片	SB73→本跡	9Ｃ中葉
257	P-10	—	—	—	—	なし	SB75→本跡→SD17	—
258	O-9	—	—	8.0×(3.0)	—	須恵器片，墨書	SI315，316，317 SI245→本跡→SI315	8Ｃ中葉
259	O-8	N－90°－E	—	2.8×2.5	有	土師器片，須恵器片		9Ｃ後葉
260	O-9	—	—	—	—	土師器片	SB76→本跡	10Ｃ前葉
261	O-9	—	—	2.7×2.8	—	なし	SB76→本跡	—
262	Q-8	N－2°－W	方形	4.4×4.4	有	須恵器片，鉄斧形	SI263→本跡→SD17	—
263	Q-8	N－0°	—	3.4×2.0	—	なし	本跡→SI262	—
264	Q-8	N－7°－W	長方形	3.7×3.3	有	土師器片		8Ｃ前葉
265	Q-8，9	N－0°	長方形	4.8×4.6		なし	本跡→SD17	—
266	Q-9	N－6°－W	長方形	4.3×4.0	有	土師器片，須恵器片	SI267→本跡	8Ｃ代
267	Q-9	—	—	3.3×(2.6)	—	なし	本跡→SI266	—
268	Q-9 R-9	—	—	—	—	なし		—
269	Q-9 R-9	N－90°－E	方形	3.0×3.0	有	須恵器片		8Ｃ中葉
270	Q-8	N－30°－W	長方形	4.0×3.5	有	なし	SB78→本跡→SD17	—
271	Q-8	N－0°	方形	3.0×3.0	—	なし	SB78→本跡→SD17	—
272	Q-7	N－22°－W	方形	3.7×3.7	有	土師器片，須恵器片		8Ｃ初頭
273	Q-7	N－13°－E	長方形	4.0×3.3	有	なし		—
274	Q-7	—	—	—	—	土師器片，須恵器片	本跡→SD5	9Ｃ前葉
275	P-8 Q-8	N－9°－W	長方形	5.0×4.5	有	須恵器片，墨書，漆付着	SB82→本跡	9Ｃ中葉
276	P-7	N－9°－W	—	3.5×3.4	有	土師器片，須恵器片，鉄釘	本跡→SD5	9Ｃ中葉
277	R-7 S-7	N－90°－E	—	3.1×2.7	有	土師器片，須恵器片		—
278	R-7	N－90°－E	方形	3.0×3.0	有	須恵器片		8Ｃ中葉
279	Q-7	—	—	2.6×(0.8)	—	なし	本跡→SD5	—
280	R-7	N－7°－E	—	3.5×(2.2)	有	須恵器片	本跡→SD5	9Ｃ中葉カ
281	R-9	N－0°	方形	3.6×3.6	有	土師器片，須恵器片	本跡→SD17	8Ｃ前葉
282	R-8 S-8	N－0°	長方形	3.6×3.0	有	なし		—
283	R-8 S-8	N－0°	方形	3.4×3.4	有	なし	SI284→本跡	—
284	S-8	—	—	2.5×(1.0)	—	なし	本跡→SI283	—
285	R-8	N－0°	—	4.0×(1.8)	有	土師器片	SI286	8Ｃ前葉
286	R-8	—	—	4.7×—	—	なし	SI285	—
287	R-8	—	—	4.0×(1.2)	有	なし		—
288	R-9	N－0°	長方形	4.5×4.2	有	土師器片，須恵器片		—
289	R-10	—	—	—	—	なし	SD17，SI290	
290	Q-10 R-10	N－7°－W	—	5.0×4.4	有	なし	SI289	

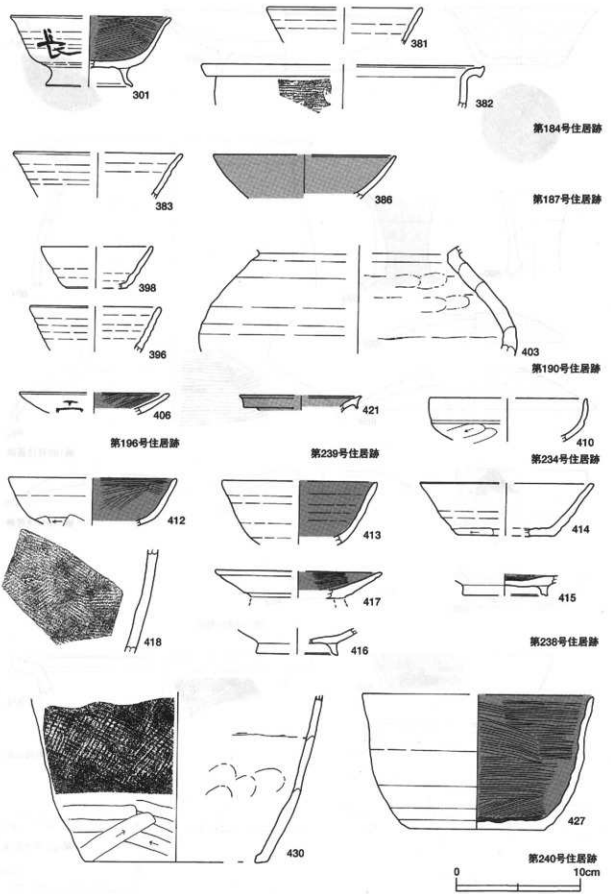
住居跡番号	位置	主(長)軸方向	平面形	規模 (m)(長軸×短軸)	壁	出土遺物	新旧関係(古→新)	時期
291	Q-10	—	—	3.5×(3.2)	—	なし	本跡→SD17	—
292	Q-9	N－90°－E	長方形	4.2×(5.6)	有	なし		—
315	O-9	N－0°	—	4.0×(3.2)	有	土師器片，灰釉，墨書	SI258→本跡，SI316，317	9C後葉
316	O-9	—	—	3.6×(1.8)	—	なし	本跡→SI258，SI315	—
317	O-8，9	N－0°	—	4.3×(3.8)	有	なし	SI258→本跡，SI315	—
318	O-9，10	N－0°	方形	3.5×3.5	有	土師器片，須恵器片	本跡→SB93	8C前葉
334	R-9 S-9	N－12°－W	方形	5.8×5.8	—	なし	本跡→SD17	—
335	N-9	N－0°	方形	3.3×3.3	有	なし		—
336	N-9	N－0°	長方形	2.7×2.3	有	なし		—
337	O-7 P-7	—	—	4.2×(2.0)	—	須恵器片	T83内	9C前葉
338	P-6	N－0°	—	4.6×(1.0)	有	土師器片，須恵器片	T83内	8C代
339	P-6	—	—	3.6×(1.0)	—	なし	T84内	—
340	P-6 Q-6	—	—	4.6×(1.0)	—	なし	T85内	—
341	Q-6	—	—	—	有	なし	T85内	—
342	Q-6	—	—	—	—	なし	T86内	—
343	Q-6	—	—	4.0×(1.4)	有	なし	T86内	—
SK7	N-11	—	長方形	2.5×1.6		土師器片	SB53→本跡	9C後葉



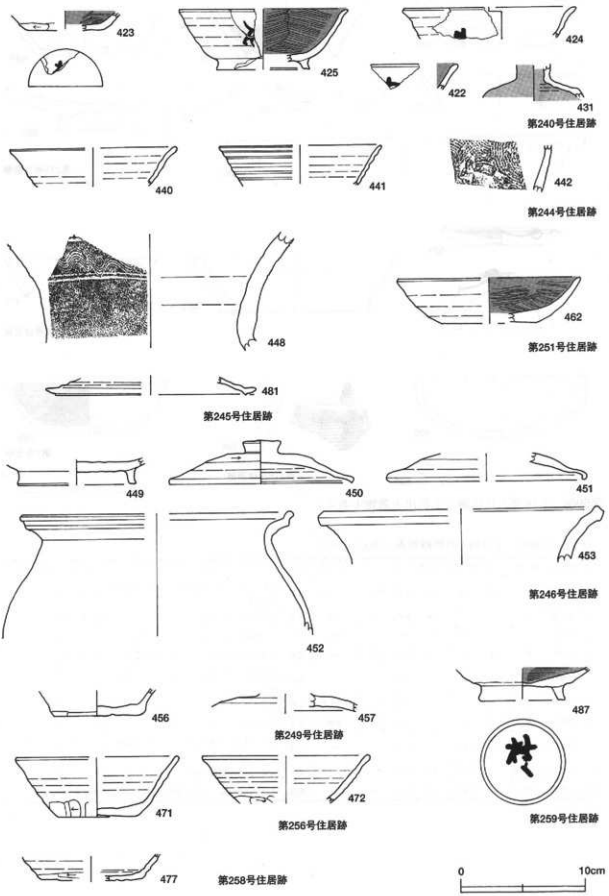
第55図　C区竪穴住居跡・土坑出土遺物実測図(1)



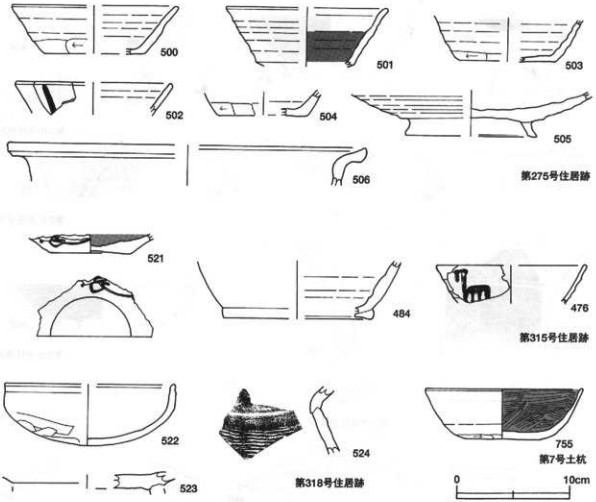
第56図　C区竪穴住居跡・土坑出土遺物実測図(2)



第57図　C区竪穴住居跡・土坑出土遺物実測図(3)



第58図　C区竪穴住居跡・土坑出土遺物実測図(4)



第59図　C区竪穴住居跡・土坑出土遺物実測図(5)

C区竪穴住居跡・土坑出土遺物観察表（第55～59図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
536	須恵器	坏	[14.0]	3.6	[9.6]	雲母，長石	にぶい黄橙	普通	回転ヘラ切り後，雑なナデ，体部下端手持ちヘラ削り	56号住	10%
539	須恵器	坏	—	(3.9)	[8.6]	雲母，長石	灰黄	普通	底部，右ロクロ回転ヘラ切り	56号住	20%
540	須恵器	坏	—	(1.0)	9.6	雲母	灰白	普通	底部丸底気味，不定方向手持ちヘラ削り	56号住	40%
671	須恵器	盤	[24.8]	4.3	[13.8]	雲母，長石	灰	普通	底部右ロクロ回転ヘラ削り後，高台貼り付け	56号住	40%
672	須恵器	蓋	15.2	4.2	—	長石	灰	普通	天井部右ロクロ回転ヘラ削り，つまみ擬宝珠状	56号住	95%　PL4
673	土師器	甕	[20.4]	(27.8)	—	雲母，長石，小石	にぶい橙	普通	体部下半ヘラ磨き	56号住	70%
676	須恵器	坏	[13.8]	4.3	7.6	長石，長石	黄灰	普通	底部回転ら切り後，一方向ナデ	76号住	70%
677	須恵器	高台付坏	[14.4]	(4.7)	—	長石	灰	普通	底部と体部との境が丸みをもつ，底部回転ヘラ切り後雑なナデ	76号住	50%
675	須恵器	コップ形	—	(1.6)	8.2	緻密	暗灰	良好	底部左ロクロ回転ヘラ削り	197号住	10%
686	須恵器	坏	12.2	4.6	6.4	長石，小石	灰	普通	底部，体部下端一方向手持ちヘラ削り	197号住	80%　PL4

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
687	須恵器	盤	19.4	4.9	11.3	長石，小石	灰褐	普通	底部右ロクロ回転ヘラ削り後，高台貼り付け，底部内面重ね焼き痕	197号住	80% PL4
688	須恵器	壺	13.7	(2.3)	—	雲母，長石	灰	普通	天井部右ロクロ回転ヘラ削り	197号住	90%
689	須恵器	壺	19.3	(3.3)	—	長石，小石	灰	普通	天井部身後ロクロ回転ヘラ削り	197号住	70%
690	須恵器	壺G	[6.0]	(7.2)	—	長石，小石	灰	普通	頸部はほぼ直立し，口縁部でわずかに外反する	197号住	20%
691	土師器	甕	[21.8]	(11.8)	—	雲母，長石	明赤褐	普通	口縁端部はつまみ上げられ，「く」の字状を呈す	197号住	20%
692	須恵器	甕	—	(8.3)	—	雲母・長石	灰	普通	体部外面横位の平行叩き，内面調整	197号住	10%
693	灰釉陶器	長頸瓶	—	(7.9)	—	緻密	灰オリーブ	良好	頸部二段接合	197号住	20%
434	須恵器	坏	[10.4]	3.7	[7.2]	長石	灰	普通	底部，体部下端右ロクロ回転ヘラ削り。火襷あり	242号住	20% 油煙付着
435	須恵器	壺	—	(2.0)	—	雲母，長石	灰	普通	天井部右ロクロ回転ヘラ削り，かえり有り	242号住	10%
436	須恵器	壺	—	(2.0)	—	長石	灰	普通	天井部回転ヘラ削り後，ロクロナデ	242号住	10%
498	須恵器	坏	—	(3.1)	[6.4]	長石	灰	普通	底部不定方向手持ちヘラ削り，体部下端手持ちヘラ削り	274号住	20%
499	須恵器	盤	—	(1.8)	[8.4]	長石	灰	普通	底部右ロクロ回転ヘラ削り後，高台貼り付け	274号住	20%
372	土師器	坏	[14.6]	(3.0)	—	赤色粒子	にぶい橙	普通	内面ヘラ磨き，黒色処理	180号住	10%
373	土師器	甕	[16.0]	(2.6)	—	雲母，長石	にぶい橙	普通	口縁端部つまみ上げ	180号住	10%
374	須恵器	鉢	[24.0]	(3.4)	—	砂粒	灰	普通	口縁端部，上下につまみ出す，体部外面斜位平行叩き	180号住	5%
375	土師器	坏	[13.0]	(3.1)	—	赤色粒子	にぶい橙	普通	体部と口縁部との境に段あり，口縁部はほぼ直立	181号住	5%
376	須恵器	壺	[15.8]	(2.0)	—	雲母，長石	灰	普通	かえりあり	181号住	10%
377	須恵器	坏	—	(1.5)	[9.2]	雲母，長石	灰	普通	丸底気味，底部右ロクロ回転ヘラ削り	181号住	10%
381	須恵器	坏	[12.4]	(2.9)	—	雲母，長石	灰	普通	器壁が厚い	184号住	10%
382	須恵器	甕	[22.8]	(3.8)	—	雲母，長石	灰	普通	口縁部は水平に屈曲し，端部は上方につまみ上げ，体部外面，横位平行叩き	184号住	10%
301	土師器	高台付坏	[12.8]	5.6	7.0	赤色粒子，砂粒	橙	普通	内面ヘラ磨き，黒色処理	184号住	40% 外面墨書「長」PL 5
383	須恵器	坏	[13.6]	(3.6)	—	雲母	灰黄	普通	口縁端部は，外反する	187号住	10%
385	緑釉陶器	椀	[14.6]	(3.5)	—	軟質胎土，灰白	淡黄色釉	普通	口縁内面端部，内そぎ状	187号住	10%
396	須恵器	坏	[10.6]	(3.6)	—	白色粒子	暗灰	普通	口縁端部水平	190号住	10%
398	須恵器	坏	[9.0]	3.3	[5.0]	砂粒	暗灰	普通	底部突出気味	190号住	10%
403	須恵器	壺	最大径 [25.6]	(8.7)	—	雲母，長石	灰	普通	体部外面上位工具によるナデ，内面指によるナデ	190号住	20%
406	土師器	皿	[12.0]	(1.7)	—	赤色粒子	橙	普通	内面ヘラ磨き，黒色処理	196号住	10%体部外面墨書 PL5
410	土師器	坏	[12.6]	(3.5)	—	砂粒	橙	普通	体部と口縁部との境に段を持ち，口縁部内湾	234号住	10%
412	土師器	坏	[13.6]	(3.8)	—	雲母，赤色粒子	にぶい橙	普通	底部手持ちヘラ削り。内面ヘラ磨き，黒色処理	238号住	20%
413	土師器	坏	[12.6]	(5.1)	—	赤色粒子	にぶい橙	普通	内面黒色処理	238号住	10%
414	須恵器	坏	[14.2]	4.2	[7.8]	雲母，長石	灰	普通	底部，体部外面手持ちヘラ削り	238号住	20%
415	土師器	高台付坏	—	(1.6)	[5.8]	長石	橙	普通	内面ヘラ磨き，黒色処理	238号住	20%
416	須恵器	高台付坏	—	(2.2)	[5.6]	砂粒	にぶい黄	不良	高台接地部，内そぎ状	238号住	10%
417	土師器	高台付皿	[13.4]	(2.1)	—	砂粒	橙	普通	内面ヘラ磨き。黒色処理	238号住	10%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
418	須恵器	甕	—	(8.4)	—	長石，小石	暗灰	良好	体部外面，不定方向平行叩き	238号住	10%
421	灰釉陶器	長頸瓶	[10.0]	(1.2)	—	緻密	灰オリーブ	良好	口縁端部は上下につまみ出される	239号住	5%
422	土師器	坏	—	(2.0)	—	赤色粒子	橙	普通	内面ヘラ磨き，黒色処理	240号住	5% 外面墨書
423	土師器	坏	—	(1.4)	[6.0]	雲母，長石	橙	普通	内面ヘラ磨き，黒色処理	240号住	5%底部外面墨書
424	須恵器	坏	[14.0]	(2.5)	—	砂粒	灰白	不良	口縁部は外反する	240号住	10%体部外面墨書
425	土師器	高台付坏	[13.6]	4.8	[7.4]	砂粒	褐	普通	内面ヘラ磨き，黒色処理	240号住	40%体部外面墨書
427	土師器	鉢	[18.6]	10.8	11.0	雲母，赤色粒子	橙	普通	体部外面上位ロクロナデ，下位右ロクロ回転ヘラ削り。内面ヘラ磨き，黒色処理	240号住	70% PL4
430	須恵器	甕	—	(13.4)	[14.0]	雲母，長石	褐	不良	体部外面上位格子目叩き，下位手持ちヘラ削り。内面指押さえ	240号住	10%
431	灰釉陶器	小瓶	—	(2.5)	—	緻密・灰オリーブ	オリーブ	良好	胴部は張っている	240号住	10%
440	須恵器	坏	[13.4]	(3.0)	—	雲母	灰白	不良	口縁部は外反	244号住	10%
441	須恵器	坏	[13.0]	(3.2)	—	雲母	灰白	不良	体部外面，工具によるロクロナデ	244号住	10%
442	須恵器	甕	—	(3.8)	—	雲母，長石	灰	普通	体部外面，同心円状叩き	244号住	10%
448	須恵器	甕	—	(9.3)	—	長石	灰	普通	6本1組の櫛歯状波状文，外面自然釉	245号住	30%
481	須恵器	壺	[15.4]	(1.4)	—	雲母	灰	普通	かえり有り	245号住	10%
449	須恵器	盤	—	(2.0)	[9.4]	長石，小石	灰	普通	底部右ロクロ回転ヘラ削り後，高台貼り付け	246号住	30%
450	須恵器	壺	14.6	3.5	—	雲母，長石	にぶい褐	普通	還化焔焼成。天井部右ロクロ回転ヘラ削り	246号住	90%
451	須恵器	壺	[15.6]	(2.2)	—	雲母，長石	灰黄褐	普通	天井部右ロクロ回転ヘラ削り	246号住	10%
452	土師器	甕	[21.4]	(9.8)	—	雲母，長石	橙	普通	口縁端部，上方につまみあげ，「く」の字状を呈す	246号住	20%
453	須恵器	甕	[22.0]	(4.3)	—	雲母，長石	黄灰	普通	口縁端部，上下につまみ出す。断面四角形	246号住	10%
456	須恵器	坏	—	(2.0)	7.2	長石	灰	普通	底部回転ヘラ切り後，一方向手持ちヘラ削り。体部下端手持ちヘラ削り	249号住	30%
457	須恵器	壺	—	(2.0)	—	長石	灰	普通	天井部回転ヘラ削り後，ロクロナデ	249号住	10%
462	土師器	坏	[14.7]	3.6	[7.6]	砂粒	にぶい橙	普通	内面ヘラ磨き，黒色処理	251号住	30%
471	須恵器	坏	[13.0]	4.8	6.4	雲母，長石	灰	普通	底部，体部下端一方向手持ちヘラ削り	256号住	40%
472	須恵器	坏	[13.4]	(3.8)	—	雲母，長石	灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り	256号住	30%
477	須恵器	坏	—	(3.0)	[8.6]	雲母	灰	普通	底部回転ヘラ切り後，雑なヘラナデ。体部下端手持ちヘラ削り	258号住	20%
487	土師器	高台付椀	—	(2.5)	[7.0]	雲母，赤色粒子	橙	普通	内面ヘラ磨き，黒色処理	259号住	40% 底部外面墨書
500	須恵器	坏	[13.2]	(3.9)	[8.0]	雲母，長石	灰黄	普通	体部下端手持ちヘラ削り	275号住	20%
501	須恵器	坏	[12.8]	(4.7)	—	雲母，長石	灰	普通	口縁部外反，内面漆付着	275号住	20%
502	須恵器	坏	[12.4]	(2.5)	—	雲母	灰	普通	口縁部破片	275号住	5% 外面墨書
503	須恵器	坏	—	(3.4)	[8.0]	長石	灰	普通	底部外面・体部外面下端，手持ちヘラ削り	275号住	20%
504	須恵器	坏	—	(2.0)	[7.2]	長石	灰	普通	底部外面・体部外面下端，一方向手持ちヘラ削り	275号住	10%
505	須恵器	盤	—	(3.7)	[10.4]	雲母	灰白	普通	高台接地面の断面三角形	275号住	40%
506	須恵器	甕	[28.8]	(3.0)	—	雲母	灰黄	普通	口縁部断面三角形	275号住	10%
476	須恵器	坏	[12.2]	(3.0)	—	白色粒子	灰	普通	器壁がうすい	315号住	20% 体部外面墨書 PL5
521	土師器	坏	—	(1.6)	6.4	赤色粒子	橙	普通	底部外面一方向手持ちヘラ削り，内面黒色処理	315号住	20% 体部外面「瓦」墨書 PL5

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
484	灰釉陶器	長頸瓶	—	(4.6)	[12.0]	緻密	浅黄	良好	体部下位回転ヘラ削り	315号住	10%
522	土師器	坏	[13.6]	5.0	—	赤色粒子	橙	普通	半球形状，外面手持ちヘラ削り	318号住	10%
523	須恵器	高台付坏	—	(1.4)	—	長石	灰白	普通	底部回転ヘラ削り	318号住	10%
524	須恵器	甕	—	(4.0)	—	長石，白色粒子	灰	普通	体部外面横位方向平行叩き	318号住	10%
755	土師器	坏	12.7	4.1	8.2	長石，小石	にぶい橙	普通	内面，ヘラ磨き，黒色処理。底部一方向手持ちヘラ削り，体部下端手持ちヘラ削り	7号土坑	100%

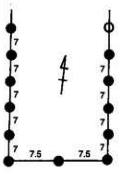
4　建物群D区（付図第1図）

D区は当遺跡の南西部に位置し，西には九重東岡廃寺が隣接している。調査により掘立柱建物跡27棟，竪穴住居跡56軒，溝跡2条が確認された。以下，掘立柱建物跡・溝跡については遺構ごとに記述し，竪穴住居跡・土坑については確認調査のみであることから，遺構・遺物とも一覧表で記載する。

(1)　掘立柱建物跡

第45号掘立柱建物跡（第60図）

調査区の南西部，R13・R14区に位置する桁行5間以上×梁間2間，棟方向N－6°－Wの南北棟建物跡である。平面観察によると本跡P8が第46号掘立柱建物跡P9を掘り込んでおり，本跡の方が新しい。本跡の北部は調査区域外であるため，確認できた建物の規模は，桁行10.6m（35尺）以上，梁間4.54m（15尺）である。柱間寸法は桁行2.12m（7尺）等間，梁間2.27m（7.5尺）等間である。柱穴掘り方平面形は一辺0.8～1.0mの円形である。遺物570・571須恵器坏はP10・P9確認面，572須恵器壷はP1確認面から出土しており，9世紀前・中葉に属するものである。このほかに灰釉陶器の細片がP9確認面から出土している。

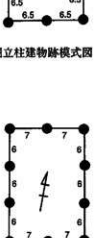


第45号掘立柱建物跡模式図

第60図　第45号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第45号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第60図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
570	須恵器	坏	[13.6]	4.0	[7.4]	長石，白色粒子	灰褐	普通	体部下端手持ちヘラ削り	P10確認面	10%
571	須恵器	坏	[13.2]	(3.2)	—	雲母	灰	普通	内・外面共にロクロ目が強い	P9確認面	10%
572	須恵器	壷	[16.0]	(1.6)	—	雲母	灰黄	不良	口縁端部が強くつまみ出される	P1確認面	10%



第46号掘立柱建物跡模式図

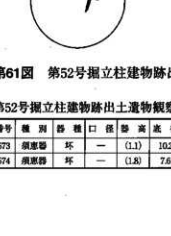
第46号掘立柱建物跡

調査区の南西部，R13・R14区に位置する桁行3間×梁間2間，棟方向N－1°－Wの南北棟建物跡である。平面観察によると本跡P9が第45号掘立柱建物跡P8に掘り込まれており，本跡の方が古い。建物の規模は桁行5.90m（19.5尺），梁間3.93m（13尺）である。柱間寸法は桁行・梁間ともに1.96m（6.5尺）等間である。柱穴掘り方平面形は径0.7m前後の円形または隅丸方形である。遺物は出土していない。

第47号掘立柱建物跡模式図

第47号掘立柱建物跡

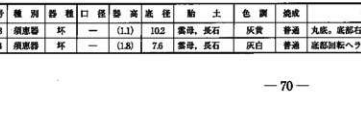
調査区の南西部，R13区に位置する桁行3間×梁間2間，棟方向N－10°－Wの南北棟建物跡である。本跡は第176号竪穴住居跡に掘り込まれており，本跡の方が古い。建物の規模は，桁行5.45m（18尺），梁間4.24m（14尺）である。柱間寸法は桁行1.81m（6尺）等間，梁間2.12m（7尺）等間である。柱穴掘り方平面形は径約0.7mの円形である。遺物は須恵器の細片1点，土師器甕片2点が出土しているだけで，細片のため図示できなかった。本跡より新しい第176号竪穴住居跡の遺物は9世紀後葉であるので，本跡の時期はそれ以前になる。



第52号掘立柱建物跡模式図

第52号掘立柱建物跡（第61図）

調査区の南西部，R12区に位置する桁行3間×梁間2間，棟方向N－8°－Wの東西棟建物跡である。建物の規模は，桁行6.81m（22.5尺），梁間4.84m（16尺）である。柱間寸法は桁行2.27m（7.5尺）等間，梁間2.42m（8尺）等間である。柱穴掘り方平面形は径0.8～0.9mの円形である。遺物は土師器甕片10点，須恵器坏・高盤・甕片が柱穴確認面から出土している。573・574須恵器坏はP1・P2確認面出土で，8世紀前葉・後葉に属するものである。574の底部外面には墨痕がみられる。



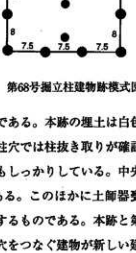
第61図　第52号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第52号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第61図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
573	須恵器	坏	—	(1.1)	10.2	雲母，長石	灰黄	普通	丸底，底部石ロクロ回転ヘラ割り	P1確認面	40%
574	須恵器	坏	—	(1.8)	7.6	雲母，長石	灰白	普通	底部回転ヘラ切り後，一方向の強なナデ	P2確認面	30%，底部墨痕

第68号掘立柱建物跡（第62図）

調査区の南西部，U12・U13・V12・V13区に位置する桁行４間×梁間３間，棟方向N－11°－Wの南北棟建物跡である。本跡は第69号掘立柱建物跡と同じ主軸方向であり，西桁行の柱を同じ位置で建て替え，東桁行は第69号掘立柱建物跡を東と南に１間分ずつ拡張して建て替えたものと思われる。西へ８mの距離には本跡と南妻の柱筋がほぼ一直線に並び，棟方向もほぼ同一の第96号掘立柱建物跡が位置する。建物の規模は，桁行9.69m（32尺），梁間6.81m（22.5尺）である。柱間寸法は桁行2.42m（８尺）等間，梁間2.27m（7.5尺）等間である。柱穴掘り方平面形は一辺が1.1～1.3mの方形，深さは断ち割りを行ったＰ８・Ｐ９で1.1mである。第62図土層断面図中，第１層は柱抜き取り痕覆土で，第２～11層は埋土，第12層は第69号掘立柱建物跡柱穴埋土である。本跡の埋土は白色粘土・黄褐色粘土が主体となっており，水平に互層に叩き締められている。南梁の柱穴では柱抜き取りが確認できた。本跡の柱穴掘り方は当遺跡の掘立柱建物跡の中で最も大きく，埋土の状況もしっかりしている。中央部にはＰ19～Ｐ23の小柱穴が並んでいる。遺物580須恵器鉢はＰ１確認面出土である。このほかに土師器甕片・須恵器高台付坏片などが出土しており，時期は８世紀後葉から９世紀前葉に属するものである。本跡と第69号掘立柱建物跡のＰ９～Ｐ14の柱穴において新旧が認められており，これらの柱穴をつなぐ建物が新しい建物になりうる。ここで記述したＰ１～Ｐ14までを新しい１棟と考える場合（拡張）と，Ｐ９～Ｐ18までを新しい１棟と考える場合（縮小）とが考えられ，今回は前者の拡張と考えて記述している。



第68号掘立柱建物跡模式図

土層解説

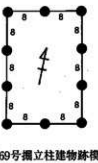
1　黒褐色　白色粘土中・小ブロック中量，ローム中ブロック少量
2　灰黄色　白色粘土大ブロック多量，ローム中ブロック中量
3　灰黄褐色　白色粘土小ブロック少量
4　黒褐色　白色粘土小ブロック・ローム小ブロック少量
5　黒褐色　黄褐色粘土小ブロック中量，白色粘土小ブロック少量
6　黄褐色　黄褐色粘土大・白色粘土中ブロック中量
7　淡黄色　白色粘土大ブロック多量
8　黒褐色　白色粘土大ブロック中量
9　暗褐色　白色粘土小ブロック多量，ローム小ブロック中量
10　暗褐色　白色粘土中・ローム小ブロック中量，白色粘土大・小ブロック少量
11　暗褐色　白色粘土中ブロック多量，白色粘土大・ローム小ブロック中量
12　灰黄褐色　白色粘土小・ローム中・小ブロック中量，白色粘土中ブロック少量（69号掘立埋土）

第68号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第62図）

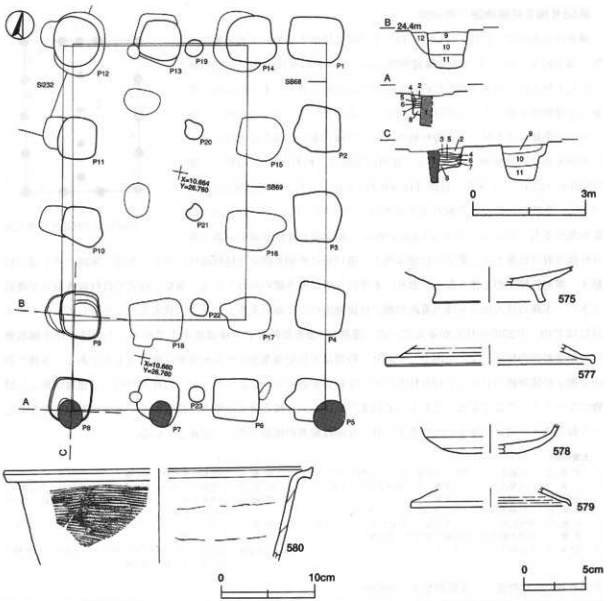
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
580	須恵器	鉢	[32.8]	(10.1)	—	雲母，長石	オリーブ黒	普通	体部外面横位の平行叩き	Ｐ１確認面	20%

第69号掘立柱建物跡（第62図）

調査区の南西部，U12・U13・V12・V13区に位置する桁行３間×梁間２間，棟方向N－11°－Wの南北棟建物跡である。本跡の西桁柱穴は第68号掘立柱建物跡に掘り込まれ，桁・梁共に第68号掘立柱建物跡より１間分小さい。本跡は第232号竪穴住居跡を掘り込み，第68号掘立柱建物跡に掘り込まれており，第232号竪穴住居跡→本跡→第68号掘立柱建物跡の順に新しくなる。建物の規模は桁行7.27m（24尺），梁間4.84m（16尺）で柱間寸法は桁行2.42m（８尺）等間，梁間2.42m（８尺）等間である。柱穴掘り方平面形は，短軸0.8～1.0m×長軸1.1～1.4mの長方形である。遺物575須恵器盤・577須恵器壷はＰ17，578須恵器坏・579須恵器壷はＰ11確認面からそれぞれ出土している。これらの出土遺物は８世紀前葉から後葉に属するものである。



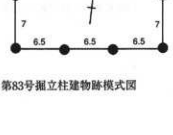
第69号掘立柱建物跡模式図



第62図　第68・69号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第69号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第62図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
575	須恵器	盤	—	(2.8)	[9.0]	雲母，長石	灰	普通	底部右ロクロ回転ヘラ削り，比較的高い高台	P17確認面	20%
577	須恵器	蓋	[16.8]	(1.6)	—	雲母，長石	黄灰	普通	口縁端部で大きく反る	P17確認面	10%
578	須恵器	坏	—	(2.3)	[4.8]	雲母，長石	灰白	普通	丸底。底部右ロクロ回転ヘラ削り	P11確認面	10%
579	須恵器	蓋	[13.0]	(1.5)	—	雲母	灰	普通	器壁が薄く，なだらかに口縁端部にいたる	P11確認面	10%

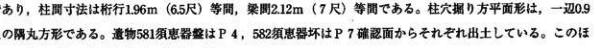


第83号掘立柱建物跡模式図

第83号掘立柱建物跡（第63図）

調査区の南西端部，U９区に位置する桁行３間×梁間２間，棟方向N－84°－Eの東西棟建物跡である。本跡から４m東には第85号掘立柱建物跡が位置し，わずかに棟方向がずれるが本跡の南桁と第85号掘立柱建物跡の北桁の柱筋がほぼ一直線に並ぶ。本跡のP９・P10が第84号掘立柱建物跡P４・P５を掘り込んでおり，本跡の方が新しい。建物の規模は桁行5.88m（19.5尺），梁間4.24m（14尺）

であり，柱間寸法は桁行1.96m（6.5尺）等間，梁間2.12m（7尺）等間である。柱穴掘り方平面形は，一辺0.9mの隅丸方形である。遺物581須恵器盤はＰ４，582須恵器坏はＰ７確認面からそれぞれ出土している。このほかに土師器甕片，須恵器坏片・甕片が出土している。



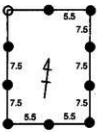
第63図　第83号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第83号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第63図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
581	須恵器	盤	—	(1.5)	[9.4]	雲母，長石	緑沢	普通	底部・体部下端右ロクロ回転ヘラ削り	Ｐ４確認面	10%
582	須恵器	坏	—	(0.8)	[7.4]	雲母，長石	沢	良好	底部回転ヘラ切り後，不定方向の手持ちヘラ削り	Ｐ７確認面	5%

第84号掘立柱建物跡

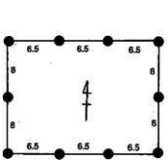
調査区の南西端部，Ｔ９区に位置する桁行３間×梁間２間，棟方向はＮ－６°－Ｗの南北棟建物跡である。本跡から4.5m北には本跡と棟方向をほぼ同じくする第89号掘立柱建物跡が位置する。本跡は第83号掘立柱建物・第305号竪穴住居に掘り込まれており，本跡の方が古い。建物の規模は桁行6.81m（22.5尺），梁間3.33m（11尺）である。柱間寸法は桁行2.27m（7.5尺）等間，梁間1.66m（5.5尺）等間である。柱穴掘り方平面形は径0.7～0.9mの円形である。遺物は柱穴確認面から土師器甕片，須恵器坏片・甕片が出土しているが細片のため図示できなかった。



第84号掘立柱建物跡模式図

第85号掘立柱建物跡（第64図）

調査区の南西端部，Ｕ10区に位置する桁行３間×梁間２間，棟方向はＮ－88°－Ｅの東西棟建物跡である。本跡から４ｍ西には第83号掘立柱建物跡が位置し，わずかに棟方向がずれるが，本跡の北桁と第83号掘立柱建物跡の南桁の柱筋がほぼ一直線に並ぶ。また，本跡の２ｍ北には，本跡と棟方向や規模が同一の第87号掘立柱建物跡が位置する。本跡は第309号竪穴住居に掘り込まれており，本跡の方が古い。建物の規模は桁行5.90m（19.5尺），梁間4.84m（16尺）である。柱間寸法は桁行1.96m（6.5尺）等間，梁間2.42m（８尺）等間である。柱穴掘り方平面形は一辺0.9mの方形である。遺物583・584須恵器蓋はそれぞれＰ１・Ｐ９確認面出土であり，８世紀中・後葉に属するものである。本跡より新しい第309号竪穴住居跡出土の遺物は９世紀中葉に属するもので，本跡の時期はそれ以前である。

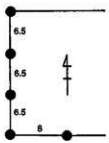


第85号掘立柱建物跡模式図

第64図　第85号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第85号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第64図）

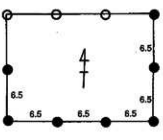
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
583	須恵器	蓋	[15.4]	(2.5)	—	長石	灰	普通	天井部右ロクロ回転ヘラ削り，丸みを帯びた天井	P 1 確認面	40%
584	須恵器	蓋	[11.6]	(2.0)	—	砂粒	灰	普通	天井部右ロクロ回転ヘラ削り，口縁端部で強く反る	P 9 確認面	20%



第86号掘立柱建物跡模式図

第86号掘立柱建物跡

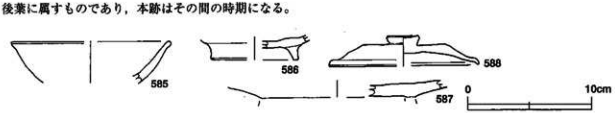
調査区南西部，T10区に位置する桁行1間以上×梁間3間，棟方向はN－90°－Eの東西棟建物跡と想定した。本跡は第307号竪穴住居跡を掘り込んでおり，本跡の方が新しい。本跡の東部分は未調査であるため確認できた建物の規模は桁行2.42m（8尺）以上，梁間5.90m（19.5尺）である。柱間寸法は梁間1.96m（6.5尺）等間であり，桁行は2.42m（8尺）と想定した。柱穴掘り方平面形は一辺1.1～1.2mの方形である。遺物は出土していない。本跡より古い第307号竪穴住居跡出土遺物は，8世紀初頭に属するものであり，本跡の時期は，それ以降になる。



第87号掘立柱建物跡模式図

第87号掘立柱建物跡（第65図）

調査区の南西部，U10区に位置する桁行3間×梁間2間，棟方向N—88°—Eの東西棟建物跡である。本跡の2m南には，本跡と棟方向・規模が同一の第85号掘立柱建物跡が位置する。本跡は第312号竪穴住居跡を掘り込み，第88号掘立柱建物・第308号竪穴住居に掘り込まれており，第312号竪穴住居跡→第313号竪穴住居跡→本跡→第88号掘立柱建物跡→第308号竪穴住居跡の順に新しくなる。建物の規模は桁行5.90m（19.5尺），梁間3.93m（13尺）である。柱間寸法は桁行1.96m（6.5尺）等間，梁間1.96m（6.5尺）等間である。柱穴掘り方平面形は一辺0.8～1.0mの方形である。遺物は各柱穴確認面から須恵器坏片・盤片・壺片・甕片が出土している。585須恵器坏・586須恵器高台付坏はP 1 確認面，587須恵器盤はP 3 確認面，588須恵器壺はP 5 確認面からそれぞれ出土しており8世紀後葉頃に属すると思われるものが多い。なお，本跡より新しい第308号竪穴住居跡出土遺物は8世紀初頭，本跡より古い第312号竪穴住居跡出土遺物は8世紀後葉に属するものであり，本跡はその間の時期になる。



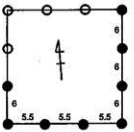
第65図　第87号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第87号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第65図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
585	須恵器	坏	[12.6]	(3.3)	—	砂粒	灰	普通	体部は丸みを帯びて立ち上がる。口縁端部肥厚	P 1 確認面	10%
586	須恵器	高台付坏	—	(1.9)	[6.9]	白色粒子	緑灰	普通	底部回転ヘラ削り後，高台貼り付け	P 1 確認面	20%
587	須恵器	盤	—	(1.4)	—	雲母，長石	灰	普通	底部回転ヘラ削り，高台剥がれ	P 3 確認面	10%
588	須恵器	壺	[12.0]	2.4	—	長石	橙	不良	天井部摺平，右ロクロ回転ヘラ削り	P 5 確認面	25%

第88号掘立柱建物跡

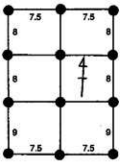
調査区の南西部，U10区に位置する桁行３間×梁間３間，棟方向はN－４°－Eを示す南北棟建物跡である。本跡Ｐ４・Ｐ７が第87号掘立柱建物跡のＰ３・Ｐ５を掘り込んでおり，本跡の方が新しい。建物の規模は桁行5.45ｍ（18尺），梁間4.99ｍ（16.5尺），柱間寸法は桁行1.81ｍ（６尺）等間，梁間1.66ｍ（5.5尺）等間である。柱穴掘り方平面形は径0.4～0.6ｍの円形で，他の掘立柱建物跡の規模と比べて小形である。新旧関係から，本跡が最も新しい遺構であること，掘り方が小形であることなどから，中世の建物の可能性がある。遺物は出土していない。



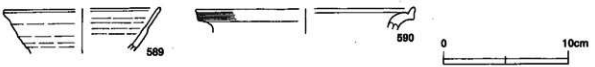
第88号掘立柱建物跡模式図

第89号掘立柱建物跡（第66図）

調査区南西端部，Ｔ９区に位置する桁行３間×梁間２間，棟方向N－３°－Wの南北棟総柱建物跡である。建物の規模は桁行7.57ｍ（25尺），梁間4.54ｍ（15尺）である。柱間寸法は桁行が等間隔ではなく，南側１間分が2.72ｍ（９尺）で，他２間はそれぞれ2.42ｍ（８尺），梁間は2.27ｍ（7.5尺）等間である。柱穴掘り方平面形は短径0.8ｍ×長径1.1ｍの楕円形のものと一辺0.7～1.1ｍの方形のものがあり，ばらつきがみられる。遺物はＰ１確認面から須恵器坏片・甕片，土師器甕片が出土している。



第89号掘立柱建物跡模式図



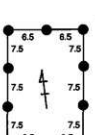
第66図　第89号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第89号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第66図）

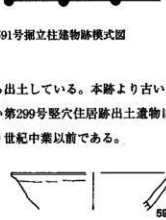
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
589	須恵器	坏	[12.6]	(3.4)	—	雲母，赤色粒子	灰	普通	器壁が厚く，ロクロ目が強い	Ｐ１確認面	10%
590	土師器	甕	[17.6]	(1.7)	—	長石	橙	普通	口縁端部が上方につまみ上げられ，「く」の字状を呈す	Ｐ１確認面	10%

第90号掘立柱建物跡

調査区南西端部，Ｔ９区に位置する桁行３間×梁間２間，棟方向N－７°－Eの南北棟建物跡である。建物の規模は桁行6.81ｍ（22.5尺），梁間3.93ｍ（13尺）である。柱間寸法は桁行2.27ｍ（7.5尺）等間，梁間1.96ｍ（6.5尺）等間で，柱穴掘り方平面形は一辺0.9～1.1ｍの方形である。棟方向が東に傾く建物は当遺跡内で約10棟みられるが，ほとんどは東へ１～３°の傾きであり，本跡のように７°という傾きのものはなく，特異である。遺物は出土していない。



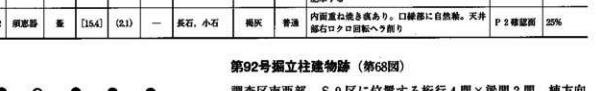
第90号掘立柱建物跡模式図



第91号掘立柱建物跡模式図

第91号掘立柱建物跡（第67図）

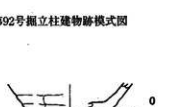
調査区南西部，Ｓ10区に位置する桁行２間以上×梁間２間，棟方向Ｎ－90°－Ｅの東西棟建物と思われる。本跡は第303号竪穴住居跡を掘り込み，第299・304号竪穴住居に掘り込まれており，第303号竪穴住居跡→本跡→第299・304号竪穴住居跡の順に新しくなる。重複関係があるため確認した建物の規模は桁行4.84m（16尺）以上，梁間4.84m（16尺）で，柱間寸法は桁行・梁間ともに2.42m（８尺）等間である。柱穴掘り方平面形は，一辺1.0～1.1mの隅丸方形である。遺物591須恵器坏，592須恵器蓋はそれぞれＰ１・Ｐ２確認面から出土している。本跡より古い第303号竪穴住居跡出土遺物は８世紀後葉までのものと思われ，本跡より新しい第299号竪穴住居跡出土遺物は９世紀中・後葉のものと思われることから，本跡の時期は８世紀後葉以降，９世紀中葉以前である。



第67図　第91号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第91号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第67図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
591	須恵器	坏	[13.0]	(2.9)	—	砂粒	淺黄	不良	体部は丸みをもって立ち上がり，口縁端部で肥厚する	Ｐ１確認面	10%
592	須恵器	蓋	[15.4]	(2.1)	—	長石，小石	褐灰	普通	内面重ね焼き痕あり。口縁部に自然釉。天井部石ロクロ回転ヘラ削り	Ｐ２確認面	25%



第92号掘立柱建物跡模式図

第92号掘立柱建物跡（第68図）

調査区南西部，Ｓ９区に位置する桁行４間×梁間２間，棟方向Ｎ－84°－Ｅの東西棟建物跡である。本跡は第295号竪穴住居に掘り込まれており，本跡の方が古い。建物の規模は桁行7.87m（26尺），梁間5.15m（17尺）で，柱間寸法は桁行1.96m（6.5尺）等間，梁間は2.57m（8.5尺）等間である。柱穴掘り方平面形は，短軸0.8～0.9m×長軸1.0～1.2mの隅丸長方形である。遺物は各柱穴確認面から土師器甕，須恵器坏・甕の細片が出土している。593須恵器坏片はＰ７確認面出土である。

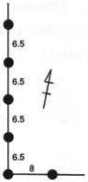
第68図　第92号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第92号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第68図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
593	須恵器	坏	—	(2.1)	[6.6]	雲母	灰	普通	底部・体部下端手持ちヘラ削り	Ｐ７確認面	10%

第96号掘立柱建物跡（第69図）

調査区南西端部，V12区に位置する桁行4間以上×梁間1間以上，棟方向N－11°－Wの南北棟建物跡である。本跡の東8mには第68・69号掘立柱建物跡が位置し，本跡の南梁と第68号掘立柱建物跡南梁がほぼ一直線に並ぶ。本跡は第319号竪穴住居跡を掘り込んでおり，本跡の方が新しい。本跡の西側が農道になっているため確認できた建物の規模は桁行7.87m（26尺）以上，梁間2.42m（8尺）以上である。柱間寸法は桁行1.96m（6.5尺）等間，梁間が確認できたのは1間分だけで2.42m（8尺）である。柱穴掘り方平面形は，一辺1.1～1.4mの方形や長方形である。遺物はP2・P6確認面から土師器坏・甕，須恵器坏片が出土している。594の土師器坏はP2確認面出土で，8世紀前葉に属するものである。



第96号掘立柱建物跡模式図

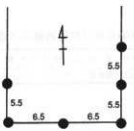
第69図　第96号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第96号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第69図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
594	土師器	坏	[13.0]	(3.3)	—	赤色粒子	橙	普通	体部と口縁部との境に段をもち，口縁部はほぼ直立	P2確認面	5%

第97号掘立柱建物跡（第70図）

調査区南西端部，V11区に位置する桁行2間以上×梁間2間，棟方向N－1°－Eの南北棟建物跡である。本跡は第19号溝に掘り込まれており，本跡の方が古い。本跡の北側が調査区域外であるため確認できた建物の規模は桁行3.33m（11尺）以上，梁間3.93m（13尺）である。柱間寸法は桁行1.66m（5.5尺）等間，梁間1.96m（6.5尺）等間である。柱穴掘り方平面形は，短径0.55m×長径0.8mの楕円形である。遺物595須恵器坏，596須恵器鉢はP7・P4柱穴確認面からそれぞれ出土しており，8世紀中・後葉頃の時期に属するものである。



第97号掘立柱建物跡模式図

第70図　第97号掘立柱建物跡出土遺物実測図

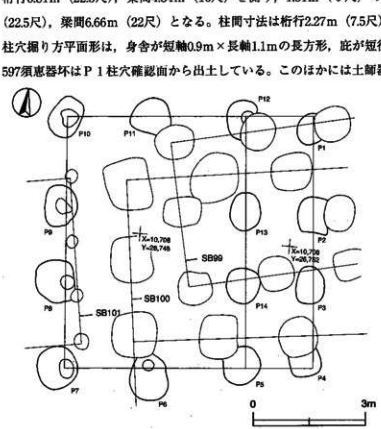
第97号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第70図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
595	須恵器	坏	—	(1.6)	[7.5]	雲母	灰	普通	底部・体部下端一方向の手持ちヘラ削り	P7確認面	20%
596	須恵器	鉢	[33.7]	(5.4)	—	雲母	灰	普通	体部外面，横位の平行叩き，口縁部は外側に屈曲	P4確認面	10%

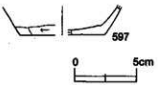
第98号掘立柱建物跡（第71図）

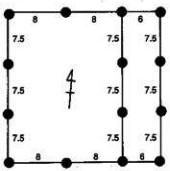
調査区南西部，S12区に位置する桁行3間×梁間2間の身舎に東庇が付く，棟方向N－5°－Wの南北棟建物跡である。本跡は第99・100号掘立柱建物に掘り込まれており，本跡の方が古い。建物の規模は身舎だけで

桁行6.81m（22.5尺），梁間4.84m（16尺）を測り，1.81m（6尺）の庇が東に付き，庇も含めると桁行6.81m（22.5尺），梁間6.66m（22尺）となる。柱間寸法は桁行2.27m（7.5尺）等間，梁間2.42m（8尺）等間である。柱穴掘り方平面形は，身舎が短軸0.9m×長軸1.1mの長方形，庇が短径0.7m×長径1.0mの楕円形である。遺物597須恵器坏はP1柱穴確認面から出土している。このほかには土師器甕片が出土しているだけである。



第71図　第98号掘立柱建物跡出土遺物実測図

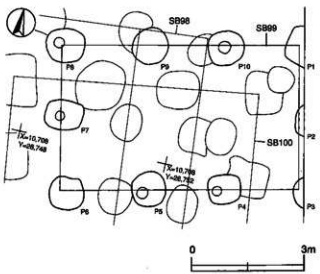




第98号掘立柱建物跡模式図

第98号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第71図）

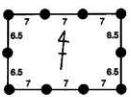
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
597	須恵器	坏	—	(2.3)	[6.8]	雲母	灰	普通	底部多方向手持ちヘラ削り，体部下端手持ちヘラ削り	P1 確認面	10%



第72図　第99号掘立柱建物跡実測図

第99号掘立柱建物跡（第72図）

調査区南西部，S12区に位置する桁行3間×梁間2間，棟方向N－77°－Eの東西棟建物跡である。本跡の4.5m南には第103号掘立柱建物跡が位置し，本跡の東梁と第103号掘立柱建物跡の東桁がほぼ一直線上に並び，棟方向もほぼ同一である。本跡は

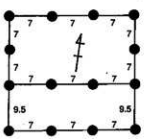


第99号掘立柱建物跡模式図

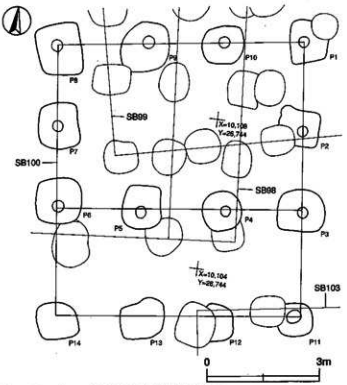
第100号掘立柱建物跡を掘り込んでおり，本跡の方が新しい。建物の規模は桁行6.36m（21尺），梁間3.93m（13尺）である。柱間寸法は桁行2.12m（7尺）等間，梁間1.96m（6.5尺）等間である。柱穴掘り方平面形は，径0.8～0.9mの隅丸方形である。遺物は土師器甕の細片がほとんどで，図示できるものはない。

第100号掘立柱建物跡（第73図）

調査区南西部，S12区に位置する桁行3間×梁間2間の身舎に南庇が付く，棟方向N－82°－Eの東西棟建物跡である。本跡は第98号掘立柱建物跡を掘り込み，第99・103号掘立柱建物に掘り込まれており，第98号掘立柱建物跡→本跡→第99・103号掘立柱建物跡の順に新しくなる。建物の規模は身舎だけで桁行6.36m（21尺），梁間4.24m（14尺）を測り，2.87m（9.5尺）の庇が南に付き，庇も含めると桁行6.36m（21尺），梁間7.12m（23.5尺）となる。柱間寸法は桁行2.12m（7尺）等間，梁間2.12m（7尺）等間である。柱穴掘り方平面形は，身舎が一辺1.2m前後の方形もしくは長方形，庇が一辺0.9mの方形である。遺物は土師器甕片，須恵器坏片・蓋片・高台付坏片が出土しているが，細片のため図示できるものはない。



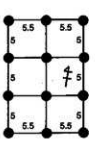
第100号掘立柱建物跡模式図



第73図　第100号掘立柱建物跡実測図

第101号掘立柱建物跡

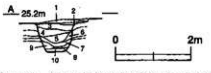
調査区南西部，S11区に位置する桁行3間×梁間2間，棟方向N－9°－Wの南北棟総建物跡である。本跡は第98号掘立柱建物跡を掘り込み，本跡の方が新しい。建物の規模は桁行4.54m（15尺），梁間3.33m（11尺）である。柱間寸法は桁行1.51m（5尺）等間，梁間1.66m（5.5尺）等間である。柱穴掘り方平面形は0.4～0.5mの円形で，他の掘立柱建物跡の掘り方と比べると小形である。遺物は出土していないため時期判断はできないが，小形の掘り方で第88号掘立柱建物跡と共通しており，中世の可能性もある。



第101号掘立柱建物跡模式図

第102号掘立柱建物跡（第74図・付図1）

調査区南西部，R12区でN－77°－Eの方向で東西に柱穴が2つ並んだものを，掘立柱建物跡と想定した。



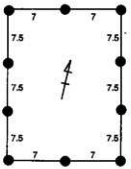
第74図　第102号掘立柱建物跡土層断面図

土層解説

1　黒 褐 色　ローム・焼土・炭化粒子中量　(321号住覆土)
2　明黄褐色　砂粒多量，ローム粒子中量　(321号住床面)
3　黒 褐 色　焼土粒子中量，ローム小ブロック少量
4　黒 褐 色　ローム小ブロック・粒子少量
5　暗 褐 色　ローム粒子少量
6　暗 褐 色　ローム粒子中量
7　黒 褐 色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
8　黒　　色　ローム中・小ブロック中量，ローム粒子多量
9　暗 褐 色　ローム小ブロック・粒子中量
10　黒 褐 色　ローム中・小ブロック・粒子多量

本跡の廃絶後には第321号竪穴住居跡が構築されており，本跡の方が古い。２つの柱穴間は2.12m（７尺）である。柱穴掘り方平面形は，半分だけの確認であるため断定はできないが，径0.8mの円形もしくは隅丸方形になるものと思われる。

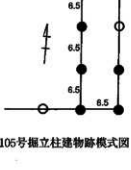
第103号掘立柱建物跡



第103号掘立柱建物跡模式図

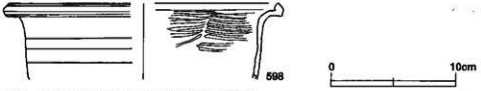
調査区南西部，Ｓ12・Ｔ12区に位置する桁行３間×梁間２間，棟方向Ｎ－13°－Ｗの南北棟建物跡である。本跡の4.5m北には第99号掘立柱建物跡が位置し，本跡の東桁と第99号掘立柱建物跡の東梁がほぼ一直線上に並び，棟方向もほぼ同一である。本跡は第100号掘立柱建物跡，第325・326号竪穴住居跡を掘り込んでおり，本跡の方が新しい。建物の規模は桁行6.81m（22.5尺），梁間4.24m（14尺）である。柱間寸法は桁行2.27m（7.5尺）等間，梁間2.12m（７尺）等間である。柱穴掘り方平面形は，短軸0.7m×長軸0.9mの隅丸長方形であり，遺物は出土していない。本跡と重複している第326号竪穴住居跡の出土遺物は少ないため時期は不明であるが，第325号竪穴住居跡の時期は８世紀後葉と思われるので，本跡はそれ以降の時期が想定される。

第105号掘立柱建物跡（第75図）



第105号掘立柱建物跡模式図

調査区南西部，Ｔ12区に位置する桁行３間×梁間１間以上の身舎に東庇が付く，棟方向Ｎ－４°－Ｗの南北棟建物跡である。第327・328号竪穴住居跡を掘り込んでおり，本跡の方が新しい。本跡身舎は西側に広がるが，西側が調査区域外であるため確認できた建物の規模は，身舎だけで桁行5.90m（19.5尺），梁間1.96m（6.5尺）以上に，1.96m（6.5尺）の庇が東に付き，庇桁行5.90m（19.5尺），梁間3.93m（13尺）以上となる。柱間寸法は桁行1.96m（6.5尺）等間，梁間1.96m（6.5尺）等間である。柱穴掘り方平面形は，身舎が短径0.7m×長径0.95mの楕円形，庇が一辺0.5～0.6mの円形である。遺物598土師器鉢はＰ３柱穴確認面から出土している。このほかには須恵器片が出土しているだけである。本跡と重複している第327号竪穴住居跡の時期は８世紀初頭と思われ，本跡の時期はそれ以降の時期が想定される。



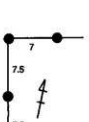
第75図　第105号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第105号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第75図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
598	土師器	甕	[21.4]	(6.0)	—	雲母，赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部は外側に屈曲し，端部は上方につまみ出される。内面ヘラ磨き	P 3確認面	10%

第106号掘立柱建物跡

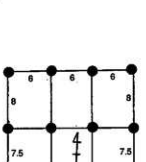
調査区南西部，T12・T13区に位置する桁行1間以上×梁間2間，棟方向N－78°－Eの東西棟建物跡と想定した。本跡は第330号竪穴住居跡と重複しているが，竪穴住居跡内で本跡の柱穴が確認できなかったので，本跡は第330号竪穴住居に掘り込まれたものと考えられ，本跡の方が古いと判断した。調査区域が狭いため建物の一部分しか確認できなかったが。建物は東に広がるものと思われる。確認できた建物の規模は桁行2.12m（7尺）以上，梁間4.54m（15尺）である。柱間寸法は桁行2.12m（7尺）等間，梁間2.27m（7.5尺）等間である。柱穴掘り方平面形は，一辺1.0mの方形であり，遺物は出土していない。本跡より新しいと考えられる第330号竪穴住居跡の時期は9世紀後葉と思われるので，本跡の時期はそれ以前である。



第106号掘立柱建物跡模式図

第107号掘立柱建物跡（第76図）

調査区南西部，U14区に位置する桁行3間×梁間3間，棟方向N－3°－Wの南北棟総柱建物跡である。本跡東部分は第108号掘立柱建物跡と重複しており，本跡のP12～P15が第108号掘立柱建物P7～P9に掘り込まれており，本跡の方が古い。建物の規模は桁行7.12m（23.5尺），梁間5.45m（18尺）である。桁行の柱間寸法は等間隔ではなく，中央が2.27m（7.5尺），外側1間分ずつが2.42m（8尺），梁間の柱間寸法は1.81m（6尺）等間である。柱穴掘り方平面形は短軸0.9～1.0m×長軸1.1～1.3mの長方形，深さは断ち割りを行ったP15で0.5mである。第76図土層断面図中，第1～5層は柱抜き取り痕，第6～10層は埋土である。平面観察では，柱穴すべてに抜き取り痕が確認されている。遺物は各柱穴確認面から土師器甕片，須恵器甕・坏・壺・盤の破片が出土している。599須恵器甕はP6，600須恵器長頸瓶はP1確認面から出土している。遺物が少量であるため，時期判断は困難であるが，8世紀代にはおさまる時期の遺物である。



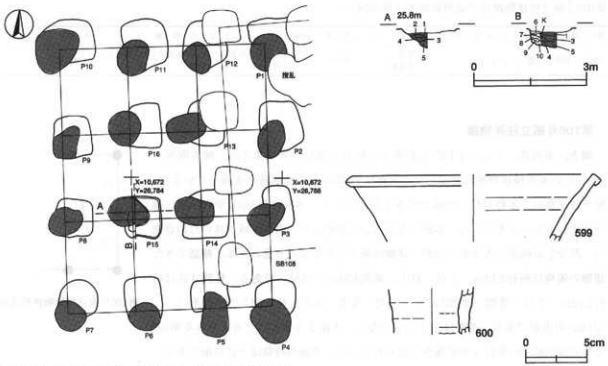
第107号掘立柱建物跡模式図

土層解説

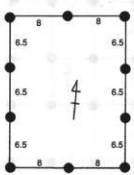
1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
2 暗褐色 ローム小ブロック・粒子中量，焼土粒子少量
3 褐色 ローム中・小ブロック・粒子多量，白色粘土中ブロック少量
4 黒褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，白色粘土小ブロック少量
5 灰黄褐色 ローム小ブロック・粒子多量
6 褐色 ローム粒子多量，炭化粒子・焼土粒子少量
7 黒褐色 ローム粒子中量
8 暗褐色 ローム粒子多量
9 黒褐色 ローム粒子中量，白色粘土中ブロック少量
10 褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック中量

第107号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第76図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
599	須恵器	甕	[19.4]	(5.3)	—	雲母，長石	灰黄	不良	口縁端部は，外側に折り返し	P 6確認面	10%
600	須恵器	長頸瓶	—	(3.8)	—	緻密	灰	普通	頸部はほぼ直立	P 1確認面	10%



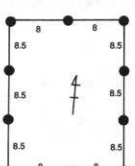
第76図　第107号掘立柱建物跡・出土遺物実測図



第108号掘立柱建物跡模式図

第108号掘立柱建物跡

調査区南西部，U14区に位置する桁行３間×梁間２間，棟方向N－５°－Wの南北棟建物跡である。本跡から約５ｍ南に位置する第109号掘立柱建物跡と，棟方向が一致し，東・西桁行の柱筋が一直線に通る。本跡Ｐ７～Ｐ９は第107号掘立柱建物跡のＰ12～Ｐ14を掘り込んでおり，本跡の方が新しい。また，本跡は第224号竪穴住居跡を掘り込んでおり，本跡の方が新しい。建物の規模は桁行5.90ｍ（19.5尺），梁間4.84ｍ（16尺）で，柱間寸法は桁行1.96ｍ（6.5尺）等間，梁間2.42ｍ（８尺）等間である。柱穴掘り方平面形は一辺約1.0ｍの方形である。遺物は柱穴確認面から土師器甕片３点，須恵器坏片２点・甕片３点が出土しているが，細片のため図示できなかった。



第109号掘立柱建物跡模式図

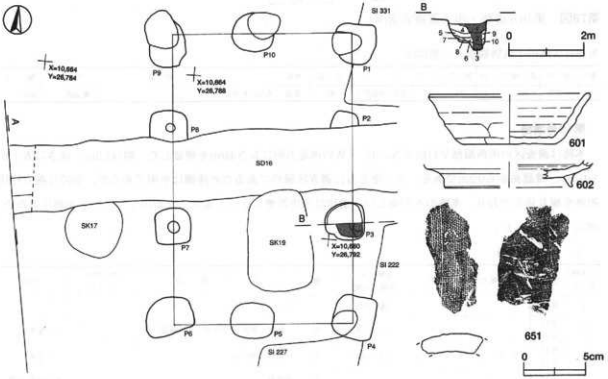
第109号掘立柱建物跡（第77図）

調査区南端部，U14・V14区に位置する桁行３間×梁間２間，棟方向N－５°－W南北棟建物跡である。本跡から約５ｍ北に位置する第108号掘立柱建物跡と主軸が一致し，東・西桁行の柱筋が一直線に通る。本跡は第227・331号竪穴住居跡を掘り込んでおり，第16号溝に掘り込まれており，第227・331号竪穴住居跡より新しく，第16号溝より古い。建物の規模は桁行7.72ｍ（25.5尺），梁間4.84ｍ（16尺）で，柱間寸法は桁行2.57ｍ（8.5尺）等間，梁間2.42ｍ（８尺）等間である。柱穴掘り方平面形は一辺1.0～1.1ｍの方形で，断ち割りを行ったＰ３で深さ0.8ｍである。第77図土層断面図中，第１～３層は柱抜き取り痕覆土，第４～10層は埋土である。遺物は各柱穴確認面から

土師器甕，須恵器坏・蓋・盤・甕の細片が出土している。601須恵器坏はＰ４，602須恵器高台付坏はＰ９，651丸瓦はＰ１の確認面出土で，８世紀後葉頃の時期に属するものである。

土層解説

1 暗褐色 粘土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子微量
2 褐色 粘土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子微量
3 暗褐色 焼土粒子少量，焼土粒子少量，粘土粒子微量
4 暗褐色 炭化粒子中量，焼土粒子少量，ローム小ブロック微量
5 褐色 ローム粒子少量，炭化・焼土粒子微量
6 暗褐色 粘土小ブロック中量，ローム・炭化・焼土粒子微量
7 褐色 粘土小ブロック中量，ローム小ブロック・炭化粒子少量
8 褐色 粘土中ブロック中量，ローム・炭化・焼土粒子少量
9 暗褐色 粘土中ブロック中量，ローム小ブロック・炭化粒子少量
10 暗褐色 焼土粒子微量



第77図 第109号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第109号掘立柱建物跡出土遺物観察表

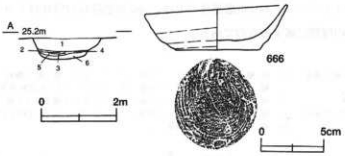
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
601	須恵器	坏	[12.8]	4.0	7.4	雲母，長石	灰	普通	底部右ロクロ回転ヘラ削り。体部下端手持ちヘラ削り	Ｐ４確認面	40%
602	須恵器	高台付坏	—	(2.2)	[10.2]	雲母，長石	灰	普通	底部右ロクロ回転ヘラ削り後，高台貼り付け。高台断面三角形	Ｐ９確認面	10%

番号	種別	幅	長さ	厚さ	重量	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
651	丸瓦	(5.8)	(7.9)	1.5	[90.9]	雲母，赤色粒子	明赤褐	普通	凸面ヘラ削り，凹面布目痕	Ｐ１確認面	5%

(2) 溝跡

第16号溝跡（第78図・付図１）

本跡は調査区の南西端部U14区から中央部南端U15・U16区でN－82°－Eの東西方向で，部分的に調査区域外のため確認できなかった部分があるが51.5mにわたって確認し，幅1.6～1.9m，深さは表土から0.56m，確認面から0.24m，断面U字形の溝である。また，第109号掘立柱建物跡を南北に二分するように走り，本跡の方が新しい。遺物666土師器坏は，本跡の東端の確認面から出土したものである。



土層解説（ポイントは第77図の第109号掘立柱建物跡図中）

1 黒 褐 色 ローム・焼土粒子少量（表土）
2 褐 色 ローム中ブロック中量
3 暗 褐 色 焼土小ブロック少量
4 暗 褐 色 ローム中ブロック少量
5 極暗褐色 ローム小ブロック少量
6 暗 褐 色 ローム小ブロック中量

第78図 第16号溝跡・出土遺物実測図

第16号溝跡出土遺物観察表（第78図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
666	土師器	坏	11.4	3.6	6.7	雲母，赤色粒子	橙	普通	底部回転糸切り	確認面	80%

第19号溝跡

本跡は調査区の南西端部V11区でN－17°－Wの南北方向に長さ4.0mを確認した。幅は1.2m，深さは表土から0.5m，確認面から0.2mである。北・南ともに調査区域外であるため詳細は不明であるが，第97号掘立柱建物跡を掘り込んでおり，本跡の方が新しい。遺物は須恵器甕片3点と瓦片2点が出土しているが細片のため，図示できなかった。

(3) 竪穴住居跡

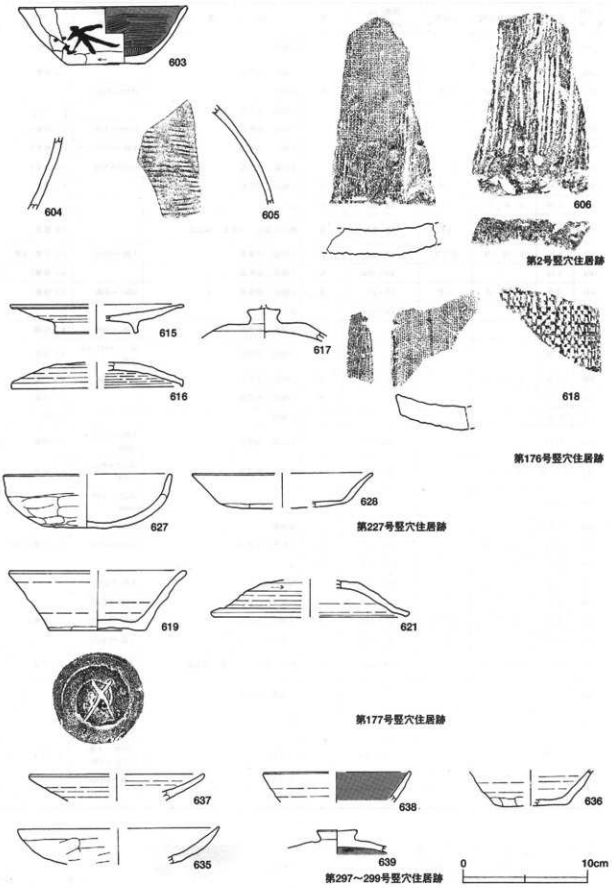
住居跡番号	位置	主(長)軸方向	平面形	規模（m）（長軸×短軸）	竈	出土遺物	新旧関係（古→新）	時期
1	R-15	—	—	2.8×（1.2）		なし		—
2	R-15 R-16	—	—	4.6×（2.2）	有	土師器（墨書），須恵器，灰釉陶器，瓦		9Ｃ後葉
3	R-15 S-15	N－8°－E	—	5.5×（4.4）	有	土師器，須恵器		8Ｃ中葉
4	S-15	—	—	—	有	須恵器		8Ｃ中葉・後葉
175	R-13 S-13	—	—	7.6×（4.4）	—	須恵器	本跡→SI178	8Ｃ後葉
176	R-13 S-13	N－10°－W	—	—	有	土師器，須恵器，瓦	SB47・SI178→本跡	9Ｃ後葉
177	R-13	N－7°－W	長方形	6.4×5.2	有	土師器，須恵器，鉄器（刀子）		9Ｃ前葉
178	R-13 S-13	—	—	—	—	土師器，須恵器	本跡→SI175・176	8Ｃ中葉
194	Q-12	N－0°	長方形	3.7×3.4	—	土師器，須恵器		—
207	R-14	—	—	—	—	なし		—
220	V-15	—	—	—	—	なし	(T74内)	—
221	V-14 V-15	—	—	4.0×（3.2）	—	土師器	(T74内)	—
222	V-14	N－13°－E	—	5.0×4.6	有	なし	SI227，本跡→SB109	—
223	U-14	—	—	3.5×（3.0）	—	土師器		8Ｃ前葉
224	U-14	N－13°－E	長方形	5.3×4.3	有	なし	本跡→SB108	—
227	V-14	—	—	—	—	土師器，須恵器	SI222，本跡→SB109	8Ｃ前葉
228	V-13	—	—	—	—	なし		—
229	V-13	—	—	—	—	なし		—
230	U-12	—	—	—	有	なし		—
231	V-12	N－6°－E	—	3.0×（2.6）	—	なし		—
232	U-12	N－6°－E	方形	4.5×4.5	有	なし	SB68，本跡→69	—

住居跡番号	位置	主(長)軸方向	平面形	規模(m)(長軸×短軸)	竈	出土遺物	新旧関係(古→新)	時期
293	R-9 R-10	—	—	(4.2)×(3.0)	—	須恵器		8C中葉ｶ
294	S-9	—	—	3.0×—	—	土師器、須恵器		9C後葉
295	S-9	N−14°−W	方形	4.5×4.5	有	須恵器	SB92→本跡	—
296	S-10	—	—	5.9×(1.8)	—	土師器、須恵器		8C前葉
297	S-10	—	—	(4.6)×4.0	—	土師器、須恵器	SI298→本跡	9C後葉ｶ
298	S-10	—	—	(3.0)×(1.0)	—	土師器、須恵器	本跡→SI297	8C前葉ｶ
299	S-10	—	—	(6.0)×(4.8)	—	土師器、須恵器	SI298→本跡	9C前葉ｶ
300	T-10	N−0°	方形	6.2×6.2	有	土師器、須恵器		8C後葉
301	T-10	N−8°−E	方形	3.2×3.2	有	なし		—
302	S-9 T-9	N−0°	方形	2.8×2.8	有	縄文土器片、土師器、須恵器		9C後葉
303	S-10	N−18°−W	長方形	4.5×3.2	有	土師器、須恵器	本跡→SB91	8C中葉-後葉
304	S-10	—	—	4.0×(2.6)	有	土師器、須恵器		9C前葉ｶ
305	T-9	N−4°−W	方形	2.2×2.2	有	土師器、須恵器	SB84→本跡	9C後葉
306	U-9	—	—	4.0×(1.4)	—	なし		—
307	T-10	—	—	—	—	土師器、須恵器	本跡→SB86	8C初頭
308	T-10	—	—	—	有	土師器、須恵器	SI312→SI313→本跡	8C後葉
309	U-10	N−10°−W		2.8×(2.2)	有	土師器、須恵器	SB85→本跡	9C中葉
310	U-10	—	—	—	有	土師器、須恵器		8C初頭
311	U-10	—	—	—	—	土師器		8C代
312	U-10	—	—	(5.0)×4.2	—	土師器、須恵器	本跡→SI313→SI308	8C初頭
313	T-9、10	N−7°−W	—	5.0×5.0	有	土師器、須恵器	SI312→本跡→SI308	8C前葉
319	U-12	—	—	—	—	なし	SI320、本跡→SB96	—
320	U-12	—	—	—	—	須恵器	SI319	—
321	R-12	N−3°−W	—	4.6×(1.2)	有	土師器、須恵器	SB102→本跡	9C中葉以降ｶ
322	R-12	—	—	3.8×(1.2)	有	なし		—
323	S-12	—	—	4.3×(1.0)	—	なし	本跡→SI324	—
324	S-12	—	—	(2.2)×(1.0)	—	なし	本跡→SI323	—
325	T-12	N−0°	長方形	4.7×(3.8)	有	土師器、須恵器	本跡→SB103	8C後葉ｶ
326	T-12	N−27°−E	方形	5.2×4.6	—	土師器	本跡→SB103	—
327	T-12	N−8°−W	—	(4.0)×3.8	有	縄文土器片、土師器、須恵器	SI328→本跡→SB105	8C初頭
328	T-12	—	—	—	—	土師器、須恵器	SB105→SI327→本跡	—
329	U-12	—	—	—	—	なし	SB106、本跡→SI330	—
330	U-12	—	—	2.7×(1.6)	—	土師器	SB106→本跡、SI329→本跡	9C後葉
331	U-14	—	—	—	—	土師器	本跡→SB109	—
333	V-13	—	—	—	—	なし		—

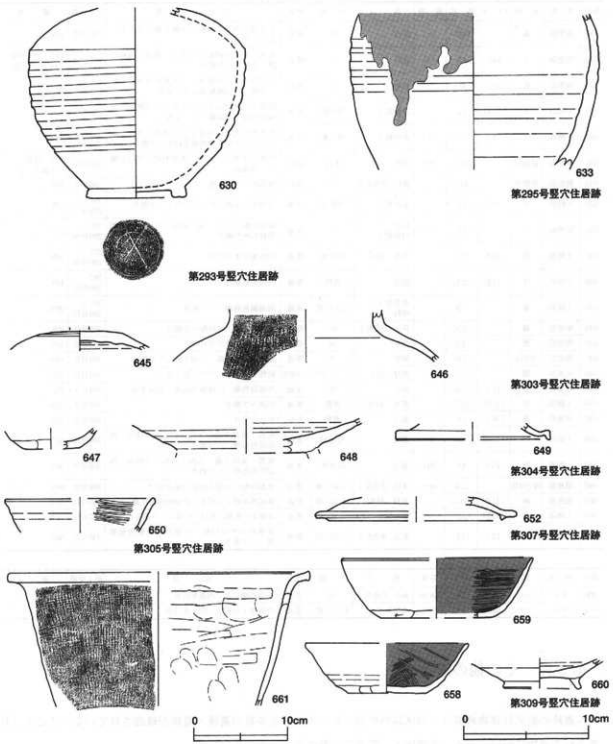
第327号竪穴住居跡

第330号竪穴住居跡

第79図　D区竪穴住居跡出土遺物実測図 (1)



第80図　D区竪穴住居跡出土遺物実測図(2)



第81図　D区竪穴住居跡出土遺物実測図(3)

D区竪穴住居跡出土遺物観察表（第79～81図）

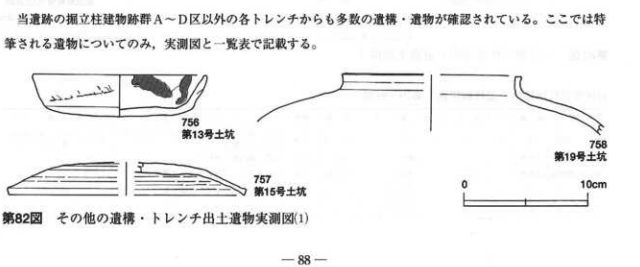
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
603	土師器	坏	13.4	4.5	6.2	砂粒	にぶい橙	普通	底部・体部下端手持ちヘラ削り。内面黒色処理・ヘラ磨き	2号住	85%　体部外面墨書「庚」ヵ　PL5
604	須恵器	長頸瓶	—	(5.8)	—	緻密	灰黄	良好	体部下端回転ヘラ削り	2号住	10%
605	灰釉陶器	長頸瓶	—	(8.0)	—	堅緻	暗灰黄	良好	外面灰オリーブ釉。体部外面横位平行叩き	2号住	10%
615	土師器	高台付椀	[14.0]	2.3	[6.7]	雲母、長石、赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁端部で外反する。器壁が薄い	176号住	40%
616	須恵器	壺	[13.8]	(2.0)	—	雲母、長石	灰	普通	天井部石ロクロ回転ヘラ削り。	176号住	30%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
617	須恵器	蓋	—	(2.8)	—	長石	灰	普通	天井部右ロクロ回転ヘラ削り後、ロクロによるナデ	176号住	40%
619	須恵器	坏	[14.0]	4.8	7.6	長石	灰	普通	底部右ロクロ回転ヘラ切り。体部下端幅の狭い手持ちヘラ削り	177号住	40%　底部外面「×」ヘラ記号
621	須恵器	蓋	[15.3]	(3.0)	—	長石	灰	普通	丸みをもった天井部。天井部右ロクロ回転ヘラ削り。口縁端部は短く屈曲。	177号住	30%
627	土師器	坏	[13.4]	4.3	—	赤色粒子	明赤褐	普通	底部から体部にかけて手持ちヘラ削り、口縁部外面・内面横ナデ。丸底。	227号住	70%
628	土師器	坏	[14.5]	2.7	[10.4]	赤色粒子	明赤褐	普通	わずかに丸底気味を呈し、体部は外反しながら立ち上がる。底部手持ちヘラ削り。	227号住	30%
630	須恵器	長頸壺	—	(15.2)	8.0	砂粒	灰白	良好	肩部に灰オリーブ釉、体部のロクロ目が強い。角高台。	293号住	80%　底部「×」ヘラ記号　PL 4
633	須恵器	長頸瓶	—	(12.4)	—	長石、黒色斑点	灰	良好	体部灰オリーブ釉	295号住	10%
635	土師器	坏	[16.0]	(2.9)	—	赤色粒子	明赤褐	普通	底部から体部にかけて手持ちヘラ削り	297～299号住	10%
636	須恵器	坏	—	(2.9)	[6.0]	長石・白色粒子	灰	普通	底部回転ヘラ切り後、雑なナデ。体部下端手持ちヘラ削り	297～299号住	20%
637	土師器	皿	[13.8]	(2.1)	—	雲母・長石	明赤褐	普通	内外面ロクロナデ	297～299号住	10%
638	土師器	坏	[11.8]	(2.4)	—	雲母	黄橙	普通	内面黑色処理。	297～299号住	10%
639	土師器	蓋	—	(1.9)	—	赤色粒子・砂粒	にぶい橙	普通	内面黑色処理・ヘラ磨き。	297～299号住	20%
645	須恵器	蓋	—	(1.5)	—	長石・白色粒子	灰	普通	天井部右ロクロ回転ヘラ削り	303号住	20%
646	須恵器	甕	—	(4.2)	—	長石	灰	普通	体部外面縦位の平行叩き。	303号住	10%
647	須恵器	鉢形か	—	(1.6)	[4.2]	緻密	灰	普通	底部・体部下端一方向手持ちヘラ削り	304号住	10%
648	須恵器	壺	—	(2.6)	[9.8]	雲母、長石	にぶい橙	二次焼成	底部が分厚く、ロクロ目が強い	304号住	20%
649	須恵器	壺	[12.4]	(1.3)	—	長石	灰	普通	外面自然釉。口縁端部は強く外反する	304号住	5%
650	土師器	坏	[12.0]	(2.7)	—	雲母、石英	黄橙	普通	内面ヘラ磨き。	305号住	10%
652	須恵器	壺	[16.2]	(1.8)	—	雲母	黄橙	不良	かえり有り	307号住	10%
658	土師器	坏	[13.0]	4.0	6.2	雲母	暗赤褐	普通	底部・体部下端一方向手持ちヘラ削り。内面黑色処理・ヘラ磨き	309号住	40%
659	土師器	坏	[15.4]	4.8	[9.0]	雲母	暗赤褐	普通	底部・体部下端一方向手持ちヘラ削り。内面黑色処理・ヘラ磨き	309号住	40%
660	須恵器	高台付皿	—	(2.4)	[6.0]	雲母、赤色粒子	にぶい褐	普通	底部回転ヘラ削り後高台貼り付け	309号住	60%
661	須恵器	鉢	[31.8]	(14.1)	—	雲母、砂粒	にぶい褐	普通	体部外面格子目叩き、内面指頭押圧痕	309号住	20%
664	土師器	坏	[13.7]	(3.2)	—	赤色粒子	橙	普通	底部から体部にかけて手持ちヘラ削り。丸底	327号住	20%
665	土師器	高台付坏	13.7	(2.5)	—	雲母、赤色粒子	にぶい橙	普通	底部右ロクロ回転ヘラ削り。内面黑色処理・ヘラ磨き	330号住	80%

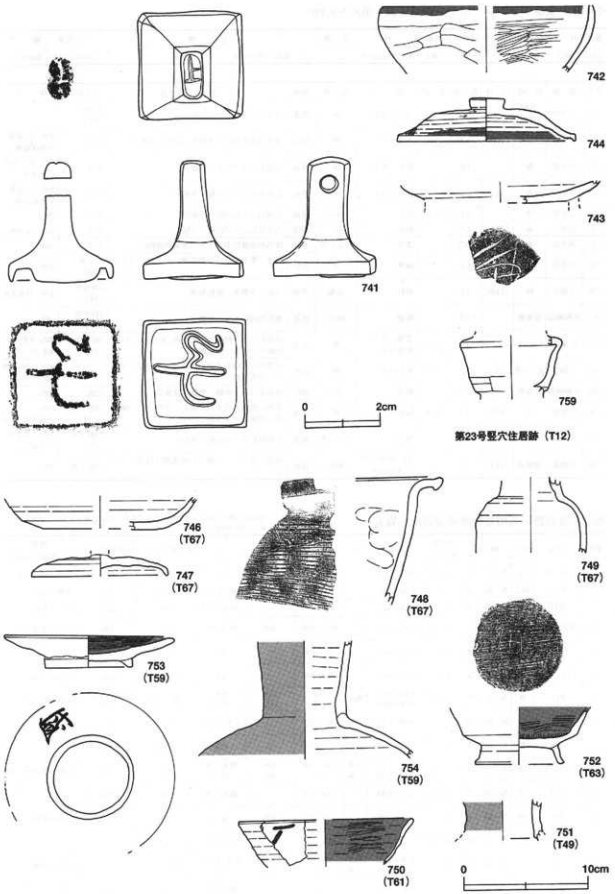
番号	種別	幅	長さ	厚さ	重量	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
606	平瓦	(10.0)	15.7	2.0	(383.0)	長石、白色粒子	灰	普通	凸面長縄叩き、凹面布目痕	2号住	10%
618	平瓦	(8.8)	(6.0)	1.9	(104.5)	赤色粒子	にぶい橙	普通	凸面格子目叩き、凹面布目痕	176号住	10%

第3節　その他の遺物

当遺跡の掘立柱建物跡群A～D区以外の各トレンチからも多数の遺構・遺物が確認されている。ここでは特筆される遺物についてのみ，実測図と一覧表で記載する。



第82図　その他の遺構・トレンチ出土遺物実測図(1)



第83図　その他の遺構・トレンチ出土遺物実測図(2)

その他の遺構・トレンチ出土遺物観察表（第82・83図）

番号	種別	印面径	高さ	印面高	重量	穿孔	色調	特徴	出土位置	備考
741	銅印	2.8×2.8	3.2	0.5	383	鼻鈕，孔5cmの孔	—	「子」陽刻。紐の上面に「上」の印刻	23号住（T12）	巻頭ｶﾗｰ

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
759	須恵器	小形短頸壺	—	(5.0)	—	雲母，砂粒	灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り	23号住（T12）	
742	土師器	鉢状形	[17.0]	(5.4)	—	赤色粒子	橙	良好	体部外面手持ちヘラ削り，内面ヘラ磨き	T12	10% 口縁部内外面後爛
743	須恵器	盤	—	(1.6)	—	雲母，長石	灰	普通	底部右ロクロ回転ヘラ削り。	T12	10% 底部外面ヘラ書き
744	須恵器	蓋	14.4	3.5	—	雲母，長石	灰	普通	天井部右ロクロ回転ヘラ削り	T12	80% 口縁部内外面後爛
746	須恵器	坏	—	(2.7)	[9.4]	長石	緑灰	普通	底部右ロクロ回転ヘラ削り。	T67	20%
747	須恵器	蓋	[10.8]	(1.7)	—	砂粒	灰	普通	天井部右ロクロ回転ヘラ削り	T67	50% 転用硯
748	須恵器	鉢	—	(10.2)	—	雲母	にぶい黄	普通	体部外面横位平行叩き，内面指頭押圧	T67	10%
749	須恵器	小瓶	—	(6.1)	—	緻密	灰	良好	胴部下寄せ回転ヘラ削り後，ロクロによるナデ	13号溝（T67）	10%
750	土師器	坏	[14.0]	(3.7)	—	砂粒	赤褐	普通	内面ヘラ磨き，黒色処理。	136号住（T61）	10% 外面陽書
751	灰釉陶器	長頸瓶	—	(3.2)	—	緻密	灰白	普通	頸部外面灰オリーブ釉	141号住（T49）	5%
752	土師器	高台付坏	—	(4.5)	[7.2]	雲母，長石，赤色粒子	橙	普通	底部右ロクロ回転ヘラ削り後，高台貼り付け。内面ヘラ磨き，黒色処理。	162号住（T63）	30% 底部内面剥離 PL5
753	土師器	高台付皿	13.3	2.7	7.0	赤色粒子	橙	良好	底面不定方向の手持ちヘラ削り，内面ヘラ磨き，黒色処理。	T59	90% 外面陽書「原」ｶ PL5
754	灰釉陶器	長頸瓶	—	(9.4)	—	緻密	灰白	良好	外面オリーブ灰釉。頸部二段接合	T59	30%
756	土師器	坏	13.9	3.4	11.8	砂粒	橙	普通	丸底。底部不定方向手持ちヘラ削り。口縁端部，内側につまみ出し	13号土坑（C区）	95% 内面後爛 PL4
757	須恵器	蓋	[18.8]	(2.6)	—	雲母	にぶい黄	普通	天井部右ロクロ回転ヘラ削り	15号土坑（C区）	40% 天井部ヘラ記号
758	須恵器	短頸壺	[14.4]	(4.5)	—	長石，黒色粒点，ガラス質の微小混じ	褐灰	良好	胴部に灰オリーブ釉，口縁端部は角張り，シャープ	19号土坑	10%

掘立柱建物跡・基壇建物跡確認状況一覧表

※括弧の上段は身舎部分の数値であり，下段は庇部分を含めた数値である。
※1尺は0.303mとした。

番号	位置	区	棟方向	柱間数（桁×梁）	規模	庇	柱穴測り方 径・一辺	深さ	形状	桁行柱間（m）	梁間柱間（m）	備考 新旧関係（古→新）
1	S9～T9	A	N－3°－W	9×3	19.69×5.75	—	0.75～1.05	0.8～0.9	方形	2.12，2.42	1.81，1.96	SI43・44→本跡
2	M15	16T	N－85°－E	3×2	7.26×4.54	—	0.7	—	隅丸方形，円形	2.42	2.27	本跡→SB3
3	M15	16T	N－85°－E	4×2	6.64×4.54	—	0.7	—	隅丸方形	1.66	2.27	SB2→本跡
4・5	R30，21	A	N－90°－E	5×3	12.87×5.45	—	0.75～0.95	0.8	隅丸方形	2.57	1.81	SI13→本跡
7	O14，P14，P15	B	N－82°－E	3×2	6.81×4.84	—	0.7～0.8	—	方形	2.27	2.42	
8	P14，P15	B	N－7°－W	4×2	8.48×4.84	—	0.7～0.9	—	方形	2.12	2.42	SB36→本跡
9	P14	B	N－5°－W	3×2	8.18×5.15 8.18×6.82	西庇	0.9 0.7	0.96 0.74	方形 方形	2.87，2.42	2.57，1.51，1.96	本跡→SB14
10	P14	B	N－10°－W	2×3	8.18×5.15	—	0.6～0.7	—	方形・円形	2.72	2.57	
11	O14	B	N－84°－E	4×2	7.87×4.84	—	1.0	—	方形	1.96	2.42	
12	O14，P14	B	N－2°－W	4×1以上	9.69×2.12 12.7×3.93	北西二面	0.8～1.00 0.8	0.8 0.5	隅丸方形 円形	2.42	2.12	本跡→基壇1，SB9
13	O14	B	N－85°－E	4×2	7.27×4.84	—	0.8～1.0	—	隅丸方形	1.81	2.42	
14	P14	B	N－85°－E	3×2	8.18×5.15	—	0.8～1.0	0.94	方形	2.72	2.57	SB9→本跡
15	P14	B	N－5°－W	2以上×2	5.15以上×5.15	—	0.9～1.1	—	方形	2.57	2.57	
16	P15	B	N－88°－E	4×2	8.48×4.59 8.48×8.18	南北二面	1.0～1.2 0.7	0.6 0.4	隅丸長方形 円形	1.96，2.57	2.27	SI36→本跡
18	D19	35T	N－5°－E	3×2	5.43×4.62	—	0.7	—	隅丸方形	1.81	1.81	
19	D19	35T	N－4°－E	3×2	4.08×3.36	—	0.4	—	円形	1.36	1.51	SI166

番号	位置	区	棟方向	柱間数(桁×梁)	規模	底	柱穴掘り方 径・一辺	深さ	形状	桁行柱間(m)	梁間柱間(m)	備考 新旧関係(古→新)
21	R19	A	N−5°−W	4以上×3	10.30以上×5.75	—	0.7	—	方形	2.57	1.81	
22	R19	A	N−4°−W	2以上×2	3.63以上×3.93	—	0.6〜0.7	—	方形・円形	1.81	1.96	SB88→本跡→SB29
23	Q20	A	N−79°−E	1以上×3	2.72以上×5.45	—	0.7〜0.95	—	長方形	2.72	1.81	
24	Q19	A	N−10°−E	3×2	4.99×3.32	—	0.4〜0.5	—	円形	1.66	1.51, 1.81	
25	R21	A	N−4°−W	3×2	4.69×3.33	—	0.3〜0.4	—	円形	1.51	1.66	
26	S19	A	N−0°	5×2	13.6×4.54 14.39×7.57	四面	0.8〜1.2 0.7〜1.0	—	長方形 円形	2.72	2.27	SB5・78→本跡
27	S20	A	N−1°−E	5×3	10.75×5.45 13.63×8.16	四面	0.9×1.1	0.58	方形 円形	2.27, 2.12	1.81	
29	Q19	A	N−83°−E	4×2	7.87×5.15	—	0.4	—	円形	1.96	2.57	SB22→本跡
31	N15, O15	B	N−3°−W	3×2	5.89×4.24	—	0.6〜0.8 —	—	長方形 —	1.81, 2.12	2.12	
32	N15	B	N−3°−W	2以上×2	3.33以上×3.93	—	0.55	—	隅丸方形	1.66	1.96	SI103→本跡
33	N15, O15	B	N−9°−W	3×2	4.99×3.63	—	0.8〜0.9	—	方形	1.66	1.81	本跡→SI97
34	O15	B	N−8°−W	3×2	5.60×4.84	—	1.0	0.55	方形	1.81, 1.96	2.42	本跡→SI99・100・101
35	O16	B	N−9°−W	?×2	−×3.63	—	0.7	—	方形		1.81	
36	N15	B	N−17°−W	1以上×2	1.96以上×5.45	—		—			2.72	本跡→SI96・103
40	D19	T35	N−2°−E	2×2	3.32×3.02	—	0.8〜0.9	—	方形	1.66	1.51	
41	D19	T35	—	—	2.42以上×?	—	0.7	—	方形	2.12	?	
42	K26	T25	N−0°	4×2	7.26×3.92	—	0.6	—	円形	2.12, 1.51	1.96	SI170→本跡
43	U19	A	N−3°−W	3×1以上	5.45×2.12以上	—	0.9〜1.1	—	方形	1.81	2.12	
44	O11, P11	C	N−0°	4×2	8.78×5.15	—	0.8〜1.0	—	隅丸方形	2.27, 1.81, 2.42	2.57	本跡→SI180
45	R13, 14	D	N−6°−W	5以上×2	10.65以上×4.54	—	0.8〜1.0	—	円形	2.12	2.27	SB46→本跡
46	R13, 14	D	N−1°−W	3×2	5.90×3.93	—	0.7	—	円形か隅丸方形	1.96	1.96	本跡→SB45
47	R13	D	N−10°−W	3×2	5.45×4.24	—	0.7	—	円形	1.81	2.12	本跡→SI176
48	Q12, 13	C	N−88°−E	3×2	6.81×3.93 6.81×5.90	南庇	0.9〜1.0 0.7〜0.8	0.5 0.45	隅丸方形 隅丸方形	2.27	1.96	
49	P12	C	N−0°	4×2	8.48×5.15	—	1.0	0.75	隅丸方形か円形	2.42, 1.81	2.57	SI181→本跡 SB59新旧不明
50	O12	C	N−4°−E	3×2	6.81×4.54	—	0.8	—	隅丸方形か円形	2.27	2.27	本跡→SI184
51	N12	C	N−0°	3×3	6.81×6.06	—	0.8〜0.9	—	方形か円形	2.27	2.12, 1.81	本跡→SI183
52	R12	D	N−8°−W	3×2	6.81×4.84	—	0.8〜0.9	—	円形	2.27	2.42	
53	N11	C	N−89°−E	3×2	7.87×5.75 7.87×7.87	南庇	0.9〜1.2 0.8	—	隅丸方形 隅丸方形	2.72, 2.42	2.87	本跡→SK7
54	N11	C	N−0°	5×3	10.15×5.90 10.15×8.02	南庇	0.9〜1.1 0.8〜0.9	—	方形 隅丸方形	2.12, 1.96	1.96	本跡→SI196
55	J12	C	N−5°−W	3×3	5.90×4.09	—	0.7	0.35-0.55	方形	1.96	1.36	本跡→SD5
56	J12	C	N−5°−W	3×2	7.27×4.84	—	0.65〜0.8	0.6	楕円形	2.42	2.42	本跡→SD5
57	N11	C	N−1°−W	5×2以上	11.66×3.93	—	0.65〜0.8	—	隅丸方形	2.42, 2.27	1.96	本跡→SB58
58	M11	C	N−86°−E	1以上×2	2.87以上×5.15 2.87以上×7.42	南庇	0.9〜1.1 0.8	—	方形 方形	2.72	2.57	SB57→本跡
59	O12	C	N−6°−W	3以上×2	9.09以上×5.15	—	1.0〜1.2	—	方形	3.03	2.57	SB66→本跡 本跡→SB64
62	U20	A	N−1°−W	2以上×2	5.45以上×5.45	—	0.8〜1.1	—	長方形	2.72	2.72	
63	P12	C	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
64	O12	C	N−12°−W	3以上×2	6.81以上×4.24	—	0.8×1.0	—	長方形	2.27	2.12	SB59→本跡
65	O12	C	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
66	O12	C	—	—	—	—	—	—	—	—	—	本跡→SB59
68	U12-13, V12-13	D	N−11°−W	4×3	9.69×6.81	—	1.1〜1.3	1.1	方形	2.42	2.27	SB69→本跡
69	U12-13, V12-13	D	N−11°−W	3×2	7.27×4.84	—	0.8×1.4	—	長方形	2.42	2.42	SI232→本跡→SB68

番号	位置	区	検方向	柱間数(桁×梁)	規模	底	柱穴掘り方			桁行柱間(m)	梁間柱間(m)	備考 新旧関係(古→新)
							径・一辺	深さ	形状			
70	P8	C	N−2°−E	5×2	9.69×4.84	—	0.9~1.2	—	方形	2.12, 1.81	2.42	本跡→SI249, SB79
71	P9	C	N−92°−E	4×2	7.42×4.84 9.39×7.12	北西二面	0.9~1.1 0.8	—	隅丸方形 隅丸方形	1.96, 1.81	2.42	本跡→SI251→SD17
72	O8	C	N−2°−E	4×2	8.48×5.15 8.48×7.12	東底	0.9~1.0 0.75	0.6	隅丸方形 円形	2.12	2.57	本跡→SI246, 249, SB80
73	P10	C	N−0°	4×3	9.69×5.75	—	0.8~1.0	—	円形	2.27, 2.57	1.81, 2.12	本跡→SI256
74	P9	C	N−3°−W	3以上×3	5.90以上×5.75	—	0.8~1.0	—	長方形か 隅丸方形	1.96	1.81, 1.96	
75	O10, P10	C	N−3°−E	3×2	8.18×5.45 8.18×7.27	西底	0.9~1.1 0.8~0.9	—	円形 円形	2.72	2.72	本跡→SI257・SD17
76	O9	C	N−77°−E	3×2	6.36×4.24	—	0.55~0.7	—	円形	2.12	2.12	本跡→SI260, 261
78	Q7・8	C	N−0°	3×1以上	5.90×2.27以上	—	0.6~0.8	—	方形	1.96	2.27	本跡→SI270, 271→SD17
79	P8	C	N−4°−W	2×2	5.54以上×4.54	—	0.6~0.8	—	楕円形	2.72	2.27	SB70→本跡
80	O8, P8	C	N−15°−W	7以上×2	13.18以上×3.93	—	0.4~0.6	—	円形	1.51, 1.81, 1.96	1.96	SB70, 72→本跡 SD5と本跡?
81	Q10	C	N−76°−E	3×3	8.02×5.45	—	0.8~0.9	—	円形	2.57, 2.72	1.81	
82	P7・8, Q7・8	C	N−12°−W	3×3	7.72×7.57	—	0.9~1.0	0.45	隅丸方形か 円形	2.57	2.42, 2.57	本跡→SI275
83	U9	D	N−84°−E	3×2	5.88×4.24	—	0.9	—	隅丸方形	1.96	2.12	SB84→本跡
84	T9	D	N−6°−W	3×2	6.81×3.33	—	0.7~0.9	—	円形	2.27	1.66	本跡→SB83, SI305
85	U10	D	N−88°−E	3×2	5.90×4.84	—	0.9	—	方形	1.96	2.42	本跡→SI309
86	T10	D	N−90°−E	1以上×3	2.42以上×5.90	—	1.1~1.2	—	方形	2.42	1.96	SI307→本跡
87	U10	D	N−88°−E	3×2	5.90×3.93	—	0.8~1.0	—	方形	1.96	1.96	SI308, 312→本跡→SB88
88	U10	D	N−4°−E	3×3	5.45×4.99	—	0.4~0.6	—	円形	1.81	1.66	SB87→本跡
89	T9	D	N−3°−W	3×2	7.57×4.54	—	0.7~1.1	—	楕円形, 方形	2.42, 2.72	2.27	
90	T9	D	N−7°−E	3×2	6.81×3.93	—	0.9~1.1	—	方形	2.27	1.96	
91	S10	D	N−90°−E	2以上×2	4.84以上×4.84	—	1.0~1.1	—	隅丸方形	2.42	2.42	SI303→本跡→SI299, 304
92	S9	D	N−84°−E	4×2	7.57×5.15	—	0.8~1.2	—	隅丸長方形	1.96	2.57	本跡→SI295
93	O9	C	N−86°−E	5×2	9.54×3.63	—	0.8~0.9	0.4~0.9	隅丸方形か円形	1.66, 1.96	1.81	SI318→本跡→SI244
94	N9, O9	C	N−16°−W	4×2?	8.78×5.14	—	0.7~0.85	0.65	隅丸方形	2.12, 2.27	2.57か	本跡→SI238, 244
95	N10, O10	C	N−0°	4×2	9.54×5.45	—	0.95~1.1	0.6	方形	2.27, 2.42	2.72	SI190, 234→本跡
96	V12	D	N−11°−W	4以上×1以上	7.57×2.42	—	1.1~1.4	—	方形か長方形	1.96	2.42	SI319→本跡
97	V11	D	N−1°−E	2以上×2	3.33以上×3.93	—	0.55~0.8	—	楕円形	1.66	1.96	本跡→SD19
98	S12	D	N−5°−W	3×2	6.81×4.84 6.81×6.66	東底	0.9~1.1 0.7~1.0	—	長方形 楕円形	2.27	2.42	本跡→SB99, 100
99	S12	D	N−77°−E	3×2	6.36×3.93	—	0.8~0.9	—	隅丸方形	2.12	1.96	SB100→本跡
100	S12	D	N−82°−E	3×2	6.36×4.24 6.36×7.12	南底	1.2 0.9	—	方形, 長方形, 方形	2.12	2.12	SB98→本跡→SB99, 103
101	S11	D	N−9°−W	3×2	4.54×3.33	—	0.4~0.5	—	円形	1.51	1.66	SB98→本跡
102	R12	D	N−77°−E	—		—	0.8	—	円形か長丸方形	2.12		本跡→SI321
103	S12, T12	D	N−13°−W	3×2	6.81×4.24	—	0.7×0.9	—	隅丸長方形	2.27	2.12	SB100, SI325, 326→本跡
105	T12	D	N−4°−W	3×1以上	5.88×1.96以上 5.88×3.92	東底	0.7×0.95 0.5~0.6	—	楕円形 円形	1.96	1.96	SI328→本跡
106	T12, T13	D	N−78°−E	1以上×2	2.12以上×4.54	—	1.0	—	方形	2.12	2.27	SI310→本跡
107	U14	D	N−3°−W	3×3	7.12×5.45	—	0.9~1.3	0.5	長方形	2.27, 2.42	1.81	本跡→SB108
108	U14	D	N−5°−W	3×2	5.90×4.84	—	1.0	—	方形	1.96	2.42	SI224, SB107→本跡
109	U14, V14	D	N−5°−W	3×2	7.72×4.84	—	1.0~1.1	0.8	方形	2.57	2.42	SI331, 227→本跡→SD16
基壇1	P13	B	N−7°−W	—	10.9×5.14	—	—	—	—	—	—	SB12→本跡→SK8

溝跡確認状況一覧表

番号	位置	方向	確認長（m）	確認幅（m）	深さ（m）	出土遺物	備考（新旧関係）
2	U16～V16	N－2°－W	11.5	1.3	0.35	須恵器	
3	V19	N－2°－W	2.2	1.25	0.28	縄文土器片，土師器，須恵器	
4	R15	N－8°－E	6.0	1.2	—	土師器，須恵器	
5	D20～I12・13 M9～R6	N－70°－E N－57°－E	241 (466)	0.6～2.5	0.5～1.8	土師器，須恵器，灰釉陶器	SI56・76・242・279， SB55・56，SD18→本跡
16	U14～U16	N－82°－E	51.5	1.6～1.9	0.56	土師器，須恵器	SB109→本跡
17	P8～P10 P8・Q8・R8・S8	N－78°－E N－12°－W	103	0.7～2.2	—	土師器，須恵器，瓦	SI251・257・265， SD71・75→本跡
18	M10～N8 N7～O7	N－80°－E N－15°－W	46.5	0.7	0.35	土師器，須恵器	
19	V11	N－17°－W	4.0	1.2	0.5	須恵器，瓦	SD97→本跡

トレンチ内竪穴住居跡確認状況一覧表

番号	位置	出土遺物
17	T17	なし
18	T17	なし
22	T11	なし
23	T12	須恵器，土師器，銅印，鉄釘
28	T16	なし
29	T15	土師器，須恵器，羽釜
30	T15	なし
31	T14	土師器，須恵器，粘土塊
32	T21	縄文土器片，土師器，須恵器
33	T21	縄文土器片
34	T22	なし
35	T30	なし
39	T13	なし
40	T13	なし
47	T24	縄文土器片，土師器，須恵器
48	T24	縄文土器片，土師器
49	T24	土師器，須恵器
50	T25	なし
51	T25	なし
52	T25	なし
53	T25	なし
54	T25	なし
55	T24	なし
57	T30	土師器，須恵器
58	T30	縄文土器片，土師器，須恵器
59	T30	土師器，須恵器
60	T26	なし
61	T26	なし
63	T33	土師器，須恵器
64	T33	なし
65	T33	土師器，須恵器
67	T26	なし
68	T31	縄文土器片，土師器，須恵器
69	T31	縄文土器片，土師器，須恵器
70	T31	土師器，須恵器，鉄鏃
71	T32	土師器，須恵器
73	T33	土師器，須恵器
74	T36	土師器，須恵器，灰釉陶器
75	T35	なし
77	T31	土師器，須恵器，炭化材
85	T47	なし
86	T46	なし
87	T46	なし
109	T56	縄文土器片，土師器，須恵器
110	T56	縄文土器片，土師器，須恵器
111	T56	縄文土器片，土師器，須恵器
112	T56	縄文土器片，土師器，須恵器
113	T58	土師器，須恵器，炭化材
114	T58	なし
115	T58	なし
116	T57	なし
117	T57	なし
118	T57	なし
119	T59	縄文土器片，土師器，須恵器，陶器
120	T59	土師器，須恵器，鹿角
121	T59	縄文土器片，須恵器
123	T59	土師器，須恵器，砥石
124	T59	縄文土器片
125	T59	土師器，須恵器
126	T59	縄文土器片，土師器，須恵器

番号	位置	出土遺物
127	T60	縄文土器片，土師器，須恵器
128	T60	なし
129	T60	土師器，須恵器
130	T60	土師器，須恵器
131	T60	土師器，須恵器
132	T60	土師器，須恵器
133	T55	なし
134	T55	なし
135	T61？	土師器，須恵器
136	T61？	土師器（墨書），須恵器
137	T61？	土師器，須恵器
138	T61	土師器，須恵器
139	T61	なし
140	T61	なし
141	T49	土師器，須恵器，灰釉陶器
142	T54	なし
143	T50	なし
144	T50	なし
145	T52	須恵器
146	T52	なし
147	T53	なし
148	T54	縄文土器片，土師器，須恵器，瓦
149	T66	なし
150	T66	なし
151	T66	なし
152	T66	なし
153	T66	なし
154	T67	須恵器
155	T62	縄文土器，土師器，須恵器，磁器
156	T62	土師器

番号	位置	出土遺物
157	T62	土師器，須恵器
158	T62	土師器，須恵器，瓦
159	T62	縄文土器，土師器，須恵器
160	T62	土師器，須恵器
161	T63	土師器，須恵器，灰釉陶器（2）
162	T63	土師器（刻書），須恵器
163	T63	土師器
164	T35	なし
165	T35	なし
166	T35	なし
168	T35	なし
169	T35	なし
170	T25	なし
171	T25	なし
172	T25	なし
173	T25	なし
209	T28	なし
210	T55	なし
211	T64	なし
212	T64	なし
213	T62	なし
214	T62	なし
215	T61	なし
216	T61	なし
225	T77	なし
226	T77	なし
346	T33	なし
347	T59	なし
348	T59	なし
349	T62	なし

第4章　金田西坪B遺跡

第1節　遺跡の概要

調査によって確認された遺構は，掘立柱建物跡3棟，竪穴住居跡50軒，溝跡3条等である。今年度の調査区は昨年度明らかになった正倉域の南側であるが，今回の確認調査によって正倉域は南側には延びていないこと，郡庁院は南側には存在しないことが明らかになった。遺構は平面観察のみであるため，遺構・遺物については一覧表で記載する。

第2節　遺構と遺物

竪穴住居跡確認状況一覧表

番号	位置	主(長)軸方向	規模 (m) (長軸×短軸)	壁	出　土　遺　物	備考 (新旧関係)	時期
1	AL26	N－30°－W	(4.5) × (3.0)	—	なし	T1	—
2	AM26	N－0°	2.5 × 2.5	有	なし	T1	—
3	AM26	N－11°－E	(4.5) × (1.0)	—	なし	T2	—
4	AM26	N－10°－W	5.0 × —	有	土師器	T1	—
5	AO27	N－9°－E	(4.5) × (3.0)	—	縄文土器片，土師器，須恵器	拡張　SB3	8C前
6	AN26·27	N－0°	5.0 × (3.6)	—	土師器，須恵器，鉄滓	拡張	—
7	AO26	N－13°－W	5.0 × (3.1)	—	なし	拡張	—
8	AO26	N－10°－W	4.1 × (3.5)	—	なし	拡張	—
9	AQ26	N－27°－W	(4.0) × (2.0)	—	なし	T4	—
10	AQ26	N－0°	(4.5) × (2.5)	—	縄文土器片，須恵器	T4	—
11	AQ25	N－3°－W	6.5 × (2.5)	—	縄文土器片，土師器，須恵器	T4	5C末
12	AO24·25	N－35°－W	(5.5) × (5.2)	—	なし	T6	—
13	AO24	N－35°－W	(5.5) × (4.5)	—	なし	T7	—
14	AQ23 AQ24	N－33°－W	5.8 × 5.8	有	なし	T4	—
15	AQ24	—	(2.0) × (1.0)	—	縄文土器片，土師器	T4	—
16	AM25	N－9°－W	(3.5) × (2.5)	—	なし	T6	—
17	MN25	N－22°－W	(4.5) × 3.5	—	なし	T6	—
18	AN28	—	(2.0) × (1.3)	—	土師器，須恵器	T11	8C前
19	AN28	N－21°－E	(3.0) × (2.0)	—	土師器，須恵器	T13 5C末	—
20	AN28	N－5°－W	5.3 × (2.2)	—	なし	T11	—
21	AM23	—	3.2 × (1.3)	—	土師器，砥石	T12	—
22	AN23	—	(4.5) × (1.0)	有	なし	T8	—
23	AN23	N－40°－W	(4.0) × 4.0	—	なし	T8	—
24	AQ26	N－0°	(3.5) × (1.2)	—	なし	T5	—
25	AO25	N－34°－W	7.0 × (3.1)	—	なし	拡張	—
26	AO25	N－37°－W	(4.7) × (4.2)	—	なし	拡張	—

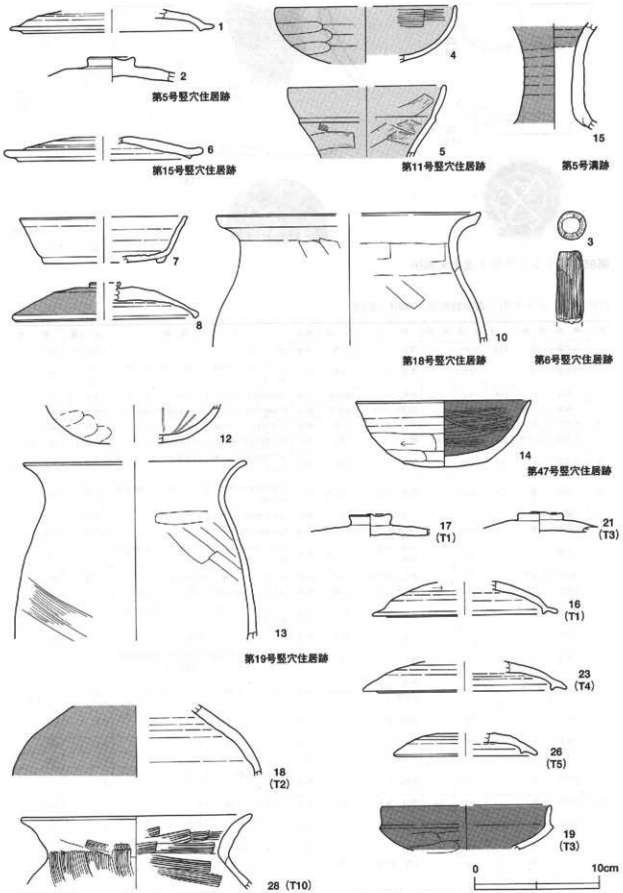
番号	位置	主(長)軸方向	規模 (m) (長軸×短軸)	層	出土遺物	備考 (新旧関係)	時期
27	AP25	N－32°－W	6.5 × (3.5)	—	土師器	拡張	—
28	AP26	N－35°－W	6.5 × (1.7)	有	羽口	拡張	—
29	AO26	N－5°－W	7.8 × 7.5	有	なし	拡張	—
30	AO26	N－20°－W	5.5 × (4.5)	—	なし	拡張	—
31	AP26	N－0°	7.0 × (1.0)	—	なし	拡張	—
32	AO26	—	径3.4	—	なし	拡張	—
33	AN25	N－4°－W	5.6 × (1.2)	—	なし	拡張	—
34	AO25	—	径2.0	—	なし	拡張	—
35	AO24	N－30°－W	(3.5) × (1.6)	—	なし	拡張	—
36	AP25	—	径3.5	—	縄文土器片	T 1	—
37	AP26	N－41°－W	2.5 × (2.2)	—	なし	T 5	—
38	AO26	—	径2.0	—	なし	拡張	—
39	AP25	—	径1.4	—	なし	T 3	—
40	AO25	N－5°－E	3.8 × 2.0	—	なし	T11 拡張部	—
41	AO28	N－0°	3.3 × (1.3)	—	なし	T11 拡張部	—
42	AO28	—	径2.0	—	なし	拡張	—
43	AN26	N－20°－W	8.0 × 7.1	—	なし	拡張	—
44	AO25	N－0°	(2.5) × 2.5	—	縄文土器片	拡張	—
45	AN25 AN26	—	7.3 × 5.3	—	土師器	拡張	—
46	AQ26	N－5°－W	7.4 × (1.8)	—	なし	T 1	—
47	AQ26	N－0°	3.0 × (1.8)	—	土師器	T 1	—
48	AO26	—	径2.2	—	なし	拡張	—
49	AL25	N－0°	3.5 × (2.2)	—	なし	T 6	—
50	AP25	N－3°－E	(5.5) × (1.5)	—	なし	T 6	—

掘立柱建物跡確認状況一覧表

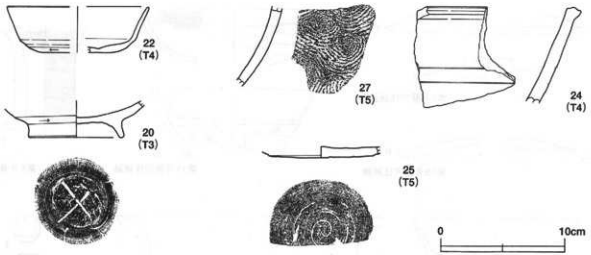
番号	位置	棟方向	柱間数 (桁×梁)	規模 (m)	庇	柱穴掘り方			桁行柱間 (m)	梁間柱間 (m)	備考 新旧関係(古→新)
						径・一辺	深さ	形状			
1	AO26 AO27	N－95°－E	5×3	9.8×5.13	—	0.5×0.5	—	円形	1.96	1.66, 1.81	SI29→本跡→ SI5, 6, SB2
2	AO26	N－3°－W	3×3	5.88×4.98	—	0.5×0.5	—	円形	1.96	1.66	SB1, SB3
3	AN26 AN27	N－1°－E	3×1以上	6.96×2.42	—	0.8×0.8	—	方形	2.42, 2.27	2.42	SI43→本跡→ SI5, 6, SB2

溝跡確認状況一覧表

番号	位置	方向	確認長 (m)	確認幅 (m)	深さ	出土遺物	備考・新旧関係
5	AL26～AQ24	N－8°－E N－80°－E	130	0.6～1.8	—	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 羽口	SI12→本跡 T4内に土師
8	AQ25	N－43°－W	7.5	1.2	—	なし	SI19・42
9	AN28～AO28	N－2°－W	20	0.6～0.8	—	なし	



第84図　第5・6・11・15・18・19・47号住居跡・第5号溝跡・トレンチ出土遺物実測図



第85図　トレンチ出土遺物実測図

住居跡・トレンチ出土遺物観察表（第84・85図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	須恵器	壺	[16.4]	(1.8)	—	雲母	灰黄	普通	かえり有り	5号住(T3)	10%
2	須恵器	壺	—	(2.0)	—	雲母，長石	赤褐	普通	天井部右ロクロ回転ヘラ削り，扁平なボタン状つまみ	5号住(T3)	30%
4	土師器	坏	[14.6]	(4.5)	—	砂粒	暗赤褐	普通	内外面刷毛状工具によるナデ，内外面赤彩	11号住(T4)	20%
5	土師器	小形壺	[12.6]	(5.7)	—	白色顆粒，赤色粒子	暗赤褐	普通	内面刷毛状工具によるナデ，口縁部外面横ナデ	11号住(T4)	30%
6	須恵器	蓋	[16.0]	(1.9)	—	雲母，長石	灰黄	普通	天井部右ロクロ回転ヘラ削り，かえり有り	15号住(T4)	20%
7	須恵器	高台付坏	[13.4]	(3.7)	[9.6]	緻密	灰	良好	低い角高台が底部のいちばん外側に付く	18号住(T11)	20%　PL4
8	須恵器	壺	[14.4]	(3.0)	—	緻密	灰白	良好	天井部灰オリーブ釉。口縁端部わずかなつまみ出し	18号住(T11)	25%　PL4
10	土師器	甕	[21.0]	(10.6)	—	雲母，長石	にぶい橙	普通	体部内外面ヘラ状工具によるナデ，口縁部内外面横ナデ	18号住(T11)	10%
12	土師器	坏		(3.1)	—	赤色粒子	橙	普通	内面放射状ヘラ磨き，外面指頭痕	19号住(T13)	10%
13	土師器	甕	[17.8]	(14.4)	—	白色顆粒，長石	にぶい赤褐	普通	内外面刷毛状工具によるナデ	19号住(T13)	20%
14	土師器	坏	14.0	5.3	—	雲母，長石，角礫	にぶい橙	普通	底部，体部下半手持ちヘラ削り。内面黒色処理，ヘラ磨き	47号住(T1)	100%
15	灰釉陶器	長頸瓶	—	(8.5)	—	緻密，黒色斑	灰白	良好	頸部灰オリーブ釉，頸部接合痕	5号溝	20%
16	須恵器	壺	[14.6]	(2.7)	—	雲母，長石	灰黄	普通	天井部右ロクロ回転ヘラ削り，かえり有り	T1	15%
17	須恵器	蓋	—	(1.8)	—	雲母，長石	灰白	普通	天井部右ロクロ回転ヘラ削り，扁平なボタン状つまみ	T1	15%
18	須恵器	壺	—	(5.5)	—	長石	褐灰	普通	外面オリーブ灰色の自然釉	T2	10%
19	土師器	坏	[13.6]	(3.6)	—	微粒	褐	普通	口縁部と体部との境に段を有す。体部外面手持ちヘラ削り。内面・口縁部外面ナデ	T3	10%
20	土師器	高台付椀	—	(2.9)	7.6	雲母，長石，赤色粒子	暗赤褐	普通	底部左ロクロ回転ヘラ削り後，高台貼り付け	T3	40% ヘラ書き「×」
21	須恵器	蓋	—	(1.6)	—	雲母，長石	褐	不良	天井部右ロクロ回転ヘラ削り，扁平なボタン状つまみ	T3	15%
22	須恵器	坏	[11.4]	3.7	[8.0]	雲母，長石，小石	灰白	不良	底部右ロクロ回転ヘラ削り	T4	40%
23	須恵器	蓋	[16.0]	(2.4)	—	雲母，長石	灰黄	普通	かえり有り	T4	10%
24	須恵器	鉢	—	(7.9)	—	雲母，長石	灰黄	普通	口縁端部が外側につまみ出される。体部に2本の沈線	T4	5%
25	須恵器	坏	—	(0.9)	8.6	雲母，長石	灰白	普通	底部右ロクロ回転ヘラ削り	T5	20%
26	須恵器	蓋	[11.2]	(1.8)	—	長石，角礫	灰白	普通	丸みのある天井。天井部右ロクロ回転ヘラ削り。かえり有り	T5	20%
27	須恵器	甕	—	(6.6)	—	長石	灰	普通	内面同心円状当て具痕	T5	5%
28	土師器	甕	18.4	(6.0)	—	砂粒，赤色粒子	橙	普通	内外面6本1組の櫛歯状工具によるナデ	T10	20%

番号	種別	器種	長さ	径	重量	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3	土製品	棒状製品	(5.9)	2.3	(34.8)	長石	にぶい赤褐	普通	手持ちヘラ削り後，刷毛状工具によるナデ	6号住(T5)	10%

第５章　九重東岡廃寺

第１節　遺跡の概要

調査によって確認された遺構は，掘立柱建物跡３棟，竪穴住居跡32軒，溝跡６条である。今年度の調査区は平成12年度の調査区の北側と東側の区域であり，第１～17号のトレンチを設定して実施した。調査の目的は主要伽藍と寺域溝の確認であったが，主要伽藍と成りうる建物跡は確認できなかった。今回の確認調査で確認した第５号溝跡は，平成12年度調査の第２号溝跡とつながることが確実となり，この溝跡は東西方向からほぼ90度屈曲して南方向へはしることが確認された。また，金田西遺跡の第５号溝跡と当遺跡の第７号溝跡がつながる可能性が予想される。本調査はトレンチ調査が基本で掘立柱建物跡や溝跡については一部拡張をして確認を行った。一部の遺構については土層観察を実施したが，基本的には平面確認だけであるため，時期・性格等の詳細な情報は少ない。ここでは，溝跡については概略について記し，掘立柱建物跡・竪穴住居跡については一覧表で記載する。

第２節　遺構と遺物

１　溝跡

第５号溝跡（第86図）

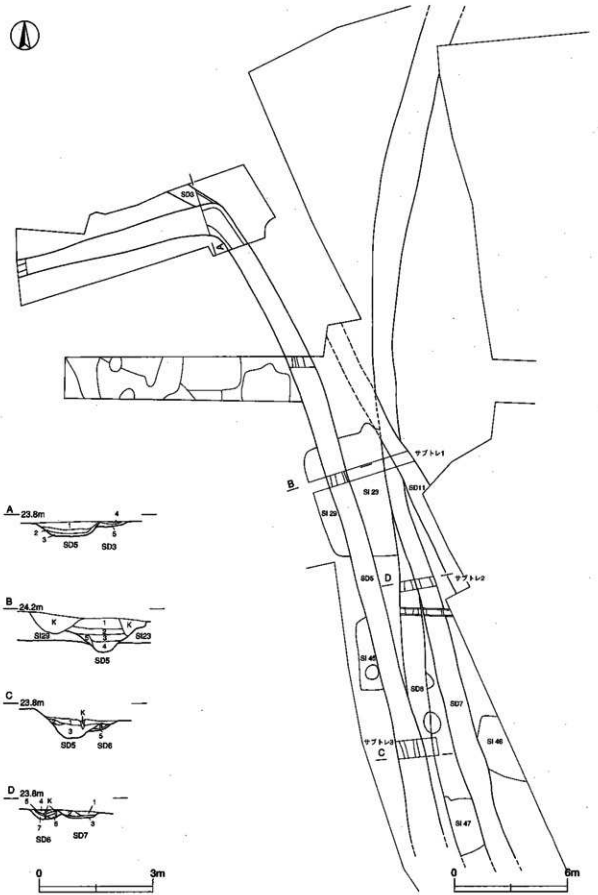
調査区中央の南部，Ｕ２～Ｕ５，Ｕ５～Ｗ６区に位置する。平成12年度調査の第２号溝跡からＮ－75°－Ｅの傾きで66m西に走り，Ｕ５区でほぼ直角に屈曲して，36m南に走る。確認できた長さは，平成12年度調査分も含めて102mである。確認できた上幅は1.2～1.5m，確認面からの深さは浅いところで0.3m，深いところで0.5m，断面は薬研堀状を呈する。本跡は第３・６号溝跡より新しく，第23号竪穴住居跡を掘り込んでいる。覆土には白色粘土を含んでおり，南北方向に走る部分の底面付近では瓦片が敷き詰められるように出土した。今回の確認調査では228点の瓦片が出土し，内訳は丸瓦78点（玉縁12点を含む），平瓦144点，軒平瓦２点，軒丸瓦４点である。

第６号溝跡（第86図）

調査区中央の南部，Ｖ６～Ｗ６区に位置する。第５・７号溝に掘り込まれて，本跡が最も古い。２つの溝跡に掘り込まれているため，確認できた長さは15mで，Ｎ－１°－Ｗで南北にはしり，幅1.2m，深さ0.18mである。覆土には白色粘土と砂質ロームが多く含まれている。出土遺物は土師器片・須恵器片・灰釉陶器片の他，瓦片30点である。瓦片の内訳は丸瓦７点（玉縁１点を含む），平瓦23点である。

第７号溝跡（第86図）

調査区中央の南部，Ｕ６～Ｗ６区に位置する。第６号溝跡・第23号竪穴住居跡を掘り込んでおり，本跡の方が新しい。また，第11号溝に掘り込まれており，本跡が古い。第６号溝跡と合流する付近まではＮ－13°－Ｗで南北方向にはしり，これより北側ではＮ－10°－Ｅの方向に変わる。北方向に延長すると，金田西遺跡の第５号溝跡につながる可能性が強い。確認長は90m，幅1.4～2.0m，深さ0.2mである。覆土には白色粘土が含まれている。出土遺物は土師器片87点，須恵器片59点，灰釉陶器片１片，瓦片92点である。出土瓦の内訳は丸瓦35点（玉縁２点を含む），平瓦54点，軒平瓦３点である。



第86図　第5・6・7号溝跡実測図

土層解説（第3・5号溝跡，A）

1　黒　　色　白色粘土粒子微量，粘性強　（5号溝）
2　黒　　色　白色粘土中ブロック微量，粘性強（同上）
3　黒　　色　白色粘土小ブロック少量，粘性強（同上）
4　黒　　色　ローム粒子微量　（3号溝）
5　暗 褐 色　ローム大ブロック少量　（同上）

土層解説（B）

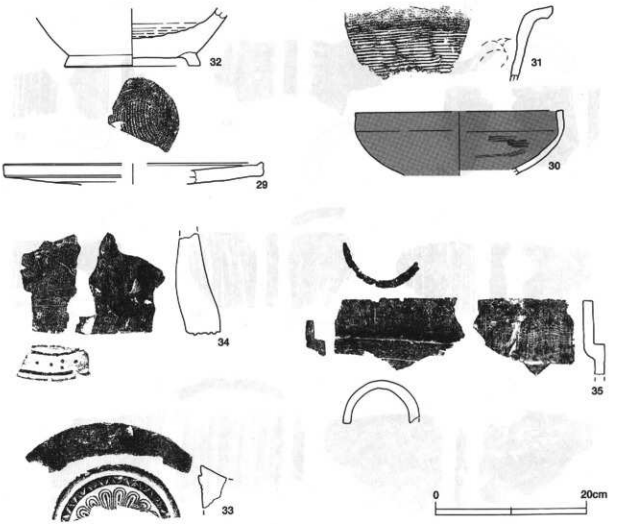
1　暗 褐 色　焼土粒子・炭化物・ローム粒子微量
2　極暗褐色　焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子・ローム粒子微量
3　黒 褐 色　焼土粒子微量
4　黒 褐 色　焼土小ブロック・砂質粘土小ブロック少量（遺物多量）
5　褐　　色　ローム粒子微量

土層解説（第5・6号溝跡，C）

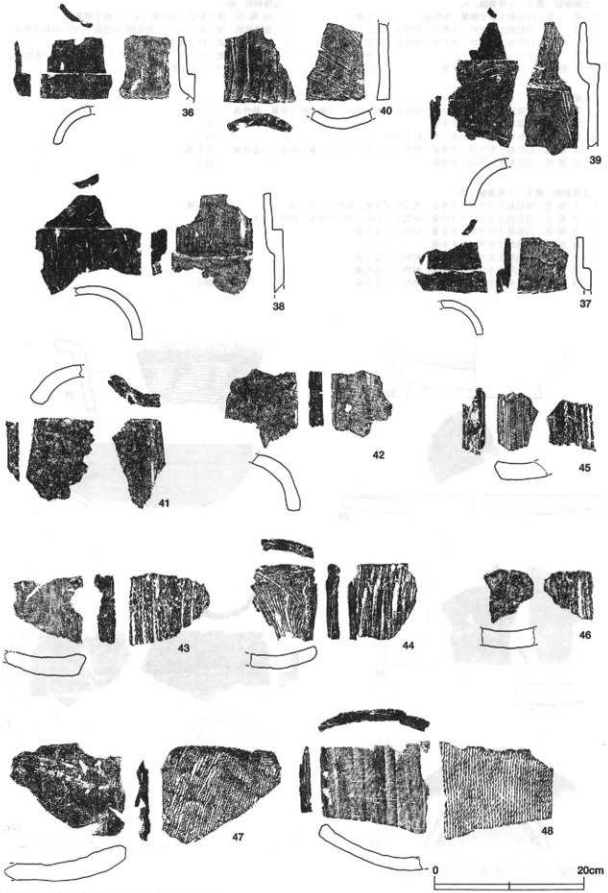
1　黒 褐 色　砂質粘土小ブロック中量，砂質粘土中ブロック・焼土粒子少量，粘性強　（5号溝）
2　黒 褐 色　砂質粘土小ブロック少量　（同上）
3　黒 褐 色　白色粘土中ブロック・焼土粒子少量　（同上）
4　黄 褐 色　白色粘土中ブロック多量，砂質ローム中ブロック中量，粘性・しまり強　（6号溝）
5　黒 褐 色　白色粘土小ブロック中量　（同上）

土層解説（第6・7号溝跡，D）

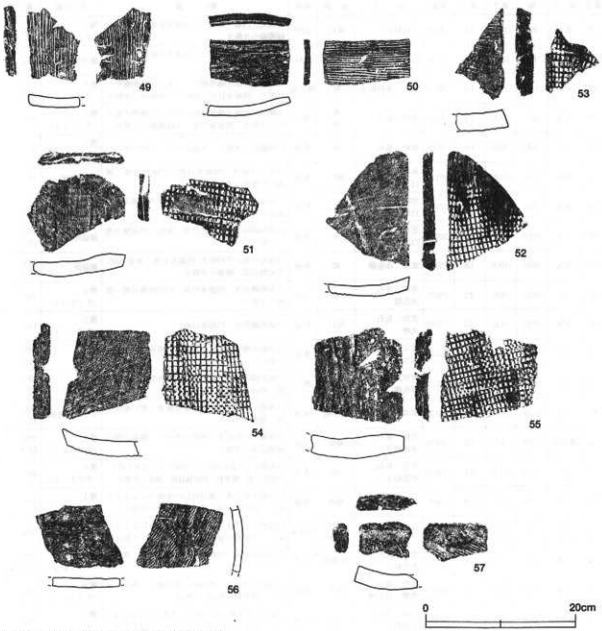
1　黄 褐 色　砂質粘土中ブロック多量，焼土粒子少量，粘性・しまり強　（7号溝）
2　黒 褐 色　白色粘土小ブロック中量，砂質ローム中ブロック少量，粘性・しまり強　（同上）
3　黒 褐 色　白色粘土中ブロック少量，粘性・しまり強　（同上）
4　黄 褐 色　白色粘土中ブロック少量　（6号溝）
5　浅 黄 色　白色粘土大ブロック多量，粘性・しまり強　（同上）
6　黒 褐 色　白色粘土小ブロック少量，粘性・しまり強　（同上）
7　浅 黄 色　白色粘土中ブロック中量，粘性・しまり強　（同上）



第87図　第5号溝跡出土遺物実測図(1)



第88図　第５号溝跡出土遺物実測図(2)



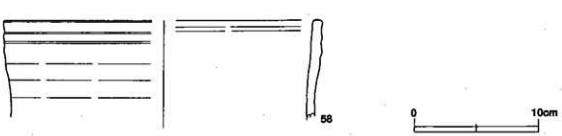
第89図　第５号溝跡出土遺物実測図(3)

第５号溝跡出土遺物観察表（第87～89図）

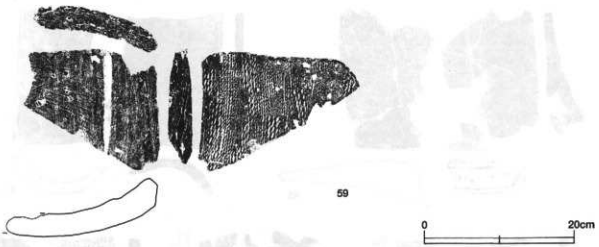
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
29	須恵器	高盤	[20.6]	(1.7)	—	砂粒	灰	普通	口縁端部はわずかにつまみ上げられる。底部右ロクロ回転ヘラ削り	T５確認面	10%
30	土師器	鉢鉢形	[16.8]	(5.1)	—	雲母，砂粒	黒褐	普通	口縁端部平滑面。内面ヘラ磨き，黒色処理	T11内	10%
31	須恵器	鉢	—	(6.0)	—	雲母	灰	普通	外面横位平行叩き，内面指頭押圧痕	T６内	10%
32	須恵器	短頸壺	—	(4.6)	[10.8]	長石，黒色微吹き出し	灰	普通	底部回転糸切り痕，内面自然釉	覆土（T５）	10%

番号	種別	幅	長さ	厚さ	重量	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
33	軒丸瓦	[17.0]	—	—	(378.1)	雲母，長石	黒褐	堅	蓮弁文縁短弁十六葉	覆土（サブトレ１）	10% PL６
34	軒平瓦	(10.7)	(13.2)	5.0	(738.9)	雲母，白色粒子	灰	普通	瓦当面連珠文。凸面ヘラ削り，凹面布目痕	覆土（サブトレ２）	10% PL６
35	丸瓦	(10.8)	(8.0)	1.1	(334.2)	雲母，長石	黒	堅	玉縁式。凸面ヘラ削り，凹面布目痕。側面ヘラ削り	覆土（サブトレ１）	10%

番号	種別	幅	長さ	厚さ	重量	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
36	丸瓦	(9.0)	(10.2)	2.1	(147.1)	白色粒子	灰白	良好	玉縁式。凸面ヘラ削り，凹面布目痕。側面・玉縁端面ヘラ削り	覆土（サブトレ1）	10%
37	丸瓦	(8.6)	(7.0)	0.9	(115.0)	白色粒子，長石	青黒	良好	玉縁式。凸面ヘラ削り，凹面布目痕。側面・玉縁端面ヘラ削り	確認面	10%
38	丸瓦	(11.2)	(13.0)	1.3	(324.5)	雲母，赤色粒子	橙	焼火場	玉縁式。凸面玉縁部横位ヘラ削り，筒部縦位ヘラ削り。凹面布目痕。側面・玉縁端面ヘラ削り	覆土（サブトレ3）	20%
39	丸瓦	(8.3)	(16.3)	1.3	(274.1)	雲母，長石	褐黒	焼り	玉縁式。凸面玉縁部横位ヘラ削り，筒部不定方向ヘラ削り。凹面布目痕。玉縁端面ヘラ削り	覆土（サブトレ3）	20%
40	丸瓦	(8.8)	(10.2)	1.4	(160.0)	砂粒，長石	灰	普通	凸面縦位ヘラ削り。凹面布目痕，糸切り痕	覆土（サブトレ3）	20%
41	丸瓦	(7.0)	(11.8)	1.6	(191.4)	長石，角礫，白色微粒	褐灰	普通	凸面ヘラ削り。凹面布目痕。凹面側辺部・側面・狭端部ヘラ削り	T11確認面	10%
42	丸瓦	(9.0)	(10.0)	1.8	(179.8)	砂粒，長石，白色粒子	褐灰	普通	凸面縦位ヘラ削り。凹面布目痕。凹面側辺部・側面ヘラ削り	覆土（サブトレ3）	10%
43	平瓦	(10.2)	(9.3)	2.7	(326.7)	長石，角礫，白色粒子	灰	普通	凸面縦横叩き。凹面布目痕。側面・凹面側辺部ヘラ削り	確認面	10% PL 8
44	平瓦	(9.0)	(10.3)	1.8	(239.8)	雲母，赤色礫	橙	普通	凸面目の粗い平行叩き，凹面布目痕・糸切り痕。凹面側辺部・側面ヘラ削り	確認面	10% PL 7
45	平瓦	(6.7)	(8.9)	2.1	(156.5)	雲母，長石，赤色礫	橙	不良	凸面縦横叩き，凹面布目痕。凹凸両側辺部・側面ヘラ削り	覆土（サブトレ2）	10%
46	平瓦	(7.0)	(6.4)	2.4	(137.0)	雲母，長石，角礫	灰白	普通	凸面縦横叩き。凹面布目痕	覆土（サブトレ3）	10%
47	平瓦	(16.1)	(13.0)	2.6	(613.0)	雲母，小石，赤色礫	灰	普通	凸面縦横叩き，凹面布目痕，横骨痕。側面ヘラ削り	確認面	20% PL 7
48	平瓦	(6.7)	(8.9)	2.1	(457.1)	雲母，長石，赤色礫	褐黒	焼り	凸面縦横叩き，凹面布目痕，横骨痕。凹面側辺部・側面ヘラ削り	覆土（サブトレ2）	20% PL 7
49	平瓦	(6.8)	(9.5)	1.3	(134.2)	雲母，赤色粒子	暗赤褐	普通	凸面粗い糸切り痕。凹面布目痕後，粗い糸切り痕。側面ヘラ削り	6トレ確認面	10% PL 8
50	道具瓦	(11.0)	(5.7)	1.2	(123.8)	雲母，長石，赤色粒子	褐灰	普通	凸面横位平行叩き，凹面ヘラナデ，側面・凹凸両側辺部ヘラ削り	覆土（サブトレ3）	10% PL 8
51	平瓦	(11.9)	(11.2)	2.1	(328.0)	雲母，長石，黒色粒子	灰	普通	凸面格子叩き後部分的にヘラ削りによるすり消し。凹面布目痕，横骨痕。凹凸両側辺部・側面ヘラ削り	覆土（サブトレ3）	20%
52	平瓦	(10.6)	(15.7)	1.3	(258.9)	雲母，白色粒子	暗灰	普通	凸面格子叩き後，部分的にヘラ削りによるスリ消し。凹面布目痕，横骨痕。側面ヘラ削り	覆土（サブトレ1）	10%
53	平瓦	(7.0)	(11.5)	2.3	(197.0)	雲母，角礫	青灰 灰赤	焼火場	凸面格子叩き後，部分的にヘラ削りによるスリ消し。凹面布目痕・糸切り痕。側面ヘラ削り	覆土（サブトレ1）	10%
54	平瓦	(10.2)	(12.7)	1.9	(379.3)	雲母，長石，赤色粒子	灰黄褐	不良	凸面格子叩き。凹面布目痕・糸切り痕。側面ヘラ削り	覆土（サブトレ3）	20% PL 8
55	平瓦	(12.2)	(12.0)	2.9	(634.7)	雲母，長石，角礫，黒色礫	青灰	良好	凸面格子叩き後，部分的にすり消し。凹面ヘラ削り，横骨痕。側面ヘラ削り	覆土（サブトレ2）	20%
56	道具瓦	(10.3)	(8.0)	1.2	(138.0)	雲母，長石，赤色粒子	灰黄	普通	凸面平行叩き後，部分的にヘラ状工具によるなでつけ。凹面ヘラ状工具によるナデ。凸面糸あり	覆土（サブトレ3）	10%
57	平瓦	(18.4)	(5.0)	1.9	(114.0)	雲母，白色粒子，小礫	灰	不良	凸面平行叩き，凹面ヘラ削り。側面ヘラ削り	T5確認面	10%



第90図　第6号溝跡出土遺物実測図(1)

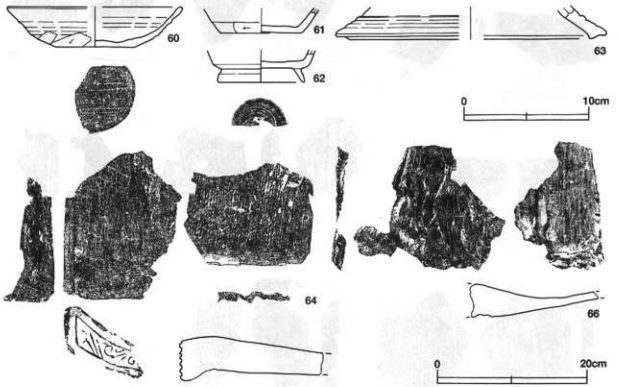


第91図　第６号溝跡出土遺物実測図(2)

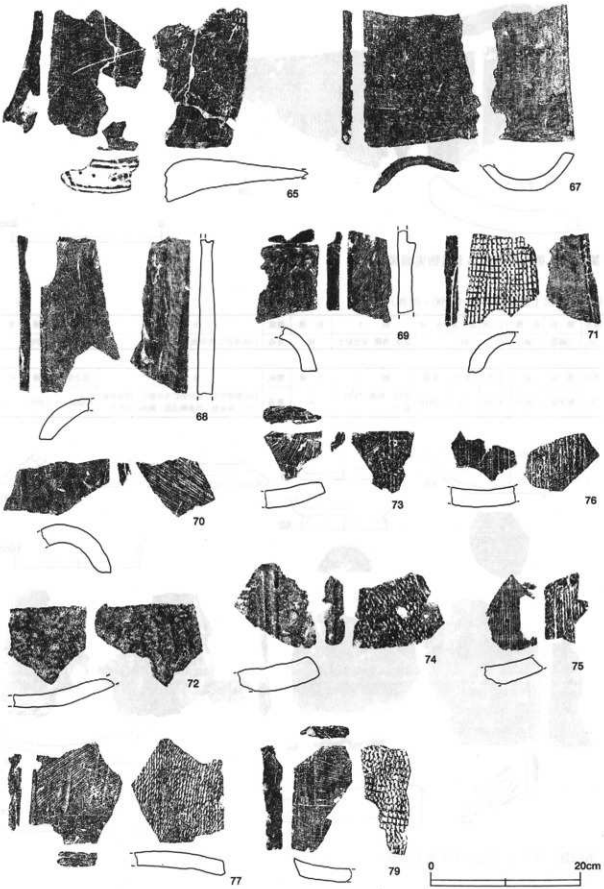
第６号溝出土遺物観察表（第90・91図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
58	土師器	鉢	[25.7]	(8.0)	—	雲母、角閃、赤色粒子	橙	普通	口縁端部に水平面をもつ	覆土面	10%

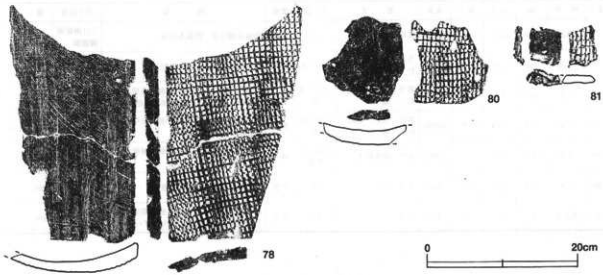
番号	種別	幅	長さ	厚さ	重量	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
59	軒平瓦	(18.8)	(15.6)	3.1	(1181.0)	雲母、角閃、黒色粒子	灰	普通	凸面縄綾叩き，部分的にスリ消し。凹面糸切り痕，模骨痕，凹面側辺部・側面ヘラ削り	覆土面	10%



第92図　第７号溝跡出土遺物実測図(1)



第93図　第７号溝跡出土遺物実測図(2)



第94図　第７号溝跡出土遺物実測図(3)

第７号溝跡出土遺物観察表（第92～94図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
60	須恵器	坏	[14.0]	3.2	6.4	雲母，角礫，赤色粒子	にぶい橙	微火焔	底部一方向手持ちヘラ削り。体部下端手持ちヘラ削り。口縁端部肥厚	確認面	40%
61	須恵器	坏	—	(2.0)	6.6	長石，白色粒子	灰	普通	底部回転ヘラ切り後，雑な一方向のナデ，体部下端手持ちヘラ削り	確認面	20%
62	須恵器	高台付坏	—	(2.6)	7.0	砂粒，長石	灰	良好	底部回転ヘラ削り後，細く高い高台貼り付け	確認面	20%　ヘラ書き「×」
63	須恵器	脚部	—	(2.7)	[22.0]	長石，白色粒子	灰	普通	脚部に凸線が巡る	確認面	10%

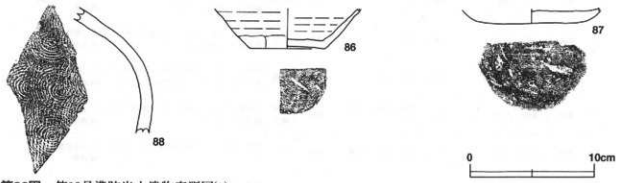
番号	種別	幅	長さ	厚さ	重量	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
64	軒平瓦	(15.3)	(19.1)	4.2	(2030.0)	雲母，長石，赤色粒子	灰褐 黒褐	燒ち	均整唐草文。段顎，凸面横縄叩き，凹面布目痕。糸切り痕	T11南拡張 確認面	30%　PL 6
65	軒平瓦	(11.7)	(19.5)	3.4	(945.1)	雲母，長石	灰白	普通	瓦当面連珠文。凸面縦位ヘラ削り。凹面布目痕	T５北拡張 確認面	30%　PL 6
66	軒丸瓦	(14.8)	(15.6)	—	(756.2)	雲母，長石	灰	普通	瓦当面欠損。凸面縦位ヘラ削り，凹面布目痕	T11南拡張 確認面	30%　PL 6
67	丸瓦	(12.2)	(18.2)	1.5	(593.7)	雲母，赤色粒子	橙	酸火焔	凸面ヘラ削り，凹面布目痕，瓦骨痕。凹面側辺部・側面ヘラ削り。	T11南拡張 確認面	40%
68	丸瓦	(10.0)	(20.5)	2.3	(459.4)	雲母，長石，赤色粒子	橙	酸火焔	玉縁式。凸面ヘラ削り。凹面布目痕。凹面側辺部・側面ヘラ削り	T11南拡張 確認面	40%
69	丸瓦	(5.0)	(11.0)	1.6	(229.6)	雲母，長石	青灰	良好	玉縁式。凸面ヘラ削り，指頭押圧痕。凹面布目痕。凹面側辺部・側面ヘラ削り	T11南拡張 確認面	20%
70	丸瓦	(9.3)	(7.0)	2.2	(260.0)	雲母，長石	暗灰	普通	凸面ヘラ削り，指頭痕あり。凹面布目痕・糸切り痕。側面・凹面側辺部ヘラ削り	T５北拡張 確認面	10%
71	丸瓦	(6.0)	(12.0)	1.9	(271.1)	雲母，長石，赤色粒子	褐灰	一部燒ち	凸面格子叩き。凹面布目痕。側面・凹面側辺部ヘラ削り	T５北拡張 確認面	20%
72	平瓦	(13.4)	(10.3)	1.9	(316.8)	雲母，長石，角礫	灰白	不良	摩滅が激しい。凸面指頭押圧痕，凹面布目痕	T５北拡張 確認面	10%
73	平瓦	(7.9)	(9.2)	2.5	(183.1)	雲母，長石	明褐灰	不良	摩滅が激しい。凸面太縄叩き。凹面布目痕・糸切り痕	T５北拡張 確認面	10%
74	平瓦	(10.9)	(9.5)	3.4	(510.5)	長石，角礫，白色粒子	橙	普通	凸面太縄叩き，凹面横骨痕	T５北拡張 確認面	20%

番号	種別	幅	長さ	厚さ	重量	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
75	平瓦	(7.6)	(10.1)	2.4	(232.2)	雲母，角礫	灰	普通	凸面長縄叩き，凹面布目痕	T11南拡張確認面	10%
76	平瓦	(8.4)	(7.0)	2.3	(183.4)	雲母，長石，赤色粒子	にぶい褐	普通	凸面長縄叩き，凹面ヘラ削り	T11拡張確認面	10%
77	平瓦	(11.6)	(13.4)	2.2	(478.7)	雲母，長石，赤色粒子，礫	にぶい褐黒	堅り	凸面長縄叩き。凹面布目痕・赤切り痕・横骨痕。側面・凹面側端部へラ削り	T11南拡張確認面	25%
78	平瓦	(17.1)	(24.8)	1.8	(1380.0)	雲母，長石，赤色粒子・礫	にぶい褐黒	堅り	凸面格子叩き，凹面布目痕・赤切り痕・横骨痕。側面ヘラ削り。	T11南拡張確認面	40% PL 6
79	平瓦	(7.6)	(14.0)	1.7	(259.2)	雲母，赤色粒子	にぶい褐黒褐	堅り	凸面格子叩き，凹面布目痕。側面ヘラ削り	T11南拡張確認面	10%
80	平瓦	(10.1)	(11.6)	1.7	(264.0)	雲母，長石	灰白	不良	凸面格子叩き，凹面布目痕。	T5南拡張確認面	10%
81	道具瓦	(4.3)	(5.1)	1.0	(33.3)	雲母	暗灰	普通	凸面格子叩き，凹面布目痕。側面ヘラ削り。狭端部が凹面側に折り曲げられる	T5南拡張確認面	10%

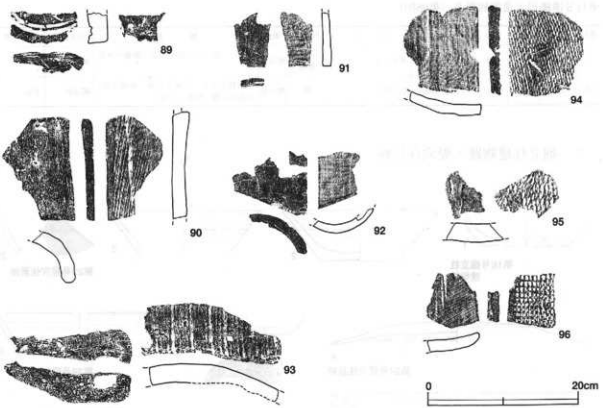
第95図　第９号溝跡出土遺物実測図

第９号溝出土遺物観察表（第95図）

番号	種別	幅	長さ	厚さ	重量	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
82	丸瓦	(4.4)	(5.8)	1.4	(55.0)	砂粒	灰	普通	玉縁部欠損。凸面ヘラ削り，凹面布目痕。	確認面	10%
83	丸瓦	(4.6)	(5.8)	1.1	(44.1)	雲母，白色粒子，小礫	暗赤褐	微火焔	凸面かき目状工具痕，凹面布目痕	確認面	10%
84	平瓦	(8.3)	(11.6)	1.7	(275.3)	雲母，白色微粒，長石	灰	普通	凸面細縄叩き，凹面布目痕	確認面	10%
85	平瓦	(8.7)	(6.5)	1.5	(121.7)	雲母，白色粒子	灰	良好	凸面格子叩き，部分的にスリ消し。凹面布目痕	確認面	10%



第96図　第10号溝跡出土遺物実測図(1)



第97図　第10号溝跡出土遺物実測図(2)

第10号溝跡出土遺物観察表（第96・97図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
86	須恵器	坏	—	(3.3)	[6.4]	雲母，長石	灰	普通	底部・体部下端手持ちヘラ削り。	確認面	20%
87	須恵器	坏	—	(1.3)	[9.8]	雲母，長石，角礫	灰白	普通	丸底気味の底部，不定方向の手持ちヘラ削り	確認面	20%
88	須恵器	甕	—	(10.0)	—	雲母，長石	灰	普通	外面同心円状叩き，内面ナデ	確認面	10%

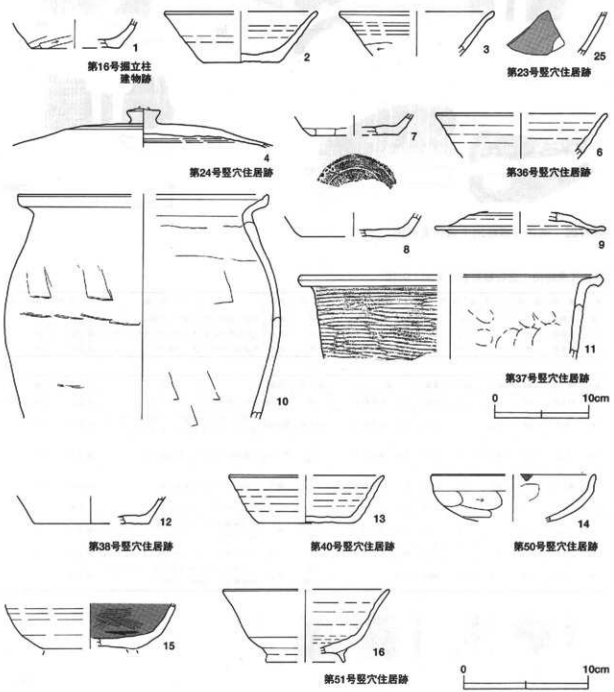
番号	種別	幅	長さ	厚さ	重量	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
89	軒丸瓦	(8.8)	—	2.5	(124.4)	雲母，赤色粒子	橙	酸火焔	蓮弁七葉蓮華文か。笵キズ有り	確認面	10% PL 6
90	丸瓦	(4.8)	(13.5)	1.6	(272.2)	雲母，赤色粒子	暗赤褐	酸火焔	玉縁式。凸面ヘラ削り，凹面布目痕，糸切り痕。凹凸面側辺部・側面ヘラ削り	確認面	30%
91	丸瓦	(4.7)	(6.1)	1.1	(46.0)	雲母，赤色粒子	灰 灰褐	酸火焔	凸面縦位ヘラ削り，凹面布目痕。	確認面	5%
92	道具瓦	(8.0)	(8.5)	1.4	(111.6)	雲母，赤色粒子	暗赤褐 黒	強り	凸面ヘラ削り，凹面布目痕	確認面	10%
93	平瓦	(18.5)	(6.7)	2.8	(104.8)	長石，赤色礫	にぶい橙	不良	凸面太縄叩き，凹面布目痕。	確認面	10%
94	平瓦	(9.5)	(10.7)	1.4	(275.9)	雲母，赤色粒子	暗赤褐 黒	強り	凸面細縄叩き，凹面布目痕・模骨痕。側面ヘラ削り	確認面	20%
95	平瓦	(7.5)	(6.3)	2.3	(144.3)	粗悪，小石多量	灰	普通	凸面太縄叩き。凹面布目痕	確認面	5%
96	平瓦	(6.8)	(7.3)	1.4	(384.0)	雲母	灰 淡橙	不良	凸面格子叩き，凹面布目痕・糸切り痕。凸面側辺部・側面ヘラ削り	確認面	5%

第98図　第11号溝跡出土遺物実測図

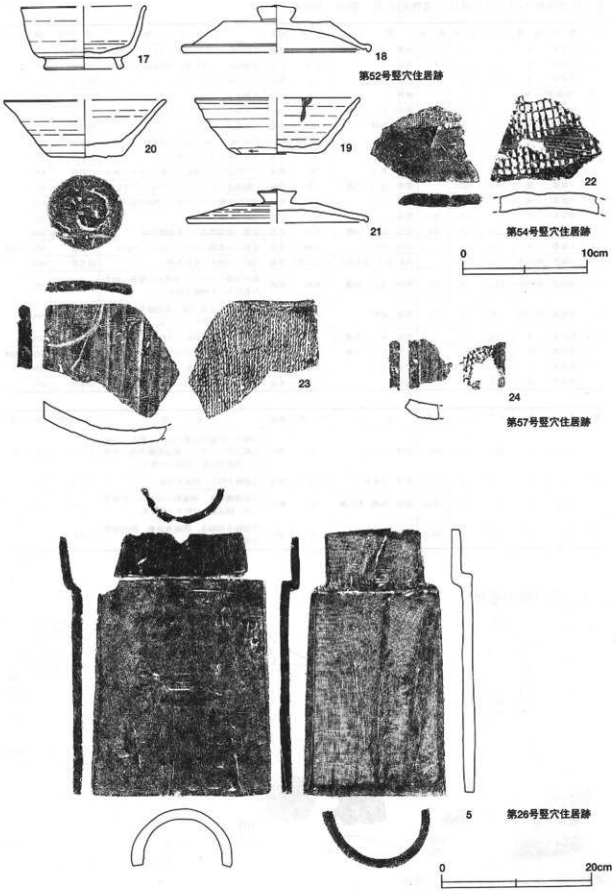
第11号溝跡出土遺物観察表（第98図）

番号	種別	幅	長さ	厚さ	重量	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
97	丸瓦	(3.8)	(4.8)	1.4	(49.1)	赤色粒子	にぶい褐 褐灰	酸火焔	凸面ヘラ削り，凹面隅辺部・側面ヘラ削り	確認面	5％
98	平瓦	(6.3)	(5.1)	1.9	(96.0)	白色粒子	橙	酸火焔	凸面格子叩き，凹面布目痕・糸切り痕。凸面側辺部・側面ヘラ削り	確認面	5％

2　掘立柱建物跡・竪穴住居跡



第99図　掘立柱建物跡・竪穴住居跡出土遺物実測図(1)



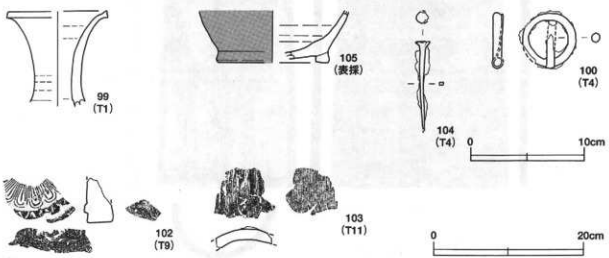
第100図　掘立柱建物跡・竪穴住居跡出土遺物実測図(2)

掘立柱建物跡・竪穴住居跡出土遺物観察表（第99・100図）

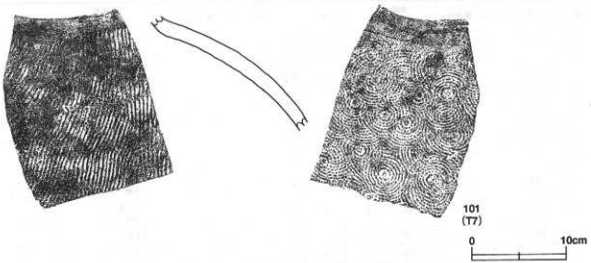
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	須恵器	坏	—	(2.3)	[7.0]	角礫	灰	普通	底部回転ヘラ切り。体部下端手持ちヘラ削り	16号掘立	20%
2	須恵器	坏	[12.2]	4.1	6.1	長石	灰黄	不良	底部回転ヘラ切り後，外周回転ヘラ削り	23号住	50%
3	須恵器	坏	[12.4]	(3.6)	—	雲母，長石	灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り	23号住	10%
25	二彩陶器	小瓶?	—	(3.5)	—	軟質	白	普通	外面オリーブ釉	23号住	10%
4	須恵器	蓋	—	(3.1)	—	雲母，長石，角礫	にぶい黄橙	二次焼成	天井部右ロクロ回転ヘラ削り	24号住	40%
6	須恵器	坏	[13.8]	(2.0)	—	長石，角礫	灰	普通	内外面ロクロナデ	36号住	10%
7	須恵器	坏	—	(1.6)	[7.0]	雲母，長石	にぶい橙	酸化焼	底部回転ヘラ切り，体部下端手持ちヘラ削り	36号住	10%
9	須恵器	蓋	[13.8]	(1.7)	—	雲母，長石	灰	普通	底部回転ヘラ切り後雑なナデ	37号住	20%
10	土師器	甕	[20.0]	(18.0)	—	雲母，長石，角礫	橙	普通	口縁端部つまみ上げ。内外面ヘラ当て痕	37号住	30%
11	須恵器	鉢	[32.0]	(9.0)	—	雲母，長石	暗灰	普通	体部外面横位の平行叩き，内面指頭押圧痕	37号住	10%
12	須恵器	坏	—	(2.2)	[9.2]	雲母	灰白	不良	底部回転ヘラ切り	38号住	10%
13	須恵器	坏	[12.4]	3.9	8.0	雲母，長石，角礫	灰白	普通	底部・体部摩滅のため調整不明	40号住	60%
14	土師器	坏	[13.0]	(3.8)	—	雲母，砂粒	黒褐	普通	底部から体部にかけて手持ちヘラ削り	50号住	30% 内面油煙
15	土師器	高台付坏	—	(3.6)	—	長石・長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	内面ヘラ磨き，黒色処理	51号住	20%
16	須恵器	高台付坏	[13.2]	5.8	[6.2]	雲母・長石・角礫	黒灰	普通	高台は細く小さい。底部から体部へのたちあがりに不明瞭な段をもつ	51号住	20%
17	須恵器	高台付坏	[10.0]	5.1	6.1	雲母，砂粒	灰黄	普通	底部回転ヘラ削り後，高台貼り付け。高台は太くしっかりしている	52号住	70%
18	須恵器	蓋	[15.0]	3.9	—	雲母，長石，角礫	灰	普通	天井部右ロクロ回転ヘラ削り	52号住	60%
19	須恵器	坏	[13.2]	4.5	6.2	雲母，長石，角礫	暗灰	普通	底部・体部下端一方向の手持ちヘラ削り	54号住	50% 内面油煙
20	須恵器	坏	[13.0]	4.6	6.0	雲母，長石	灰褐	普通	底部回転ヘラ切り後，雑なヘラナデ。厚底	54号住	60%
21	須恵器	蓋	[14.4]	2.7	—	雲母	灰褐	普通	幅平な天井部，天井部右ロクロ回転ヘラ削り	54号住	40%

番号	種別	幅	長さ	厚さ	重量	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
5	丸瓦	13.4	34.9	1.5	(2000.0)	雲母，長石	黒	堅	玉縁式。凸面筒部横方向ヘラ削り，玉縁部縦方向ヘラ削り。側辺部縦方向ヘラ削り。凹部布目痕，外周ヘラ削り。	26号住	100% PL 6
22	平瓦	(8.3)	(7.0)	1.5	(101.5)	雲母，赤色粒子	にぶい橙	普通	凸面格子叩き，凹面布目痕	54号住	10%
23	平瓦	(18.2)	(15.3)	2.0	(645.0)	雲母，角礫，赤色礫	黒	堅	凸面縄縄叩き，狭端部ヘラ削り。凹面布目痕。側辺部ヘラ削り。横骨痕	57号住	10%
24	平瓦	(5.7)	(6.2)	2.0	(88.2)	長石	橙	良好	凸面格子目叩き，凹面布目痕。凹凸面側辺部縦方向ヘラ削り。横骨痕	57号住	10%

3　その他の遺物



第101図　トレンチ出土遺物実測図(1)



第102図　トレンチ出土遺物実測図(2)

トレンチ出土遺物観察表（第101・102図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
99	須恵器	長頸瓶	[8.7]	(8.4)	—	長石	灰	普通	口縁端部は上下につまみ出される	T 1	20%
101	須恵器	甕	—	(12.1)	—	長石，ガラス質の吹き出し	灰	普通	外面縦方向平行叩き，自然釉。内面同心円状当て具痕	T 7 (P 14)	10%
105	灰釉陶器	長頸瓶	—	(4.2)	[8.8]	緻密	灰	良好	高台接地面重着	表採	10%

番号	種別	幅	長さ	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
100	鉸具	4.3	4.4	0.7	(16.5)	鉄		T 4	90%
104	釘	1.1	(7.1)	0.2	(5.85)	鉄		T 4	90%

番号	種別	幅	長さ	厚さ	重量	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
102	軒丸瓦	—	—	(4.0)	(201.0)	雲母，黒色粒子	灰	普通	剛直文縁短弁十六葉	T 9	10%
103	丸瓦	(11.2)	(6.7)	1.4	(94.9)	白色粒子	灰	普通	凸面ヘラ削刻，凹面布目痕後，縦刻	T11	10%

竪穴住居跡確認状況一覧表

番号	位置	主（長）軸方向	規模（m）（長軸×短軸）	竈	出土遺物	備考（新旧関係）	時期
11	V5	N－5°－E	2.5 × (2.0)	有	土師器，須恵器	T 5	—
22	V5	N－2°－E	2.8 × (1.5)	有	土師器	T11拡張 本跡→SD5・SD7	—
23	V5	N－0°	— × (2.3)	有	土師器，須恵器，二彩カ	T11拡張	9Ｃ前
24	T5	N－18°－W	3.5 × (1.0)	有	土師器，須恵器	T11	8Ｃ代
25	R6	—	(5.0) × (2.2)	—	なし	T 9	—
26	S5	—	3.5 × (2.0)	—	瓦	T 6	—
27	S5	—	(3.6) × (0.7)	—	なし	T16	—
28	S5	—	(5.2) × (2.0)	—	なし	T16	—
29	V5	N－15°－W	5.3 × —	—	なし	T11拡張 本跡→SD5・SD7	—
30	Y5	—	4.1 × (1.8)	—	なし	T 2	—
31	T5	—	(2.0) × (1.5)	—	なし	T 6	—
36	V8	—	4.0 × (1.6)	有	土師器，須恵器	T 5	—
37	T7・8	—	—	—	土師器，須恵器	T 7拡張	8Ｃ中
38	T7・8	N－40°－W	5.0 × 5.0	有	土師器，須恵器	T 7拡張	—

番号	位置	主（長）軸方向	規模（m）（長軸×短軸）	竈	出土遺物	備考（新旧関係）	時期
39	T7・8	N－5°－E	5.1 × (3.6)	有	なし	T7拡張	—
40	U7	N－0°	2.5 × (2.0)	有	なし	T7	8C後
41	T7・8	—	—	—	須恵器	T7拡張	—
42	T7・8	—	—	—	土師器	T7拡張	—
43	T7・8	—	—	—	なし	T7拡張	—
44	T7・8	—	—	—	なし	T7拡張	—
45	V5	N－0°	4.1 × (2.3)	—	なし	T11南拡張 本跡→SD5・SD6	—
46	W6	—	3.0 × (2.1)	—	なし	T11南拡張 本跡→SD7	—
47	W6	—	3.0 × (1.6)	有	なし	T11南 本跡→SD5	—
48	U4・5	—	2.8 × 2.0	—	なし	T6	—
49	V7・8	—	(2.0) × 1.5	有	なし	T7	—
50	V7	N－0°	5.2 × 4.8	—	土師器，須恵器	T4拡張	—
51	U6	N－5°－E	4.5 × (3.8)	有	土師器，須恵器	T4拡張	9C後
52	R3	N－20°－E	2.5 × 2.2	—	須恵器	T14	—
53	S3	N－19°－E	4.6 × (3.5)	—	なし	T14	—
54	S3	N－20°－E	5.0 × (2.0)	—	土師器，須恵器，瓦	T16	9C中
55	S4	N－20°－E	3.0 × (2.1)	—	土師器	T16	—
56	U3	N－15°－E	(4.0) × 4.0	—	土師器，須恵器，瓦	T15南拡張	—
57	U3	—	(2.5) × (1.5)	—	なし	T15南拡張	—

溝跡確認状況一覧表

番号	位置	方向	確認長（m）	確認幅（m）	深さ（m）	出土遺物	備考（新旧関係）
5	U2～U5 U5～W6	N－75°－E N－15°－W	102	1.2～1.5	0.3～0.5	土師器，須恵器，灰釉陶器，瓦（軒丸・軒瓦・丸・平）	SD6→本跡
6	V6～W6	N－1°－W	15	1.2	0.18	土師器，須恵器，灰釉陶器，瓦（丸・平）	本跡→SD5→SD7
7	U6～W6	N－10°－E N－13°－W	90	1.4～2.0	0.20	土師器，須恵器，灰釉陶器，瓦（軒平・丸・平）	SD6→SD5→本跡
8	T6	—	—	—	—	なし	T2内
9	T4	N－22°－E	2.0	1.23	0.38	土師器，瓦（丸・平）	T17内
10	T5	N－70°－W	7.2	0.7	0.48	土師器，須恵器，瓦（軒丸・丸・平）	SI31→本跡
11	U5～W6	N－30°－W	16	1.2	—	土師器，須恵器，灰釉陶器，瓦（丸・平）	SD7→本跡

掘立柱建物跡確認状況一覧表

番号	位置	棟方向	柱間数（桁×梁）	規模（m）	庇	柱穴掘り方			桁行柱間（m）	梁間柱間（m）	備考 新旧関係（古→新）
						径・一辺	深さ	形状			
14	T7・U7	N－9°－E	4× (2)	4.53×3.62	—	0.6×0.6	—	円形	0.909，1.36	1.81	
15	U7	N－6°－E	3×2	4.98×3.62	—	0.6×0.8	—	楕円	1.66	1.81	
16	U7	N－7°－E	3×2	6.36×3.92	—	0.6×0.8	—	楕円	2.12	1.96	

第6章　ま　と　め

本章では金田西遺跡の遺構群の変遷・性格について検討を行い，さらに金田西坪B遺跡（正倉院），九重東岡廃寺を含めた河内郡衙関連遺跡全体の変遷を検討する。

第1節　出土土器について

当遺跡群の調査は確認調査であるため，各遺構確認面での出土遺物が大部分である。時期決定に際しては確認面から出土した遺物に頼らざるを得ない状況であるため，遺構調査で得られるような正確さに欠けることは否めない。

1期　比較的長くシャープなかえりを有する須恵器蓋，内面が放射状の磨きの扁平な土師器坏が指標となる。

2期　短いかえりを有する須恵器蓋，扁平で丸底気味の須恵器坏が指標となる。

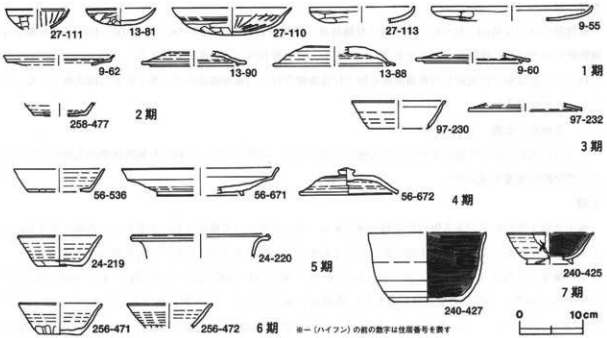
3期　須恵器蓋のかえりは消失する。須恵器坏は平底で，底径が大きい。高台付坏の法量分化がある。

4期　土師器甕の肩の張りが弱くなる。須恵器坏の底径は3期より小さくなる。盤にも法量分化がみられる。

5期　須恵器坏の底径はさらに小形化し，器高は高くなる。体部下端の手持ちヘラ削りの幅が広くなってくる。

6期　須恵器坏の底径は口径の2分の1程度になる。

7期　須恵器の食膳具はみられなくなり，ヘラ磨き・黒色処理が施された土師器が主体となる。



第103図　金田西遺跡出土土器群

第2節　遺構群の変遷

河内郡衙関連遺跡のなかで，特に金田西遺跡は遺構が集中しており，掘立柱建物跡と竪穴住居跡の重複により新旧関係が捉えられ，掘立柱建物跡については建て替え状況を把握できるものがある。さらに，掘立柱建物跡の主軸方向を細分することにより，金田西遺跡の変遷をたどることができる。まず，建物群の変遷を検討し，

これらの建物群の性格について考えてみたい。

1　金田西遺跡の変遷

(1)　掘立柱建物跡群の大別

掘立柱建物跡の主軸方向をみると，建物は以下のように五大別することが可能である。

1群（N－2～3°－E）

建物群C区の北西部を中心に展開する第50・70～72・75号掘立柱建物跡の一群と，その南部に位置する第90号掘立柱建物跡が該当する。

2群（N－0°）

建物群C区の北部中央を中心に展開する第44・49・51・53・54・57・73・95号掘立柱建物跡の一群と，建物群D区の南端部を中心とする第86・90号掘立柱建物跡の一群，建物群A区の第4・5・26・27号掘立柱建物跡が該当する。

3群（N－2～4°－W）

建物群A区の第1・43号掘立柱建物跡の一群，建物群B群の第12・13・16・31号掘立柱建物跡の一群，建物群C区の第48・74・79号掘立柱建物跡，建物群D区の第46・85・87・107号掘立柱建物跡が該当する。

4群（N－5～8°－W）

建物群A区では第21号掘立柱建物跡，建物群B区では，第1号基壇建物跡，第7～11・14～16・33・34号掘立柱建物跡，建物群D区では第45・52・83・92・98・105・108・109号掘立柱建物跡が該当する。

5群（N－10°以上－W）

建物群C区では第64・81・82・94号掘立柱建物跡，建物群D区では第69・96・99・100・103・106号掘立柱建物跡が該当する。建物群C区ではまばらに存在し，建物群D区では南部に集中する。

以上の5群は竪穴住居跡との重複関係や掘立柱建物跡の柱穴の重複関係から，第1群から順次新しくなっていくことが確認された。

(2)　建物群の変遷

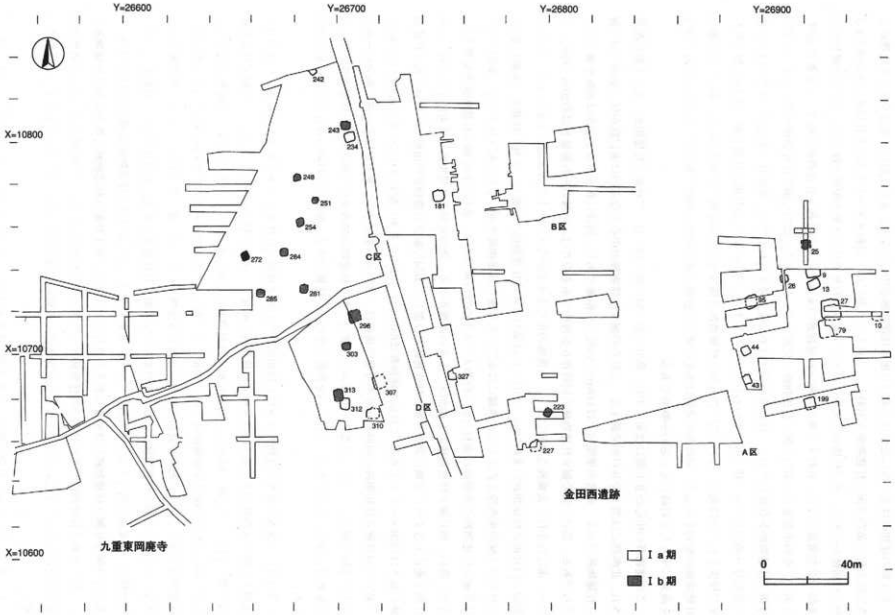
ここでは前節の出土土器による竪穴住居跡の時期区分と，本節(1)で行った掘立柱建物跡群の大別の分析をもとに建物群の変遷を試みたい。

Ⅰ期

出土土器1期に比定できる竪穴住居跡が該当する。竪穴住居だけで構成され，本格的な河内郡衙関連施設が展開される前段階である。出土土器1期の中でもわずかな時間差が認められるので時期細分が可能である。Ⅰa期に属するのは第9・10・13・26・27・43・44・79・95・181・199・227・234・242・307・310・312・327号竪穴住居跡で，大部分の竪穴住居跡が15°前後西に振れている。Ⅰb期に属するのは第25・223・243・248・251・254・264・272・281・285・296・303・313号竪穴住居跡で，主軸方向は10°以下の西の振れである。

Ⅱ期

掘立柱建物跡1・2群と出土土器2期に属する竪穴住居跡とで構成される。当期も時期細分され，先行するⅡa期は，掘立柱建物跡1群の第49・50・70～72・75・86・90号掘立柱建物跡と第258号竪穴住居跡で，建物群C区の北西部を中心に展開する。それに続くⅡb期は，建物群C区の北部中央に展開する掘立柱建物跡2群の第44・51・53・54・57・73・95号掘立柱建物跡，建物群A区に展開する第4・5・26・27号掘立柱建物跡である。



第104図　河内郡衙関連遺構群変遷図Ⅰ期

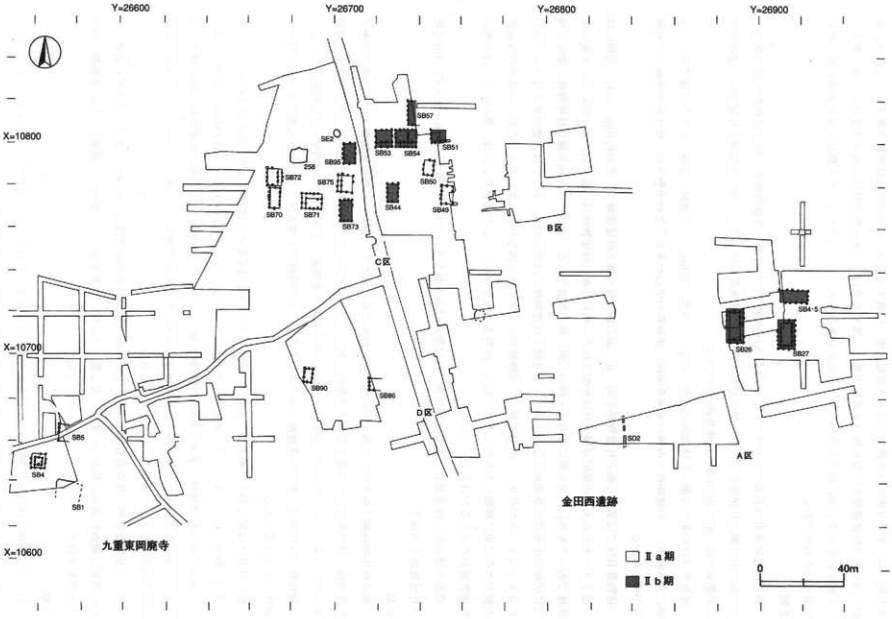
Ⅱａ期の建物群は北・西に庇が付く第71号掘立柱建物跡が中心となり，東に庇が付く第72号掘立柱建物跡と西に庇が付く第75号掘立柱建物跡が対峙し，これらの北側には一辺約８メートルの大形住居跡である第258号竪穴住居跡が存在し，掘立柱建物と大形住居という組み合わせでロの字形の配置が採られ，これらの建物の中央部分が空閑地となる。対峙する第72号掘立柱建物跡の東桁から第75号掘立柱建物跡西桁までの距離は100尺であり，その中間地点に第71号掘立柱建物跡が位置している。また，第72号掘立柱建物跡の南に近接して第70号掘立柱建物跡が存在しており，同時期の存在は不可能と考えられるため，第70号→第72号，あるいはその逆の第72号→第70号という建て替えが行われたものと思われ，第70・71・75号掘立柱建物跡，第258号竪穴住居跡で構成された小時期と，第71・72・75号掘立柱建物跡で構成された小時期とに分けられる。第72・75号掘立柱建物跡の配列をみると，同時期の建物は南北の梁が一直線に並ぶのが一般的であるが，これらは桁行１間分を南北にずらして対峙しているのが特徴である。

この建物群の中心がⅡｂ期には東にずれ，第51・53・54・95・73・44・57号掘立柱建物が，逆Ｌ字形に配置され，北西部には第２号井戸が位置する。これらの掘立柱建物跡の中心となるのは南に庇が付く第53・54号掘立柱建物跡である。両者の梁間同士は1.66m（5.5尺）の距離であり，同時に存在するか否かは判断が難しいところである。第53・54号掘立柱建物跡の同時存在が可能であるならば，２棟の桁行総延長は約20m（65尺）となり，南に庇が付く大規模な建物になり，当遺跡の中でも中心的なものとして捉えることができる。さらに，第53・54号掘立柱建物跡の東約7.0m（23尺）には第51号掘立柱建物跡が位置し，３棟の柱筋が一直線に並ぶ。これらの３棟の東西棟と直交して，西側には第73・95号掘立柱建物跡が逆Ｌ字形に配されている。第53・54・51号掘立柱建物跡の南前面は南桁行から約20メートルの空白域があり，第44・49号掘立柱建物跡が位置する。なお，第44・49号掘立柱建物跡間も約20メートルの距離がある。第54号掘立柱建物跡には東柱がみられ，この柱筋を延長するように北側に第59号掘立柱建物跡が位置し，第54号掘立柱建物跡の南桁から第44号掘立柱建物跡の長さは約20メートルである。これらの建物群は65尺という長さを基準に配列されている可能性が大である。

第53・54号掘立柱建物跡の同時存在が不可能の場合は，第53号→第54号へ，あるいはその逆の第54号→第53号という建て替えということになる。ちなみに，第54号掘立柱建物跡の西梁間と第95号掘立柱建物跡の東桁行の距離は約20メートルである。これらの建物群の性格は，建物の構造，配置や井戸跡の存在などから館と想定したい。

Ⅱｂ期には調査区東側の建物群Ａ区にも四面庇付きの南北棟掘立柱建物跡である第26・27号掘立柱建物跡と３間×５間の東西棟である第４・５号掘立柱建物跡が直交し，逆Ｌ字形に配される。第４・５号掘立柱建物跡は３間（5.4m）×５間（12.8m），第26号掘立柱建物跡は２間（4.5m）×５間（13.6m）に庇を含めると６m×15.8m，第27号掘立柱建物跡は３間（5.4m）×５間（10.7m）に庇を含めると8.1m×13.7mの大形の掘立柱建物跡である。第４号掘立柱建物から第５号掘立柱建物への桁行柱の建て替えを行っており，時期細分ができる。第26・27号掘立柱建物跡は，Ⅱａ期の第72・75号掘立柱建物跡が南北に１間分ずらして対峙しているのと同様に，南北に１間分ずらして対峙している。これら第４・26・27号掘立柱建物跡３棟が同時期に存在し，第４号→第５号掘立柱建物跡だけが建て替えられたという案と，第４号掘立柱建物跡と第26号掘立柱建物跡から，第５号掘立柱建物跡と第27号掘立柱建物跡という案の二つが考えられる。この段階ではこれらの建物群は郡庁院とは断定はできないものの，これらの建物群と西側の未調査区を含めて郡庁院の可能性がある建物群と想定する。

Ⅱａ期は，第72号掘立柱建物跡が土器群４期（８世紀後葉）に属する第246号竪穴住居跡や土器群６期（９世紀中葉）に属する第249号竪穴住居跡に切られていることから，８世紀後葉以前の時期が想定できる。



第105図　河内郡衙関連遺構群変遷図Ⅱ期

Ⅱb期では，第95号掘立柱建物がⅠ期（8世紀初頭）に属する第181・234号竪穴住居跡を掘り込んでおり，第44・54号掘立柱建物跡が土器6期（9世紀中葉）に属する第180・196号竪穴住居に掘り込まれている。第4・5号掘立柱建物はⅠ期に属する第13号竪穴住居跡を掘り込んでいることから，Ⅱb期は8世紀初頭以降9世紀中葉以前の時期である。

Ⅲ期

掘立柱建物跡群3群がこれにあたり，建物群A区の第1・43号掘立柱建物跡の一群，建物群B群の第12・13・16・31号掘立柱建物跡の一群と第97号竪穴住居跡，建物群C区の第48・74・79号掘立柱建物跡，建物群D区の第46・85・87・107号掘立柱建物跡が該当する。

建物群A区の第1号掘立柱建物跡は3間（5.7m）×9間（19.6m）で当遺跡では最も長大な建物である。前期に引き続き，この建物群と西側の未調査地区に建物群の中心があることが予想され，郡庁院が継続した可能性が考えられる。

建物群B区では第16号掘立柱建物跡が南・北二面の庇が付く掘立柱建物跡で，その約16m（53尺）北側には一辺7メートルの大形の第97号竪穴住居が配される。第12号掘立柱建物跡は，Ⅲa期には1間以上×4間の南北棟であったものに，Ⅲb期になり北・西の二面に庇が増設される。第12・13・16号掘立柱建物跡，第97号竪穴住居跡の中央部が空閑地となる。第13・31号掘立柱建物跡には間仕切り，あるいは大甕の据え付け穴と思われるようなピットが存在し，第31号掘立柱建物跡の北・東・西を囲む目隠し塀がある。これらの建物群は前期の館がさらに東に移動したものと考えられる。前期まで館が存在していた建物群C区は，第48・74・79号掘立柱建物跡が点在するだけとなっている。

南部の建物群D区東部にはこれまでは掘立柱建物跡はみられなかったが，当期には第46・85・87・107号掘立柱建物跡が出現する。

Ⅳ期

掘立柱建物跡群4群と出土土器4期の竪穴住居跡がこれにあたり，調査区東側の建物群A区では第21号掘立柱建物跡，建物群B区では第1号基壇建物跡，第7～11・14・15・33・34号掘立柱建物跡，調査区南部の建物群D区では第45・52・83・92・98・105・108・109号掘立柱建物跡，第300・308・325竪穴住居跡が該当する。

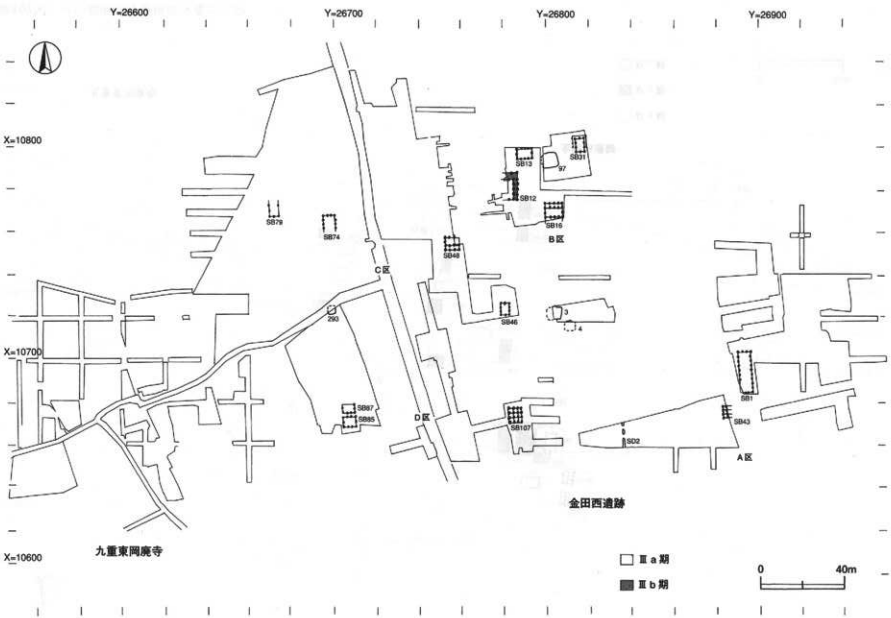
建物群A区は第21号掘立柱建物跡1棟のみであるが，その西側の未調査区と共に，Ⅱb期以来，郡庁院の可能性のある区域である。

建物群B区は建て替えが顕著で，第10号→第9・15号→第14号掘立柱建物跡の建て替えが認められており，3時期に細分される。また，Ⅱa期以来，当遺跡でみられる1間分南北にずらして2棟が対峙するという並び方で第10号掘立柱建物跡と第8号掘立柱建物跡が建っている。この第8・10号掘立柱建物跡と総柱建物の第33・34号掘立柱建物跡，第13号掘立柱建物跡は，中央部の空閑地を囲むように配されている。この区域はⅢ期に引き続き，館として機能していたと考えられる。

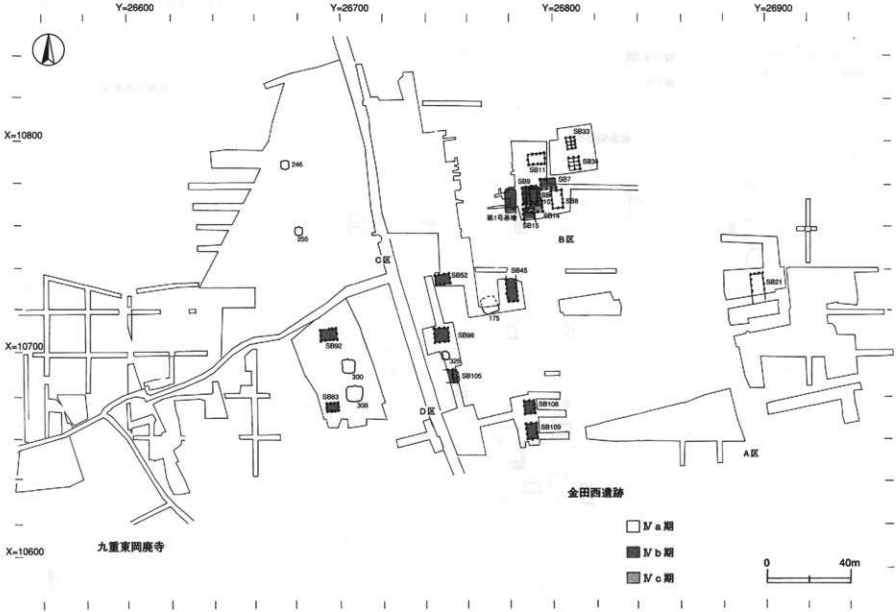
第1号基壇建物跡と建物群D区の第45・108・109号掘立柱建物跡はほぼ一直線上に並び，本期から遺跡の中心は次第に遺跡の南部に移りつつある。Ⅱa期，Ⅱb期，Ⅲ期を通じて，館として機能していた建物群C区はその役割を終え，2軒の竪穴住居跡のみとなる。

Ⅴ期

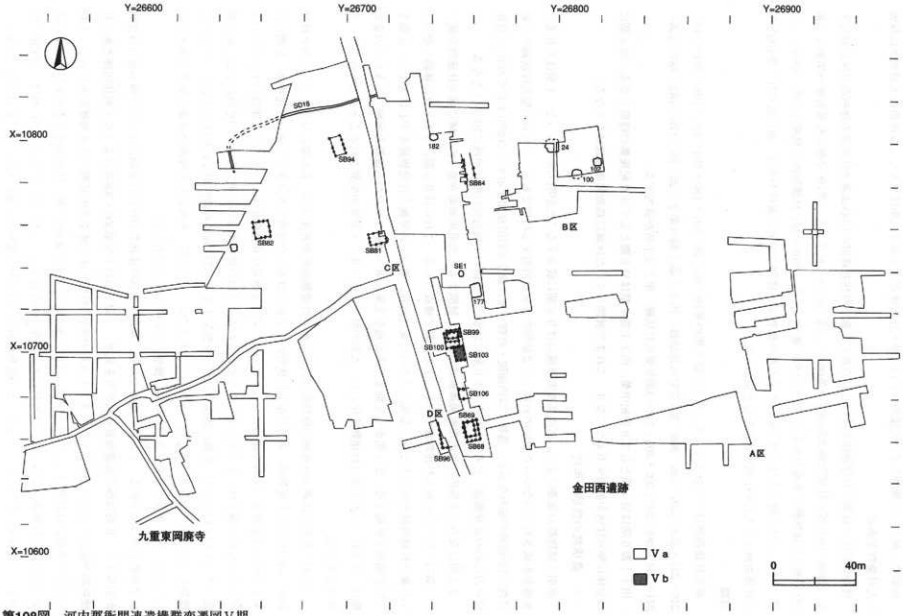
掘立柱建物跡群建物群5群と出土土器5期の竪穴住居跡がこれにあたり，建物群B区では第24・100・102号竪穴住居跡，建物群C区では第64・81・82・94号掘立柱建物跡，第18号溝跡，第182号竪穴住居跡，建物群D区では第68・69・96・99・100・103・106号掘立柱建物跡，第1号井戸跡，第177号竪穴住居跡が該当する。



第106図　河内郡衙関連遺構群変遷図Ⅲ期



第107図　河内郡衙関連遺構群変遷図Ⅳ期



第108図　河内郡衙関連遺構群変遷図Ⅴ期

前期まで館として機能していた建物群B区は竪穴住居跡だけとなり，館は東もしくは南側の未調査区に移動した可能性がある。

建物群C区では掘立柱建物跡がまばらに点在し，掘立柱建物跡群の中心は調査区南部の建物群D区に移行する。第68・69号掘立柱建物跡は第69号→第68号への拡張がみられること，第100号掘立柱建物跡→第99号・第103号掘立柱建物跡の重複があることから2期に細分できる。第68号掘立柱建物跡の規模は3間（6.8m）×4間（9.7m），柱穴掘り方は一辺1m以上で大形の建物で，建物の中央に東柱がある。南に庇が付く第100号掘立柱建物跡とともに中心的建物になると思われる。

Ⅵ期

掘立柱建物跡はみられなくなり，出土土器6期の第16・96・98・101・180・184・192・196・201・248・249・251・253・256・280・309・321号竪穴住居跡，出土土器7期の第2・20・99・176・183・187・238～241・254・294・297・302・305・315・330号竪穴住居跡，第7号土坑が該当する。

出土土器6期はⅥa期として9世紀中葉，出土土器7期はⅥb期として9世紀後葉の時期となる。Ⅵa期には全体に竪穴住居が展開するようになり，これまで展開していた区域に郡衙関連施設はなくなる。

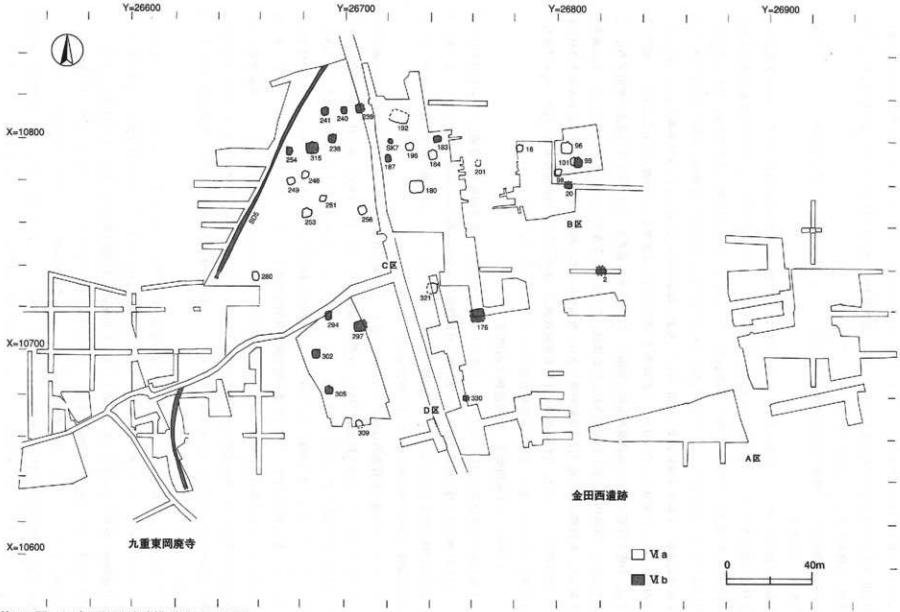
(3) 遺構群の性格と年代

前項(2)遺物群の変遷により，河内郡衙関連施設はⅡa期に成立することが明らかとなった。Ⅰ期はそれまで集落が形成されていなかった金田の台地上に突如竪穴住居が出現する時期である。これらの竪穴住居跡の主軸は西に15°前後の振れを示し，遺物では円面硯・高盤・無台盤など官的様相を示すものが出土しており，「官衙成立のための前身集落」と考えられる。Ⅰb期には竪穴住居跡の主軸方向の振れが西に10°以下となる。

Ⅱa期になると本格的に河内郡衙関連施設が成立・展開する。九重東岡廃寺寄りの区域に掘立柱建物が成立し，第71・72・75号掘立柱建物跡を中心とする一群で構成される。これらはⅡa期になると東に移動し第53・54号掘立柱建物跡が中心となり，Ⅲ期にはさらに東に移り，第12・16号掘立柱建物跡を中心に展開し，Ⅳ期まで同じ場所で継続する。Ⅱa期からⅣ期まで中心地を次第に東へ移動させながら機能を継続してきたこの建物群は，庇を持つ大形の掘立柱建物を中心に，大形の竪穴住居・井戸・倉庫が配置されることなどから「館」の区域と考える。

Ⅱb期～Ⅳ期には調査区東部の建物群A区にも掘立柱建物跡群が展開する。Ⅱb期には第4・5号掘立柱建物跡，第26号掘立柱建物跡，第27号掘立柱建物跡，Ⅲ期には長大な建物である第1号掘立柱建物跡，Ⅳ期には第1号掘立柱建物跡と同様な建物になると思われる第21号掘立柱建物跡がある。おそらく建物の中心はこのA区と西部分の未調査区にまで広がるものと考えられる。今回の確認調査の結果ではA区の建物群が郡庁院と断定できるものではないが，西側に遺構の広がりを想定すると，郡庁院の可能性がないわけではない。ここでは，建物群A区とその西側を「郡庁院」と仮定しておきたい。「郡庁院」と仮定した西端には第2号溝が南北に走っており，出土遺物からⅡ・Ⅲ期の時期に機能していたものと思われる。

建物群D区は部分的なトレンチの拡張であり，調査区南部の建物群D区にはⅢ期になると2棟の掘立柱建物が出現する。Ⅳ期は西にも建物群が広がりを見せ，一辺7m以上の第300・308号のような大形住居跡と掘立柱建物跡が混在しており，同じD区の東でも大形の第175号竪穴住居跡や第98号掘立柱建物跡がみられる。Ⅴ期になると西側には建物はなくなり，東側には南に庇が付く大形の第100号掘立柱建物跡や東柱を持つ大形の第68・69号掘立柱建物跡がみられ，建物群の北には井戸が存在する。これらのことからこの区域は「居宅的」性格をもった区域と想定したい。なお，この建物群D区ではⅤ期に建物の主軸が大きく西に振れるという変化がみられる。この角度は現在の金田西遺跡南部・九重東岡廃寺南部付近の地割りと一致している。Ⅴ期の建物が



第109図　河内郡衙関連遺構群変遷図Ⅵ期

ない地区の地割りはほぼ真北をとっており，土地の改変が行われていないようである。Ⅴ期の段階で政治的・社会的な大きな力が加わった可能性がある。また，建物群D区の掘立柱建物跡は方形に近い形態であり，他の建物とは様相を異にしていることを付け加えておきたい。

郡衙関連施設として機能してきた区域もⅥ期にはいるとその役割も終焉して竪穴住居跡だけになり，一般的な集落へと変換する。

最後に各期の年代について述べたい。Ⅰ期，Ⅵ期は共に多数の竪穴住居跡が確認されているので年代決定の資料は比較的豊富である。Ⅰ期は8世紀初頭で「郡衙成立のための前身集落」，Ⅵ期は9世紀中葉・後葉で「郡衙終焉後の集落」である。Ⅱ期の「郡衙成立」からⅤ期の「郡衙最終段階」は年代決定の材料である竪穴住居跡が少なく容易ではないが，わずかな出土資料を手がかりにⅡ期を8世紀前葉，Ⅲ期を8世紀中葉，Ⅳ期を8世紀後葉，Ⅴ期を9世紀前葉と位置づけた。なお，郡衙の成立については『常陸国風土記』に詳しいが，河内郡については欠落しており立評・立郡時期は不明であり，筑波郡からの分郡説が有力である。『常陸国風土記』の成立時期については諸説あるが，和銅6（713）年から養老8（724）年とする説が一般的である。そのことから『常陸国風土記』に記載されている郡は，この時期には成立していたとみられている。次に調査例をみると，筑波郡正倉の成立は8世紀初頭とされ，鹿島郡衙である神野向遺跡の成立も8世紀初頭とされている。河内郡衙については，今回の調査でⅠ期8世紀初頭は「郡衙成立のための前身集落」段階，成立は筑波・鹿島郡よりわずかに遅れてⅡ期の8世紀前葉ということが明らかになってきた。

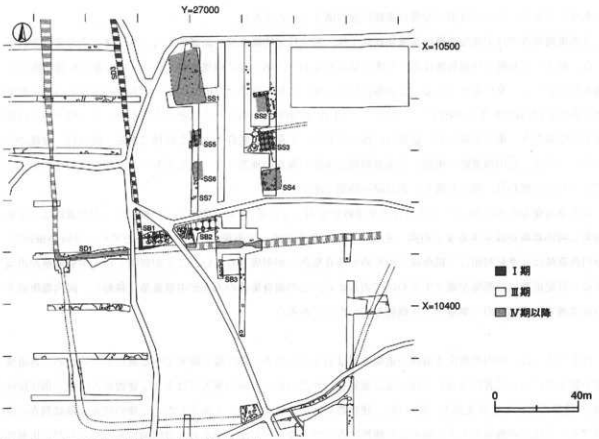
(4) 正倉院，九重東岡廃寺，中原遺跡との関連

平成12年度に確認調査が行われている金田西坪B遺跡の正倉院，九重東岡廃寺の遺構について検討を行う。

正倉院区域では8棟の礎石建物跡，3棟の掘立柱建物跡，3条の区画に関わる溝が確認されている。報告書によれば遺物が出土していないため時期判断はなされていないが，ここでは建物の傾きや建物の配列をもとに金田西遺跡の分析結果に照らし合わせて検討を行う。

第1・2・3号掘立柱建物跡は西に4°の振れ，第1～7号礎石建物跡は西に6～8°の振れで，主軸方向からみていくと前者は金田西遺跡Ⅲ期に属し，後者は同遺跡Ⅳ期に属するものである。掘立柱建物から礎石建物への変化は一般的現象であるので，建物の西へ4°から6～8°という振れの変化も古い段階から新しい段階へと捉えることができる。礎石建物についてみると，①建物の主軸方向がいずれも同じである，②南北に柱筋を揃えて1列に並ぶ東列の第2・3・4号礎石建物跡の建物間距離が25尺ずつとほぼ同一である，③南北に並ぶ西列の第1・5・6号礎石建物跡は30尺・16尺の距離であることがわかる。①～③のことから，礎石建物では工法的に坪地業から版築基壇建物という変遷も考えられるが，第1～7号礎石建物跡は同一時期の存在も可能であると判断した。以上のことからⅢ期に第1・2・3号掘立柱建物跡，Ⅳ期に第1～7号礎石建物跡をあてはめることにした。

次に区画溝は，重複関係から第3号→第1号の変遷が確認されている。第1号と第2号の関係は接続する部分に土坑が重複しており判断できない。第1号溝の北側に近接して第1・2号掘立柱建物跡，南側に第3号掘立柱建物跡が位置していることから，第1号溝とⅢ期掘立柱建物跡が同時期に存在したとは考えにくく，さらに第3号溝と第1号掘立柱建物跡は近接しており同時期存在は考えがたい。第1号溝の東西の中軸線上を挟んで西側に第1・5・6・7号礎石建物跡，東に第2～4号礎石建物跡が南北に整然と配列されていることから，第1号溝とⅣ期の礎石建物群を同時期と捉えた。第1号溝より古い第3号溝がⅢ期の掘立柱建物跡群と同時期ではないとすれば，Ⅲ期以前の溝とするかⅢ・Ⅳ期の間に1時期を設定するかのいずれかになる。現段階では，Ⅱ期に相当する正倉院の建物跡が見つかっていないことや，Ⅰ期の竪穴住居跡群の主軸方向と第3号溝の方向



第110図　金田西坪B遺跡（正倉院）変遷図

表1　推定河内郡衙の変遷

時期		Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期	Ⅳ期	Ⅴ期	Ⅵ期
年代		700			800		900
建物主軸		竪穴のみ N－10°－E	N－2～4°－E N－0°	N－2～4°－W	N－5～8°－W	N－10°以上－W	竪穴のみ
郡衙	郡庁	前身集落	成立 A区 SB 4．5．26.27 SD 2	A区 SB 1＋？ SD 2	A区 SB 21＋？	？	集落化
	館		C区 a期 SB 71.72.75 SI 258 b期 SB 53.54.73.95 SE 2	B区 SB 12.13.16 SI 97	B区 a 期 SB 8.10.11.33.34 b期 基壇1.SB 7.9.15	？	
	居宅		D区 SB 86.90	D区 SB 46.85.87.107 SI 3.4	D区 SB 83.92.108.109 SI 300.308	D区 SB 68.69.96.100	
	正倉	SD 3	？	SB 1．2．3	礎石 1～7 SD 1	？	
九重東岡廃寺			成立 基壇 1 SB 4．5	？			衰退
中原遺跡			出現（前身集落から移動？）	集落成長	自立化		集落繁栄

があることから，ここでは第３号溝はⅢ期以前の溝としておきたい。

九重東岡廃寺では主要な遺構は基壇建物跡１棟，掘立柱建物跡２棟，瓦溜め土坑２基，溝２条が確認されている。第４・５号掘立柱建物跡は第５号溝に切られており，第１号基壇建物跡，第４・５号掘立柱建物跡の主軸方向は２～３°東に振れている。この振れはⅡａ期（８世紀前葉）と同じである。瓦溜め土坑からは下野薬師寺系203Ａ型式の軒先瓦が出土しており，その年代は720年代中頃ということであるから，Ⅱａ期という時期は妥当であろう。[註(1)] 第５号溝は15°前後西に振れており，Ⅴ期の建物群の振れと同様である。西に15°前後の振れというのは，金田西遺跡の南部，九重東岡廃寺南部の現在の地割りと一致しており，Ⅴ期以降の様相を示しているものと思われ，第５号溝もⅤ期以降の時期と考えられる。

九重東岡廃寺の西約300メートルには中原遺跡が展開している。「中原遺跡３」の報告で「中原遺跡は８世紀前葉に河内郡衙が成立するまでの間，正倉の一部の機能を担って出現した」と仮説をたてた。今回の報告で，金田西遺跡は８世紀初頭に「郡衙成立のための前身集落」が形成されていたことが判明した。中原集落が出現する８世紀前葉には郡衙が成立するわけであるから，この前身集落の人々が中原集落に移動し，河内郡衙成立当初は補完的役割を担う集落として機能していたのであろう。

以上のように，河内郡衙関連遺跡の遺構変遷は追えたものの，郡庁院と断定できる施設がないため，各遺構群の捉え方について各位方面から様々なご意見をいただいた。今回の報告ではあえて建物群Ａ区を「郡庁院区域」，建物群Ｂ区とＣ区北部を「館区域」，建物群Ｄ区を「居宅区域」と仮定した。今後の研究や確認調査の進展によってはこの仮定も大きく変わる可能性は否定できない。しかしながら，全国的にみてもこれだけ広範囲にわたって郡衙関連施設エリアの確認調査がなされ，郡衙域全体・周辺の様相まで概観できる遺跡は数少ない。この報告が郡衙及び郡衙周辺域の研究の一助となれれば幸いである。

註(1)　九重東岡廃寺出土の瓦については須田勉氏にご教示いただいた。

参考文献

・猪狩忠雄ほか『根岸遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告72冊　いわき市教育委員会　2000年
・茨城県教育財団『中原遺跡３』「茨城県教育財団文化財調査報告」第170集　2001年
・茨城県教育財団『九重東岡廃寺確認調査報告書１』　2001年
・茨城県教育財団『金田西・西坪Ｂ遺跡』「茨城県教育財団文化財調査報告」第195集　2002年
・鹿島町教育委員会　『鹿島町内遺跡発掘調査報告書Ⅰ・Ⅱ』1980・1981年
・鹿島町教育委員会　『神野向遺跡Ⅰ』～『神野向遺跡Ⅵ』1981～1985年
・田中弘志ほか『弥勒寺東遺跡』　関市文化財調査報告第21号　関市教育委員会　1999年
・島羽政之『中宿遺跡』　岡部町教育委員会埋蔵文化財調査報告書第１集　岡部町教育委員会　1995年
・島羽政之ほか『中宿遺跡Ⅱ』　岡部町教育委員会埋蔵文化財調査報告書第４集　岡部町教育委員会　1999年
・奈良国立文化財研究所編『律令国家の地方末端支配機構をめぐって』研究集会資料　1996年
・奈良国立文化財研究所編『古代豪族居宅の構造と類型』研究集会資料　1998年
・奈良国立文化財研究所編『郡衙正倉の成立と変遷』研究集会資料　2000年
・山中敏史『古代地方官衙遺跡の研究』塙書房　1994年
・山本賢一郎　「常陸国筑波郡衙の正倉遺構」「古代の稲倉と村落・郷里の支配」奈良国立文化財研究所　1998年
・山本賢一郎　「常陸国筑波郡衙正倉の変遷―平沢官衙遺跡―」「郡衙正倉の成立と変遷」　2000年

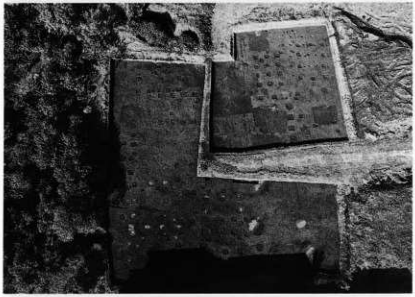
写 真 図 版

金田西遺跡
建物群A区全景

金田西遺跡
第1号掘立柱建物跡確認状況

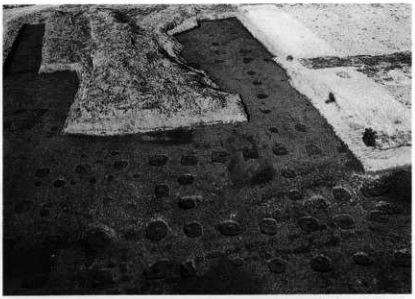
金田西遺跡
第27号掘立柱建物跡確認状況

金田西遺跡
遺跡群B・C区全景



金田西遺跡
遺跡群B区全景

金田西遺跡
第11・12・13号掘立柱建物跡確認状況



金田西遺跡
第53・54号掘立柱建物跡確認状況

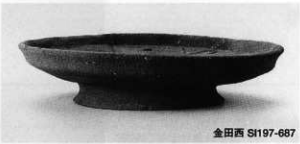
金田西遺跡
第68・69号掘立柱建物跡確認状況

金田西遺跡第53・54号掘立柱建物跡
第５号溝跡確認状況

西坪B SI18-8

西坪B SI18-7

金田西 SK13-756


金田西 SI197-687

金田西 SI197-686

金田西 SI200-284

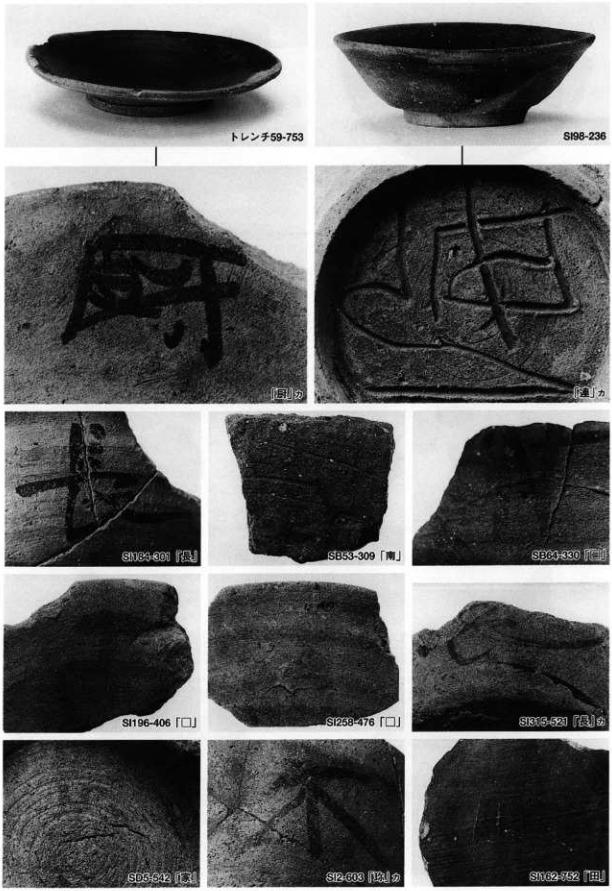
金田西 SI156-672

金田西 SB54-316

金田西 SI240-427

金田西 SI293-630

金田西遺跡・西坪B遺跡出土遺物



金田西遺跡墨書土器，ヘラ書き土器

PL6

SD5-33

SD7-64

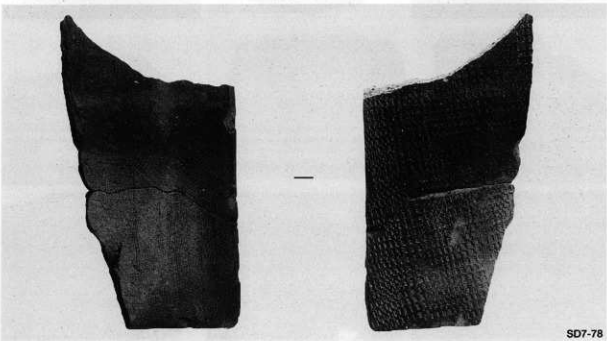
SI26-5

SD7-65

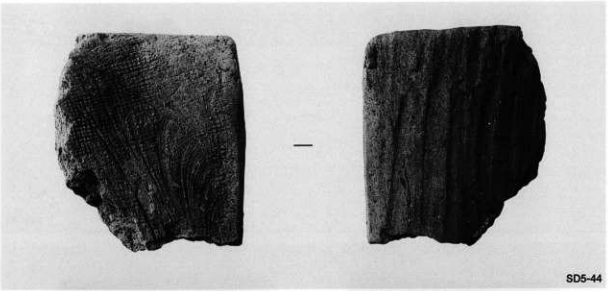
SD7-66

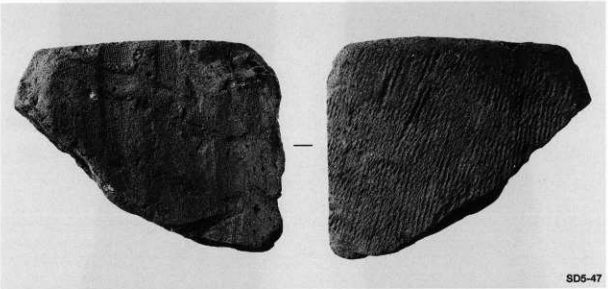
SD10-89

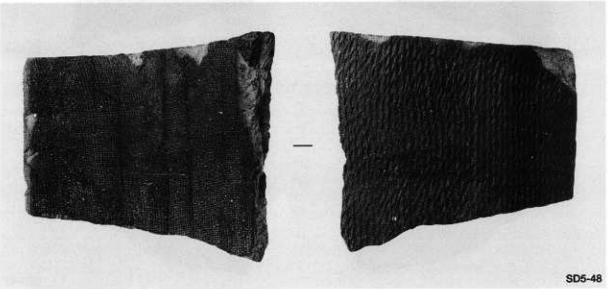
SD5-34


SD7-78

九重東岡廃寺出土瓦

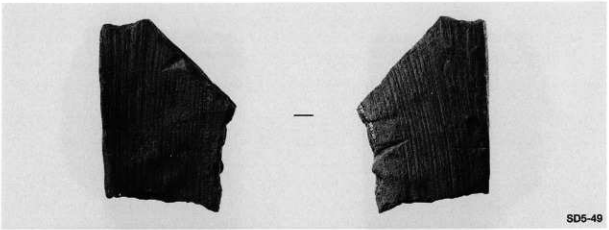


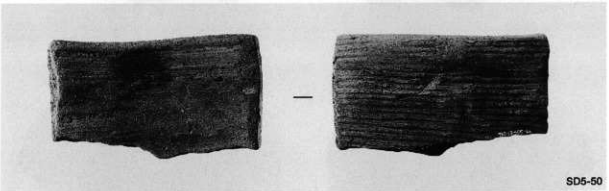


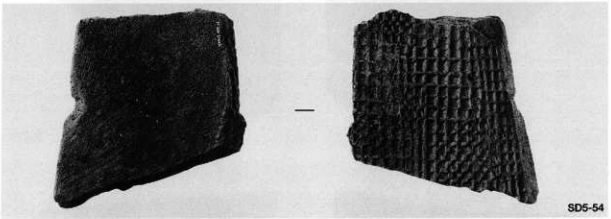


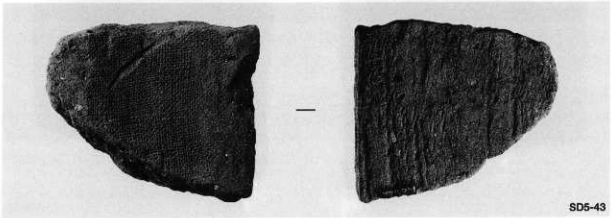
九重東岡廃寺出土瓦

PL8









九重東岡廃寺出土瓦

茨城県教育財団文化財調査報告第209集

金田西遺跡
金田西坪B遺跡
九重東岡廃寺

平成15(2003)年3月20日　印刷
平成15(2003)年3月26日　発行

発行　財団法人　茨城県教育財団
〒310-0911　水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL　029-225-6587

印刷　株式会社　あけぼの印刷社
〒310-0804　水戸市白梅1丁目2番11号
TEL　029-227-5505

作業室用

付　　図

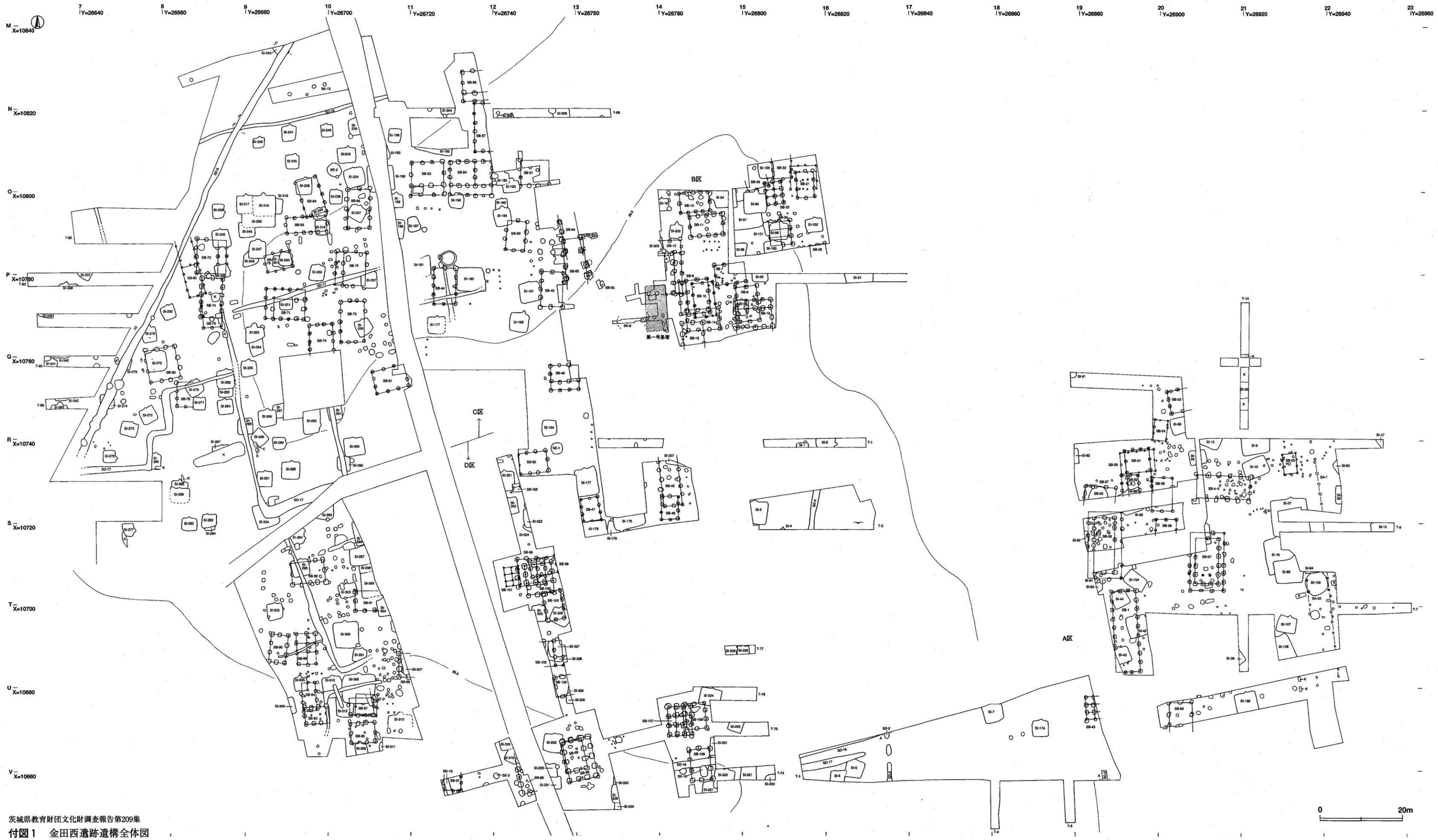
茨城県教育財団文化財調査報告第209集

付図1　金田西遺跡遺構全体図

付図2　金田西坪B遺跡遺構全体図

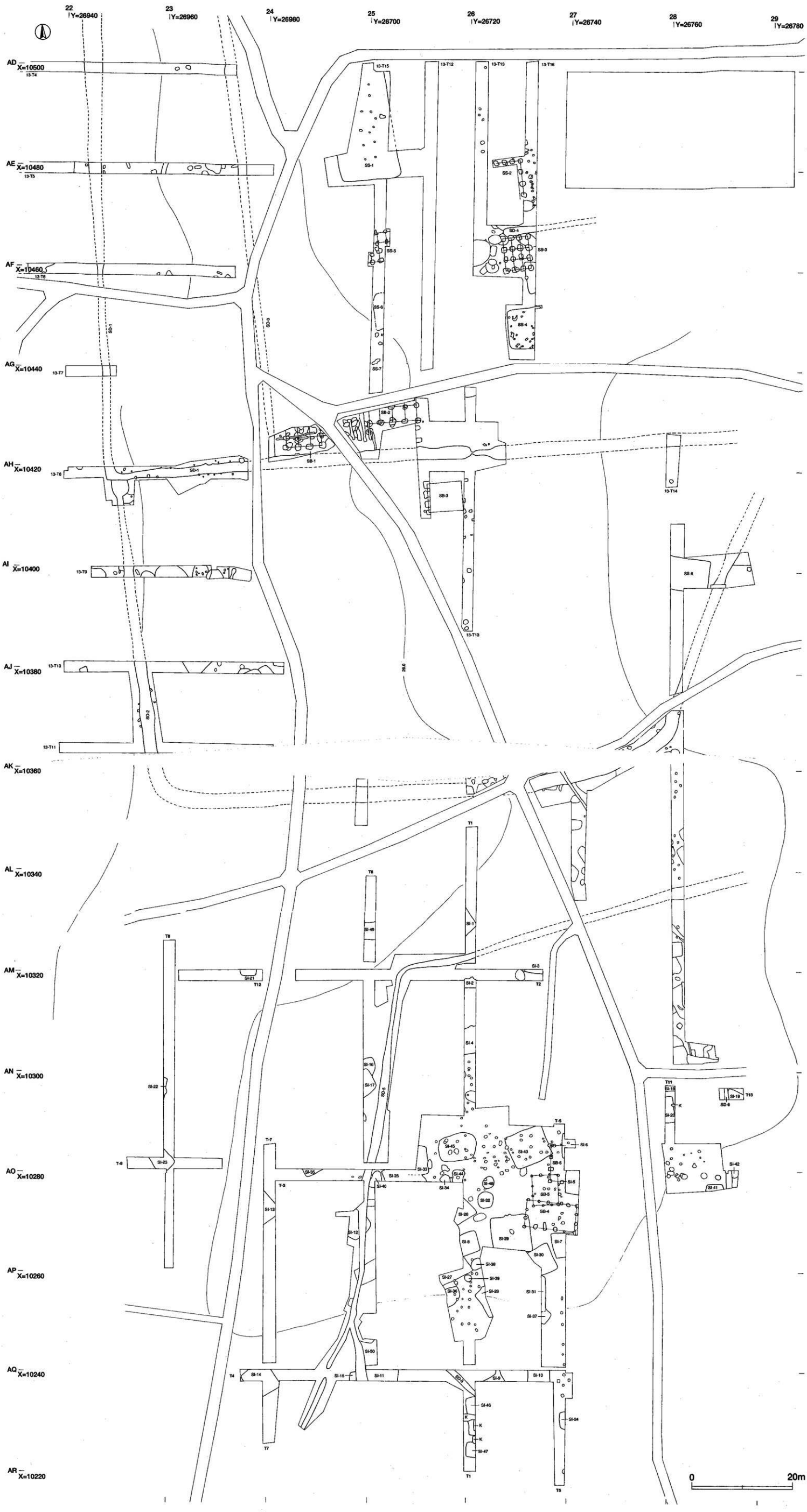
付図3　九重東岡廃寺遺構全体図

付図4　金田西・金田西坪B・中原遺跡，
九重東岡廃寺遺構全体図



茨城県教育財団文化財調査報告第209集

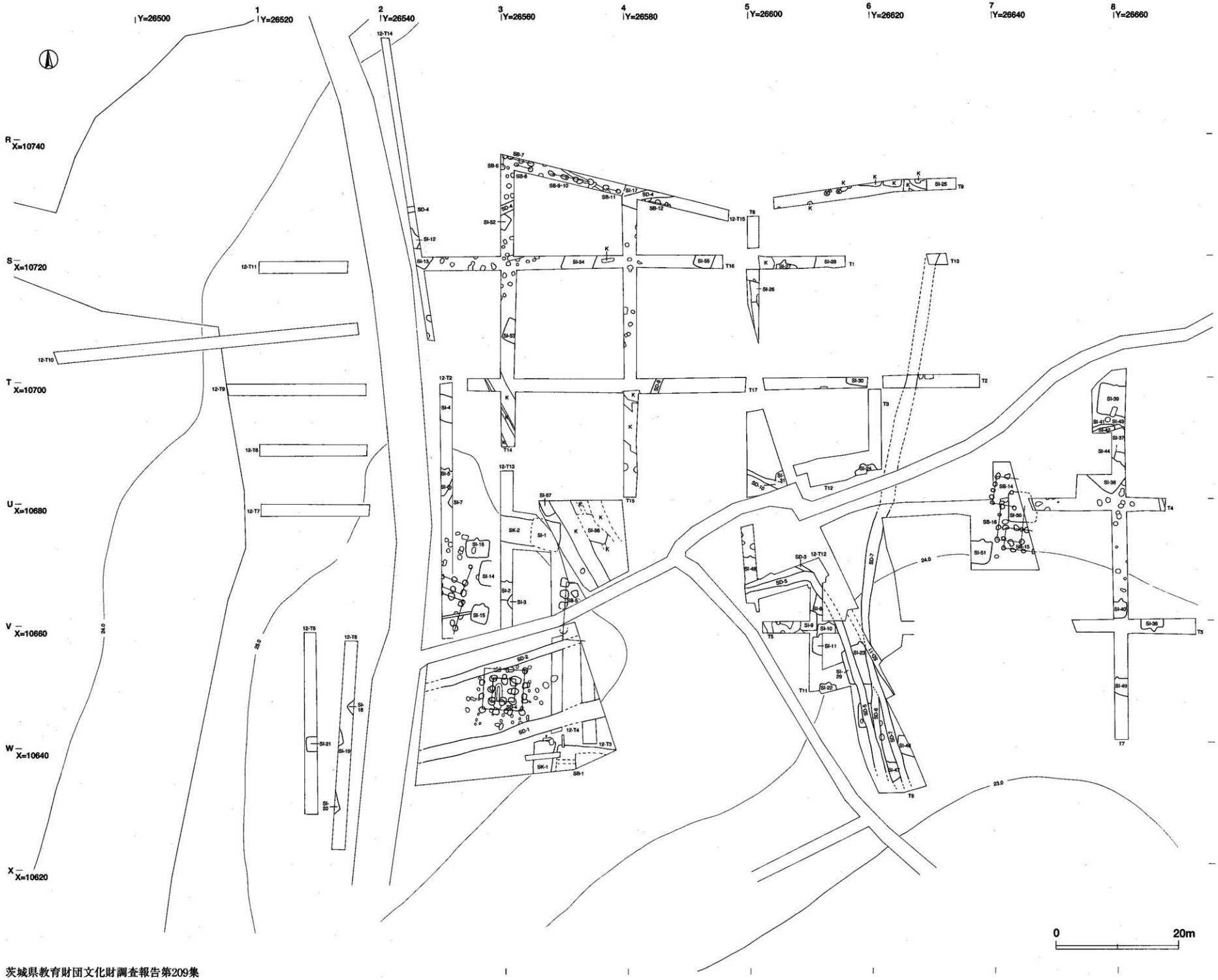
付図1　金田西遺跡遺構全体図



茨城県教育財団文化財調査報告第209集

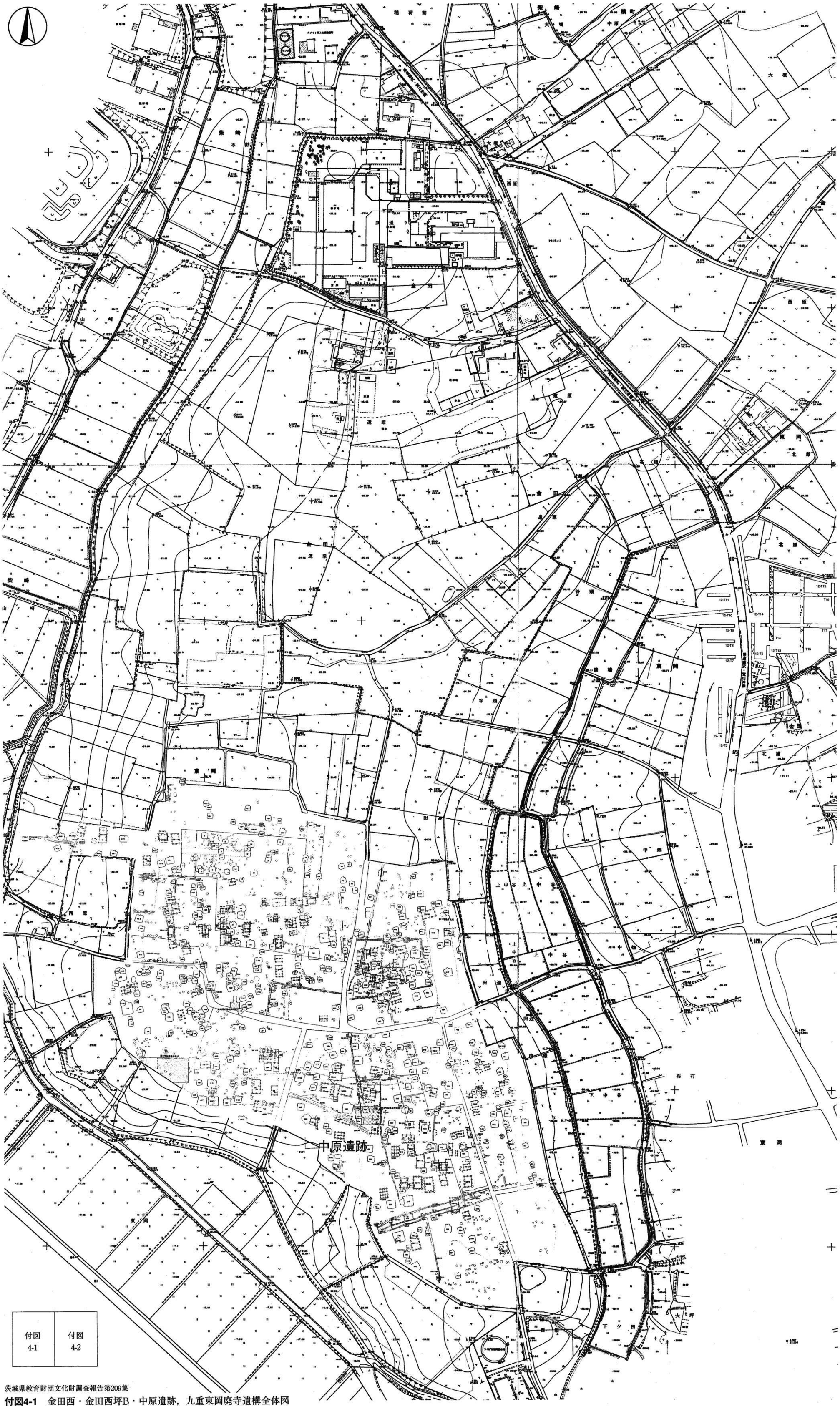
付図 2　西坪B遺跡遺構全体図

T1～T13は平成14年度報告分



茨城県教育財団文化財調査報告第209集

付図3　九重東岡廃寺遺構全体図　12-T2～12-T15は12年度報告分



茨城県教育財団文化財調査報告第209集

付図4-1　金田西・金田西坪B・中原遺跡，九重東岡廃寺遺構全体図

茨城県教育財団文化財調査報告第209集

付図4-2　金田西・金田西坪B・中原遺跡，九重東岡廃寺遺構全体図